

堂田・市子遺跡（2）

——蒲生郡蒲生町市子沖・市子川原所在——

1989

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

堂田・市子遺跡 (2)

——蒲生郡蒲生町市子沖・市子川原所在——

1989

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

目次

序文

例言

1、はじめに.....	1
2、位置と環境.....	1
3、市子遺跡の調査.....	5
4、堂田遺跡の調査.....	21
5、まとめ.....	108

挿 図 目 次

第1図	調査位置図	2
第2図	堂田遺跡・市子遺跡位置図	3
第3図	遺跡周辺地割図	4
第4図	市子遺跡と昭和62年度調査地点	5
第5図	調査トレンチ配置図	6
第6図	第1トレンチ・第4トレンチ・第12トレンチ 平面図	8
第7図	第13トレンチ～第17トレンチ 位置図及び土層図	10
第8図	第13トレンチ・第14トレンチ・第16トレンチ 平面図	12
第9図	第26トレンチ・第25トレンチ 平面図	14
第10図	第28トレンチ・第27トレンチ 平面図	16
第11図	土層堆積図及び遺物実測図	18
第12図	堂田遺跡調査区設定図	30
第13図	堂田遺跡周辺地形図	31
第14図	堂田遺跡周辺水利図	31
第15図	古川A区・29号道路区遺構図	33・34
第16図	古川B・C区遺構図	32
第17図	古川B区 SH1	35
第18図	古川A・B区 SB1・SB2・SB3・SB8	36
第19図	古川B・C区 SD1 土層断面図	37
第20図	古川B・C区 SD1・SD4・SD11 土層断面図	38
第21図	古川B区 SD5・SD6 土層断面図	39
第22図	古川B区 SD2 遺物出土状況図	40
第23図	古川B区 SD2 祭祀関連遺物出土状況模式図	41
第24図	古川D区 遺構図(1)	43・44
第25図	古川D区 遺構図(2)	45・46
第26図	古川D区 SB9・SB10・SB11	42
第27図	38号排水路区遺構図	47・48
第28図	38号排水路区素掘溝	47・48
第29図	38号排水路区 SB12・SB14	49
第30図	38号排水路区 SB13・SB15	50
第31図	38号排水路区 SB16・SB21	51
第32図	38号排水路区 SB17・SB18・SB19・SB20	52

第33图	29号道路区	S B 4 · S B 5 · S B 6 · S B 7	53
第34图	29号道路区	S D 8 · S D 10 / 38号排水路区 S D 14 土层断面图	54
第35图	46号排水路区	遺構图	55 · 56
第36图	46号排水路区	S H 6	57
第37图	46号排水路区	S H 7 · S H 8	58
第38图	46号排水路区	S H 9	59
第39图	46号排水路区	S H 10	60
第40图	46号排水路区	S B 22 · S B 23	61
第41图	46号排水路区	S B 24 · S B 25 · S B 26	62
第42图	46号排水路区	S B 27 · S B 28 · S B 30	65
第43图	46号排水路区	S B 29	63 · 64
第44图	46号排水路区	S B 31 · S B 32	66
第45图	46号排水路区	S K 1	67
第46图	46号排水路区	S K 5	68
第47图	46号排水路区	S K 6 · S K 8	69
第48图	46号排水路区	遺物出土位置图	70
第49图	古川B区	S D 1 出土土器(1)	83
第50图	古川B区	S D 1 出土土器(2)	84
第51图	古川B区	S D 1 出土土器(3)	85
第52图	古川B区	S D 1 出土土器(4)	86
第53图	古川B区	S D 1 出土土器(5)	87
第54图	古川B区	S D 2 出土土器(1)	88
第55图	古川B区	S D 2 出土土器(2)	89
第56图	古川B区	S D 2 出土土器(3)	90
第57图	古川B区	S D 4 · S D 5 · S D 6 · S H 1 出土土器	91
第58图	古川C区	S D 11 出土土器	92
第59图	古川A区 · C区 · D区	出土土器	93
第60图	38号排水路区	S D 14 出土土器(1)	94
第61图	38号排水路区	S D 14 出土土器(2)	95
第62图	29号道路区	S D 8 · S D 9 · S D 10 出土土器	96
第63图	29号道路区	S D 8 出土土器	97
第64图	38号排水路区 · 29号道路区	出土土器	98
第65图	46号排水路区	出土土器(1)	99
第66图	46号排水路区	出土土器(2)	100
第67图	46号排水路区	出土土器(3)	101

図版目次

- 図版 1 蒲生町航空写真
- 図版 2 (上) 市子遺跡調査地近景
(下) 市子遺跡調査前状況
- 図版 3 (上) 市子遺跡第13トレンチ全景
(下) 市子遺跡第16トレンチ全景
- 図版 4 (上) 市子遺跡第17トレンチ全景
(下) 市子遺跡第17トレンチ S D12
- 図版 5 (上) 市子遺跡第20トレンチ全景
(下) 市子遺跡第20トレンチ S D13
- 図版 6 (上) 市子遺跡第20トレンチ S D13
(下) 市子遺跡第26トレンチ S D14・S D15
- 図版 7 (上) 市子遺跡第20トレンチ S D13
(下) 市子遺跡遺物出土状況
- 図版 8 (上) 市子遺跡第25トレンチ S D21
(下) 市子遺跡第25トレンチ S D22
- 図版 9 (上) 市子遺跡第26トレンチ・第25トレンチ
(下) 市子遺跡第26トレンチ全景
- 図版10 (上) 市子遺跡第26トレンチ
(下) 市子遺跡第25トレンチ S D22
- 図版11 (上) 市子遺跡第26トレンチ S D22
(下) 市子遺跡第26トレンチ S D22
- 図版12 (上) 市子遺跡第27トレンチ検出遺構
(下) 市子遺跡第28トレンチ検出遺構
- 図版13 (上) 市子遺跡第27トレンチ全景
(下) 市子遺跡第28トレンチ S D26
- 図版14 (上) 市子遺跡第28トレンチ S D26
(下) 市子遺跡第28トレンチ S D26
- 図版15 (上) 市子遺跡第28トレンチ全景
(下) 市子遺跡第28トレンチ S D26
- 図版16 (上) 市子遺跡発掘作業風景
(下) 市子遺跡実測風景

- 図版17 堂田遺跡SD1一括出土土器群
- 図版18 (上) 堂田遺跡古川B区SD1・SD2・SH1
(下) 堂田遺跡46号排水路区
- 図版19 (上) 堂田遺跡38号排水路区
(下) 堂田遺跡古川D区
- 図版20 (上) 堂田遺跡古川B区SD1・SD2・SH1
(下) 堂田遺跡46号排水路区北半
- 図版21 (上) 堂田遺跡46号排水路区中央
(下) 堂田遺跡46号排水路区南半
- 図版22 (上) 堂田遺跡古川B区SD1・SH1
(下) 堂田遺跡古川B区SD1 2号馬鍬出土状況
- 図版23 (上) 堂田遺跡古川B区SH1遺物出土状況
(下) 堂田遺跡古川B区SH1
- 図版24 (上) 堂田遺跡SH1P.1柱根遺存状況
(下) 堂田遺跡SH1P.2柱根遺存状況
- 図版25 (上) 堂田遺跡古川B区全景(南から)
(下) 堂田遺跡古川B区SB8
- 図版26 (上) 堂田遺跡古川B区SD2木器出土状況(西から)
(下) 堂田遺跡古川B区SD2木器出土状況(南から)
- 図版27 (上) 堂田遺跡古川B区SD2手づくね土器出土状況(西から)
(下) 堂田遺跡古川B区SD2手づくね土器出土状況(拡大)
- 図版28 (上) 堂田遺跡古川B区SD2 3号馬鍬出土状況
(下) 堂田遺跡古川B区SD2曲物出土状況
- 図版29 (上) 堂田遺跡古川B区SD2下駄・田下駄出土状況
(下) 堂田遺跡古川B区SD2鳥形出土状況
- 図版30 (上) 堂田遺跡古川B区SD4(南から)
(下) 堂田遺跡古川B区SD4(北から)
- 図版31 (上) 堂田遺跡古川B区SD4南半部(西から)
(下) 堂田遺跡古川B区SD4南半部(南から)
- 図版32 (上) 堂田遺跡古川B区SD5・SD6(北から)
(下) 堂田遺跡古川B区SD5・SD6(南から)
- 図版33 (上) 堂田遺跡古川B区SD5 4号馬鍬出土状況
(下) 堂田遺跡古川B区SD5梯子出土状況
- 図版34 (上) 堂田遺跡古川A区北半部(南から)
(下) 堂田遺跡古川A区SB3(南から)

- 図版35 (上) 堂田遺跡古川A区SD3 (西から)
(下) 堂田遺跡古川A区SB1・SB2 (北から)
- 図版36 (上) 堂田遺跡古川C区SD11 (西から)
(下) 堂田遺跡古川C区SD11 (北から)
- 図版37 (上) 堂田遺跡古川C区SD11遺物出土状況
(下) 堂田遺跡古川C区素掘溝群 (北から)
- 図版38 (上) 堂田遺跡古川D区SB11・SK2 (南から)
(下) 堂田遺跡古川D区SH11 (南から)
- 図版39 (上) 堂田遺跡29号道路区調査前 (西から)
(下) 堂田遺跡29号道路区SB5・6・7 (南から)
- 図版40 (上) 堂田遺跡29号道路区全景 (南から)
(下) 堂田遺跡29号道路区SD9
- 図版41 (上) 堂田遺跡38号排水路区 (北から)
(下) 堂田遺跡38号排水路区 (西から)
- 図版42 (上) 堂田遺跡38号排水路区 (西から)
(下) 堂田遺跡38号排水路区SB13・14・15 (南から)
- 図版43 (上) 堂田遺跡38号排水路区SD14 (西から)
(下) 堂田遺跡SD14遺物出土状況
- 図版44 (上) 堂田遺跡46号排水路区SH6 (南から)
(下) 堂田遺跡46号排水路区SH7・8 (南から)
- 図版45 (上) 堂田遺跡46号排水路区SH6・7・8 (南から)
(下) 堂田遺跡46号排水路区SH9・10 (西から)
- 図版46 (上) 堂田遺跡46号排水路区SH9・10 (南から)
(下) 堂田遺跡46号排水路区SH9 (西から)
- 図版47 (上) 堂田遺跡46号排水路区SH10炭化材検出状況 (西から)
(下) 堂田遺跡46号排水路区SH10 (西から)
- 図版48 (上) 堂田遺跡46号排水路区SK5 (北から)
(下) 堂田遺跡46号排水路区SK8 (南から)
- 図版49 (上) 堂田遺跡46号排水路区SB22 pit163
(下) 堂田遺跡46号排水路区SB22 pit164
- 図版50 堂田遺跡出土土器 (1)
- 図版51 堂田遺跡出土土器 (2)
- 図版52 堂田遺跡出土土器 (3)
- 図版53 堂田遺跡出土土器 (4)
- 図版54 堂田遺跡出土土器 (5)

- 図版55 堂田遺跡出土土器 (6)
- 図版56 堂田遺跡出土土器 (7)
- 図版57 堂田遺跡出土土器 (8)
- 図版58 堂田遺跡出土土器 (9)
- 図版59 堂田遺跡出土土器 (10)
- 図版60 堂田遺跡出土土器 (11)
- 図版61 堂田遺跡出土土器 (12)
- 図版62 堂田遺跡出土土器 (13)
- 図版63 堂田遺跡出土土器 (14)
- 図版64 堂田遺跡出土土器 (15)
- 図版65 堂田遺跡出土土器 (16)
- 図版66 堂田遺跡出土土器 (17)
- 図版67 堂田遺跡出土土器 (18)
- 図版68 堂田遺跡出土土器 (19)
- 図版69 堂田遺跡出土土器 (20)
- 図版70 堂田遺跡出土土器 (21)
- 図版71 堂田遺跡出土土器 (22)
- 図版72 堂田遺跡出土土器 (23)
- 図版73 堂田遺跡出土土器 (24)
- 図版74 堂田遺跡出土土器 (25)
- 図版75 堂田遺跡出土土器 (26)
- 図版76 堂田遺跡出土土器 (27)
- 図版77 堂田遺跡出土土器 (28)
- 図版78 堂田遺跡出土土器 (29)
- 図版79 堂田遺跡出土木製品 (1)
- 図版80 堂田遺跡出土木製品 (2)
- 図版81 堂田遺跡出土木製品 (3)
- 図版82 堂田遺跡出土木製品 (4)
- 図版83 堂田遺跡出土木製品 (5)
- 図版84 (上) 堂田遺跡出土木製品 (6)
- (下) 堂田遺跡出土石製品
- 図版85 (上) 堂田遺跡遠景 (北から)
- (下) 堂田遺跡遠景 (西から)

第68図	46号排水路区	出土土器(4)	102
第69図	堂田遺跡	1号馬鍬・2号馬鍬	103
第70図	堂田遺跡	3号馬鍬・4号馬鍬	104
第71図	古川B区	SD1・SD5 出土土器	105
第72図	古川B区	SD2他 出土土器	106
第73図	堂田遺跡	出土石製品・鉄製品	107
第74図	麻生遺跡・堂田遺跡	掘立柱建物配置図(12世紀)	111
第75図	堂田遺跡	掘立柱建物集成図	112
第76図	古墳時代中期～後期	古師器甕(湖南・湖東)	113

例 言

1. 本書は、昭和61年度～63年度県営ほ場整備事業に伴う蒲生郡蒲生町堂田遺跡・市子遺跡の発掘調査報告書で、昭和61年度に堂田遺跡の発掘調査、昭和62年度に市子遺跡の発掘調査を実施して、昭和63年度に整理調査を実施したものである。
2. 本調査は、県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、蒲生町教育委員会の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては、東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次の通りである。

昭和61年度		昭和62年度		昭和63年度
滋賀県教育委員会				
文化財保護課長	服部 正	服部 正		堀出亀与嗣
課長補佐	田口宇一郎	田口宇一郎		小川啓雄
埋蔵文化財係長	林 博通	林 博通		林 博通
主任技師	葛野泰樹	木戸雅寿		木戸雅寿
管理係主任主事	山本徳樹	山出 隆		
(財)滋賀県文化財保護協会				
理事長	南 光雄	吉崎貞一		吉崎貞一
事務局長	中島良一	中島良一		中島良一
埋蔵文化財課長	近藤 滋	近藤 滋	企画調査課長	近藤 滋
調査三係長	兼康保明	兼康保明	調査一係長	大橋信也
技師	岡本武憲	宮崎幹也	主任技師	宮崎幹也・岡本武憲
総務課長	山下 弘	山下 弘		山下 弘
主任主事	立入裕子	東浦良子		
主事	西田博之			

6. 本書の執筆・編集は、調査担当者の宮崎幹也と岡本武憲が分担した。
7. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

1. はじめに

本報告は、昭和61年度県営ほ場整備事業（蒲生中部地区市子沖第1工区・市子殿第2工区）に伴う堂田遺跡の発掘調査と、昭和62年度県営ほ場整備事業（蒲生中部地区市子川原第1工区）に伴う市子遺跡の発掘調査の成果である。

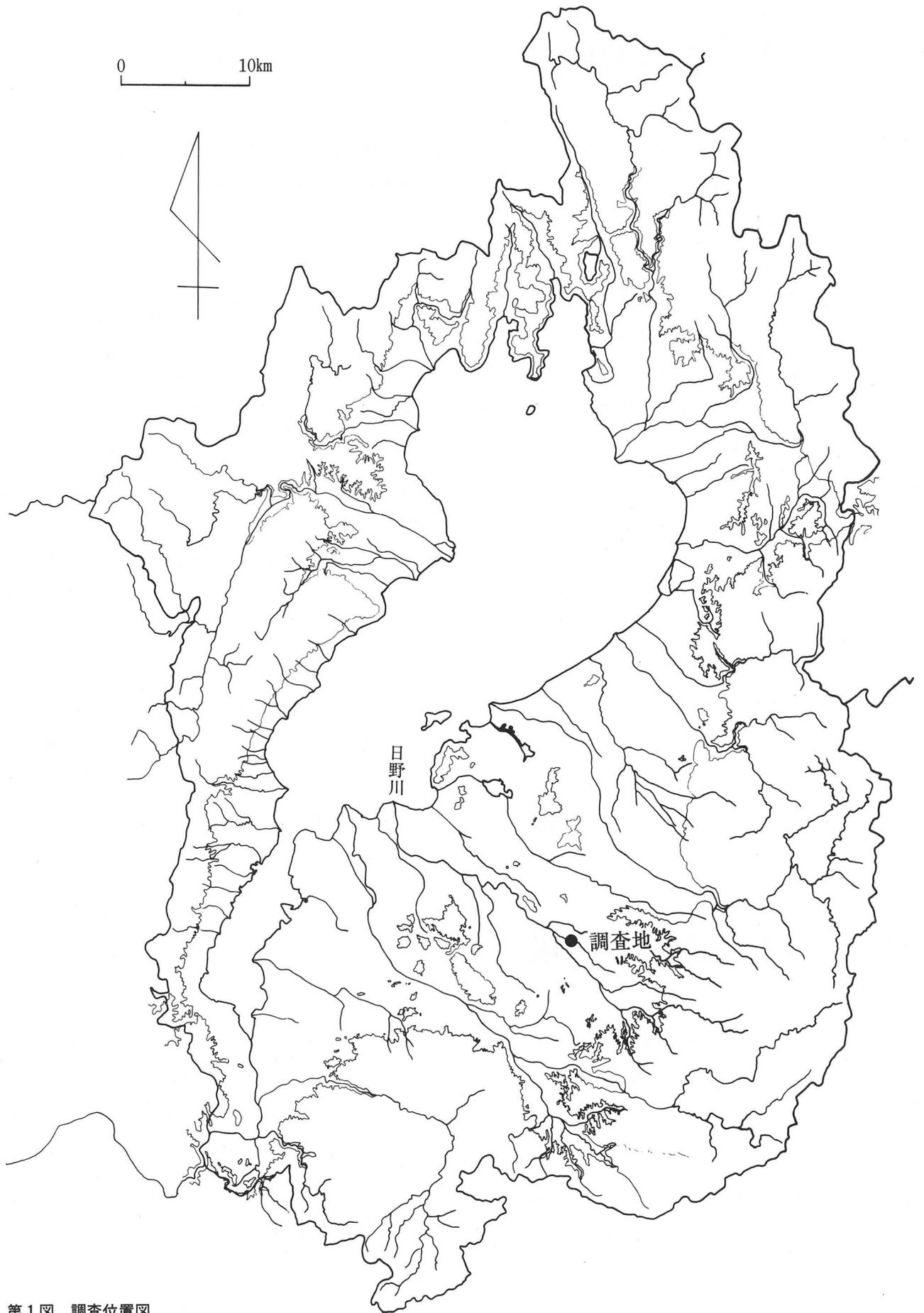
当該地は、日野川中流域においても、最も遺跡密度の高い地域である。今回の報告以外にも、市子遺跡では、弥生時代中期後葉を中心とした方形周溝墓群、古墳時代後期の集落、平安時代末の掘立柱建物群が検出されていて、その一部はすでに報告されている。堂田遺跡についても、今回の調査区の上流部分で、5世紀後半の竪穴住居16棟と方形周溝墓2基が検出された。これらの他にも、市子遺跡・堂田遺跡から約4km上流の麻生遺跡に至る間は、遺構・遺物の全く検出されない場所を見い出すのが困難な程、各時代の生活の痕跡が残されている。また、当該地は、こうした地下遺構のみならず、蒲生郡条里と呼ばれる条里地割を明瞭に残した地区でもあった。

当該地の発掘調査を実施するに先立ち、ほ場整備による切土が避けられない場所について試掘調査を実施した。本調査は、試掘調査の成果によって、県教育委員会と県農林部が協議したうえで、切土や排水路敷において遺構の保存策が講じ得ない部分についてのみ調査することとなった。調査面積は、堂田遺跡で約8,000㎡、市子遺跡で約2,000㎡であった。現地調査期間は、堂田遺跡が昭和61年4月から昭和62年1月まで、市子遺跡が昭和62年8月から昭和62年11月である。

調査の成果は後述するが、とりわけ注目されるのは、5世紀後半から6世紀後半までの時期と考えられる馬鍬が、4点出土したことである。U字型鍬先とともに、古墳時代中期以降の農耕技術の革新を示す資料として、日野川中流域の開発史のみならず、日本古代の農耕を考えるうえで欠かすことのできないものとなる。また、同じく古墳時代中期の手づくね土器が100点近くも遺棄された状態で出土したことは、水辺の祭祀の実例として、貴重な資料となる。

2. 位置と環境

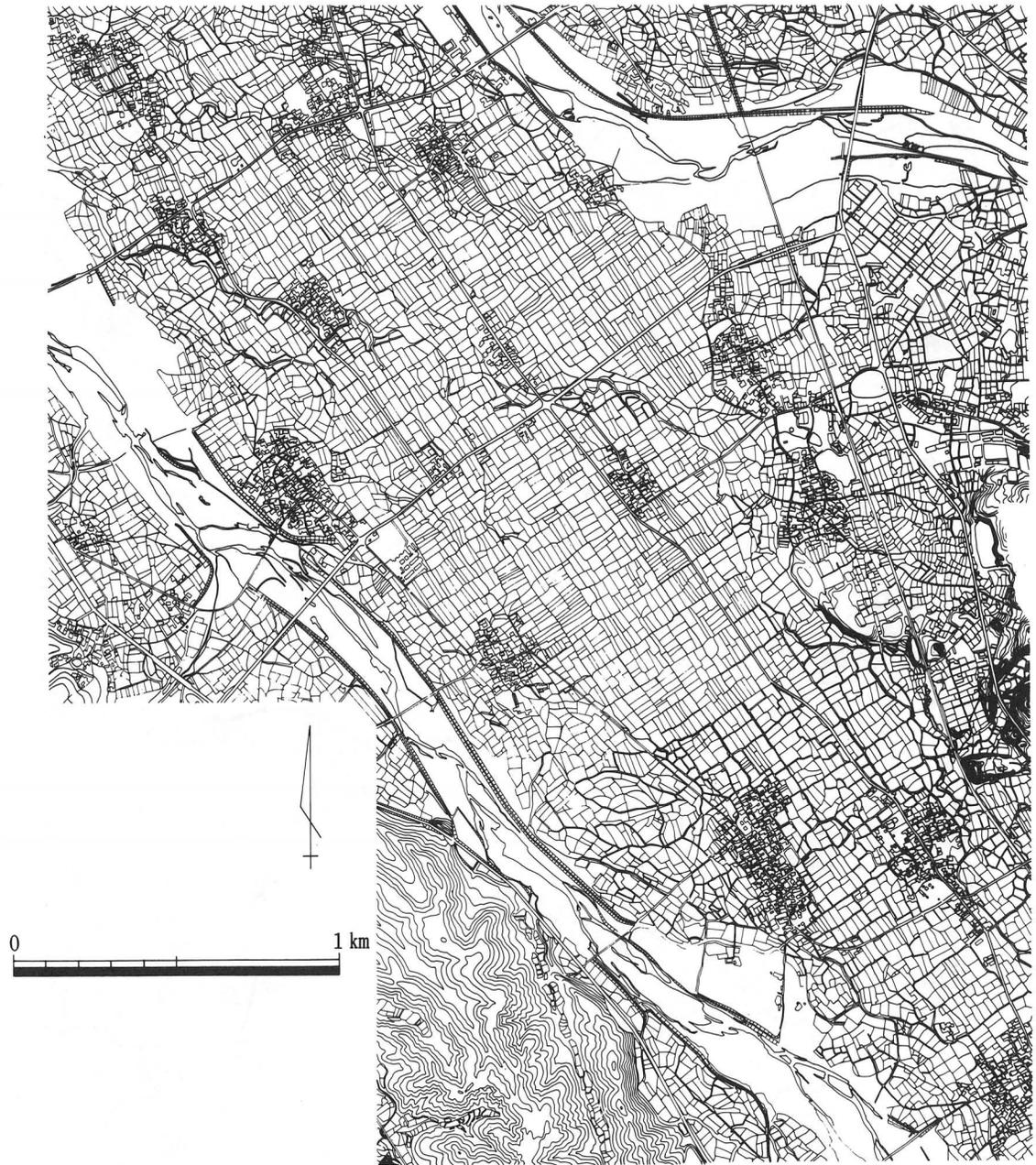
堂田遺跡と市子遺跡の立地する当該地は、日野川と佐久良川に挟まれた平野部に立地する。現況は、蒲生郡条里が顕著に遺存していた。堂田遺跡と市子遺跡の間には、古川（フルコウ）と呼ばれる小河川が流れている。古代においては、古川が、現在よりも複雑な流路をとっており、各時代の開発は、この小河川をどう統御するかによって、その規模・形態を制約されたと考えられる。古川の他にも、現在よりもはるかに大きな水量と川幅を誇っていたであろう日野川や佐久良川から流れ出た小河川が、各遺跡内を縦横無尽に走っており、現在みられる条里遺構は、こうした自然条件に打ち勝った先人の努力を如実に示していると言えよう。



第1図 調査位置図



第2図 堂田遺跡・市子遺跡位置図



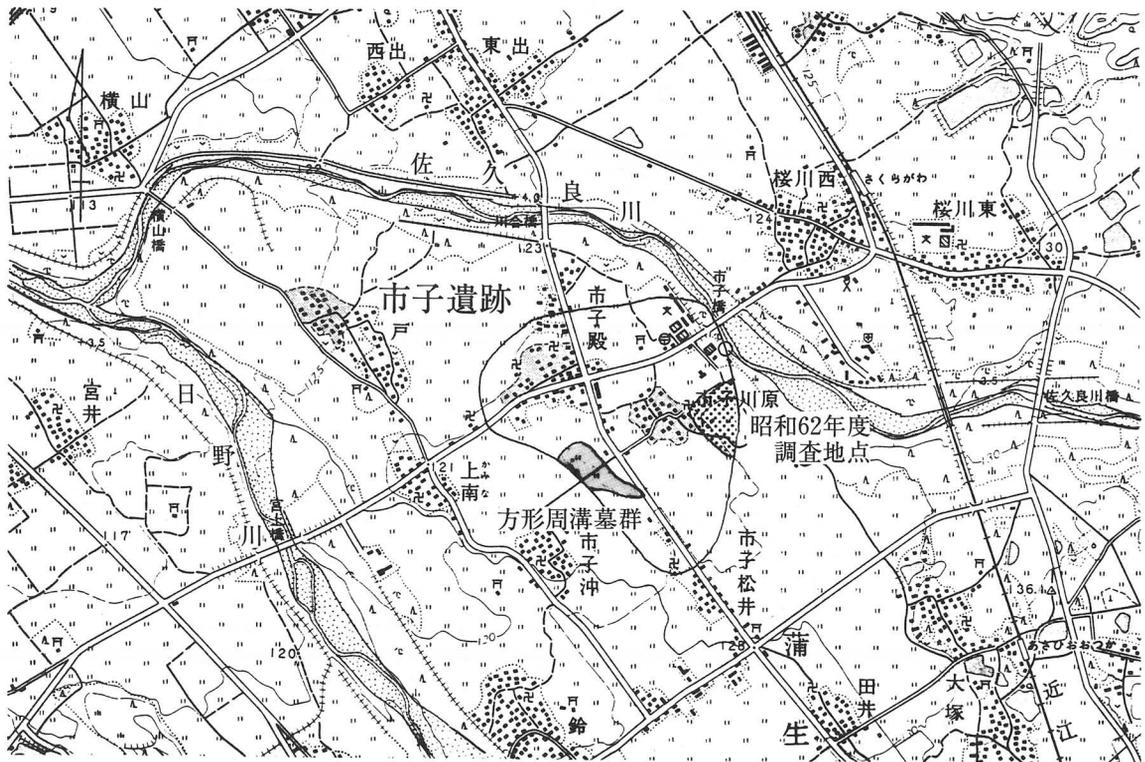
第3図 遺跡周辺地割図

3. 市子遺跡の調査

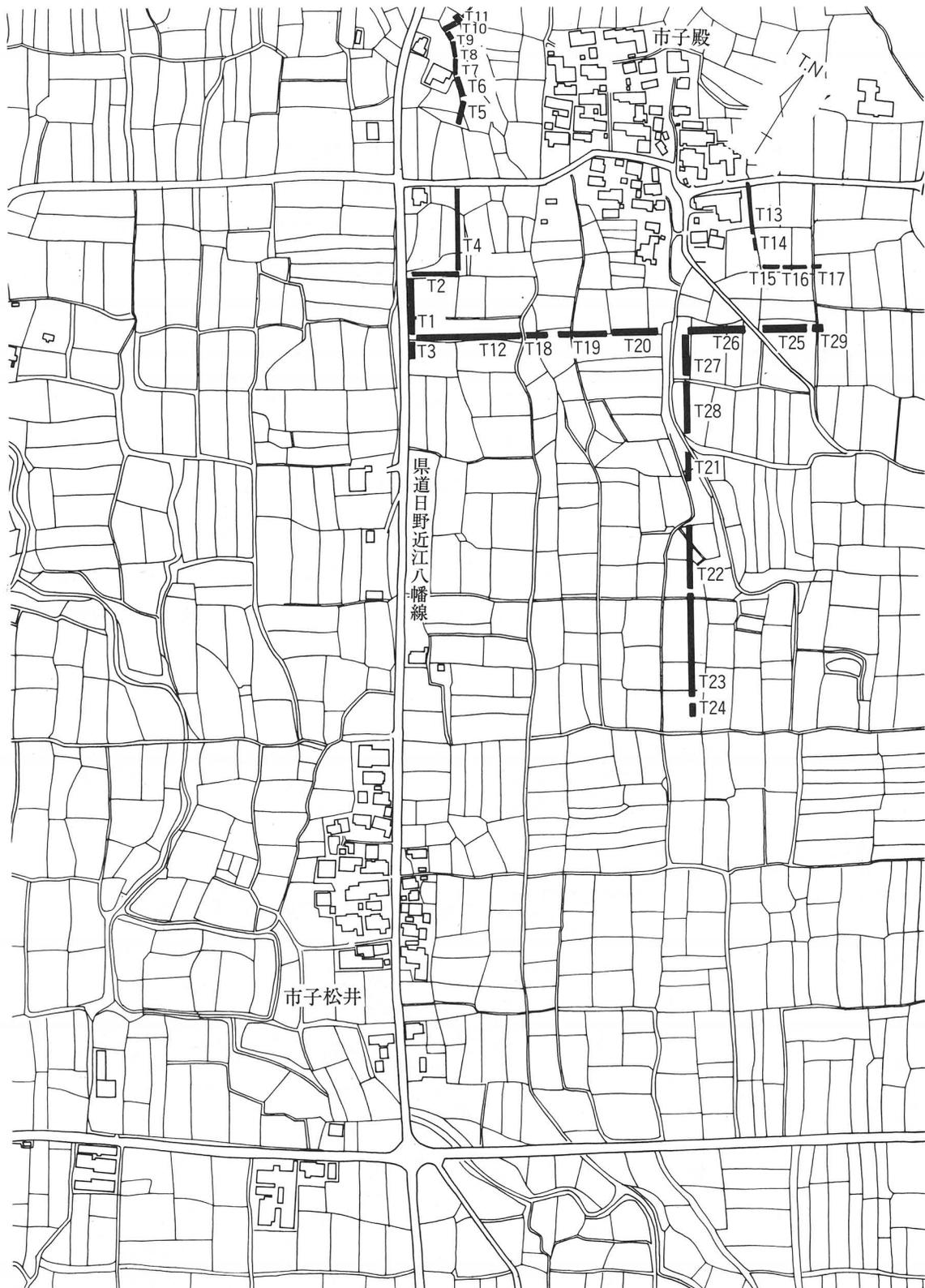
(1) はじめに

市子遺跡は蒲生町の中央に所在する集落遺跡であり、市子殿の集落を中心とし、西方を市子沖の集落、東方を市子川原の集落へと拡げている。市子遺跡の性格が初めて明らかにされたのは、昭和60年度に蒲生町教育委員会が実施した発掘調査によるものである。この調査は県営ほ場整備に伴うもので、県道日野近江八幡線の市子殿交差点から南東に広がる一帯であり、沼沢地の西縁辺部に密集する弥生時代中期後半の方形周溝墓群を発掘した。これによって、市子遺跡は弥生時代中期の集落遺跡で、居住区として適さない沼沢地周辺の低湿地に方形周溝群を築造することが明らかになった。しかしながら、弥生時代集落を構成する居住区や水田区の所在が明らかでなく、また周辺より出土する遺物の年代幅が多時期に及んでいるため、複合遺跡としても理解されている。こうした中で、市子遺跡の東限を追求する調査を昭和62年度に実施した。

調査は県営ほ場整備に伴うもので、遺跡の有無と工事の影響度を試掘調査によって明らかにした後、発掘調査するものとなった。調査地点は、昭和60年度調査地より県道日野近江八幡線を隔てた東側にあたり、主として佐久良川左岸域の蒲生町役場南部一帯である。現地調査期間は、昭和62年8月11日より同年11月10日までであり、約2,000㎡を発掘調査した。



第4図 市子遺跡と昭和62年度調査地点



第5図 調査トレンチ配置図

(2) 調査の概要

発掘調査は全て排水路工事に伴うもので、調査の順位に応じて第1トレンチ～第26トレンチとした。このうち第12トレンチと第18トレンチは、併行して実施された県営かんがい排水事業関連の発掘調査と同時に実施した。

調査は、0.4m²級バックホウによる表土・堆積土の掘削の後、人力による遺物包含層の掘り下げと、遺構の細部調査を実施し、図面実測と写真撮影による記録化を図った。

各調査区において検出した遺構は以下の通りである。

第1トレンチ～第12トレンチ

調査範囲の北東部を占める同調査区では、南寄りの第1トレンチ～第4トレンチと第12トレンチにおいて遺構を検出したが、北寄りの第5トレンチ～第11トレンチにおいては明確な遺構が検出されなかった。

南寄りの各トレンチは、先行して実施した県営かんがい排水関連調査において、その西隣に旧河道と方形周溝墓群を検出しており、旧河道を隔てた遺構の有り様が注目されていた。しかしながら検出した遺構の多くは、古墳時代と平安時代のものであり、旧河道が弥生時代の方形周溝墓域の東限を区切ることが明らかになった。

第1トレンチの基本土層は、第I層・耕土、第II層・床土、第III層・淡灰白色土、第IV層・黄灰色土と続き、地表下約40cmで遺構面に至る。

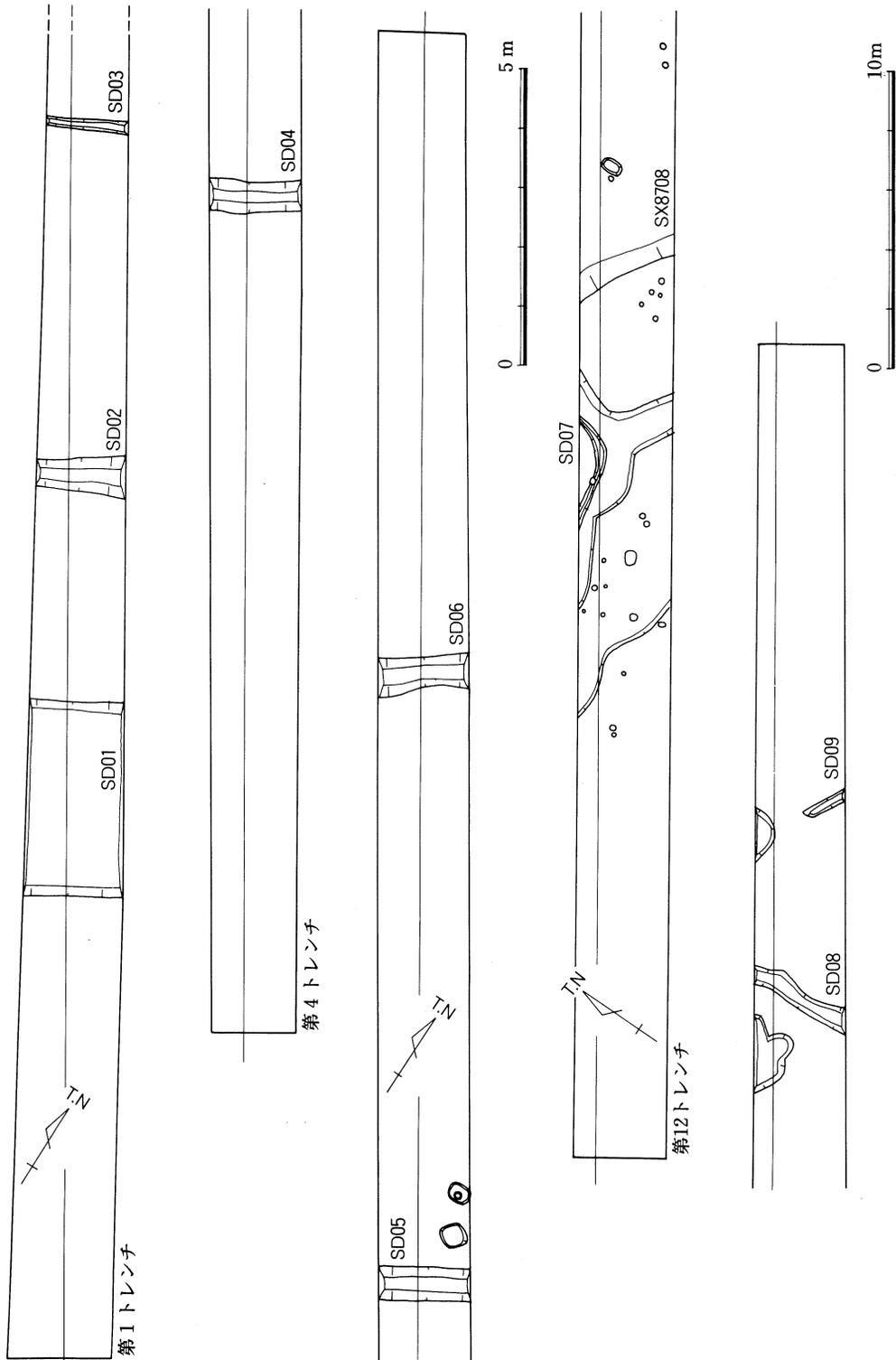
遺構には3条の溝が認められ、南より順にSD01～SD03とした。溝の規模は、SD01が幅3m30cm・深さ20cm、SD02が幅50～70cm・深さ30cm、SD03が幅20cm・深さ15cmをそれぞれ測る。このうちSD01のみは幅の広い溝であり、他の2条の溝とは性格を異にするとと思われる。この3条の溝の主軸は、景観条里方位(N33°W)に直交する。

第1トレンチの南延長に設けた第3トレンチでは、溝の遺構は検出されず、直径約15～25cmの柱穴が確認された。しかしながら、これらの柱穴から明確な掘立柱建物を復原することはできない。

第1トレンチの北端から東方へ伸びる第3トレンチでは、第VI層(黄灰色土)の下で旧河道(小規模河川跡)が認められた。この旧河道は、調査区の随所で認められ、主として南東部から北西方向へと流れており、その本数は多い。

第3トレンチにおいて検出した溝もその一つで、第12トレンチの中央付近にその上流の一部が認められる。

第2トレンチの東端から北方へ伸びる第4トレンチでは3条の溝を検出し、南方より順にSD04～SD06とした。



第6図 第1トレンチ・第4トレンチ・第12トレンチ平面図

S D04は幅55cm・深さ25cm、S D05は幅60cm・深さ20cm、S D06は幅60cm・深さ30cmをそれぞれ測り、S D01～S D03同様に遺溝の主軸を景観条里方位（N33°W）に直交させる。

S D05の北側には、平面方形の柱穴が2つ認められる。

第1トレンチの南端を東へ伸びる第12トレンチと第18トレンチは、県営かんがい排水関連の調査トレンチと一部重複する。（『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書V』参照）

第12トレンチの基本土層は、第I層・耕土、第II層・床土、第III層・淡灰白色砂質土、第IV層・灰色土、第V層・灰褐色土、第VI層・暗灰褐色粘質土と続き、地表下約80cmで遺構面に至る。遺構は、第12トレンチの西部に集中し、東部には東西長38m50cm以上の旧河道が存在する。この旧河道は深さ80cmを測り、先の第2トレンチの旧河道へと続く。また西部の遺構としては方形周溝墓（S X8708）・溝（S D07・S D08・S D07）・土壌・柱穴などが認められる。

方形周溝墓（S X8708）は旧河道の左岸縁辺部に立地し、遺構の南半部をトレンチの外部に拵げており、南北4m40cm以上・東西4m40cmの規模を測る。遺構の南側は不明であるが、北側と西側には周溝が巡る。また遺構の東側は周溝が無く、旧河道へと続く。

S X8708北側の周溝は、幅1m・深さ25cmを測り、西側の周溝は、幅1m25cm・深さ15cmを測る。周溝の北西部からは、さらに北西方向にL字形の溝の基底部分（S D07）が確認されており、S X8708の北西隣に別の方形周溝墓が存在すると考えられる。

旧河道の基底部分には、土壌状の流木溜り、柱穴、溝（S D08・S D09）が存在する。

S D08は幅50～75cm・深さ25cm、S D07は幅30cm・深さ20cmを測る。これらの遺構は、旧河道が埋設した後に人工的に開削されたものである。

第12トレンチの東側に設けた第18トレンチでは旧河道の堆積が認められたが、人工的に構築された遺構は確認されなかった。

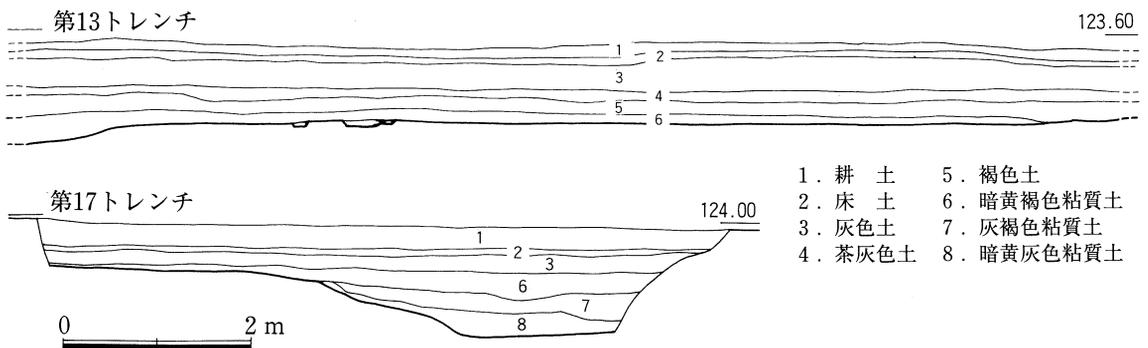
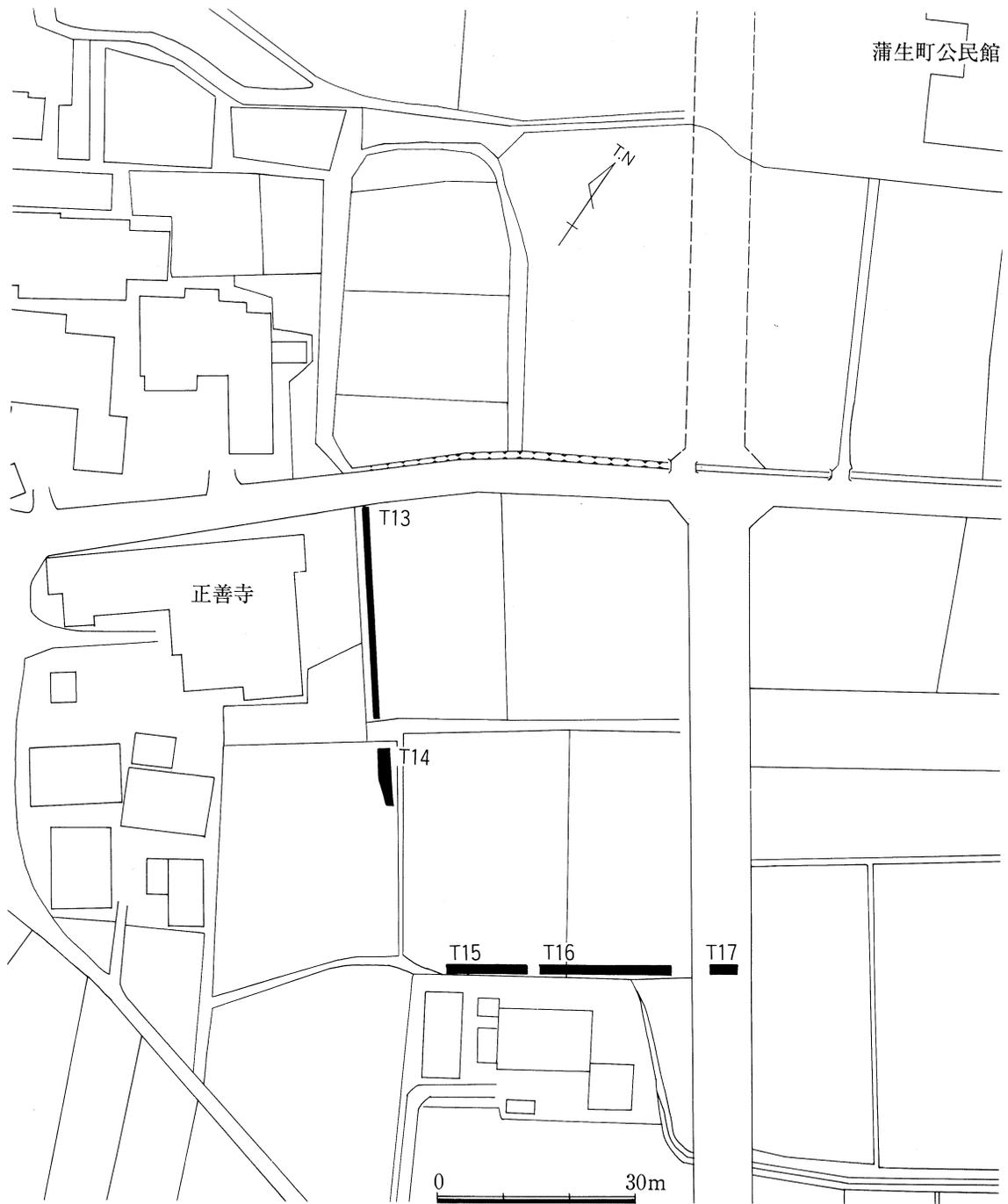
第13トレンチ～第17トレンチ

調査範囲の北東域にあたり、市子遺跡の東限と予測される一画に第13トレンチ～第17トレンチを設けた。

調査地は蒲生町役場敷地から南西50mに位置し、西側を正善寺・市子川原会館と接し、東側を新設の農道と接する。この農道以東の地区については昭和63年度に発掘調査された。

調査地の一帯は、標高123m30cm～124m10cmを測り、昭和60年度に弥生時代中期の方形周溝墓群を検出した市子遺跡西部地域より約2m～2m50cm程高くなっており、市子遺跡の中で最も標高の高い一画である。

各トレンチは排水路工事箇所を対象としており、第17トレンチが上流域、第13トレンチが下流域にあたる。調査では、現行の水路と重複する箇所や、隣接する水田標高の差異から、連続した長いトレンチの設定が不可能であり、幅の狭い、断続的な調査トレンチを設けることとなった。



第7図 第13トレンチ～第17トレンチ位置図及び土層図

第13トレンチは正善寺の敷地に接して設定された。基本土層は第Ⅰ層（耕土）・第Ⅱ層（床土）・第Ⅲ層（灰色土）・第Ⅳ層（茶灰色土）・第Ⅴ層（褐色土）・第Ⅵ層（暗黄褐色粘質土）と続き、地表下約80cmで遺構面に至る。

この調査では、第Ⅳ層掘削時に若干量の遺物が出土し、第Ⅴ層の上面に柱穴等が確認されたため、これを第1遺構面とした。また、第Ⅵ層中にも土師器等の遺物が出土し、その下層に遺構が確認されたため、これを第2遺構面とした。

第8図に示した平面図は、第13トレンチの第2遺構面を記したものである。

第2遺構面の遺構は北部19mに限られており、南部は傾斜した地形を呈し、柱穴等の遺構は認められない。これは先の第2トレンチ・第12トレンチで認められた旧河道（小規模河川跡）とも考えられるが、調査の安全上から追求するには至らなかった。

北部19mで検出した遺構は、いずれも柱穴であり、直径約10cm～40cmを測り、深さも約20cm～35cmと安定している。柱穴の平面形は円形のもの、方形のものがあるが、これらの柱穴群から掘立柱建物の平面プランを特定することはできない。

第14トレンチは、第13トレンチの南方にあたり、第1遺構面のみを残しており、第2遺構面を残さない。これは第2遺構面において、第13トレンチ南部において認められた地形上の傾斜に連続するものである。

第1遺構面で検出した遺構は1条の溝で、北部3mがトレンチに平行しているが、南部7mが屈折して西へ傾いている。溝の規模は幅55cm～60cm、深さ10cm～20cmを測り、基底は水平な状態を示す。

第15トレンチ・第16トレンチ・第17トレンチは、第13トレンチ・第14トレンチの南東方向にあたる。

これら3トレンチの基本土層は、第Ⅰ層～第Ⅲ層が先の第13トレンチと等しく、第Ⅲ層掘削後に第1遺構面が認められる。この第1遺構面の作られる4番目の土層は、先の第Ⅵ層（暗黄褐色粘質土）であり、第Ⅵ層掘削後に第2遺構面が認められる。

第1遺構面では、若干量の柱穴と溝の一部が認められるものの、いずれも残りが浅く、全容のわかるものは少ない。

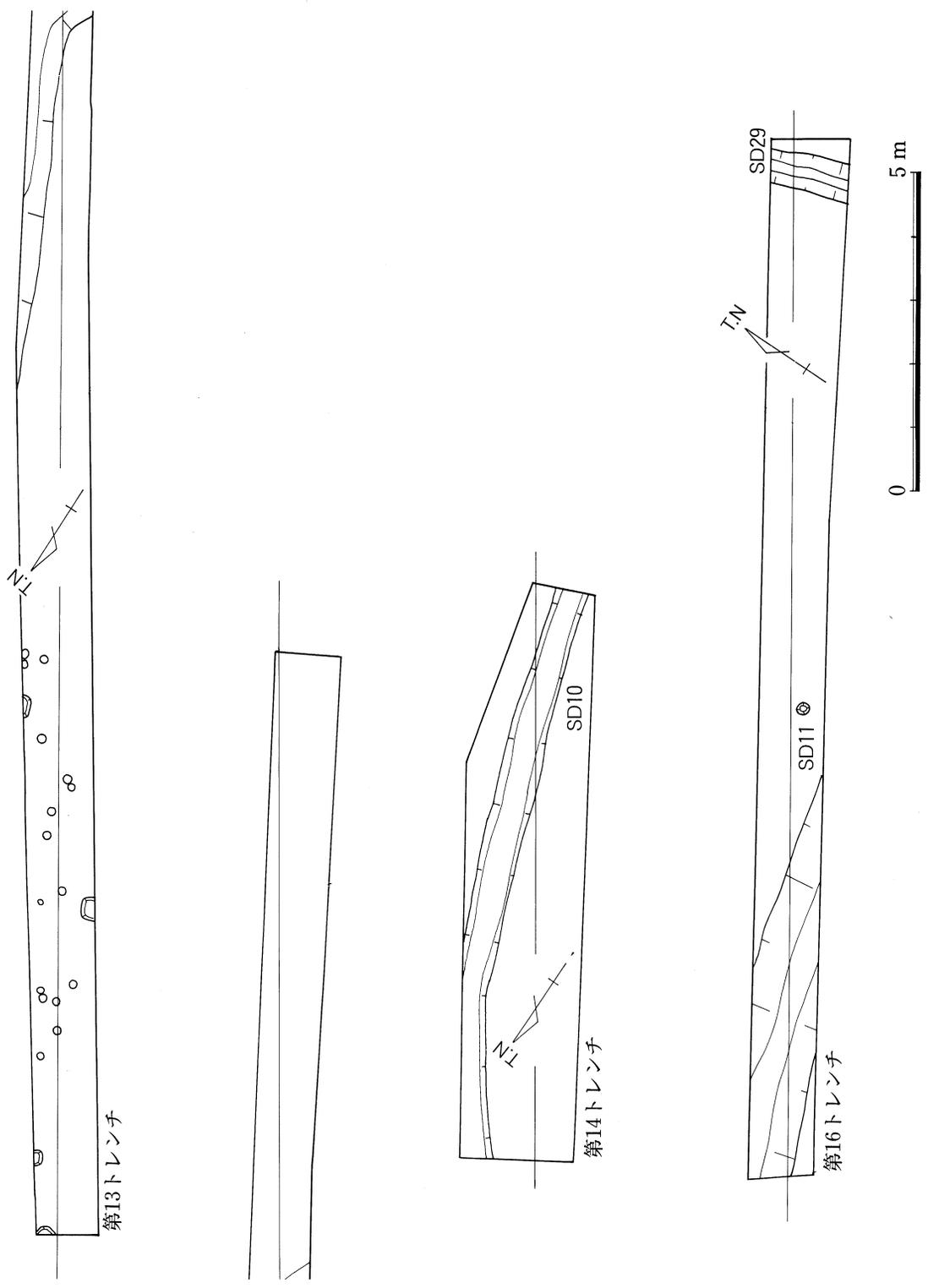
第2遺構面は、淡灰褐色のシルト層に構築されており、第16トレンチにおいて最も明瞭な遺構を検出した。

遺構は、1つの柱穴と2条の溝からなり、柱穴は直径20cm・深さ30cmを測り、平面形は円形を呈する。

溝は、西側のものをSD11とし、東側のものをSD29とした。

SD11は、幅約1m40cm・深さ40cmを測り、断面V字形を呈する。溝の主軸方位はN73°Eを測る。

SD12は、幅約60cm・深さ30cmを測り、同じくV字形の断面を呈する。溝の主軸N21°Wを測り、SD11とほぼ直交することが考えられる。



第8図 第13トレンチ・第14トレンチ・第16トレンチ平面図

第17トレンチは、第16トレンチの東隣にあたり、新設された農道直下に設定した調査トレンチである。

このトレンチでは、東半部が東傾する地形を呈し、内部に灰褐色粘質土（上層）と暗黄灰色粘質土（下層）の堆積が認められた。

このことから、第2遺構面の時期には、第17トレンチから第13トレンチ南部と第14トレンチにかけては、旧河道（小規模河川跡）状の落ち込みが想定され、その埋設後に土層堆積があり、第1遺構面が形成されたと考えられる。

この旧河道状の落ち込みは自然のものであり、第13トレンチの遺構の有り様からみて、市子遺跡の北東域を限る性格は考えられない。したがって、第17トレンチの東方にも第13トレンチ北半部同様の遺構が拡がると想定される。

第20トレンチ～第24トレンチ

今回の市子遺跡調査の目的の1つであった遺跡東限の追求のために、第21トレンチ～第24トレンチの4つの調査トレンチを設定した。

これらの調査トレンチでは河川の氾濫による粘土と砂の互層堆積が確認され、一応市子遺跡の東限の一面を確認したと考えられる。

この調査と併行して、西方100mでは県営かんがい排水事業関連の発掘調査が、南隣では国営かんがい排水事業関連の発掘調査と県営ほ場整備関連の発掘調査が実施されており、それらを総合的に理解すると、本調査の第21トレンチの北辺と、第24トレンチ西方40mの地点を結んで市子遺跡の南東部の拡がりが見込まれる。

第20トレンチではS D30より流木溜りを検出した。

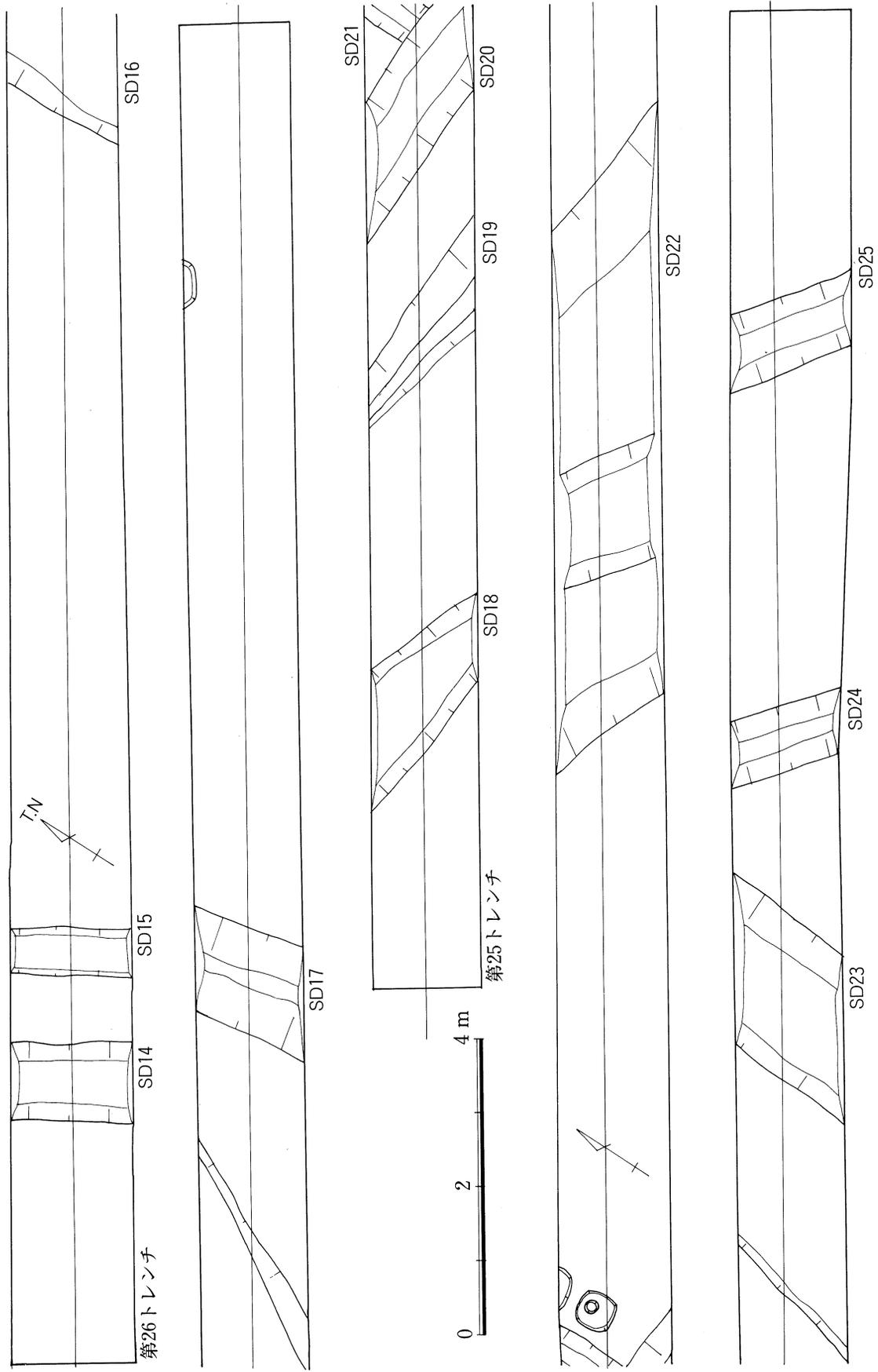
第25トレンチ～第29トレンチ

先の第15トレンチ～第17トレンチの南方40m～110mの範囲に第25トレンチ～第29トレンチの5つの調査トレンチを設定した。

このうち東西方向に伸びる調査トレンチを西から第26トレンチ・第25トレンチ・第29トレンチと呼んだ。

第26トレンチの西延長上には、方形周溝墓（S X8708）を検出した第12トレンチが所在するが、S X8708の東端で確認した旧河道（小規模河川跡）は、東隣する第18トレンチ・第19トレンチを含み、第20トレンチの西部まで続き、第20トレンチの東半部から安定した遺構面を形成する様になる。

第12トレンチ～第20トレンチに続く旧河道は、その上流を第21トレンチ以南に認めることができる。



第9図 第26トレンチ・第25トレンチ平面図

第26トレンチ・第25トレンチ・第29トレンチの基本土層は、第Ⅰ層(耕土)・第Ⅱ層(床土)・第Ⅲ層(灰色土)・第Ⅳ層(暗黄褐色粘質土)・第Ⅴ層(暗灰褐色粘質土)と続き、約75cmで遺構面に至る。これは第13トレンチ～第17トレンチに示す第2遺構面に該当する。

第26トレンチと第25トレンチでは、計12条の溝が検出され、西方より順にS D14～S D25とした。

S D14とS D15は、平行して並ぶ2条の溝で、S D14は幅98cm～1 m08cm・深さ25cmを測り、約90cmの間隔をおいて並ぶS D15は幅60cm～70cm・深さ18cmを測る。いずれも主軸をN32° Wを測る。S D14とS D15の性格については、2条1対で中央に畦を構築する条里畦畔の可能性がある。

S D16は、幅2 m20cm・深さ30cmを測る溝で、北辺と南辺の開きが大きく主軸方位が明らかでない。

S D17は、幅1 m30cm・深さ45cmを測る溝で、断面V字形を呈している。遺構の主軸方位はN15° Wを測る。

第26トレンチの遺構には、以上4条の溝の他にトレンチ東方に柱穴が認められる。柱穴は直径65cmを測る平面方形の遺構であるが、遺構の北半部をトレンチの外方に拡げるため全容はわからない。

S D18は、第25トレンチの西端に位置する溝で、幅1 m～1 m35cm・深さ40cmを測る。遺構の両辺が開くため、主軸方位は不明である。

S D19は、幅60cm～88cm・深さ40cmを測る溝で、断面V字形を呈する。遺構の両辺が開くため主軸方位は不明であるが、東辺は隣接するS D20と向きをそろえている。

S D20は、幅1 m10cm・深さ40cmを測る溝で、断面V字形を呈する。遺構の主軸方位はN90° E Wを測る。

S D21は、埋土の重複関係からS D20に先行する遺構と判断される。幅55cm・深さ20cmを測り、遺構の主軸はN3° Eを測る。

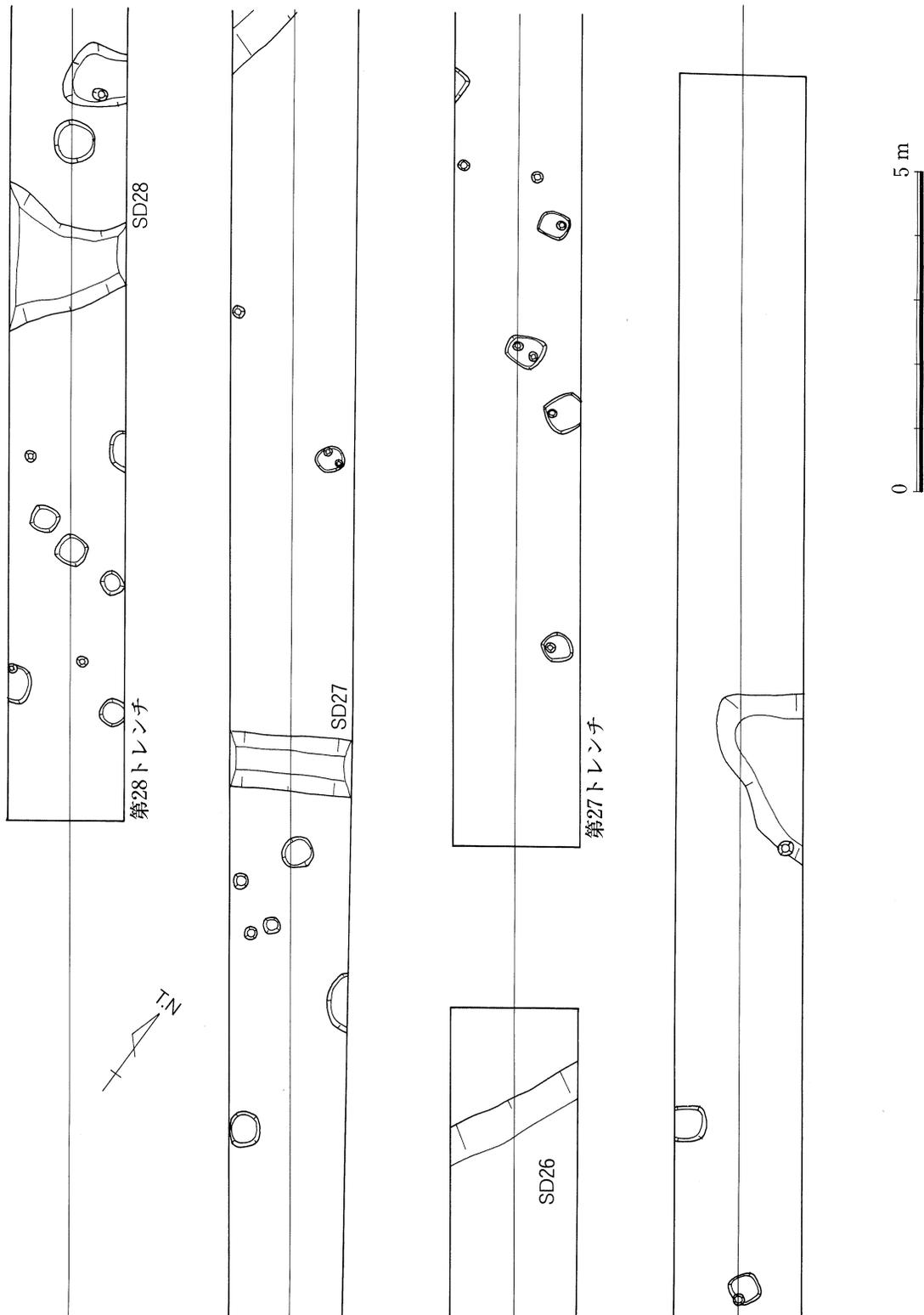
S D20・S D21の東隣には、直径約55cmを測る平面方形の柱穴掘方が2つ確認された。掘方の内部には直径約20cmの円形の柱穴が認められる。

S D22は、第25トレンチの中央に位置する溝で、復原幅約5 m70cm・深さ1 m05cmを測る。遺構の主軸方位はN22° Eを測る。S D22の基底部には幅1 m50cm前後の主軸方位を違える溝が確認されたが、埋土の堆積状況から同一のものと判断された。

S D23は、幅1 m85cm・深さ32cmを測る溝で、基底部は水平な状態を示している。遺構の主軸方位は、N19° Eを測る。

S D24は、幅90cm・深さ10cmを測る残りの浅い溝で、基底部は水平を呈する。遺構の主軸方位はN45° Wを測る。

S D25は、幅1 m・深さ25cmを測る測で、断面V字形を呈する。遺構の主軸方位はN49° Wを測る。



第10図 第28トレンチ・第29トレンチ 平面図

第25トレンチの東隣に設定した第29トレンチでは、第17トレンチ同様の東側に傾斜する落ち込みが認められ、第13トレンチ南半部へと続く旧河道の上流域左岸と考えられる。

第26トレンチ西端を南へ伸ばす様に第27トレンチと第28トレンチを設定した。第20トレンチと第26トレンチ・第27トレンチの間には、現在河川が所在し、地形上に幅5m・深さ2mの凹みを残している。また、第28トレンチと第21トレンチの間にも同様の凹みが残されており、第27トレンチ・第28トレンチは独立した地形の西端に位置する。

第27トレンチ・第28トレンチの標高は、第26トレンチ・第25トレンチの標高に比べて50cm～1m程低いが、第II層（床土）直下で遺構面を検出するため、遺構面の標高差は少なく、先の第2遺構面のみが単独で検出される。

第28トレンチの南端には、平面方形の柱穴掘方が数箇所認められる。これらは一辺30cm～40cmを測り、そのうち直線に並ぶ3つの遺構はN10°Wを示すが、掘立柱建物を構成する明確な平面プランは確認されていない。

この柱穴群の北隣にはSD28がある。SD28は、幅90cm～2m20cm・深さ20cmを測る屈曲した溝である。

SD28の北側には、直径10cm～60cmの柱穴や土壌が拡がるが、柱穴のうちで掘立柱建物を構成する平面プランは明らかでない。

第28トレンチの中央に位置するSD27は、幅90cm・深さ20cmを測り、遺構の基底部は水平に近い。遺構の主軸方位は、N30°Eを測る。

SD26は、第28トレンチの北端に位置しており、幅3m20cm・深さ1m20cmを測り、断面V字形を呈する。

第27トレンチでは、直径10cm～60cm前後を測る柱穴（柱穴掘方）と一辺2m70cmの土壌が確認されたが、性格の明らかな遺構は無い。

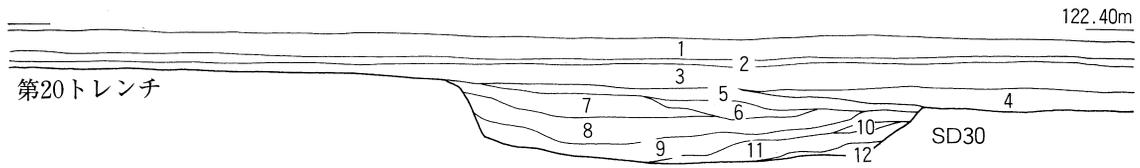
（遺物）

今回の市子遺跡の発掘調査では、弥生式土器・須恵器・土師器・黒色土器等を出土したが、実測可能なものは極めて少ない。

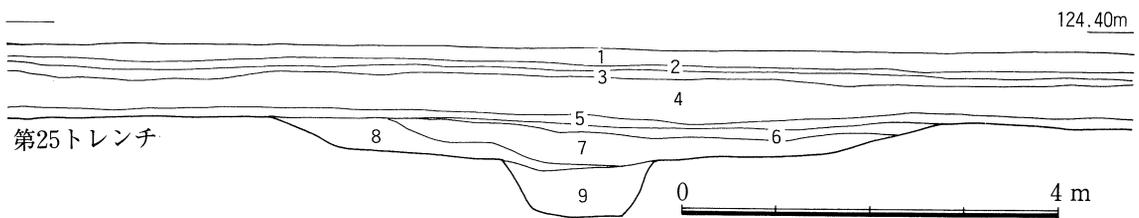
第3トレンチ

遺構面精査時に須恵器の杯蓋（10）が出土した。中央部は欠損しているが扁平なつまみが付くもので、天井部が水平である。

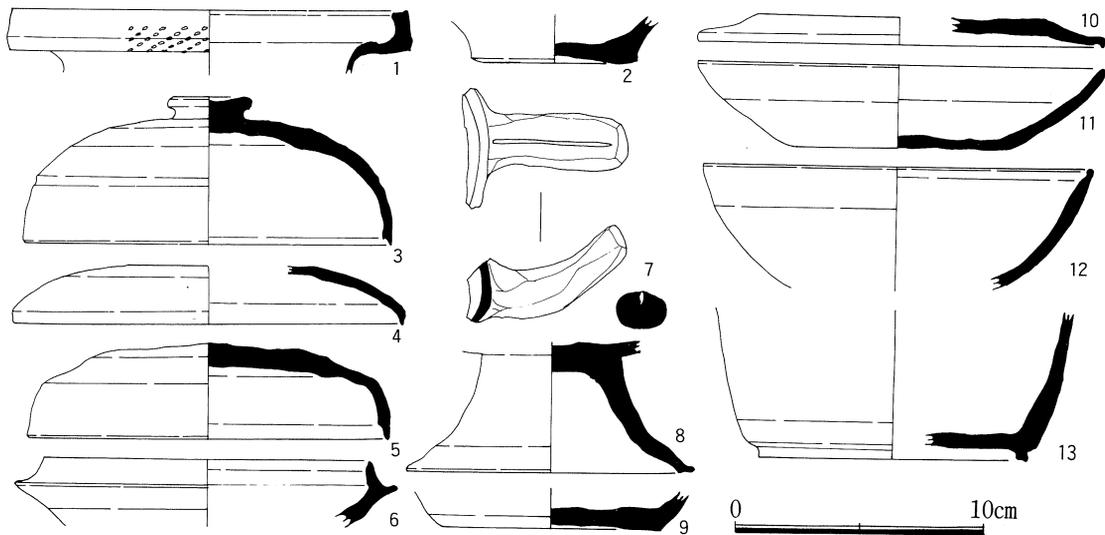
第20トレンチSD30



- 1. 耕土 5. 灰色粘質土 9. 暗灰色粘質土
- 2. 床土 6. 暗褐色土 10. 白色砂
- 3. 黄灰色土 7. 淡青灰色砂質土 11. 灰色粘質土
- 4. 淡褐色土 8. 暗青灰色砂質土 12. 暗灰色粘質土



- 1. 耕土 4. 暗黄褐色粘質土 7. 灰褐色粘質土
- 2. 床土 5. 暗灰褐色粘質土 8. 暗褐色土
- 3. 灰色土 6. 灰色粘質土 9. 暗灰褐色粘質土
- 4. 暗黄褐色粘質土



- 1.2. 第28トレンチ SD26 3.4. 第20トレンチ SD30 5.6.7.8. 第25トレンチ SD22
- 9.11.12.13. 第26トレンチ SD14 10. 第3トレンチ

第11図 土層堆積図及び遺物実測図

流木の溜まるSD30より2点の須恵器が出土した(3・4)。(3)は古墳時代の須恵器で、有蓋高杯の蓋である。(4)は奈良時代以降の杯身の蓋であり、先ほどの(1)と同様に中央に扁平なつまみが付く。天井部は丸味を帯びた蓋形を呈する。

第25トレンチSD22

杯蓋(5)・杯身(6)・把手(7)・高杯脚部(8)が出土した。いずれも古墳時代の須恵器である。

(5)は成形が悪く器壁が厚い。(7)は楕円形の断面を呈し、上方に1条の沈線を持つ。(8)は脚端部が水平で、外面に透し孔を持たない。

第26トレンチSD14

須恵器の杯身(9・13)・土師器の杯(11)・黒色土器の椀(12)が出土した。いずれも平安時代の遺物である。

(9)は高台を持たない杯身であるが、器壁が厚い。(13)は高台を持つ杯身で、器高が高いのを特徴とする。(11)・(12)共に表面が磨耗しており、細部の調整は不明である。

第28トレンチSD26

弥生式土器の甕(1)と壺の底部(2)が出土した。

(1)は中期後半の甕で、受口状口縁を呈する。口縁部は上方に伸び、幾分内傾する面を持っている。外面には刺突列点文が巡る。(2)は底径6.8cmを測り、凹底気味である。器壁の薄い底部である。

(3) まとめ

市子遺跡は、日野川と佐久良川に挟まれた沖積低地に立地する集落遺跡であるが、その内部には幾筋もの小河川が走り、複雑な地理を呈していたと考えられる。この小河川のいくつかは、現在も残されており、市子松井から市子殿・市子沖へと走る「古川(フルコウ)」もその1つであろう。

従来、市子遺跡の範囲は古川以西と考えられていたが、これまでの調査結果から古川以西には弥生時代集落の中心があり、古川以东には古墳時代集落の中心があると現在では理解されている。

古墳時代の集落は、特に佐久良川左岸に近く、蒲生町役場より南方へと続いていることが今回の調査で明らかになった。この一帯の遺構面は地表下約70cm～1 m程の深いところにあり、後世の土層堆積が大変厚いところである。

今回の調査で検出した遺構の多くは溝（SD01～SD30）であるが、線的調査の性質上、その性格は明らかでない。また、溝の主軸方位もさまざまで、南北方位に近いものから条里方位に近いものまで様々である。このうちSD01～SD06・SD14・SD15・SD27は蒲生郡の普及条里方位に近似しており、条里施行に伴う遺構と判断される。中でも条里畦畔に伴うと考えられるSD14からは平安時代後期の遺物が出土し、下層の第2遺構面に開削されることが知られ、条里の普及が12世紀代には認められるが、佐久良川の氾濫等により度々その景観が変化したと考えられる。

また条里施行に先行して、弥生時代中期と古墳時代後期に集落の形成が確認されているが、検出した遺構は一端に過ぎず、集落の全容解明は今後の調査結果を待たなければならない。

市子遺跡は縦横に走る小河川網を巧みに活用し、変則的に居住区・水田区・墓域区の配置したものと理解される。

4. 堂田遺跡の調査

(1) 遺構

古川A区(第15図)

古川と呼ばれる小河川改修部分を下流より、古川A区・古川B区・古川C区・古川D区と呼称した。このうち、古川B区と古川C区は、結果的に連なったため、古川B・C区と一括して呼称する。古川A区は、幅8m、長さ100mにわたって調査した。調査区の北端で、古墳時代中期から後期にかけてのピット群(SB3)、南端部で、平安時代末から鎌倉時代前期の掘立柱建物(SB1・SB2)、中央部で、古墳時代中期の溝(SD3)を検出した。各遺構は、耕土・床土を除く第3層上面で検出した。地山は、黄褐色土、遺構埋土は、暗茶褐色土が多い。なお、SD3の南側の浅い落ち込みで奈良時代前期の遺物(第59図240)が出土した。

SB1(第18図)

南北3間(7.2m)、東西3間(7.2m)以上の掘立柱建物である。東西はトレンチ外となるため、全体規模は不明である。建物の主軸方位はN-30°-W、柱間寸法は平均8尺(240cm)をはかる。柱穴掘方は円形で、平均径40cm、深さ30cm、柱痕部は16cm前後が多い。柱穴埋土から、12世紀代とみられる若干の土師器、黒色土器、瓦器が出土した。

SB2(第18図)

南北2間(5m)、東西1間(2.6m)以上の掘立柱建物である。建物は東へ延びると考えられるが、トレンチ外となるため規模は不明である。建物の主軸方位はN-35°-W、柱間寸法は、南北8尺(2.5m)、東西8尺5分(2.6m)を測る。柱穴掘方は円形で、平均径40cm、深さ40cm、柱痕部径は14cm前後である。柱穴埋土の遺物は少ないが、SB1とほぼ同時期と考えられる。

SB3(第18図)

南北1間(2.8m)、東西1間(3.3m)の建物である。南西角の柱穴は確認できなかった。建物の主軸方位はN-10°-Eを測る。柱穴掘方は円形で、平均径30cm、深さ20cmを測る。柱穴埋土からは、古墳時代中期から後期にかけての土器がわずかに出土した他、焼土・炭化物も混っていた。堅穴住居が削平されて、柱穴のみが残存した可能性もある。

SD3(第15図)

古川A区のほぼ中央を横断する南西から北東へ流れる溝である。溝の幅約60cm、深さ約30cmで、埋土中に磨耗した古墳時代中期の土師器細片を多く含んでいた。西方70mには、38号排水路区で検出した古墳時代中期から後期にかけての建物群があることから、同時期の居住区を区画する溝であったかもしれない。

古川B・C区（第16図）

市子沖の集落をとりまくように、幅8m、長さ約180mにわたって調査した。調査区内から、古墳時代の自然流路6条（SD1・2・4・5・6・11）、竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟を検出した。自然流路のうち、SD1・2・4・5・6はいずれも5世紀後半から6世紀後半までの遺物を多量に含んでおり、ほぼ同時期に流れていたと考えられる。とりわけ、SD1から2点、SD2、SD5から、それぞれ1点の計4点出土した馬鍬は、古墳時代中期から後期にかけての農耕技術を考えるうえで、貴重な資料となった。また、SD2から一括出土した100点近くの手づくね土器と、土師器高杯・壺・甕、滑石製白玉、木器類は、古墳時代の祭祀形態を示す良好な例である。SD11は、古墳時代前期を中心に後期までの遺物を含んでいた。SD1とSD4の間にあるSH1は、古墳時代中期の竪穴住居である。SB8は、SD1とSD2の間に占地しており、SH1とほぼ同時期の建物と考えられる。遺物は、SH1とSB8に近いSD1とSD2から最も多く出土した。なお、遺構面は、現地表面より0.8m下る。

SH1（第17図）

SD1の左岸に位置する、1辺5.8mの方形竪穴住居である。柱は4本柱で、柱間寸法は、東西2.6m、南北2.8mを計る。このうち、2本は柱根が残存していた。P.1は、床面より72cmの深さまで柱を掘り込んである。P.2も、床面から60cmの深さまで柱を掘り込んでいたが、斜めに傾いていた。柱の底部はほぼ平坦であり、径約14cmを計る。いずれも、床面上では24～33cmの掘方を検出したが、下半は、柱痕周辺の土色が、わずかに変色するのみで、明瞭な掘方は検出できなかった。住居の主軸方位は、N-18°-Wを示す。遺構面から、床面までの残存深度は10cmである。西辺と東辺の一部を除いて壁溝が廻る。床面には、炭化物と土器片が散乱していたが、実測に耐え得るものは少ない。炭化物は、東壁中央の土壌周辺に多くみられたため、炉に類する施設があったと考えられる。

SB8（第18図）

SD1の右岸に位置する掘立柱建物である。南北1間（2.4m）、東西1間（1.8m）の建物の東面に2間（5.1m）、南面に2間（4.1m）の柱列を検出した。建物の中央には径約80cm、深さ30cmの土壌がある。建物の柱穴は、径約40cm、深さ25cm、周囲の柱穴は、径約30cm、深さ15cmを計る。建物の主軸方位は、N-21°-Wを示す。

SD1（第19・20図）

南東から北西へ流れる自然流路で、幅11m、深さ1mを計る。埋土中位の暗灰色砂泥層（厚さ40cm）から、5世紀半代の遺物が多量に出土した。1号馬鍬は、流路中央の暗灰色砂泥層上面から出土した。2号馬鍬は、流路の右岸、トレンチの南端部の最上層である黒灰色泥土層から出土した。黒灰色泥土層は、6世紀後半の須恵器が出土していることから、同時期までに埋没したと考えられる。最下層より下は、礫層となっており、梯子片が出土した。

SD 2 (第22・23図)

SD 1 から分流したと考えられる自然流路で、幅5.5m、深さ0.85mを計る。埋土は上下2層に分けられるが、いずれも粘質の強い泥土である。上層は6世紀中頃から後半にかけての須恵器とともに、3号馬鍬・鳥形・曲物等の木製品が出土した。下層からは、100点近くの手づくね土器、土師器高杯3点・壺1点・甕大小3点が、右岸に沿って長さ4m、幅1mの範囲に遺棄された状態で出土した。右岸には板状の杭が、1m程の間隔で2本、その0.7m先に1本打ち込んであった。杭の周囲には、板状や棒状の材木、曲物等の木製品が散乱していた。また、手づくね土器群に混って、滑石製の白玉1点が出土した他、同じ下層から、木製の剣形、下駄、田下駄が出土している。いずれも日常生活用品とは考え難く、水辺における祭祀に使用されたものと考えられる。下層の遺物は、SD 1 中層の遺物と同じ時期、つまり5世紀後半の年代を考えたい。

SD 4 (第20図)

SD 1 の西30mで、南から東へ大きく曲る自然流路で、SD 1 に合流すると考えられる。流路の幅は約5m、深さ0.75mを計る。下層より、5世紀後半と考えられる須恵器杯蓋(202)が出土した。SD 1 に近い屈曲部からは、木片を多く出土した。遺物総数は、SD 1・SD 2 に較べて少ない。埋土は泥土もしくは粘質土である。

SD 5 (第21図)

調査区北端で検出した自然流路で、西から東へ流れる。流路の幅は約5.5m、深さ1.5mを計る。南肩部で4号馬鍬が出土した。同一層位から6世紀中葉の須恵器杯蓋2点(211・212)が出土している。埋土は中層が暗灰色泥土、下層が黒灰色泥土で、いずれも木片が多く出土した。とりわけ下層からは、多数の木枝や、梯子1点などが出土した。

SD 6 (第21図)

SD 5 から分流した自然流路で、南から北へ流れる。流路の幅は約4.5m、深さ1.1mを計る。埋土、出土遺物の様相は、SD 5 と同様であるため、同時期に埋没したとみられる。土器の出土は古川B・C区のなかで、もっとも少ない。

SD 11 (第20図)

調査区東端で検出した自然流路で、南東から北西方向へゆるやかに蛇行して流れる。流路の幅は11m、深さ1mを計る。右岸肩部及び下層の黒色泥土から、古墳時代前期の土器がまとまって出土した。最下層の砂礫層は弥生時代後期、最上層の暗灰色泥質土からは6世紀後半の土器が出土した。

古川D区 (第24・25図)

古川B・C区の上流部で、幅7m、長さ約180mにわたって調査した。調査区内からは、弥生時代後期から中世にかけての20条以上の溝を検出した。また、調査区南端と中央部に掘立柱建物群を検出した。このうち、建物としてまとまらないピットも多い。各建物群の距離は約60mを計

る。調査区北部では竪穴住居 1 棟を検出した。他の調査区と比較して遺構密度は低く、遺物量も少ない。

S D 11 (第25図)

東西3.5m以上、南北2.5m以上の方形プランの竪穴住居である。遺構は調査区外に拡がっており、全体規模は不明である。床面までの深さは20cmで、埋土中に土師器片が少量含まれていた。

S B 9 (第26図)

調査区南端で検出した。南北2間(4.6m)、東西2間(3.4m)以上の掘立柱建物である。柱穴掘方は円形で、径30cm前後、深さ30cmを計る。主軸方位はN-39°-Wを示す。南辺に接して柵列と考えられるピットが3個ある。ピット間は1.5mと2.5mで、まばらであるが、一直線に並ぶ。建物周辺より13世紀代と考えられる青磁片を出土した。

S B 10 (第26図)

S B 9と重複する建物で、南北2間(2m)を検出した。東西は、調査区外のため不明である。柱穴掘方は円形で、径30cm前後、深さ30cmを計る。主軸方位はN-37°-Wを示す。

S B 11 (第26図)

調査区のはほぼ中央で検出した。南北1間(4m)、東西1間(4.4m)の掘立柱建物である。柱穴掘方は円形で、径35cm前後、深さ20cmを計る。主軸方位はN-40°-Wを示す。

S D 16 (第24図)

蒲生郡条里の坪境を示す溝である。幅1m、深さ0.3mを測る。方位はN-62°-Eである。溝内からは、ごく少量の中世とみられる土器片が出土した。

S D 17・18 (第24図)

S B 9・10の北20mに位置する。2条の溝が、2mの間隔で平行する。溝の方位は、S B 9・10の方位とはほぼ一致する。溝の幅は0.4m、深さ0.2mを計る。

38号排水路区 (第27図)

38号排水路部分と、それに接した切土部合を合わせて38号排水路区とした。当調査区では、古墳時代中期から後期の遺構と、平安時代後期の遺構に分けられる。前者の遺構は、竪穴住居1棟(S H 2)、掘立柱建物3棟(S B 13・15・16)以上、溝3条(S D 13・14・15)などである。後者の遺構は、掘立柱建物4棟(S B 12・14・17・20)、土壇1基(S K 10)がある。他に時期不明の掘立柱建物(S B 18・19・21)や素掘溝などがある。

S H 2：やや不整形な方形竪穴住居である。柱穴はなく、埋土内からも、6世紀後半とみられる須恵器杯身の小片が出土したのみであった。長辺は4.3m、短辺4.0m、深さ0.1mを計る。

S B 12 (第29図)：南北2間(5.2m)以上、東西2間(5.0m)の掘立柱建物である。北辺はトレンチ外となるため全体規模は不明である。主軸方位はN-27°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径30cm、深さ30cmを計る。

S B 13 (第30図) : 南北3間(4.8m)、東西4間(6.4m)の掘立柱建物である。主軸方位はN-13°-Wを示す。柱穴掘方は不整形で、径60cm、深さ40cmを計る。一部に柱根を残す。

S B 14 (第29図) : 南北3間(6.4m)、東西2間(4.2m)の掘立柱建物である。主軸方位はN-41°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径30cm、深さ30cmを計る。

S B 15 (第30図) : 南北3間(4.8m)、東西4間(6.4m)の掘立柱建物である。主軸方位はN-10°-Wを示す。柱穴掘方は不整形で、径50cm、深さ40cmを計る。

S B 16 (第31図) : 南北3間(5.2m)、東西3間(6.0m)の掘立柱建物である。南辺の西端に1間の張り出しがある。主軸方位はN-12°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径40cm、深さ40cmを計る。

S B 17 (第32図) : 南北1間(2.4m)、東西1間(2.0m)の掘立柱建物である。主軸方位はN-34°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径20cm、深さ30cmを計る。

S B 18 (第32図) : 南北1間(2.4m)、東西1間(2.4m)の掘立柱建物である。主軸方位はN-32°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径30cm、深さ30cmを計る。

S B 19 (第32図) : 南北1間(2.8m)、東西1間(2.8m)の掘立柱建物である。主軸方位はN-26°-Eを示す。柱穴掘方は円形で、径30cm、深さ30cmを計る。

S B 20 (第32図) : 南北3間(6.6m)、東西2間(4.0m)の掘立柱建物である。主軸方位はN-28°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径30cm、深さ30cmを計る。

S B 21 (第31図) : 建物としては、柱穴間が不揃いである。南北4.6m、東西5.6mの掘立柱建物である。主軸方位はN-18°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径40cm、深さ30cmを計る。

S K 10 : 長径1.3m、短径1.0mの不整形の土壌である。平安時代末の土器(313・314・465・466・467)を出土した。

S D 13 : 調査区の西端で検出した。幅1.5m、深さ0.4mを計る、古墳時代中期の土器を含む。

S D 14 (第34図) : 調査区の東部で検出した古墳時代の建物群の西側を区画するように掘られた人工溝で、幅6.5m、深さ1.8mを計る。最下層より、5世紀後半の土器が完品で出土した。

S D 15 : 2条の流路が、調査区内で合流する。また合流部分より、東部へ流出する細い溝がある。埋土下層から6世紀後半の須恵器が出土した。

29号道路区 (第15図)

道路部分であるが、削平を伴う工事のため調査した。本調査区以西にも遺構が存在していたが、前年度の工事によってすでに削平されていた。調査前には、西側削平面に溝の断面が露出しており、遺物が散乱していた。検出遺構は、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての自然流路4条(S D 7・8・9・10)、平安時代末から鎌倉時代前期の掘立柱建物4棟(S B 4・5・6・7)などである。なお、S D 7は削平を受けないため掘り下げなかった。

S D 8 (第34図)

南北方向に流れる自然流路で、幅6.3m、深さ1.1mの上層流路と、SD9下層も含めた幅30m以上の下層流路とに分かれる。上層流路は古墳時代中期までの遺物、下層流路は弥生時代後期の遺物を主に出土した。

SD9 (第15図)

東西方向に流れる自然流路で、幅5.5m、深さ1.0mの上層流路と、弥生時代後期を主体とする下層流路に分けられる。

SD10 (第34図)

南北方向に流れる自然流路で、幅5.7m、深さ0.9mを計る。古墳時代中期までの遺物を含む。

SB4 (第33図)

南北4間(9.6m)、東西2間(5.0m)以上の掘立柱建物である。両端は調査区外のため、全体規模は不明である。主軸方位はN-18°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径23cm、深さ30cmを計る。

SB5 (第33図)

南北2間(4.0m)、東西2間(3.8m)以上の掘立柱建物である。柱間、柱筋ともにばらつきがある。主軸方位はN-30°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径25cm、深さ30cmを計る。

SB6 (第33図)

南北2間(4.6m)、東西1間(2.2m)以上の掘立柱建物である。主軸方位はN-25°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径25cm、深さ30cmを計る。

SB7 (第33図)

南北1間(2.2m)、東西1間(2.2m)以上の掘立柱建物である。主軸方位はN-22°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径20cm、深さ40cmを計る。

46号排水路区 (第35図)

46号排水路と切土部分を合わせて46号排水路区とした。今回の堂田遺跡の調査の中で、最も遺構が密集した調査区である。検出遺構は、弥生時代後期の竪穴住居2棟(SH9・10)、古墳時代後期の竪穴住居3棟(SH6・7・8)、掘立柱建物1棟(SB32)、平安時代末から鎌倉時代前期の掘立柱建物10棟(SB22~31)以上、溝5条(SD16~20)、土壇8基(SK1~8)などである。平安時代末から鎌倉時代前期の掘立柱建物群は、ピットの密集度の高いSB29付近を中心に、さらに増加するかもしれない。

SH9 (第38図)

調査区中央からやや北よりで、SH10と並んで検出した。方形の竪穴住居で、南北5.8m、深さ0.12mを計る。東辺部はトレンチ外のため不明である。柱は4本柱で、南北3.2m、東西3.2mを計る。柱穴掘方は径40cm、深さ40cm、柱痕部径15cmを計る。住居の主軸方位はN-49°-Wを示す。東辺部は不明だが、壁溝が三方を廻る。北東隅近くには、敲石と考えられる河原石が据えてあつ

た。床面及び埋土には炭化物が多く含まれていた。弥生時代後期の土器（441）を出土。

S H 10（第39図）

S H 9 と並んで検出した。方形の竪穴住居で、南北4.6 m、深さ0.25 mを計る。東辺部はトレンチ外のため不明である。柱は4本柱で、南北2.8 m、東西2.6 mを計る。柱穴掘方は径30cm、深さ35cmを計る。住居の主軸方位はS H 9 とほぼ一致する。壁溝は、西辺と南辺の一部に廻る。S H 9 と同様に、北東隅近くに敲石と考えられる河原石が裾えてある。石の表面は火を受けたけた痕跡を残す。床面から炭化材を検出しており、焼失して廃絶したと考えられる。遺物の出土は少ないが、S H 10 と同時期の弥生土器を出土した。

S H 6（第36図）

調査区の北端で検出した。方形の竪穴住居で、南北5.8 m、東西4.2 mを計る。西辺部は後世の削平を受けている。柱は、本来あるべき位置にはなく、まとまらない。壁溝はほぼ全周するとみられる。北辺近くの床面が火を受けて赤色化しているため、カマドがあったと考えられる。住居の主軸方位はN-41°-Wを示す。床面より、須恵器杯身（442）が出土した。

S H 7・8（第37図）

調査区の北端で、S H 6 に近接して検出した。S H 7・8 は重複しており、ともに方形の竪穴住居である。S H 7 は、南北4.9 m、東西4.8 mを計る。柱は4本柱で、南北2.4 m、東西2.3 mを計る。柱穴掘方は50cm、柱痕部径15cm、深さ65cmを計る。壁溝は、東辺と北辺の一部に廻る。主軸方位はN-37°-Eを示す。S H 8 は、後世の削平が著しいため、詳細は不明である。S H 7 とS H 8 の前後関係についても明確にできなかった。

S B 22（第40図）

南北4間（10.8 m）、東西3間（7.2 m）の掘立柱建物である。主軸方位はN-26°-Wを示す。建物の東辺に沿って、南北方向の溝（S D 20）が掘られている。さらに、溝の東肩に、4個の柱穴が一直線に並ぶ。柱穴掘方は円形で、径33cm、深さ30cmを計る。南東隅の柱穴（P.163）と、その西隣のピット（P.164）からは、黒色土器碗や土師器皿が埋納されていた。

S B 23（第40図）

南北4間（8.8 m）、東西2間（4.4 m）以上の掘立柱建物である。S B 22 とは、南辺の梁行が一直線上に揃えるが、主軸方位で3°東寄りのN-23°-Wを示す。建物の東半は、調査区外のため不明である。柱穴掘方は円形で、径33cm、深さ30cmを計る。

S B 24（第41図）

南北1間（2.2 m）、東西1間（2.4 m）の掘立柱建物である。S B 22 と重複して立地する。主軸方位はN-24°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径30cm、深さ30cmを計る。

S B 25（第41図）

柱穴のない部分もあるが、南北4間（10.0 m）、東西2間（4.7 m）の掘立柱建物と考えられる。主軸方位はN-20°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径40cm、深さ30cmを計る。

S B 26（第41図）

S B 25の北5 mにあって、主軸方位を同じくし、西辺も一直線上に揃える。南北1間(2.0 m)東西2間(4.4 m)の掘立柱建物である。柱穴掘方は円形で、径40 cm、深さ30 cmを計る。南西隅の柱穴(P.306)から土師器台付皿が出土した。

S B 27 (第42図)

南北3間(5.6 m)、東西3間(5.0 m)の掘立柱建物である。東辺中央に1間の張り出しがある。東端の1間は、柱間が1.3 mと短い。また、南辺に接して、4個の柱穴が棚状に一直線に並ぶ。したがって、身舎は2間×3間の東面廂付建物となる。主軸立位はN-29°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径23 cm、深さ25 cmを計る。

S B 28 (第42図)

S B 29に付属するように、南辺を一直線に揃えた南北1間(2.2 m)、東西1間(2.2 m)の掘立柱建物である。主軸方位はN-25°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径30 cm、深さ33 cmを計る。

S B 29 (第43図)

今回の調査区では最大の掘立柱建物である。東辺は調査区外のため不明であるが、他の三方は溝で囲う。建物は南北7間(14.8 m)、東西4間(8.8 m)以上で、西辺に幅2間、長さ1間の張り出しがある。主軸方位はN-28°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径40 cm、深さ40 cmを計る。屋敷地を囲う溝のうち、南辺を画する溝は、平行する2条(S D 16・17)からなり、溝と溝の間1.0 mには、生垣もしくは土塁があったと考えられる。南溝S D 17と、北溝S D 18の間は、約21 mを計る。北辺に接して、井戸状の土壇(S K 5)がある。各柱穴及び区画溝から、12世紀前半代の土師器・黒色土器・瓦器が出土した。また、この建物と重複して、多数の柱穴を検出しており、さらに複数の建物があった可能性は強い。

S B 30 (第42図)

S B 29の北6 mにある南北1間(2.4 m)、東西2間(5.6 m)の掘立柱建物である。主軸方位はN-30°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径35 cm、深さ30 cmを計る。

S B 31 (第44図)

柱穴のない部分もあるが、南北2間(4.8 m)以上、東西3間(6.4 m)の身舎に、南辺と東辺に廂と考えられる柱穴群が並ぶ。主軸方位はN-30°-Wを示す。柱穴掘方は円形で、径23 cm、深さ30 cmを計る。

S B 32 (第44図)

S H 7と主軸方位を一致させる。南北1間(2 m)以上、東西4間(6.4 m)以上の掘立柱建物である。柱穴掘方は不整円形で、径50 cm、深さ40 cmを計る。

S K 1 (第45図)

不整円の土壇である。長径3.2 m、深さ0.7 mを計る。瓦器椀(406・410)、土師器、黒色土器を出土した。

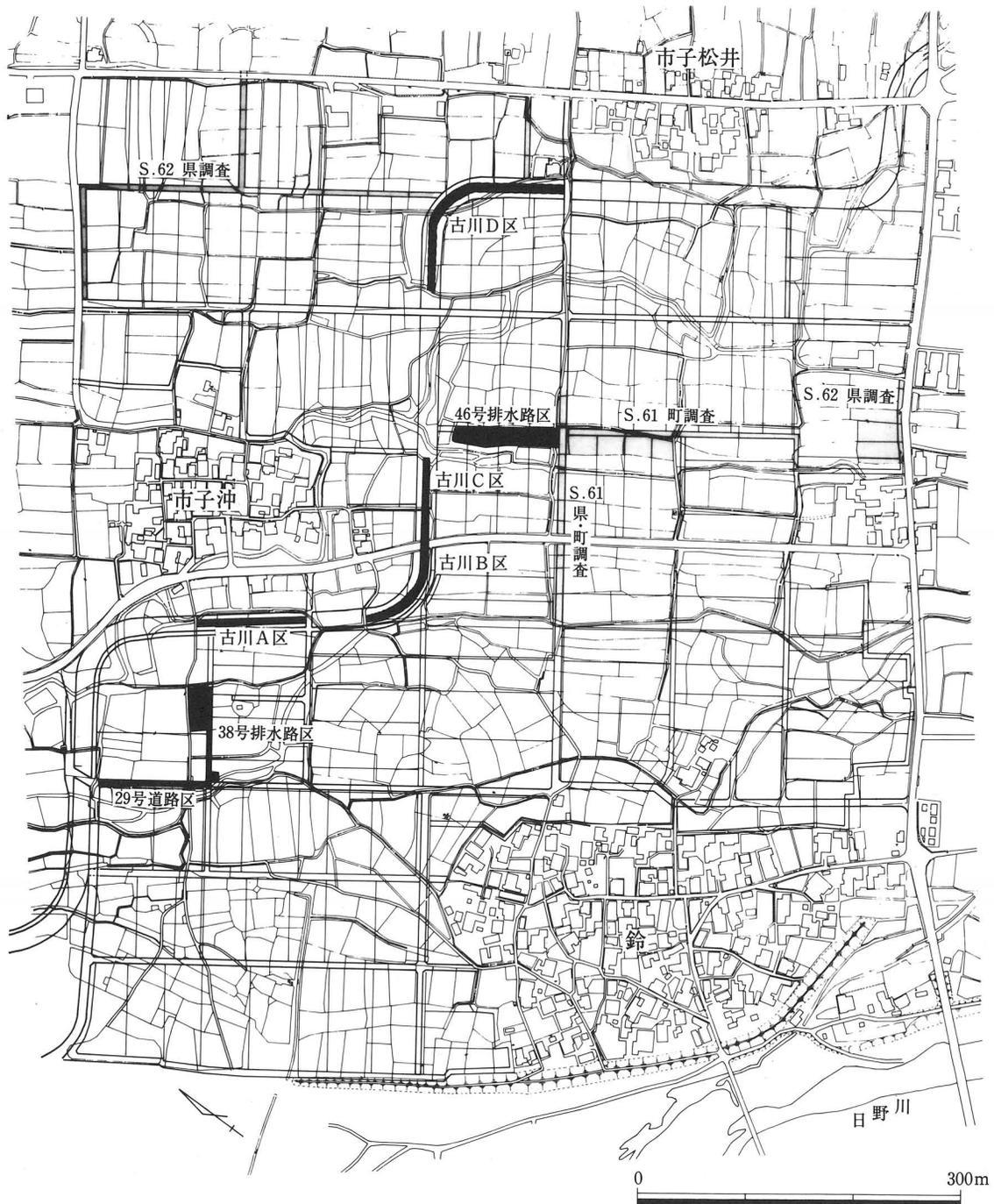
S K 5 (第46図)

S B 29の北辺に接した井戸状の土壇である。上端径2.4 m、深さ1.5 mを計る、中層の暗灰色粘

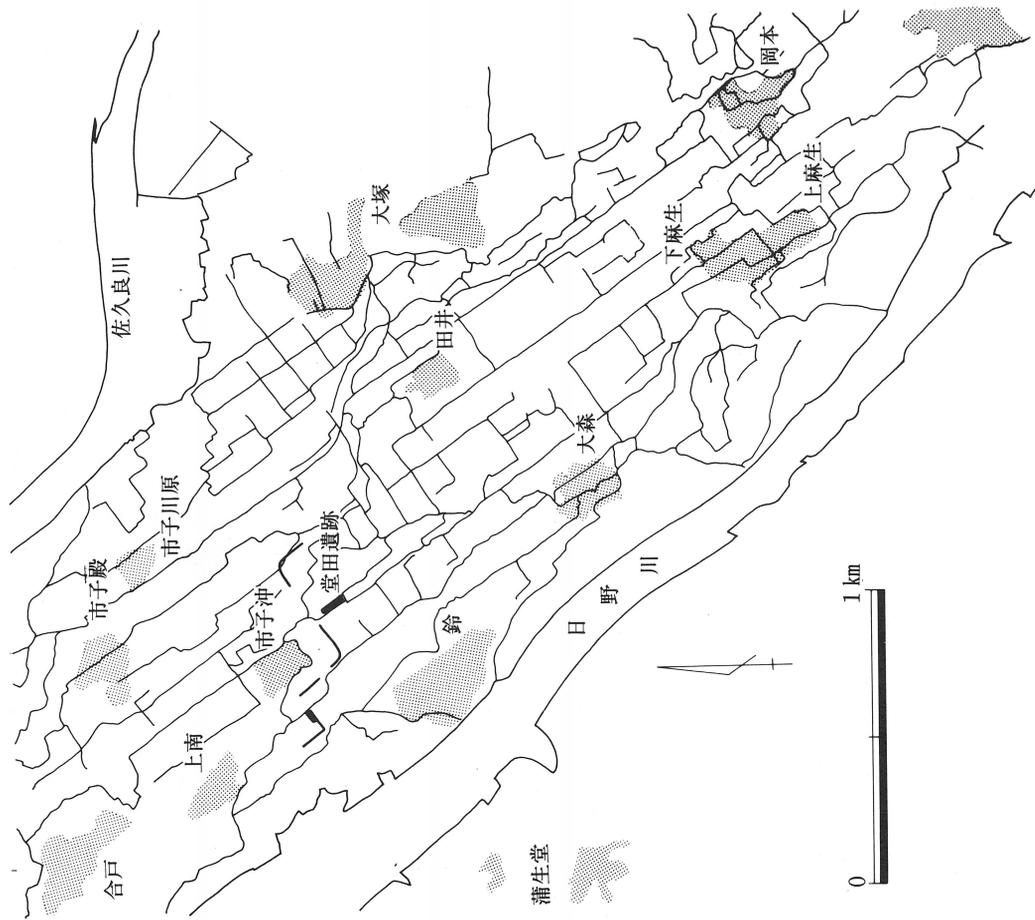
土中に木材片を含んでいた。

SK 8 (第47図)

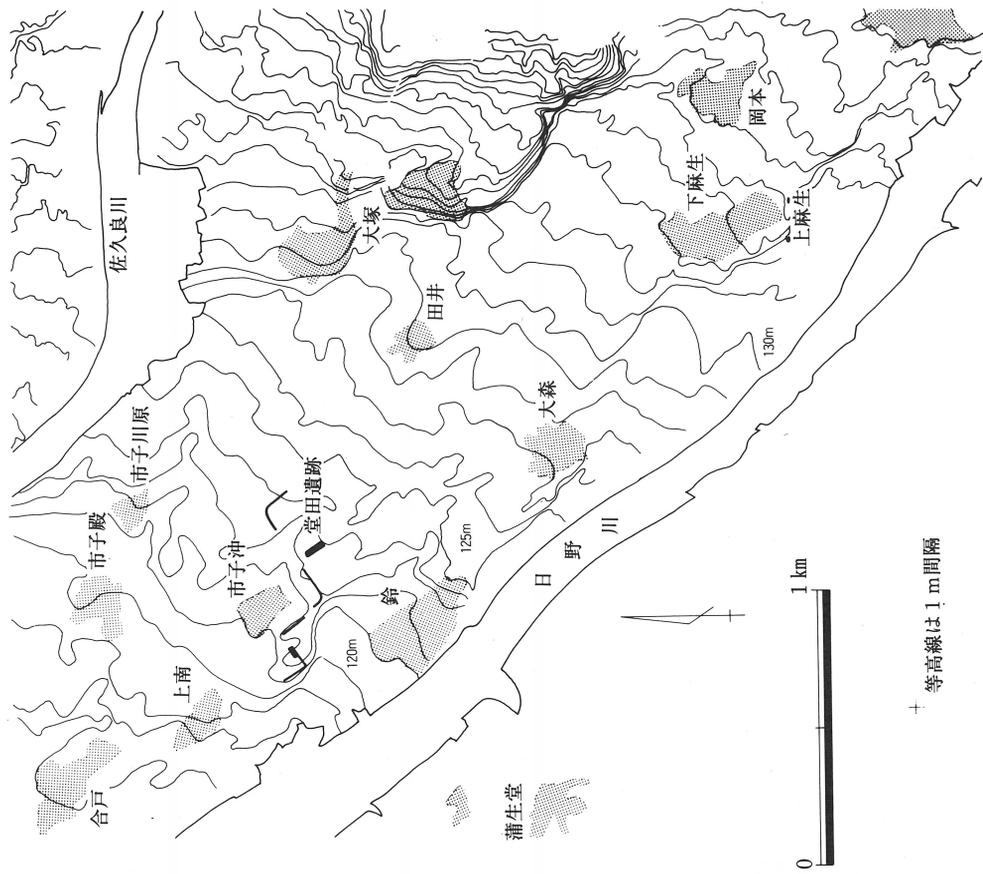
S B 22の北辺にある隅丸方形の土壙である。一辺2.0m、深さ0.7mを計る。土壙内より、土師器皿 (381)、瓦器皿 (392) が出土した。



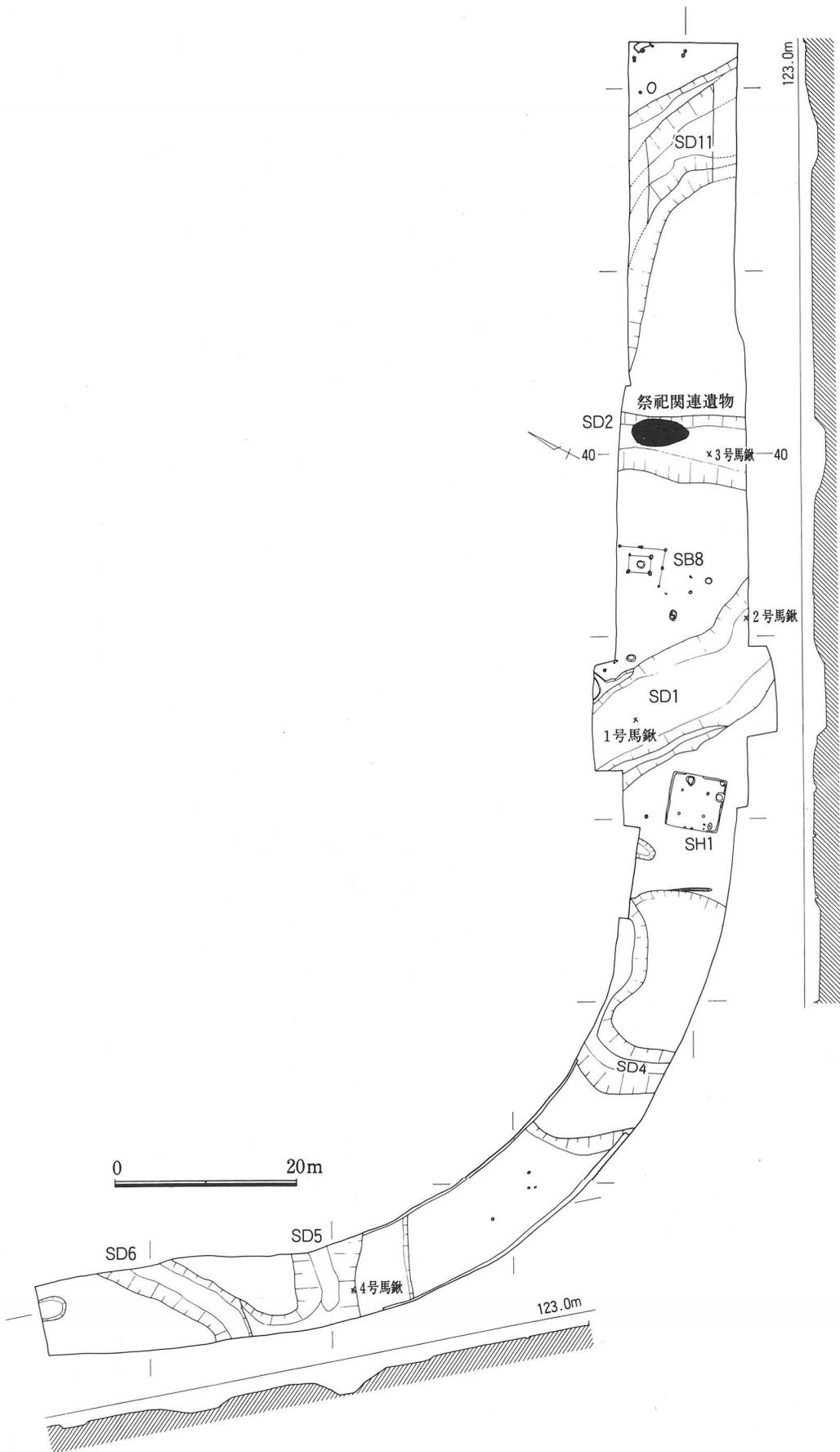
第12図 堂田遺跡調査区設定図



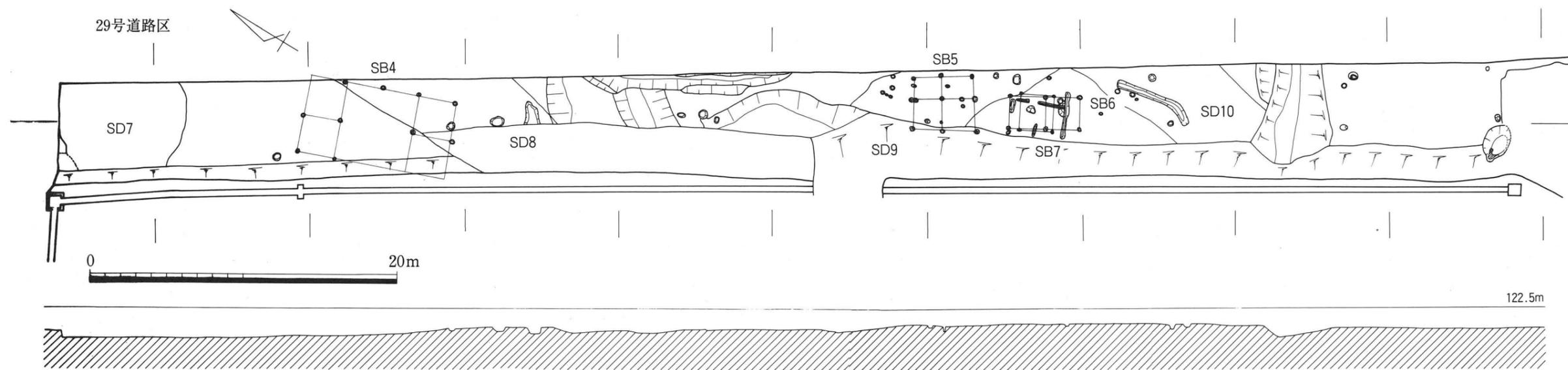
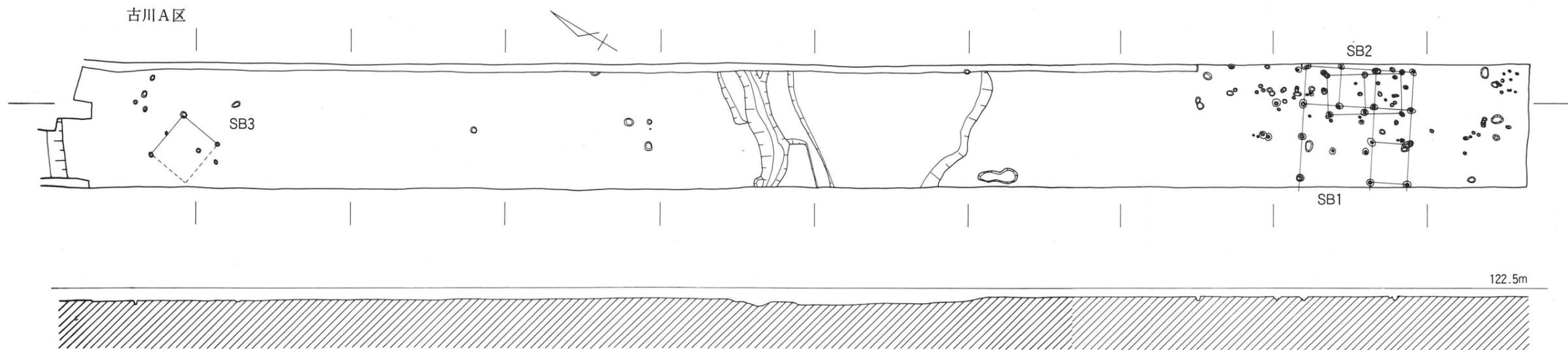
第14図 堂田遺跡周辺水利図



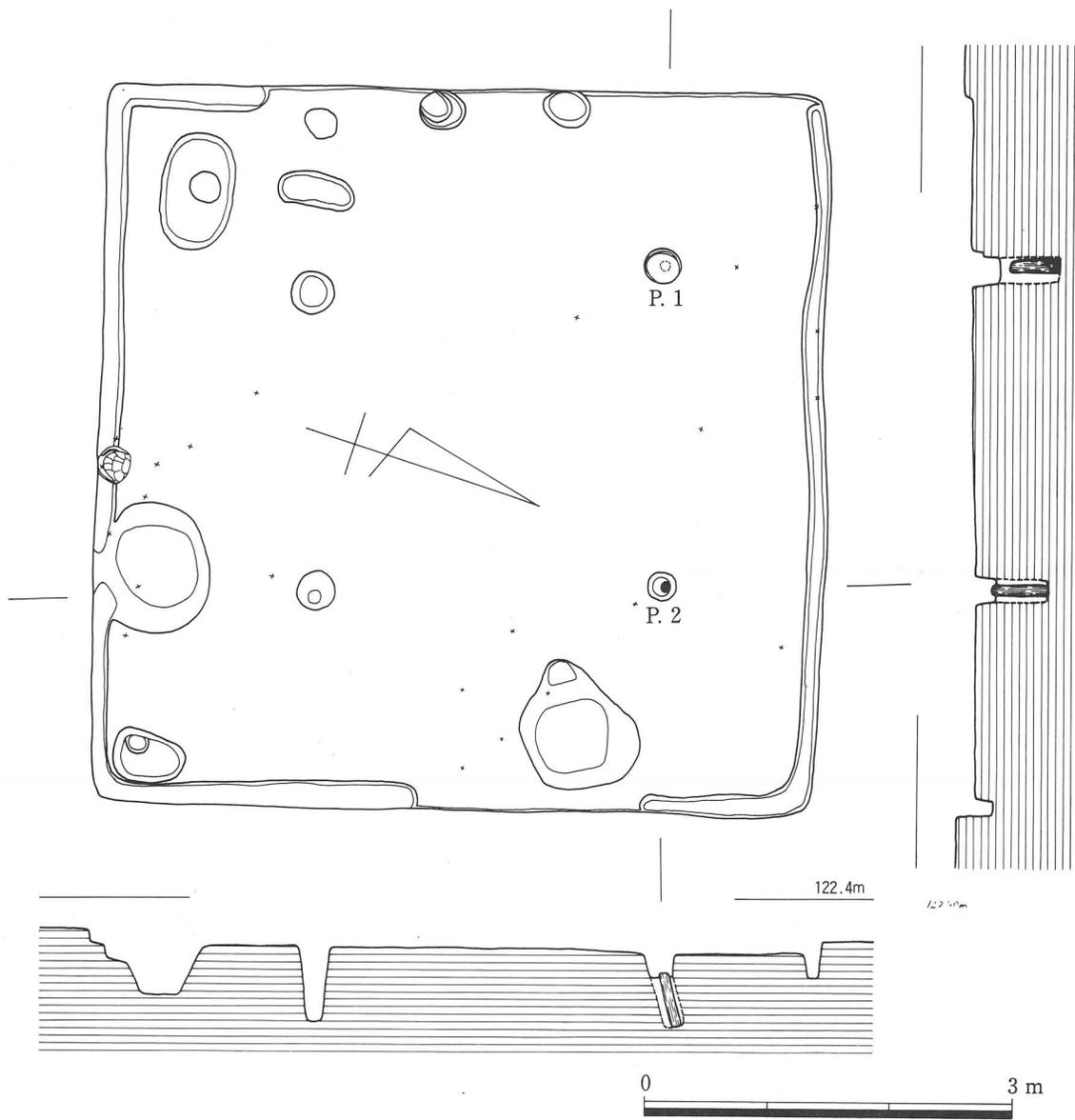
第13図 堂田遺跡周辺地形図



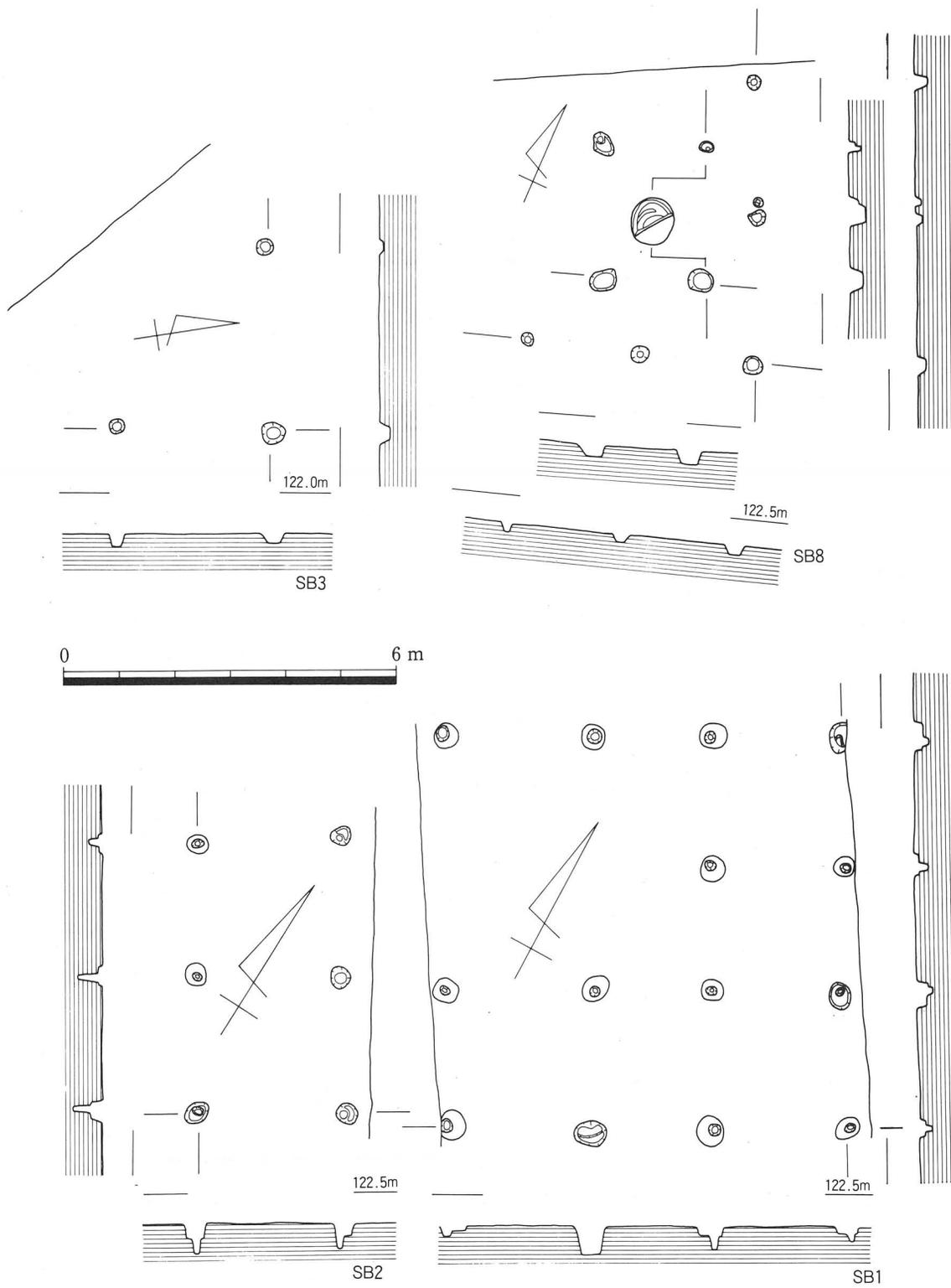
第16図 古川B・C区 遺構図



第15図 古川A区・29号道路区 遺構図



第17図 古川B区 SH1

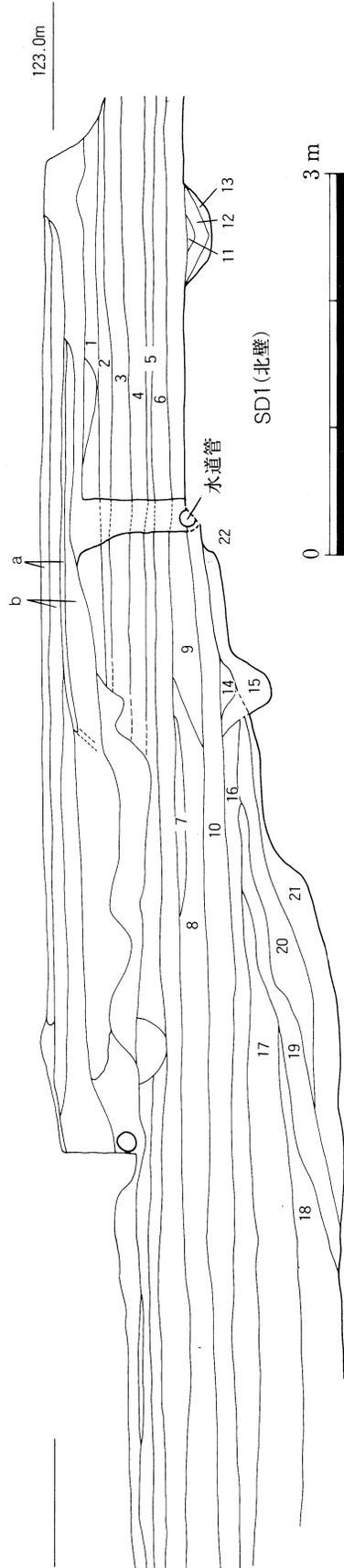


第18図 古川A・B区 SB1・SB2・SB3・SB8



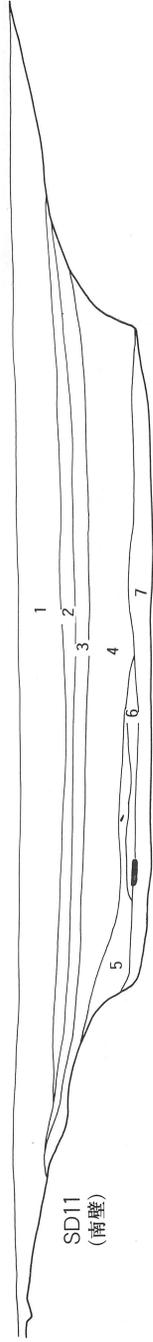
- 1. 耕土
- 2. 床土
- 3. 淡黄青灰色土
- 4. 淡灰色土
- 5. 淡黄灰色土 I
- 6. 灰色土
- 7. 淡黄灰色土 II
- 8. 暗灰色土
- 9. 暗灰色泥土 I
- 10. 暗灰色泥土 II
- 11. 暗灰色泥土 I
- 12. 暗灰色砂泥

- 1. 耕土
- 2. 床土
- 3. 淡灰色土 I
- 4. 淡黄灰色土 I
- 5. 灰色土
- 6. 淡黄灰色土 II
- 7. 明灰褐色土
- 8. 暗灰色土 I
- 9. 暗灰色土 II
- 10. 黑灰色泥土
- 11. 暗茶灰色土
- 12. 黑灰色土
- 13. 暗灰色砂質土
- 14. 暗茶灰色土
- 15. 黑灰色土
- 16. 灰色泥土 (鉄分含)
- 17. 暗灰色泥土 I
- 18. 暗灰色泥土 II
- 19. 暗灰色砂泥 (遺物多い)
- 20. 暗灰色泥土 III
- 21. 暗灰色泥土 IV (砂層を含む)
- 22. 青灰色泥土



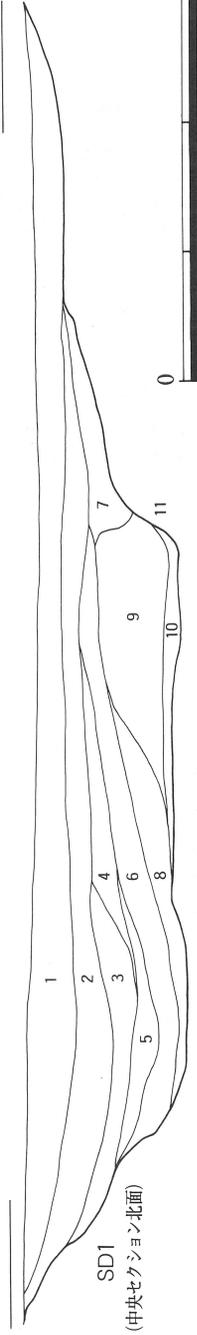
第19図 古川B・C区 SD1 土層断面図

122.4m



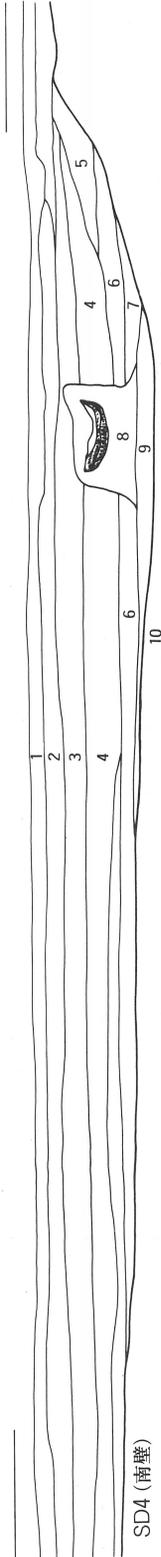
- 1. 暗灰色泥質土
- 2. 灰色泥土
- 3. 黒灰色泥土
- 4. 暗灰色泥土
- 5. 黒色泥土 (遺物多い)
- 6. 黒灰色砂
- 7. 砂

122.0m



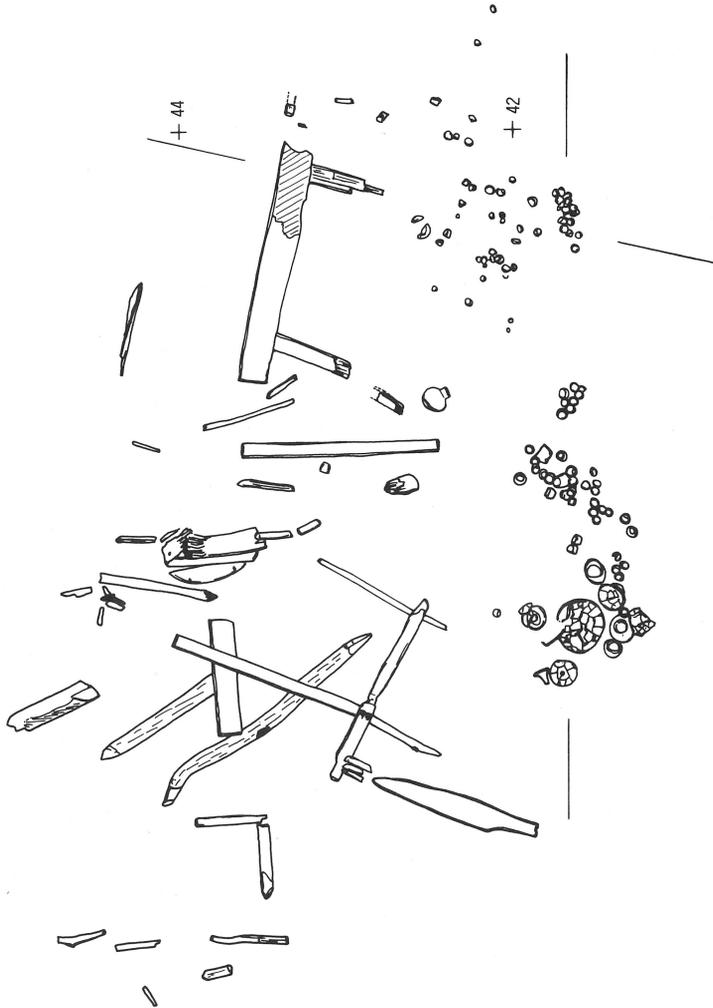
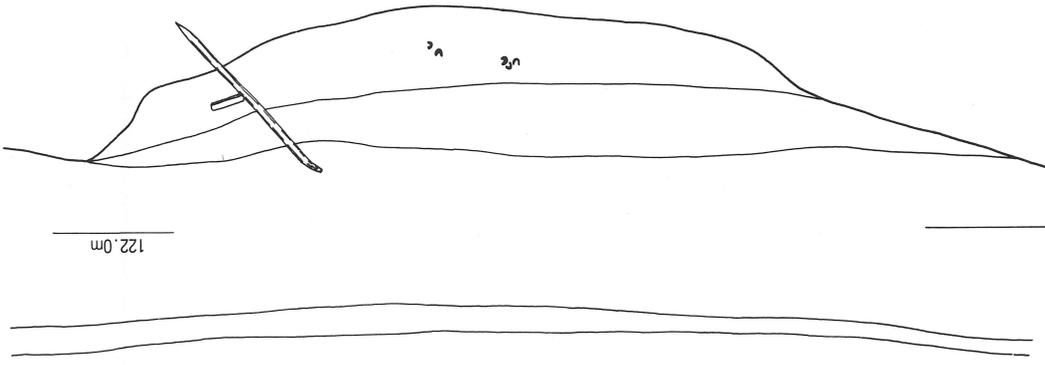
- 1. 黒灰色泥土
- 2. 暗灰色泥土 I
- 3. 暗灰色泥土 II
- 4. 暗灰色泥土 III
- 5. 暗灰色砂泥
- 6. 暗灰色泥土 IV
- 7. 灰色砂
- 8. 暗灰色泥土 V (砂層が混る)
- 9. 青灰色泥土
- 10. 青灰色砂
- 11. 青灰色泥土

122.5m



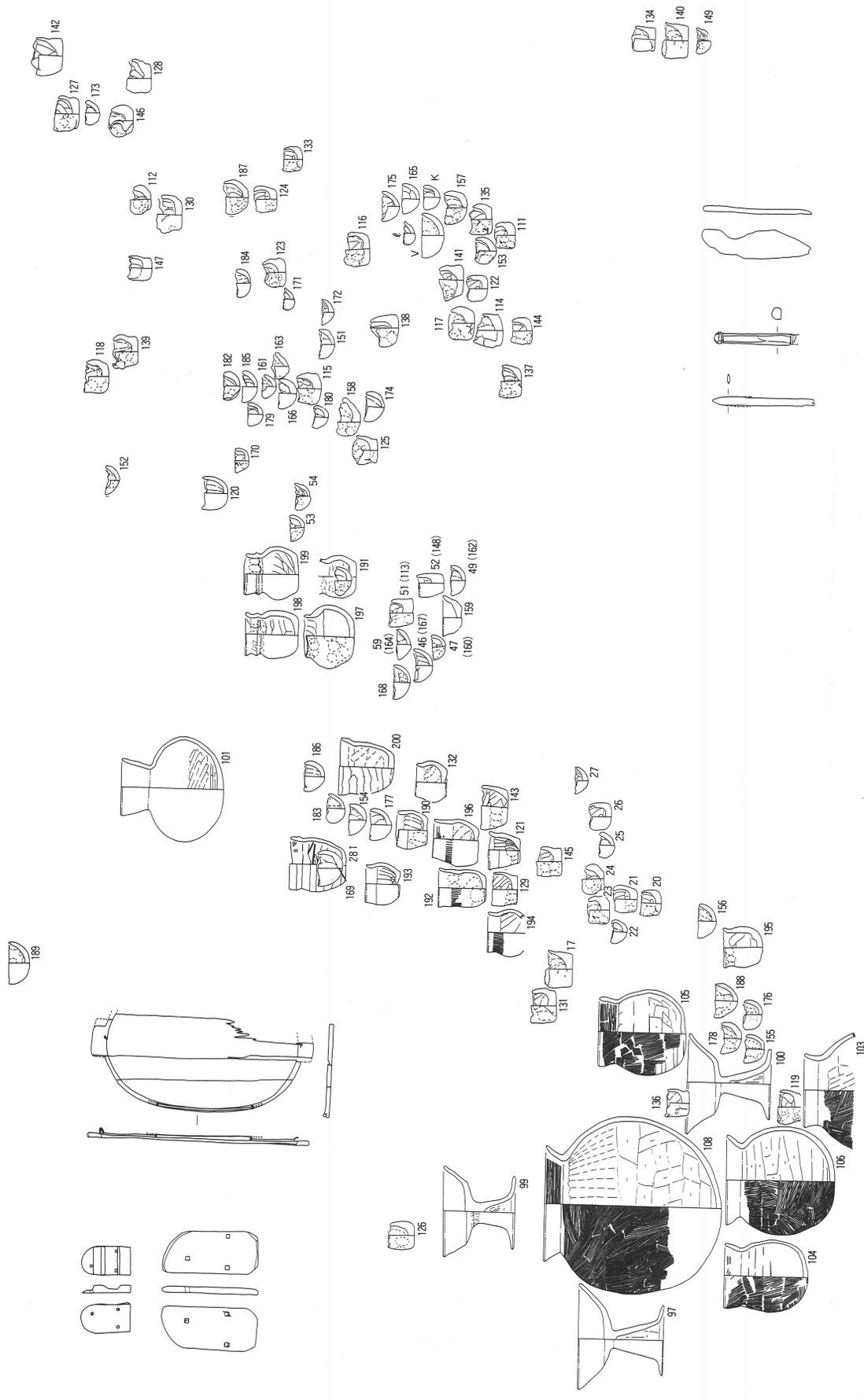
- 1. 耕土
- 2. 淡黄灰色砂質土
- 3. 黄灰色粘質土
- 4. 暗灰色粘土 I
- 5. 暗黄灰色粘土 I
- 6. 暗黄灰色粘土 II
- 7. 暗灰色泥土 II (遺物多い)
- 8. 黒灰色泥土 I
- 9. 黒灰色泥土 II
- 10. 青灰色粘土

第20図 古川B・C区 SD1・SD4・SD11 土層断面図

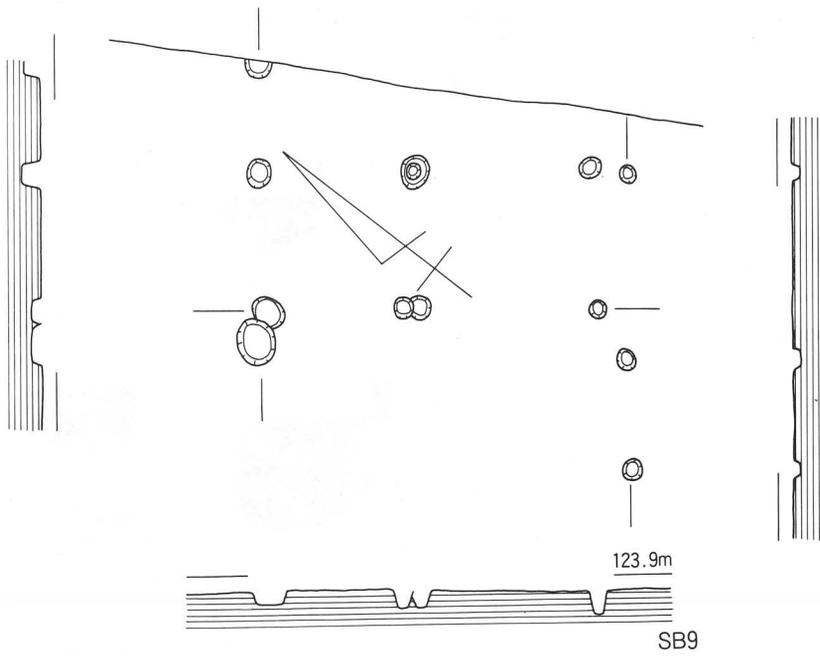
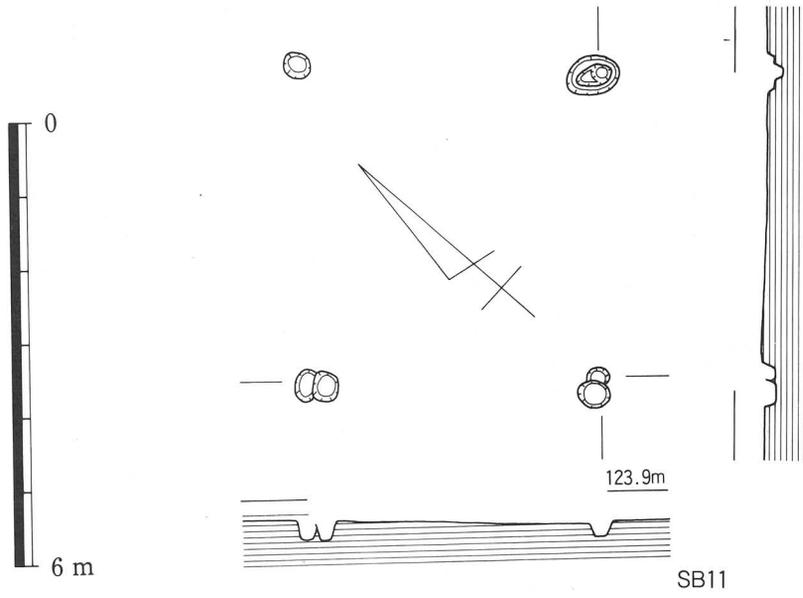
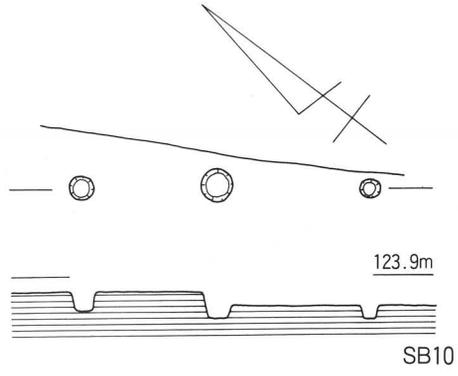


121.1m

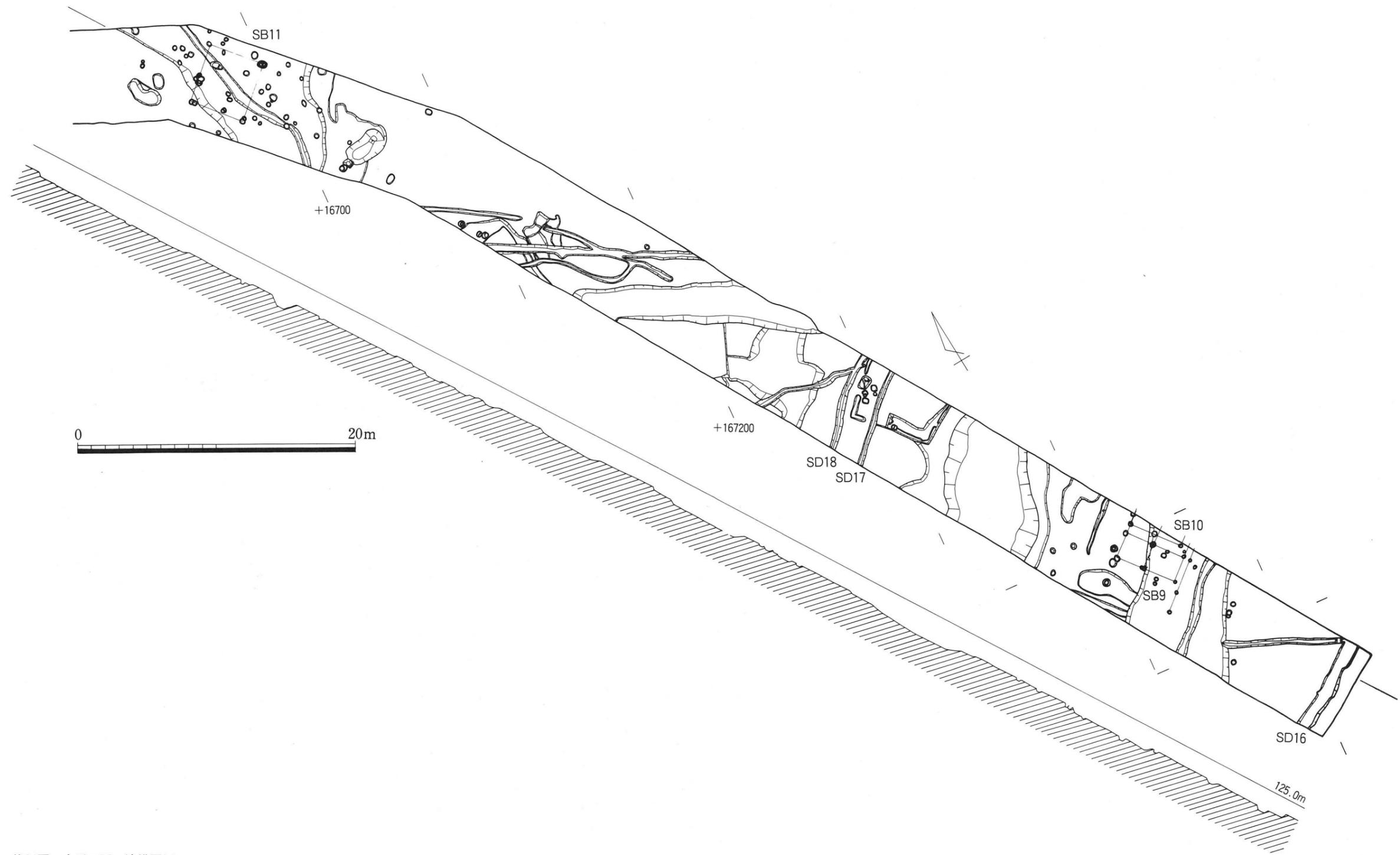
第22図 古川B区 S D 2 遺物出土状況図



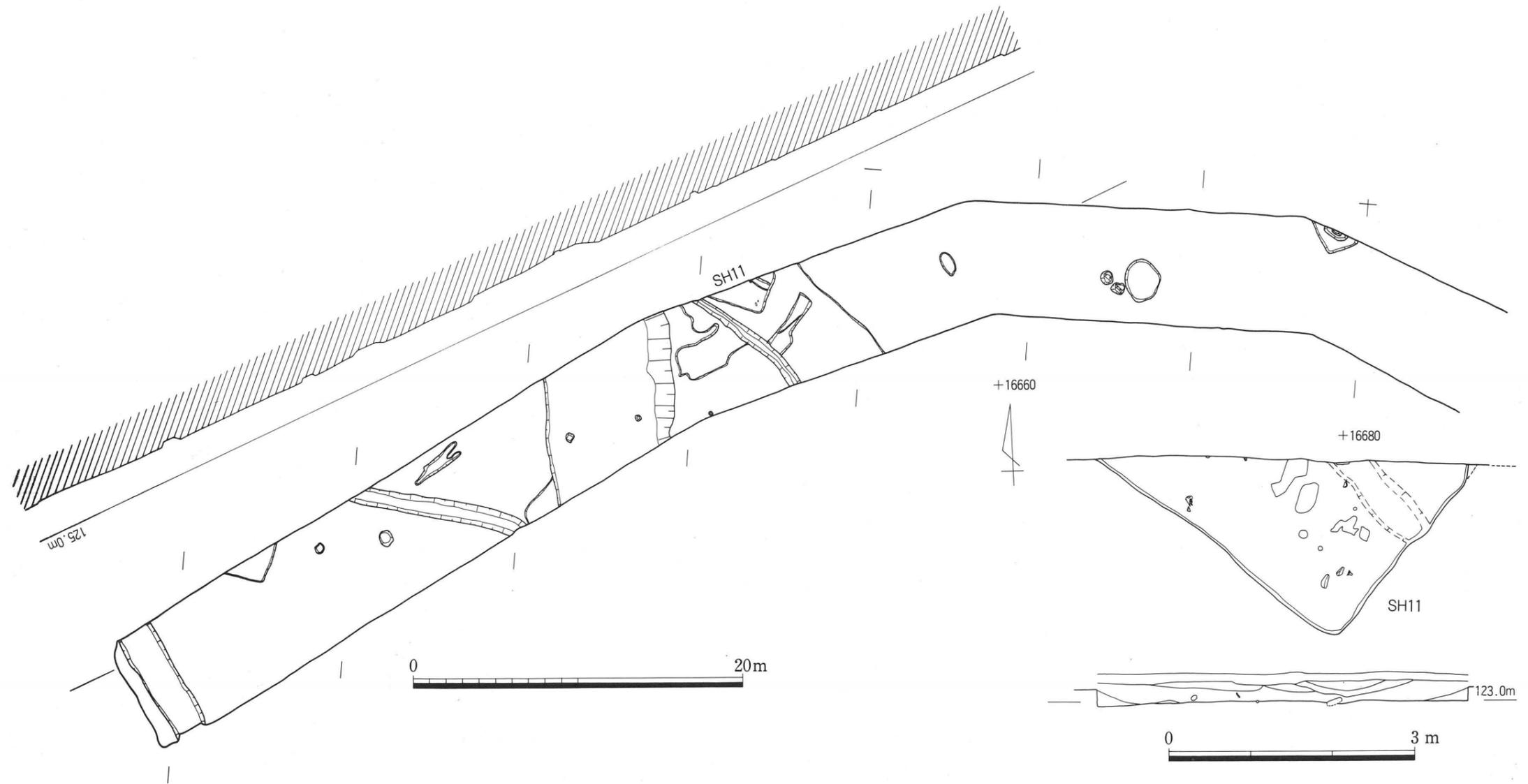
第23図 古川B区 S D 2 祭祀関連遺物出土状況模式図



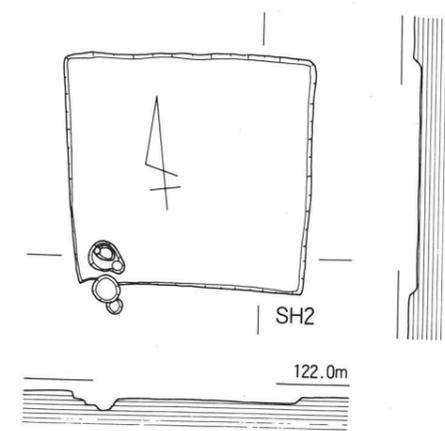
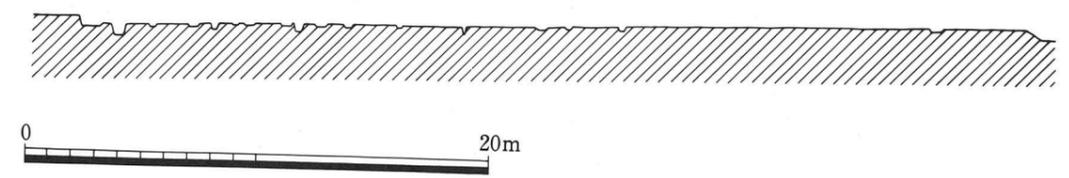
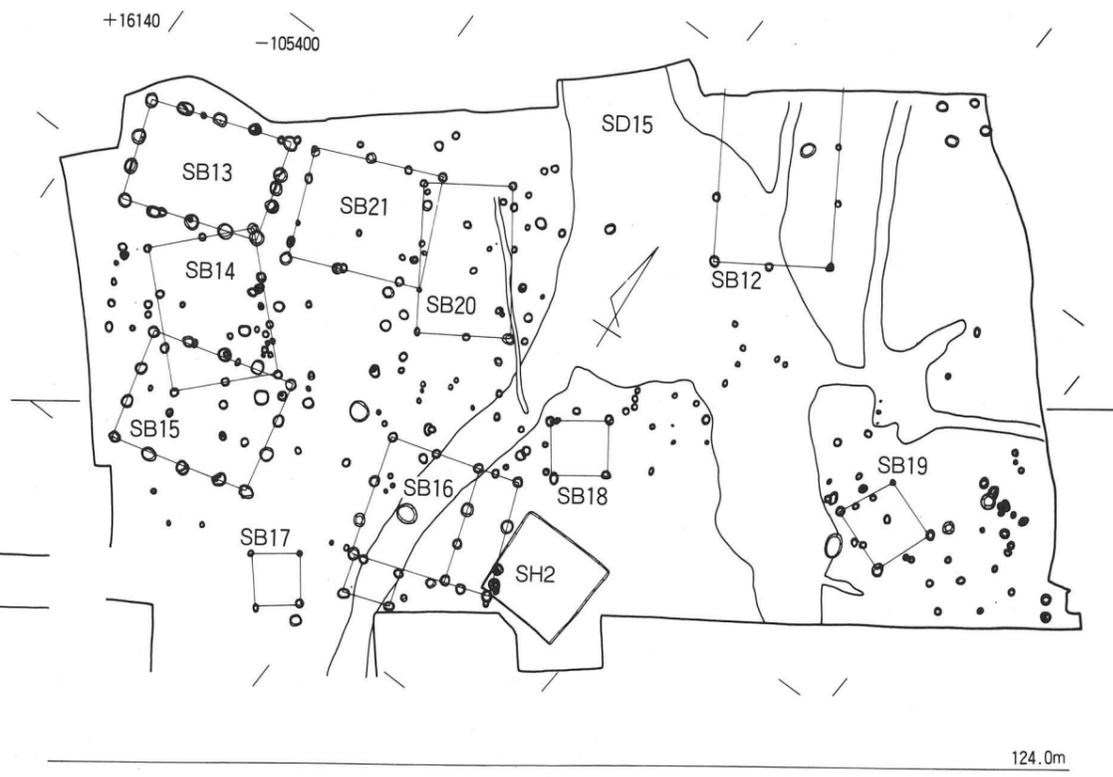
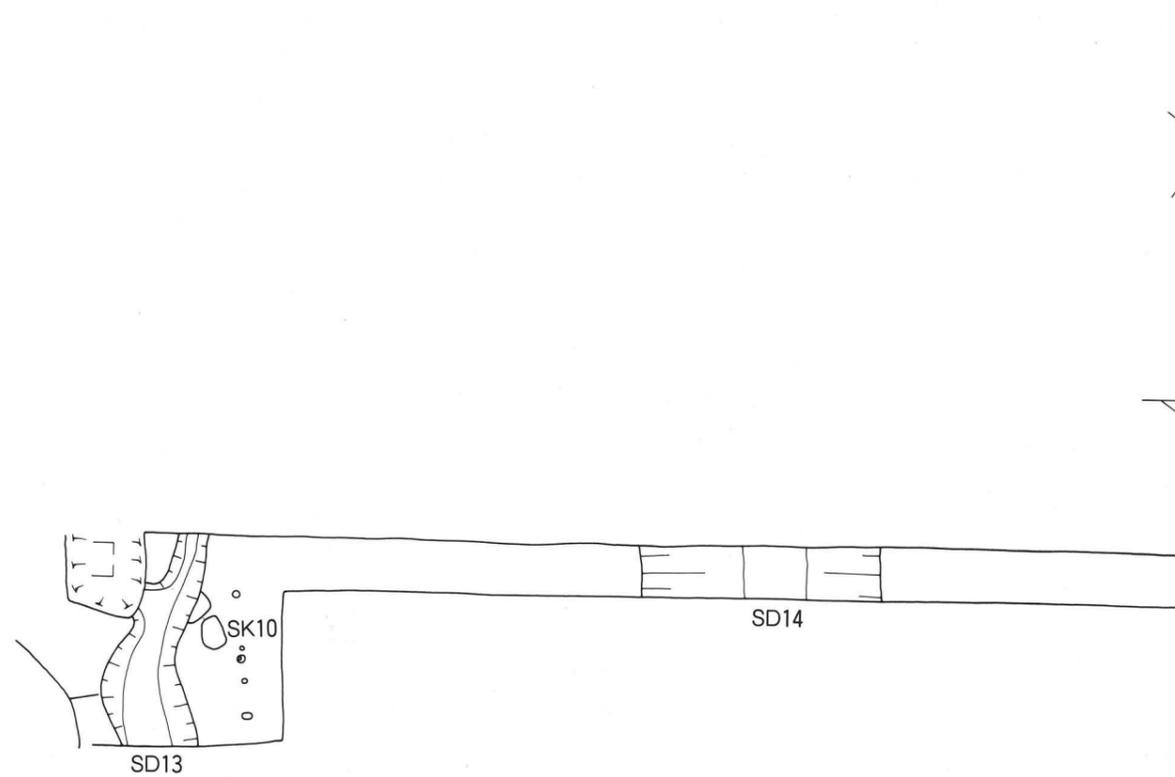
第26図 古川D区 SB9・SB10・SB11



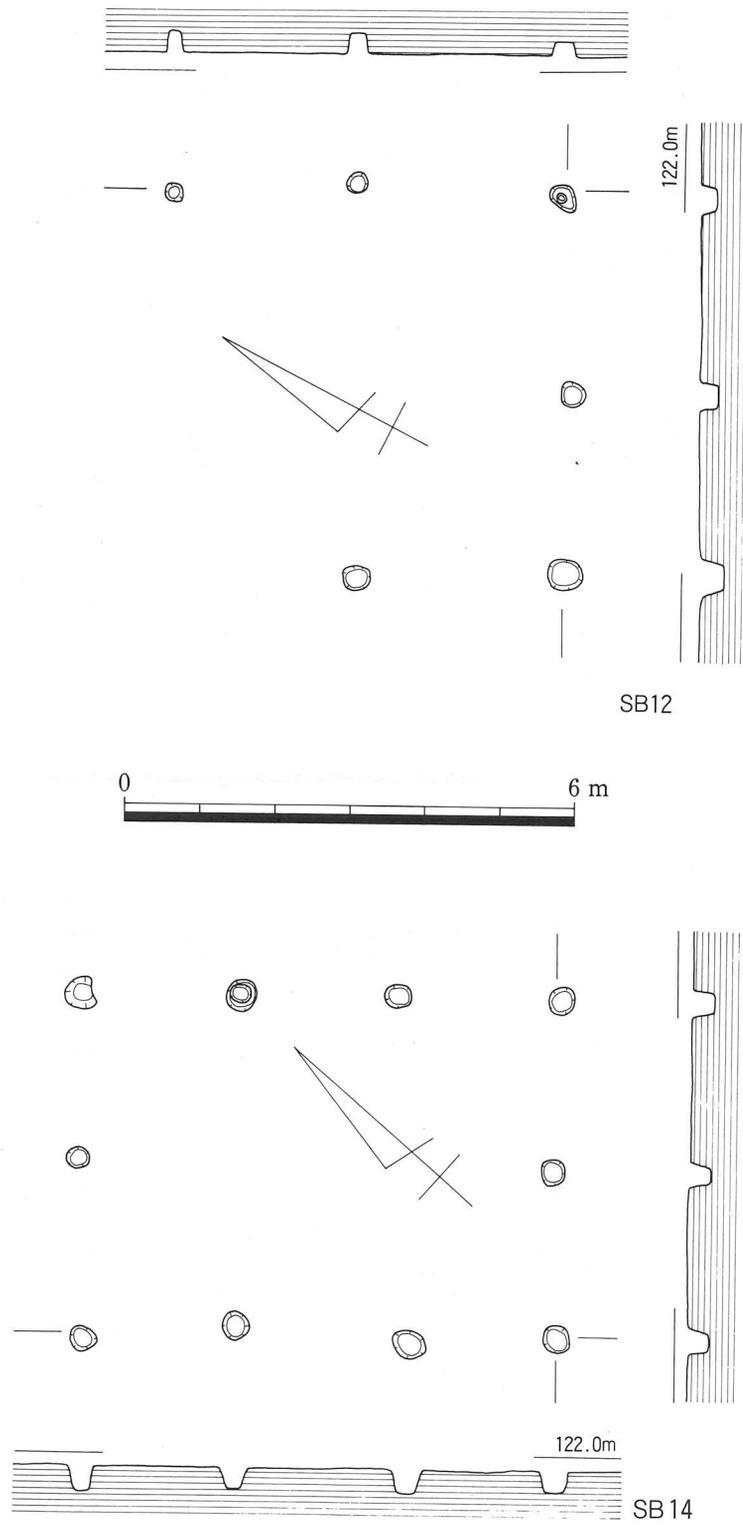
第24図 古川D区 遺構図(1)



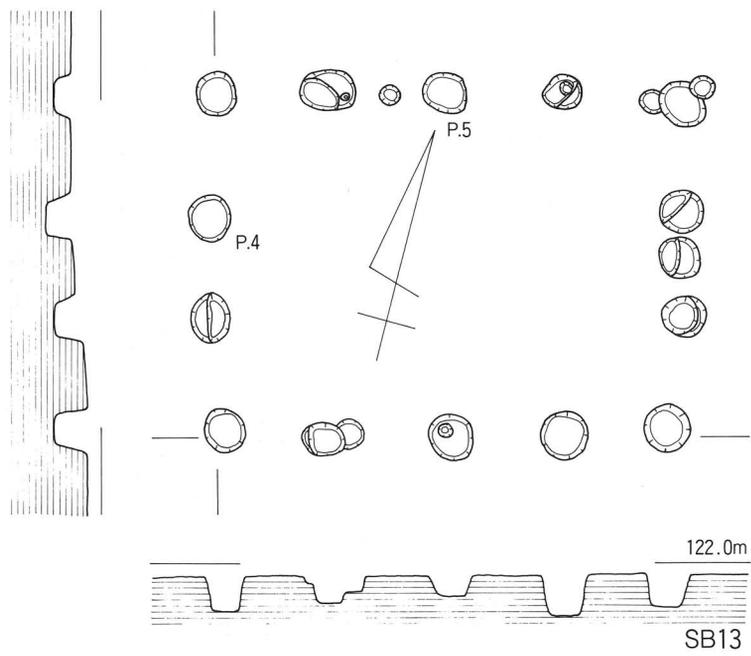
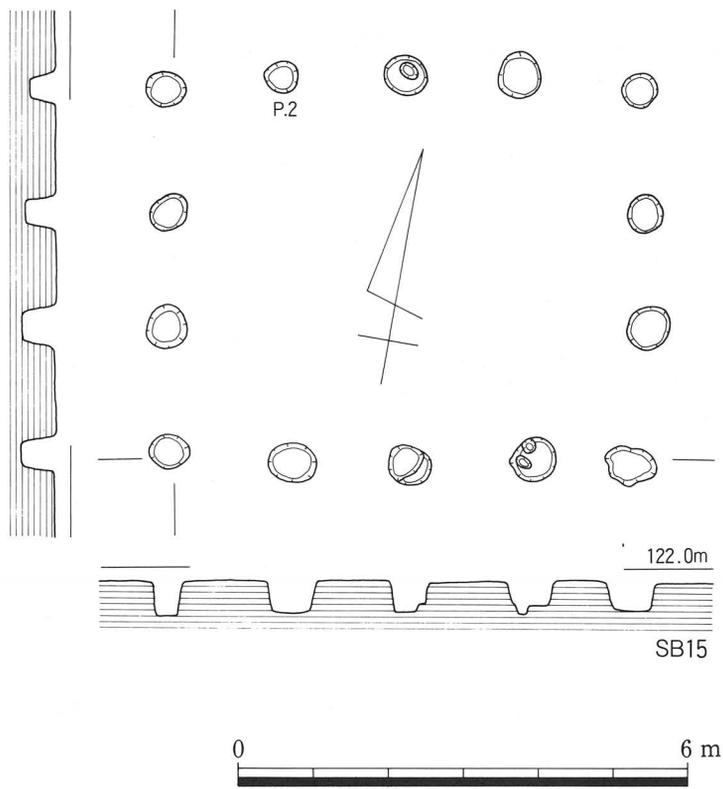
第25図 古川D区 遺構図(2)



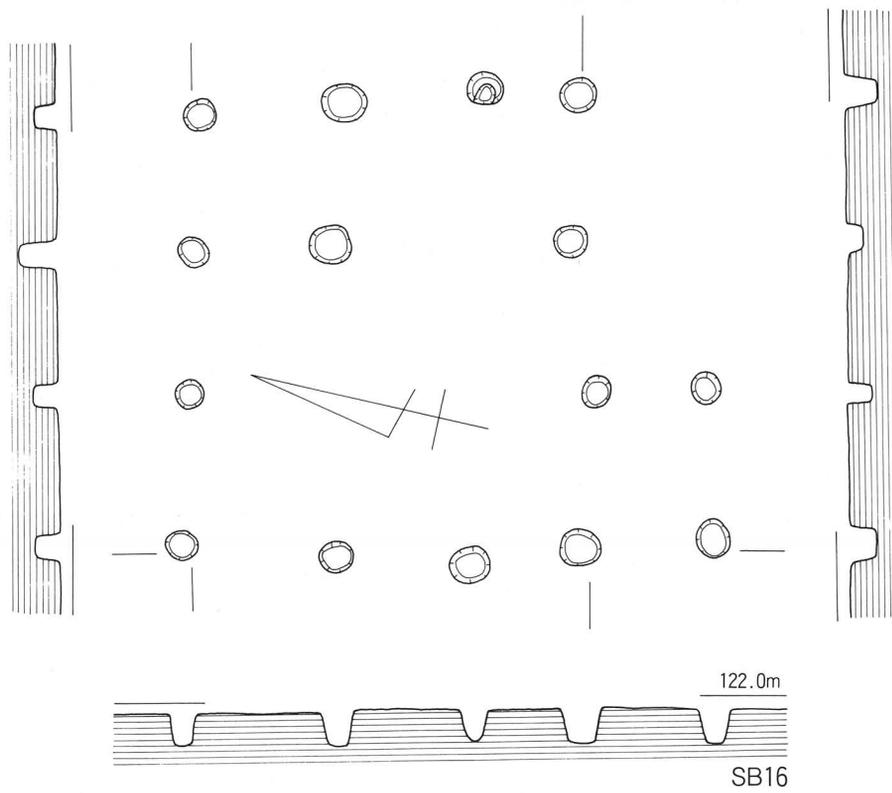
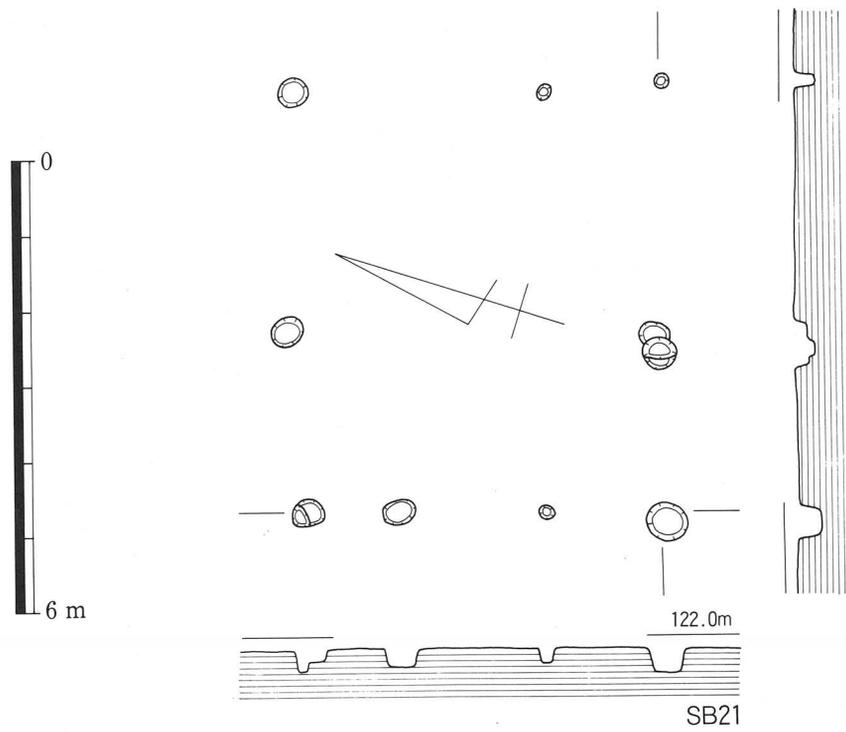
第27图 38号排水路区 遺構図/第28图 38号排水路区 素掘溝



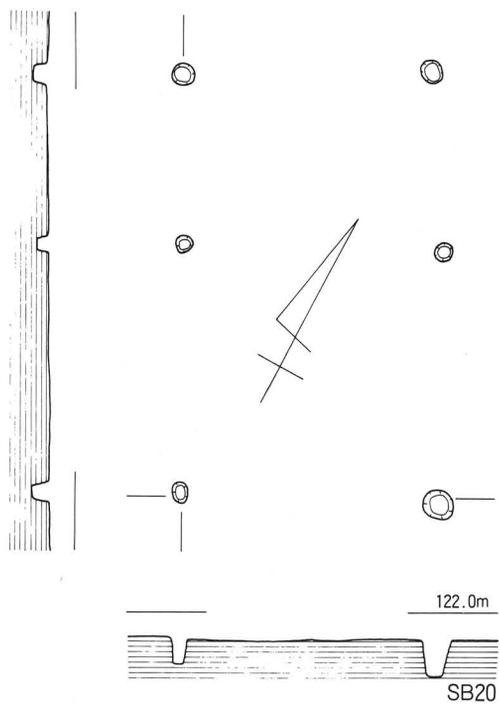
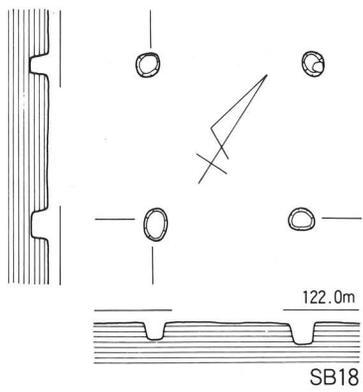
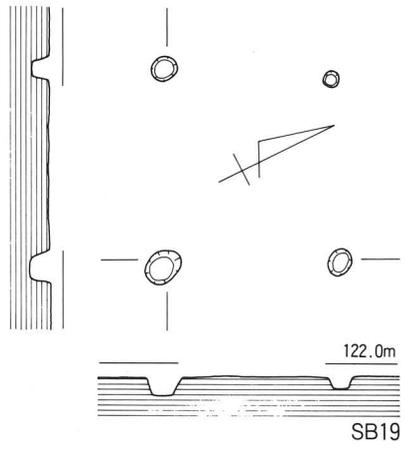
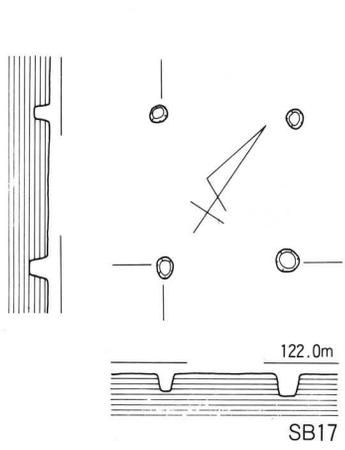
第29图 38号排水路 SB12・SB14



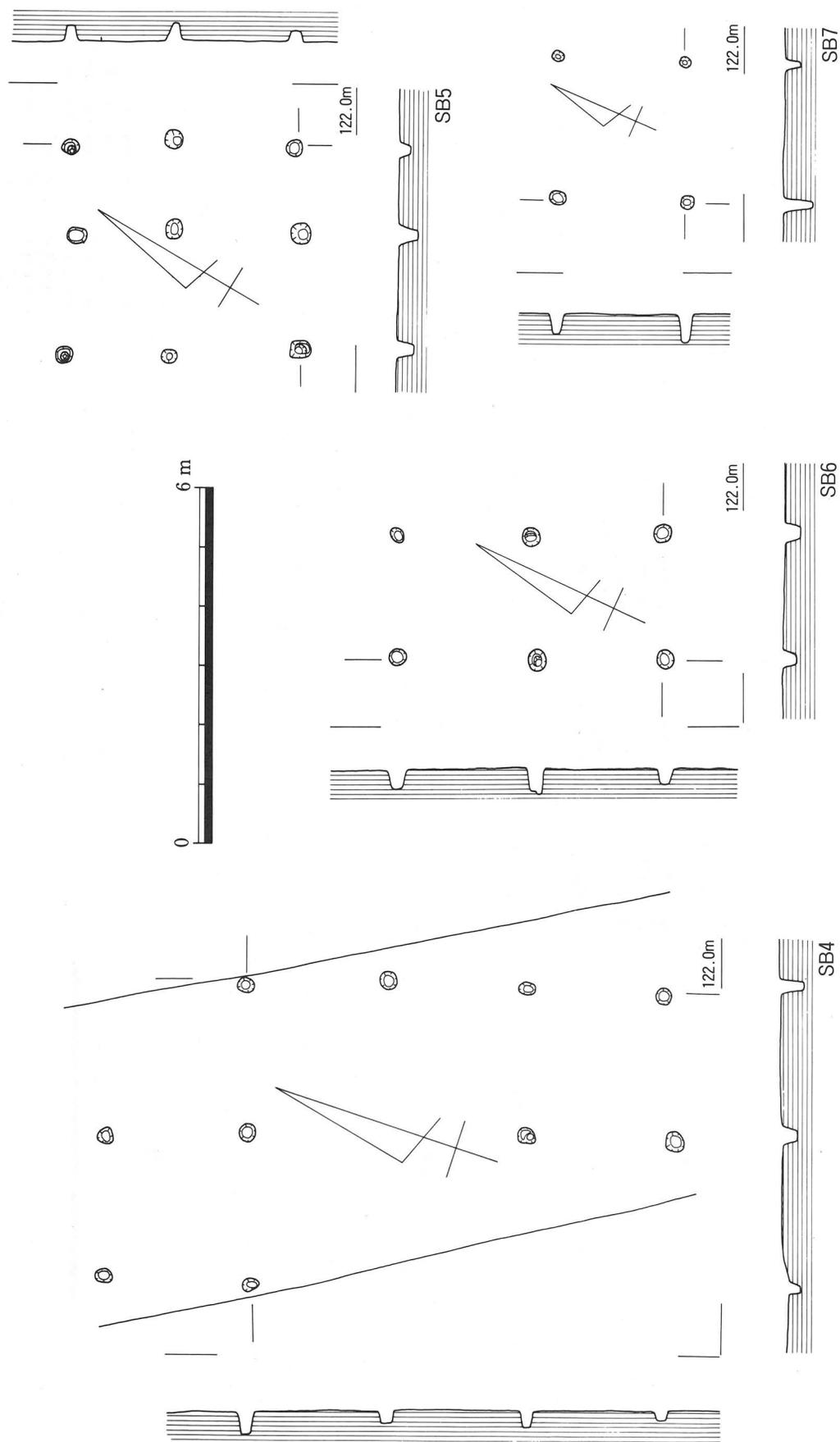
第30图 38号排水路区 SB13・SB15



第31图 38号排水路区 SB16・SB21

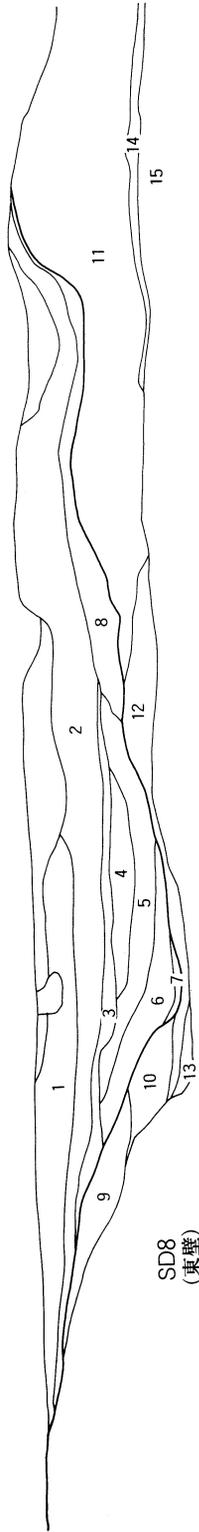


第32图 38号排水路区 SB17·SB18·SB19·SB20



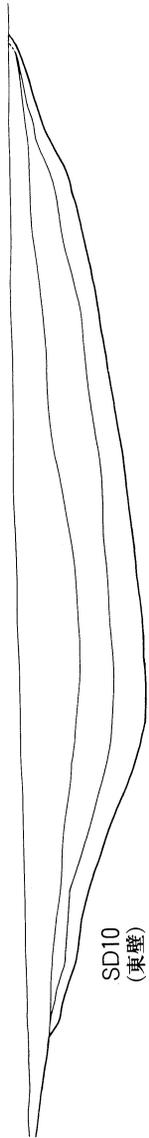
第33图 29号道路区 SB4 · SB5 · SB6 · SB7

121.5m



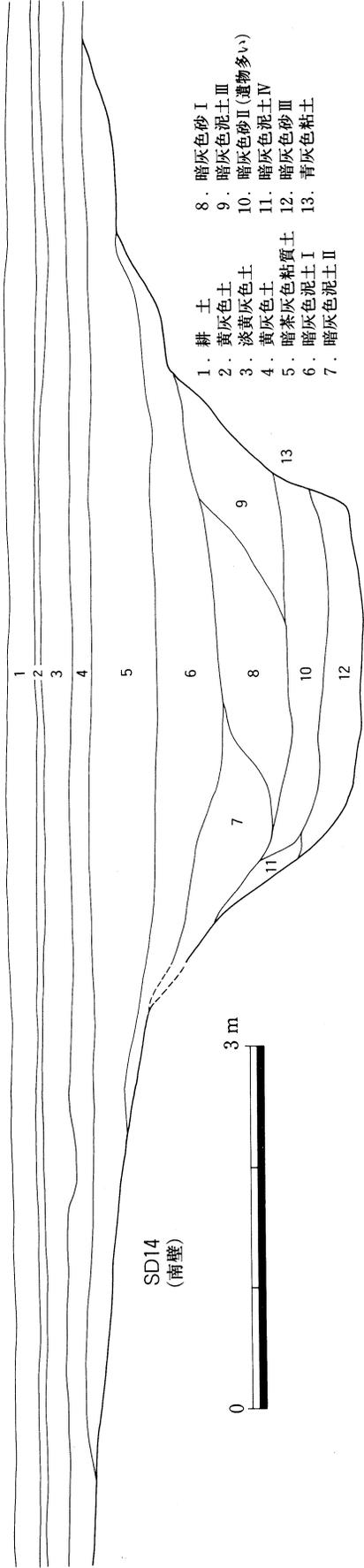
SD8
(東壁)

- 1. 暗黄灰色土
- 2. 淡黄灰色砂質土
- 3. 黄灰色土
- 4. 灰色土
- 5. 黑灰色泥土
- 6. 灰色砂質土
- 7. 灰色砂
- 8. 暗灰色土
- 9. 淡黄灰色土
- 10. 暗灰色砂質土
- 11. 淡黄灰色砂質土
- 12. 灰色砂
- 13. 暗灰色泥土
- 14. 暗青灰色砂泥土
- 15. 砂 礫



SD10
(東壁)

122.5m

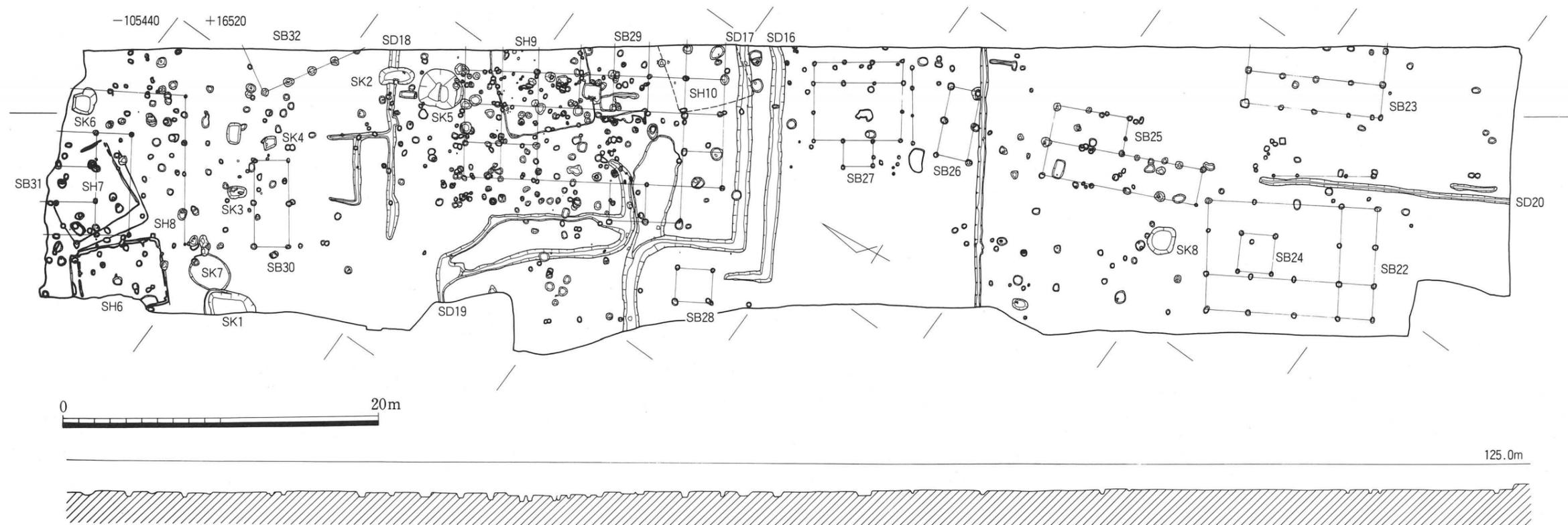


SD14
(南壁)

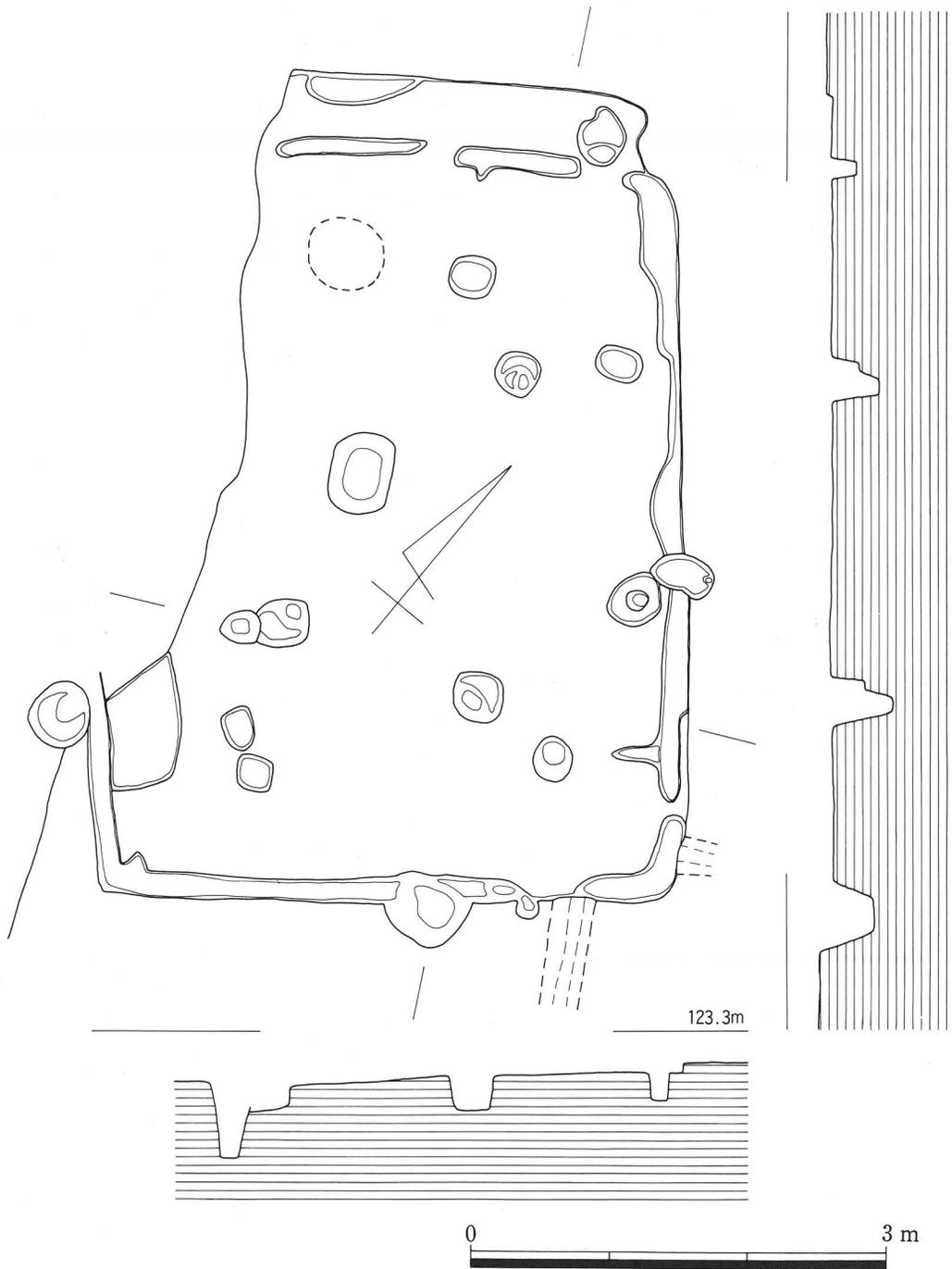
- 1. 耕 土
- 2. 黄灰色土
- 3. 淡黄灰色土
- 4. 黄灰色土
- 5. 暗茶灰色粘質土
- 6. 暗灰色泥土 I
- 7. 暗灰色泥土 II
- 8. 暗灰色砂 I
- 9. 暗灰色泥土 III
- 10. 暗灰色砂 II (遺物多い)
- 11. 暗灰色泥土 IV
- 12. 暗灰色砂 III
- 13. 青灰色粘土



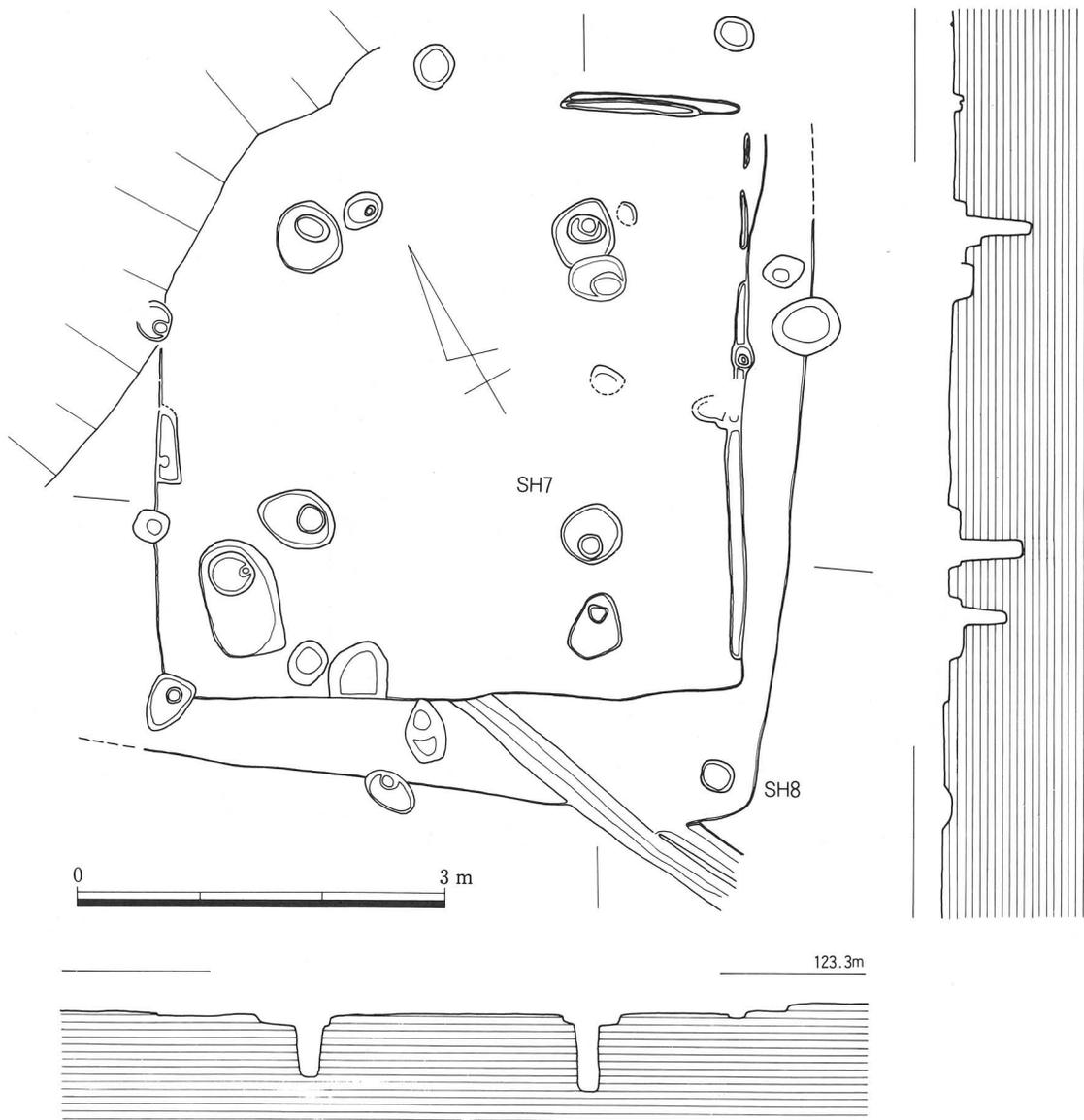
第34図 29号道路区 SD8・SD10/38号排水路区 SD14 土層断面図



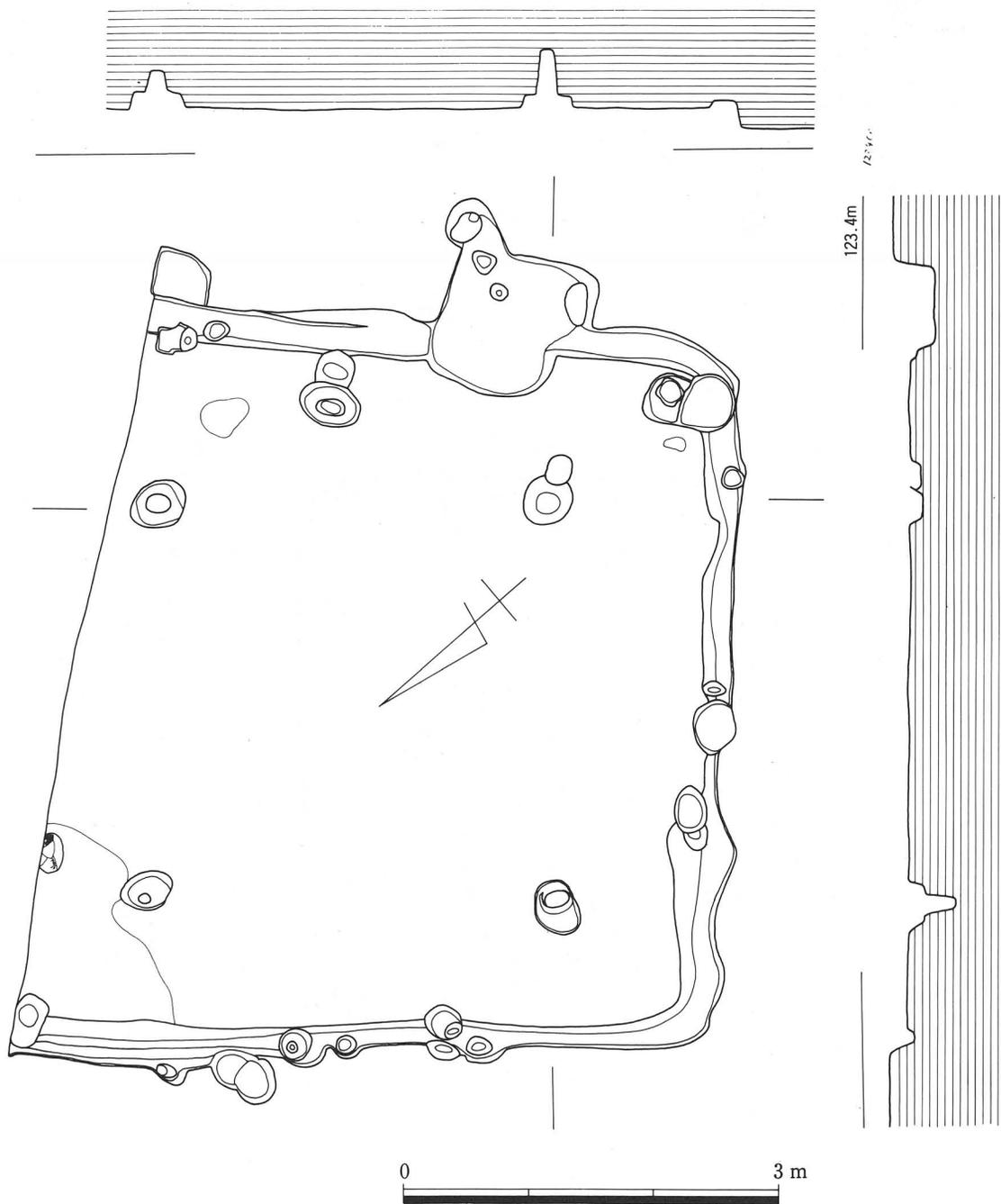
第35图 46号排水路区 遺構図



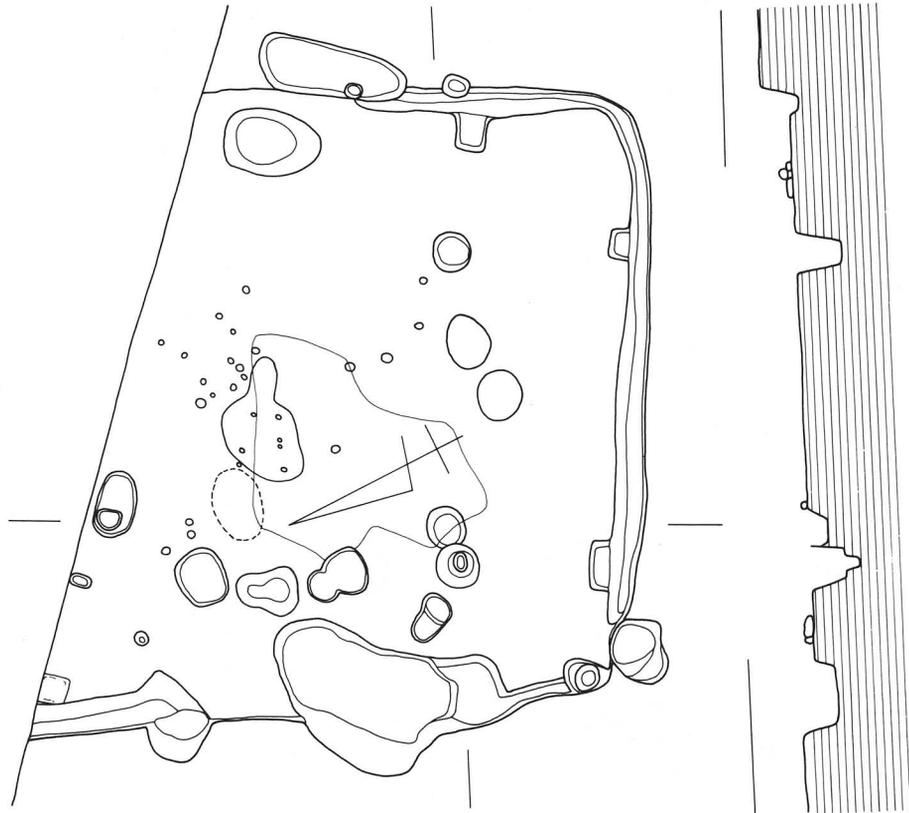
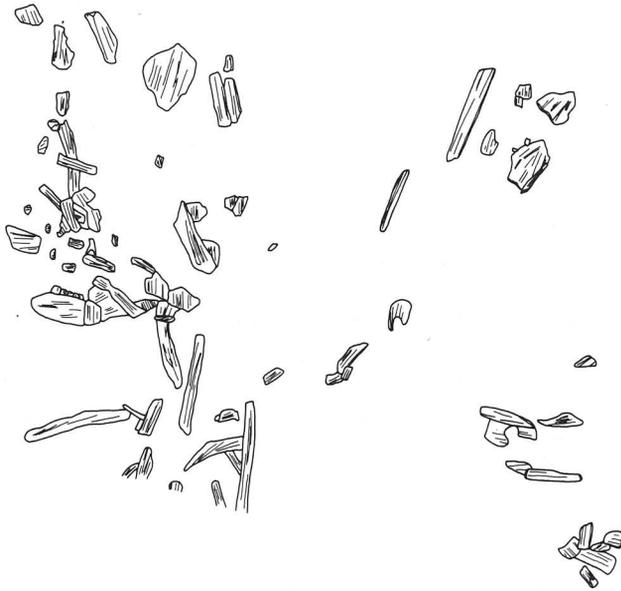
第36图 46号排水路区 SH6



第37图 46号排水路区 SH7·SH8



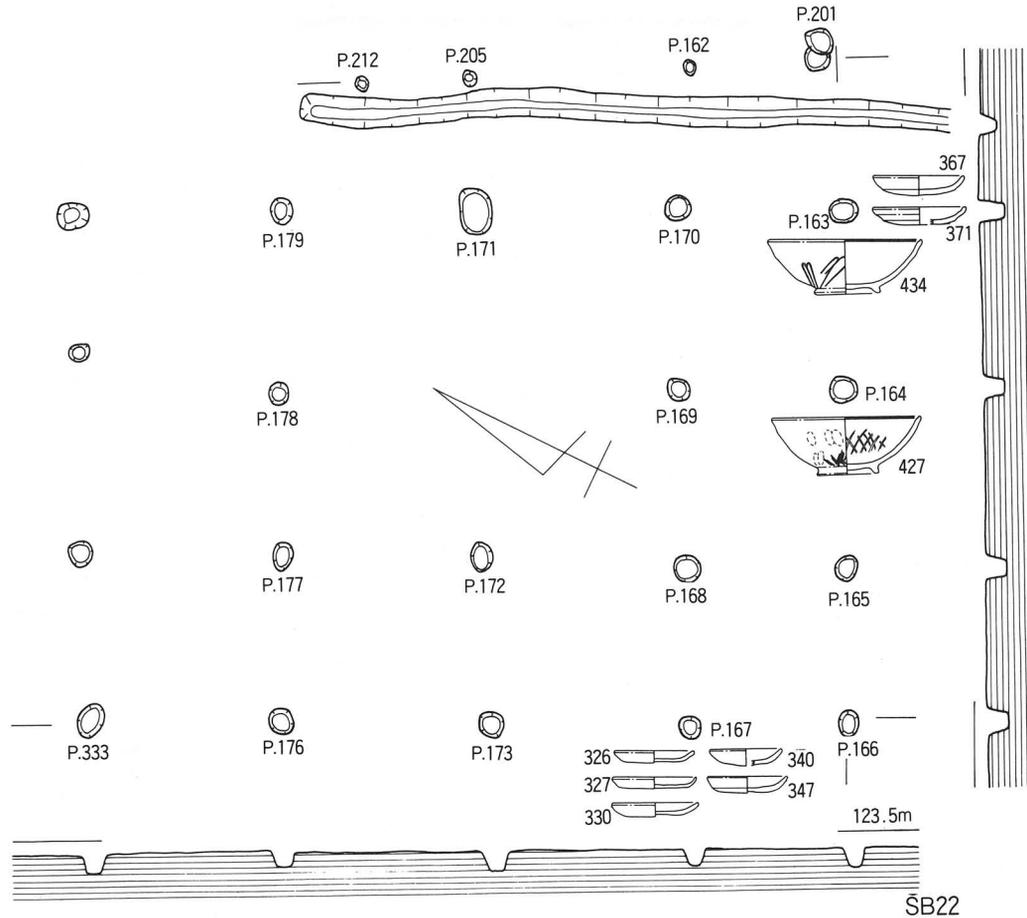
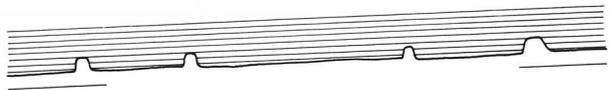
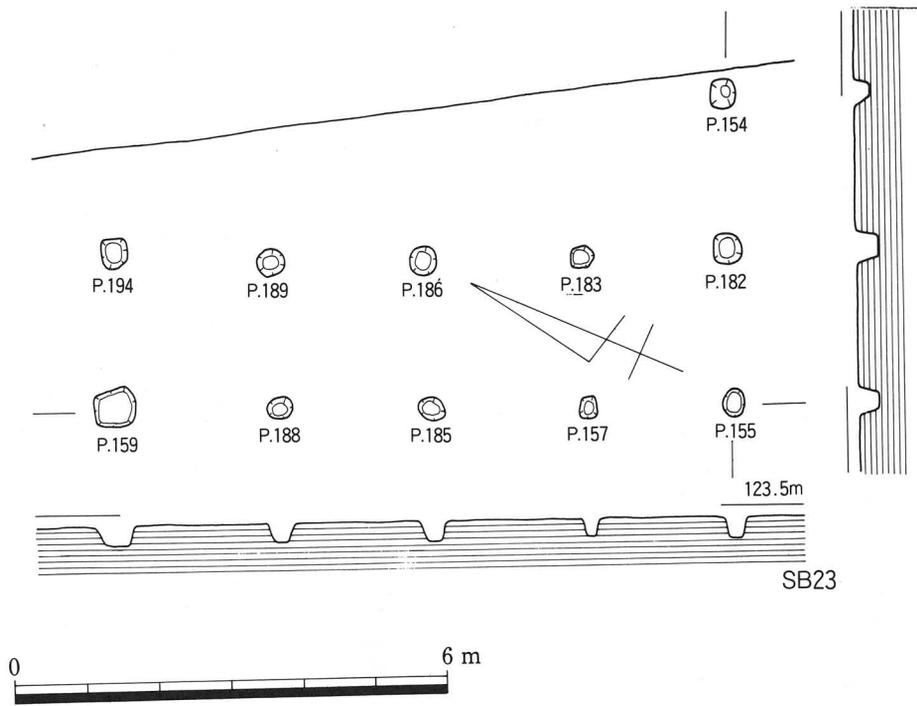
第38图 46号排水路区 SH9



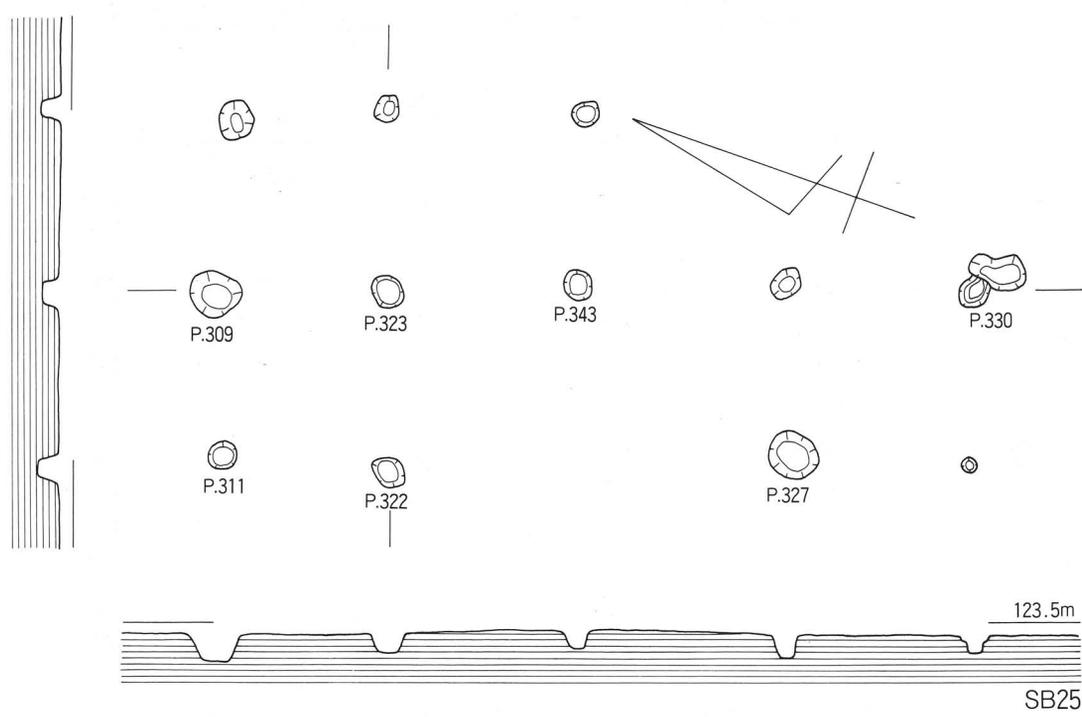
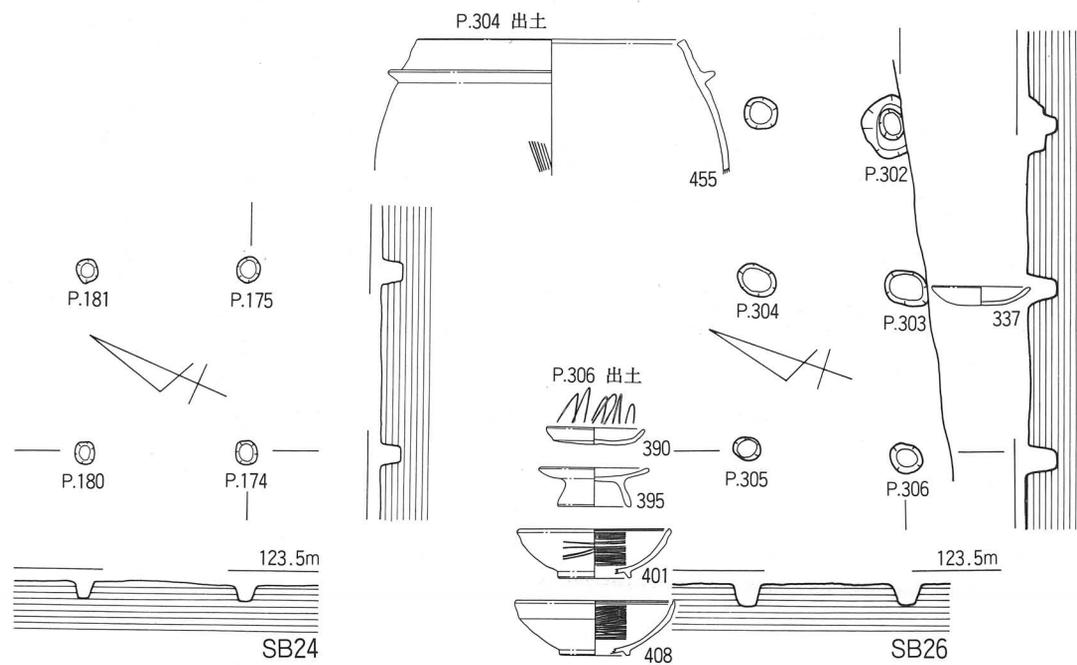
123.3m



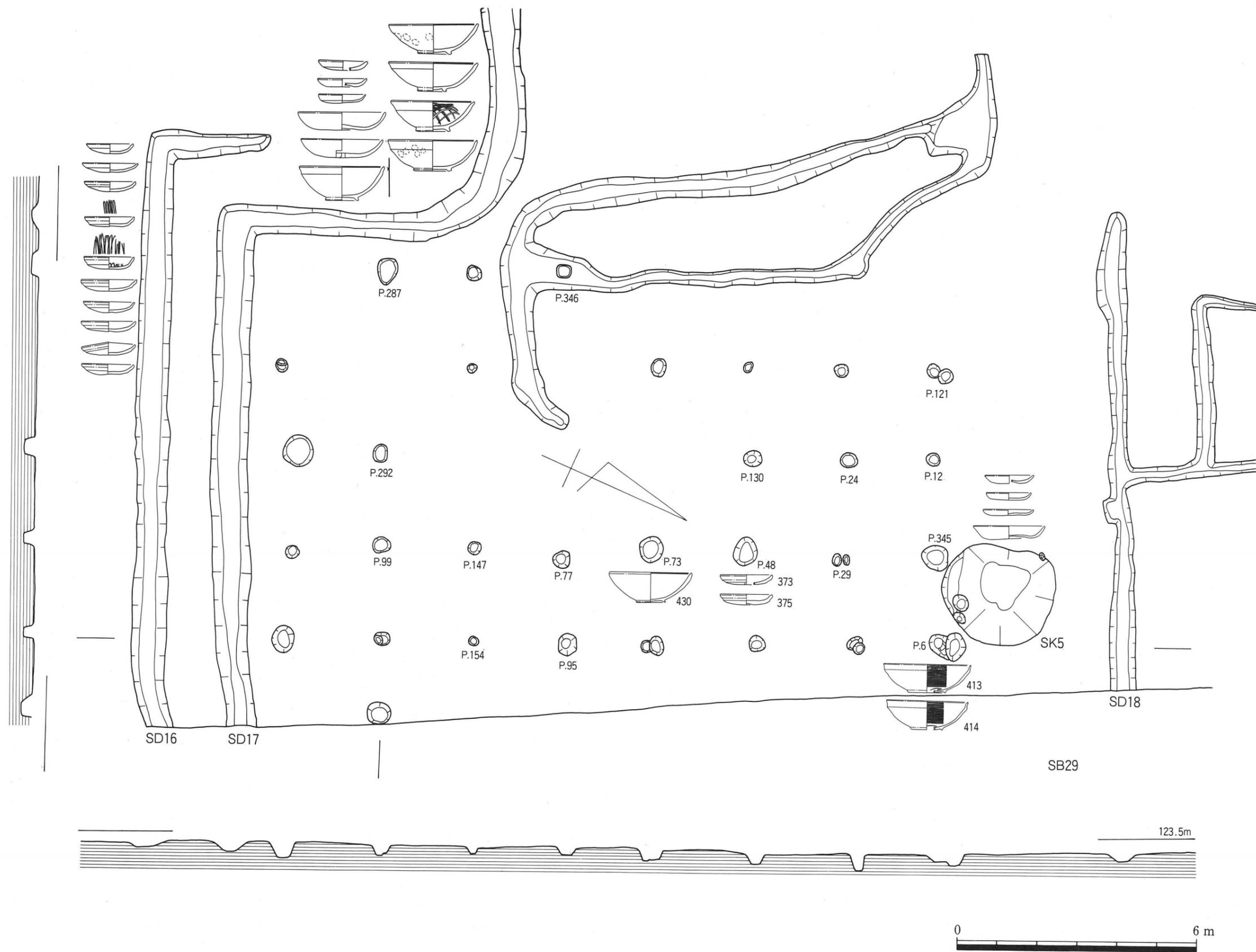
第39图 46号排水路区 SH10



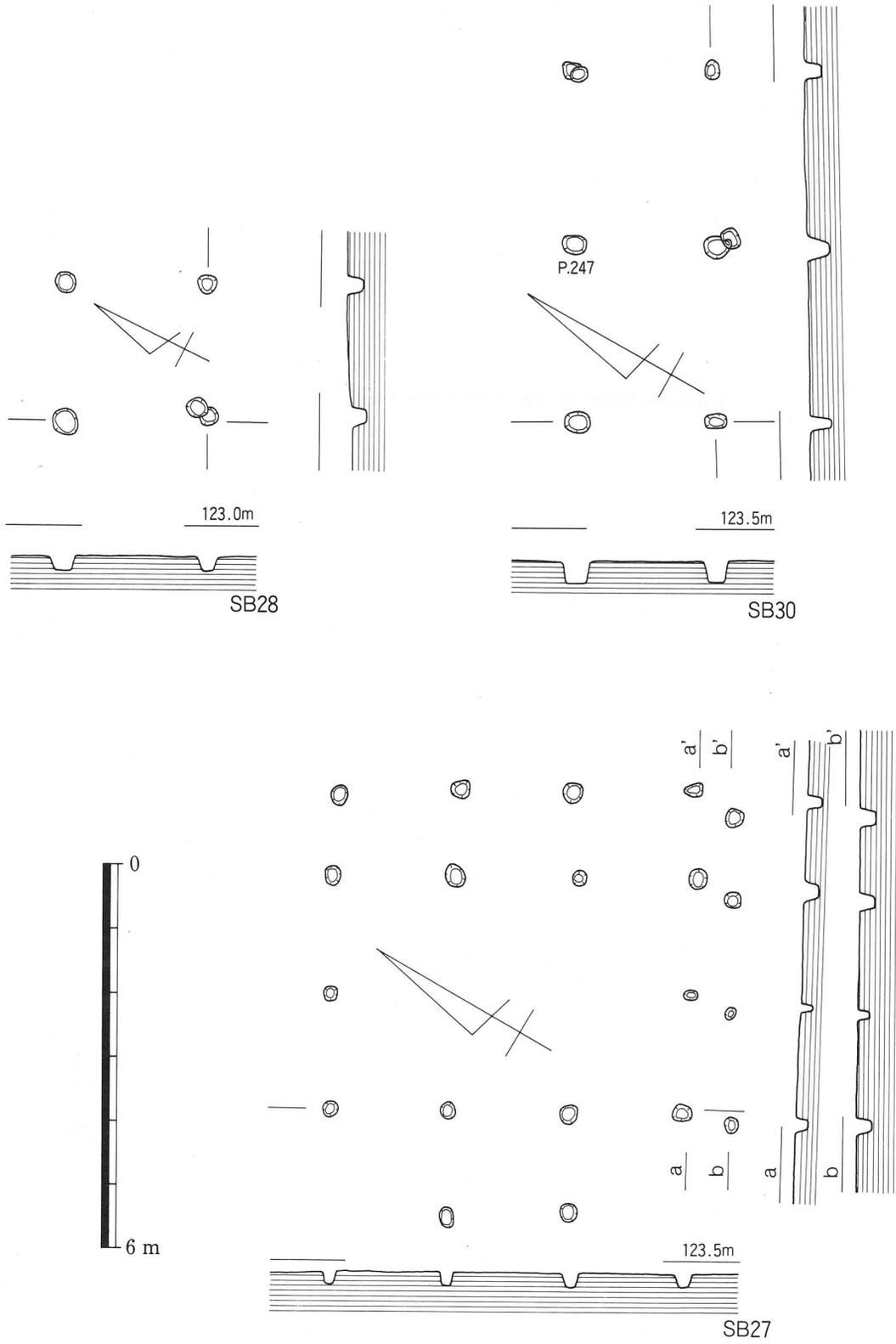
第40号 46号排水路区 SB22 · SB23



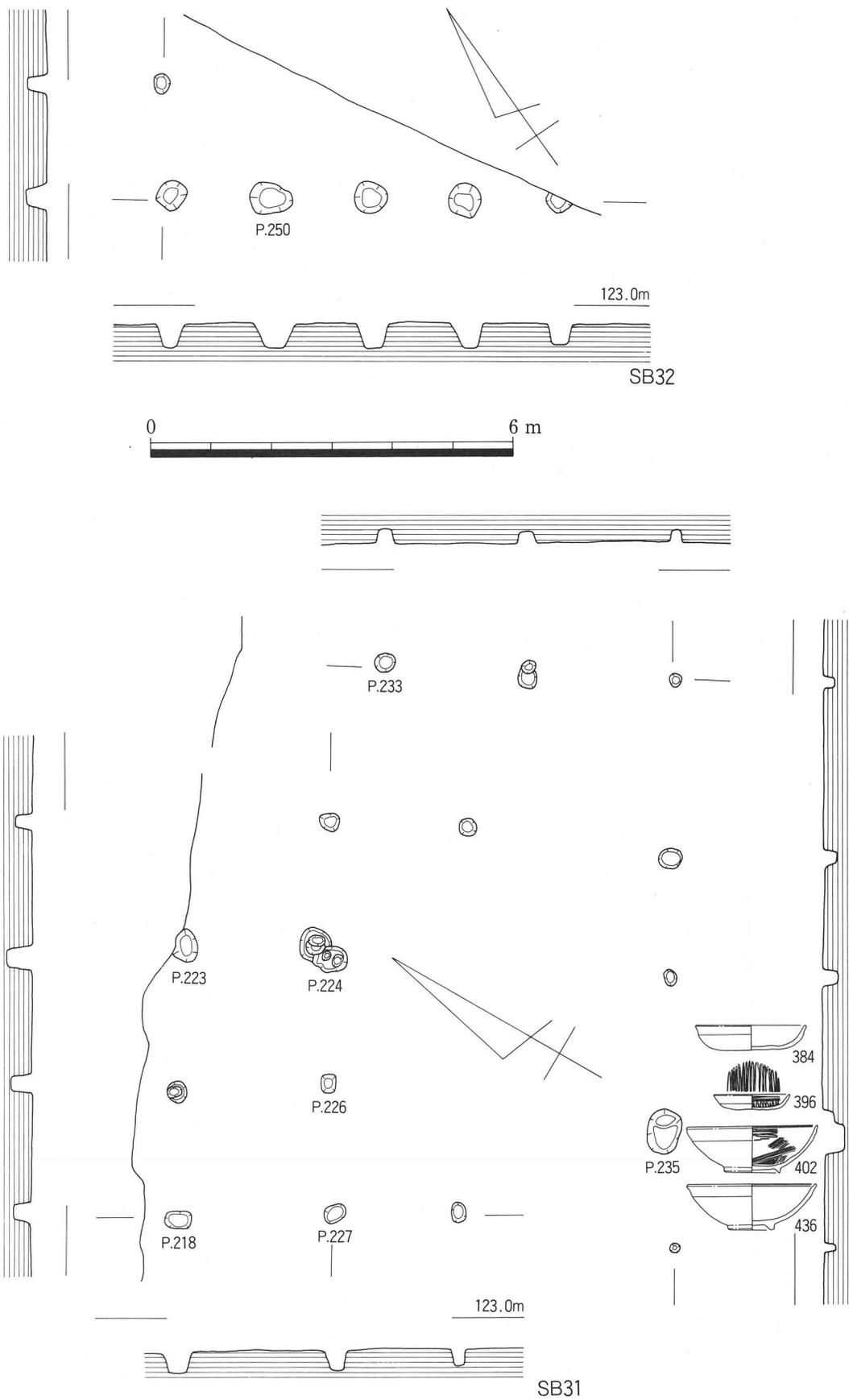
第41图 46号排水路区 SB24・SB25・SB26



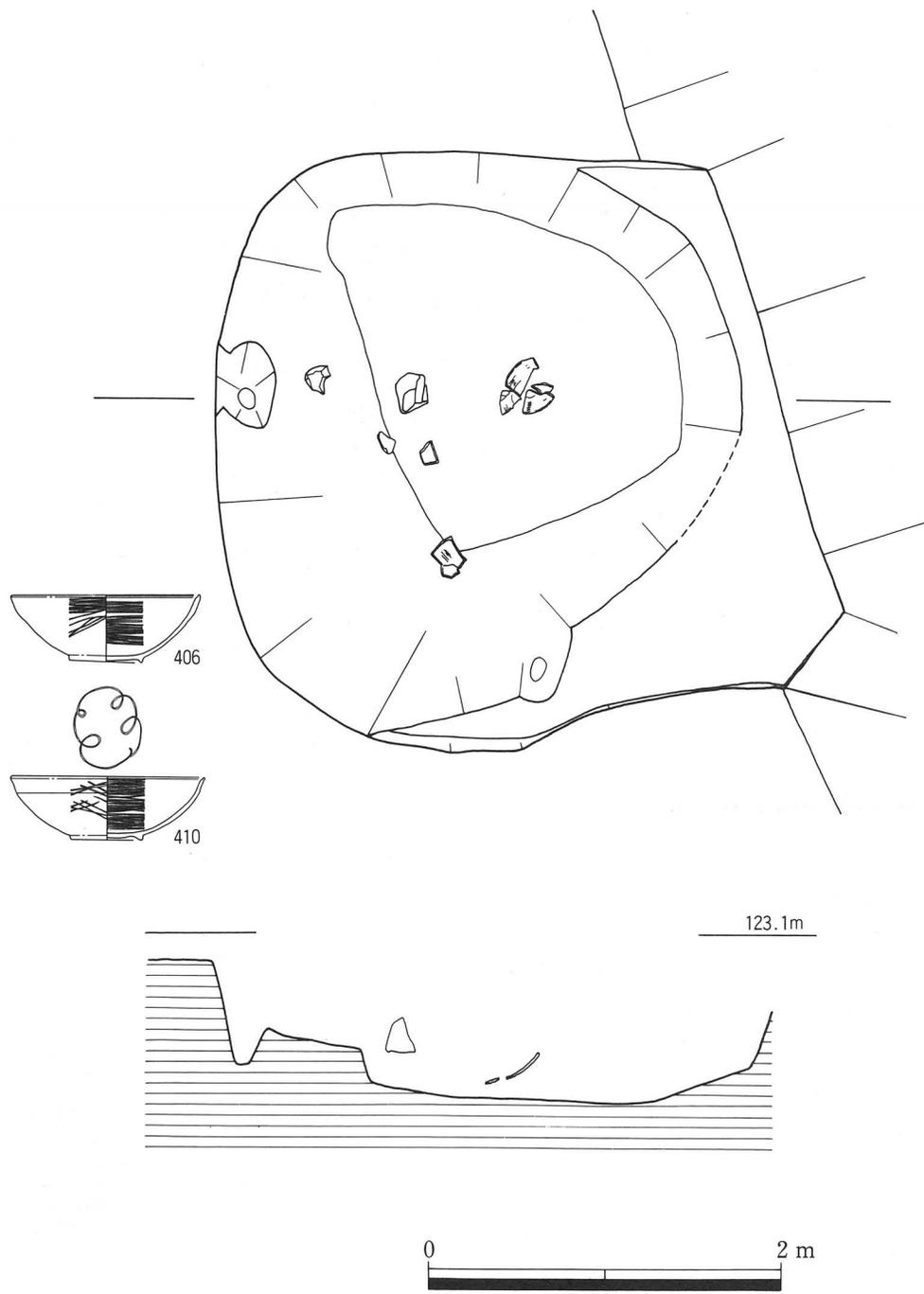
第43图 46号排水路区 SB29



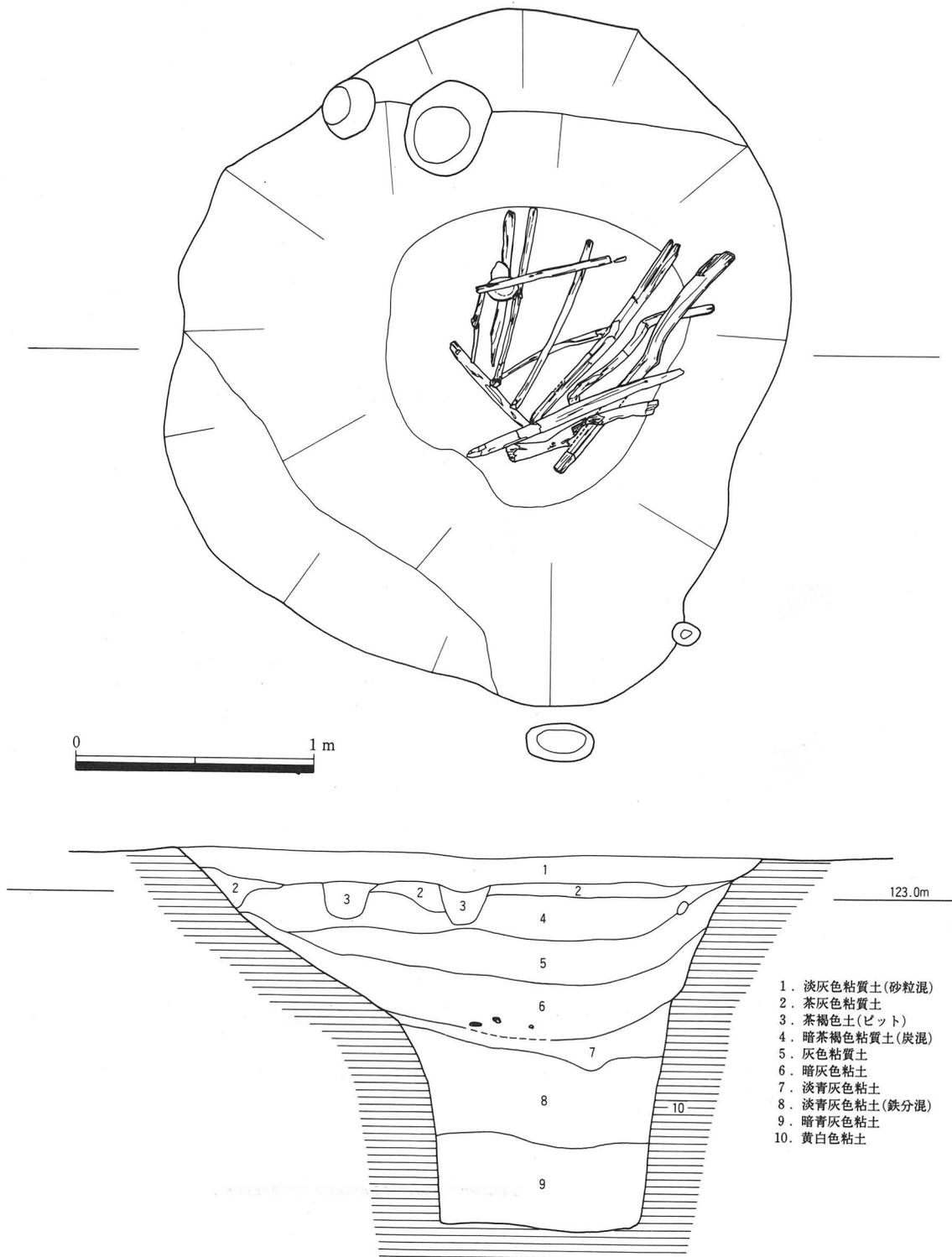
第42图 46号排水路区 SB27・SB28・SB30



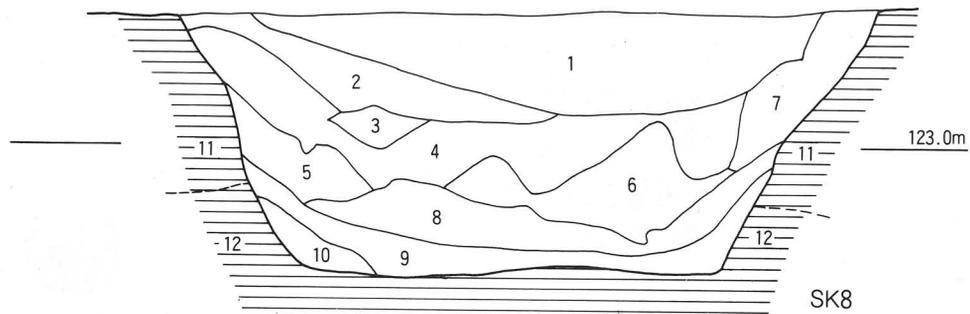
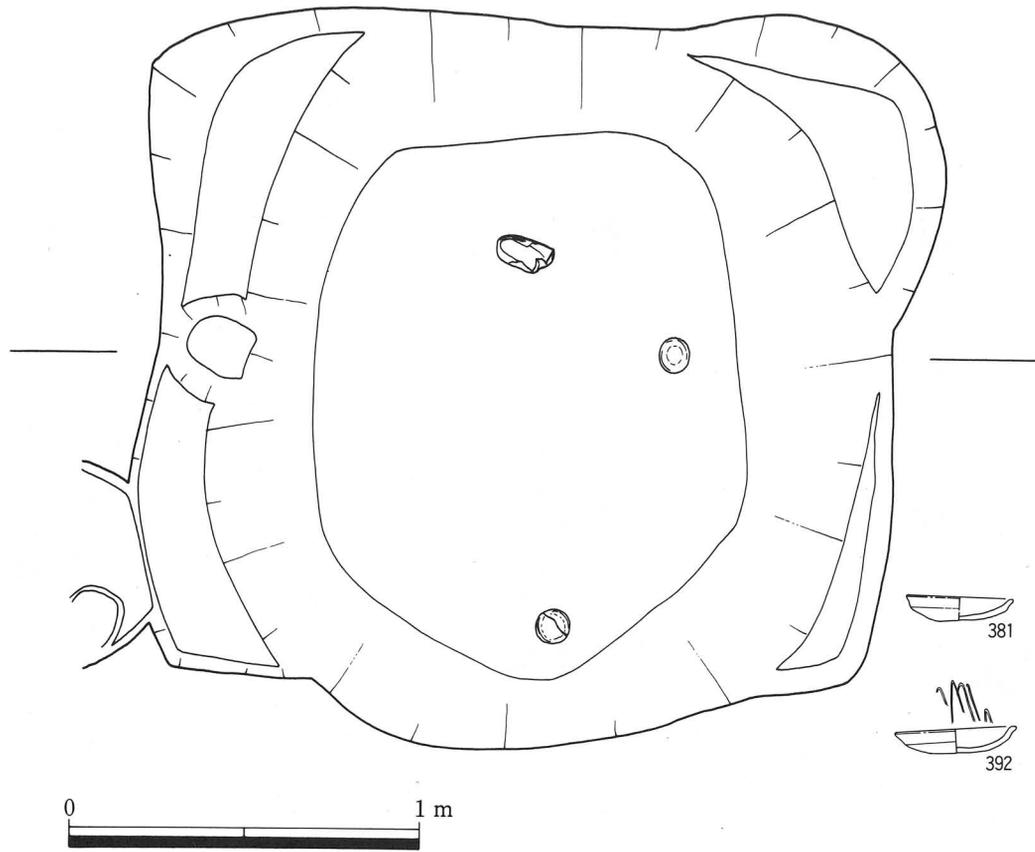
第44图 46号排水路区 S B 31 · S B 32



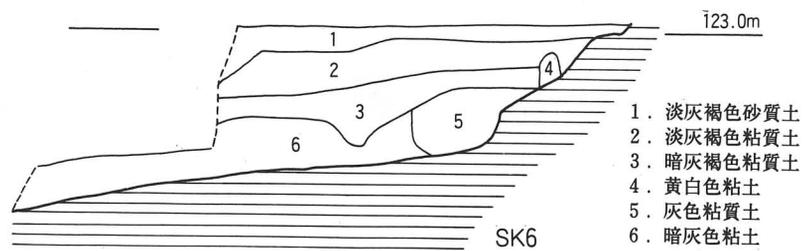
第45图 46号排水路区 SK 1



第46図 46号排水路区 SK5

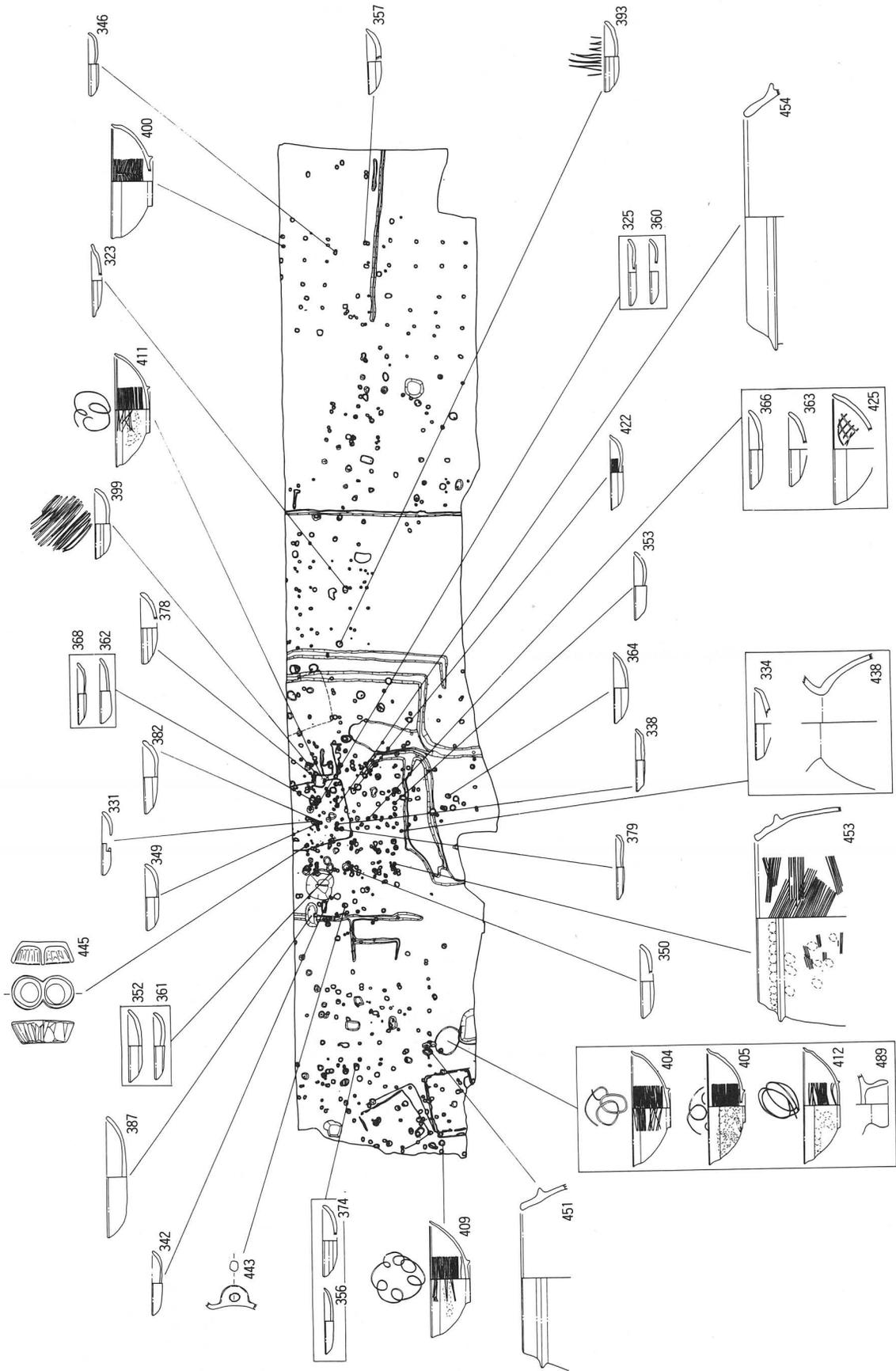


- | | |
|------------------|----------------|
| 1. 茶褐色土 | 7. 灰黑色粘質土(炭混) |
| 2. 暗茶褐色土 | 8. 淡灰色粘質土(砂粒混) |
| 3. 灰白色粘土 | 9. 淡灰色粘質土 |
| 4. 黑灰色粘質土(炭混) | 10. 淡灰色粘質土(炭混) |
| 5. 淡灰色粘質土(黄褐色砂混) | 11. 黄灰色土 |
| 6. 淡灰色粘質土(灰褐色土混) | 12. 黄褐色砂 |



- | |
|------------|
| 1. 淡灰褐色砂質土 |
| 2. 淡灰褐色粘質土 |
| 3. 暗灰褐色粘質土 |
| 4. 黄白色粘土 |
| 5. 灰色粘質土 |
| 6. 暗灰色粘土 |

第47图 46号排水路区 SK6·SK8



第48图 46号排水路区 遗物出土位置图

(2) 遺物

堂田遺跡からは、弥生時代後期から鎌倉時代までの土器類を中心とした遺物が、分類前で整理箱80箱出土した。なかでも、古墳時代中期の遺物と、平安時代末から鎌倉時代前期の遺物が大半を占めている。古墳時代中期の遺物は、古川B・C区の自然流路跡からの出土が多く、一部に竪穴住居跡も検出したことから、周辺一帯が、古墳時代中期の居住区であると考えられる。平安時代末から鎌倉時代前期の遺物は、46号排水路区からの出土が大半である。46号排水路区は、同時期の掘立柱建物群が立地しており、市子庄の支配的な階層が居住した屋敷地の一画であろうと想定している。

今回の出土遺物のなかで、とくに注目されるのは、古川B・C区のSD1・2・5で出土した4点の馬鍬である。相伴土器から、古墳時代中期から後期にかけての所産であろうと考えられる。また、同じくSD2からは、完品の土師器甕・高杯・壺とともに、100点近い手づくねのミニチュア土器が一括出土した。古墳時代中期の祭祀形態を復元するうえで貴重な資料となるであろう。

以下、出土遺構別に説明する。なお、木器、石器は最後にまとめて述べる。

SD1 (第49図～第53図)

今回の調査では、最も多量の遺物が出土した。出土遺物には、土師器が大半で、高杯・甕・甑・壺・杯・手づくね土器がある。須恵器は少量で杯蓋・壺・甕・器台がある。他に、木器として馬鍬・梯子、石製品として有孔円板がある。出土遺物の大半は古墳時代中期である。なお、形態分類には、麻生遺跡溝19での分類基準を使用した。

土師器高杯(1～44)：麻生遺跡では、杯部の形態からA～Dの4タイプに分類した。堂田遺跡出土の高杯も、ほぼ同時期と考えられるため、基本的なプロポーションについては、先の分類に従う。しかし、調整手法や、細部の形態には、麻生遺跡での分類があてはまらない例もある。ここでは、麻生遺跡と比較してみたい。A(19・20)高杯のなかでは最も大型の優品である。杯部と口縁部の屈曲部分に稜をもつ。麻生遺跡例では、屈曲部に断面三角形の凸帯を廻らし、口縁端部は面をなすが、(19・20)は、口縁端部を丸く終らせる。杯部の調整は、(19・20)が、底部外面をハケ目、他をヘラミガキとするのに対し、麻生遺跡例は、口縁部外面及び底部内面にハケ目を施している。口径は、(19)が21cm、(20)が23.2cm、器高は(20)が16.1cmを計る。麻生遺跡例は、口径22.9cm、器高15.3cmである。B(1～3・5・6・8・15～17・21～24)口縁部は外反して外上方に開き、底部との屈曲部はゆるやかな稜をなす。口縁端部は尖り気味に丸く終る。A～Dの分類のなかでは、19点中13点を占めており、最も一般的な形態である。口径は、14cm～16cmの間で、平均14.8cmを計る。器高は、(15・16・17)の平均で10.9cmを計る。麻生遺跡のBタイプの平均口径は17.7cmである。Cタイプは、杯部の底部と口縁部の境が明瞭でなく、脚部との接合部から口縁端部まで直線的に外上方へ開く。麻生遺跡では、20点中8点がCタイプであったが、本遺

跡では、実測可能なもののなかには1点も存在しなかった。D(4・7・9・18)杯部は、椀形を呈し、やや厚ぼったい感を与える。口縁部は内弯気味に外上方へ開き、底部との継目を明瞭に残す。平均口径は14.8cmを計る。麻生遺跡例は、口径12.9cmである。つぎに、調整手法では、麻生遺跡で20点中9点について、坏部の内外面にハケ目を施しているのに対し、堂田遺跡では(16・19)の底部外面にわずかにハケ目を残すのみであった。また、脚部についても、麻生遺跡では、14点中5点で、ハケ目を施すのに対し、堂田遺跡では、30点中、ハケ目を施すものはなかった。一方、脚部内面については、明瞭なヘラケズリ痕を残す例が多いが、麻生遺跡では、ヘラケズリとナデの区別が不明瞭である例が多い。

土師器甕(45~67)：球形の胴部をもつもの(52~54)と、長胴化したもの(49)、その中間的なもの(48)に大別される。麻生遺跡では、口縁の形態で、A~Iの9タイプに分類したが、堂田遺跡SD1では、大半の甕が「く」の字形に、短く外反している。あえて、麻生遺跡の分類に従うとBの口縁部は外弯気味に外上方へ開き、口縁端部は外傾した面をなすものと、Cの口縁部は直線的もしくは外弯気味に外上方へ開き、口縁端部は尖り気味に丸く終るものに該当する。しかし、総体的な傾向として、麻生遺跡例に較べて、口縁部の長さが短かく、口縁端部の形態分類が、意味を持たない。胴部のプロポーションは、麻生遺跡例が、やや縦長の球形なのに較べて、(52~54)は、胴部の高さより最大径の方が大きい。調整手法では、麻生遺跡に較べて、ハケ目が多用される傾向にある。麻生遺跡では、19点中、ハケ目を使用しているのが9点なのに対し、堂田遺跡では、23点中19点がハケ目を施している。残り4点についても、口縁部と肩部についてのみの観察によっている。23点のうち、口縁部内面に、横もしくは斜目方向のハケ目を施すものは、13点で、残りは、口縁部もしくは胴部外面にハケ目を施している。胴部内面の調整は、(52~54)はナデによる。ただし、(54)の内面上半部は、指によるカキアゲによっている。いずれも、内面に、粘土紐の継目を明瞭に残している。とくに、上半部はその傾向が強い。(48)の胴部内面は、下半はヘラケズリ、上半はナデによる。(49)の胴部内面はヘラケズリによる。口径は、麻生遺跡の平均が14.8cm、堂田遺跡が14.6cmと大差ないが、プロポーションの差から、容積は縮少傾向にあるといえる。

土師器甑(68・69)：外上方に開く円筒形の胴部に、左右対象の把手がつく。口縁端部は面をなし、内側にやや肥厚する。胴部外面はタテ方向のハケ目、内面はヨコ方向のハケ目を施す。下半は欠損のため不明。口径は、26.8cmを計る。

土師器壺(70)：やや偏平で、肩の張った球形の胴部に、外上方へ直線的に開く口縁部がつく。胴部はヘラミガキ、底部はヘラケズリ、口縁部はヨコナデによる、口径は8.8cm、器高15.4cm、体部最大径14.0cmを計る。

土師器杯(72)：丸味をおびた深底に、内弯した口縁部がつく。口縁端部は外反して尖り気味に丸く終る。体部外面はナデによるが、粘土紐の継目が明瞭に残る。口径は7.7cm、器高6.0cmを計る。

手づくね土器(73~75)：口径5.7~8cm、器高3.4~4.1cmを計る小型の粗製土器である。いずれも、粘土塊を台上もしくは手上で、指先のみで成形し、工具は使用しない。

須恵器杯蓋(76・77)：SD1出土遺物の中では最も新しい時期に属するのが(76)である。SD1最上層から出土した。杯蓋として掲載したが、杯身の可能性もある。2号馬鍬が同一層位から出土した。(77)は、天井部と口縁部の境に、断面三角形の稜を廻らす。口縁は外反して開き、端部は面をなす。天井部はヘラケズリ、他は丁寧なヨコナデである。全体として丁寧なつくりという印象を与える。口径は12.2cm、器高4.4cmを計る。

須恵器壺(78・79)：(78)は、頸部のみ的小破片であるため詳細は不明である。頸部径は、10.6cmを計る。(79)は、口縁部が外反して、外上方に尖り気味に開く。外面には、口縁端部下と、中位、下位に等間隔で3条の断面三角形の凸帯を配している。凸帯の間は、8条1単位の楕円波状文で飾る。口径は19.7cmを計る。胴部以下は欠損のため不明。

須恵器甕(80)：口縁部は大きく外反して外上方に開く。口縁端部は丸く終り、端部近くの外面に、断面三角形の凸帯を廻らす。口径は39.2cmを計る。口縁部下半以下は欠損のため不明。

須恵器器台(81)：半球形の杯部と、高い脚部からなる。杯部は、口縁が外反し、端部は凹んだ面をなす。杯部側面は、5条の文様帯で飾られている。上から、波状文、組紐文、組紐文、波状文、格子文で、各文様帯はゆるやかな稜線で画されている。脚部は、四方に4段の三角透しがある。各段の透しは、ゆるやかな凹線で画されている。脚部下端は、凹面をなし、下端部が接地する。杯部と、脚部の接合部は欠損して不明だが、図上で復元した。口径は40.5cm、器高31.2cm、脚部裾径31.2cmを計る。

SD2 (第54図～第56図)

上層と下層の遺物に分けられる。上層は、6世紀中葉から後半にかけての須恵器と、馬鍬、鳥形などが出土した。下層からは、手づくねのミニチュア土器100点近くと土師器高杯・甕・壺の一括出土があった。他に、木器として、下駄・田下駄・剣形代・曲物などが出土した。

須恵器杯(82・83・84・85)：(82)は、天井部と口縁部の境に稜をもつ。口縁は垂下し、端部は外反する。端部内面は内傾した凹面をなす。天井部外面はヘラケズリ、他は回転ナデによる。(83)は、口縁部が垂直に近く立ち上がり、端部は内傾した面をなす。底部外面はヘラケズリ、他は回転ナデによる。(84)は、口縁部が内弯し、端部は内傾した凹面をなす。天井部はヘラ切り未調整である。(85)は、底部外面をヘラケズリする。(82～85)は、いずれも上層から出土した。以下、すべて下層出土である。

土師器高杯(91～100)：SD1での分類によるBタイプとDタイプが出土した。B(91・92・97・99・100)のうち、(91)は、内外面にハケ目を施す。口径は(91)が18.7cm、他の4点の平均は14.8cmである。器高は、(97・99・100)の平均が12.3cmを計る。

土師器壺(101)：体部は、胴の張った球形で、やや外上方に直線的に開く口縁部がつく。外面は、丁寧なヘラミガキを施し、全体的に精緻な感じを与える。口径8.6cm、器高15.6cm、体部最大径15.8cmを計る。

土師器甕(88～90・101～110)：大小様々な容積の甕がある。基本的なプロポーションは、球形

の体部に、「く」の字の口縁部がつく。体部外面はハケ目による調整を施す。全体の観察が可能な(104・105・106・108)について細部をみでみる。(104・105)は、小形品で、口縁部が直立に近い。口径と胴部最大径はほぼ同じである。体部外面及び口縁部内外面はハケ目、体部内面はナデによるが、(105)の下半はヘラケズリを施す。(106)は、中形品で、球形の胴部に「く」の字の口縁部がつく。体部外面はハケ目、口縁部はヨコナデ、体部内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。(108)は、大形品で、球形の胴部に「く」の字の口縁部がつく。体部外面の下半1/3はナデ、他はハケ目を施す。口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコハケを施す。体部内面下半はヘラケズリ、上半は指によるカキアゲによる。(107)の調整は他と同じであるが、胎土は茶褐色を呈し、他の甕が茶灰色であるのと様相を異にする。(88)は、口縁端部に面をなす。(89)は、体部外面ヘラケズリ、(102)は、口縁部が直立し、端部は外側が肥厚する。体部内面は、工具によるカキ取りによる。

土師器杯(86・87)：SD1もしくはSD2から出土した。(86)は、半球形で、底部外面はハケ目を施す。

手づくね土器(111～201)：大別すると、粘土塊から指先で成形した小形品と、粘土紐を巻きあげた中形品がある。前者は、平底(111～148)と、丸底(149～189)に分けられる。平底のものは、平均の口径4cm、器高3.9cmを計る。丸底のものは、平均の口径4cm、器高2.8cmを計る。粘土紐を巻き上げて成形した中形品には様々なプロポーションのものがある。すべて平底であるが、丸味のある胴部に外反する口縁部がつくもの(191・193～197)、口縁部が屈曲して稜を有するもの(198・199)、胴部最大径よりも口縁部径が大きいもの(200・201)がある。口径は5.1～7.7cm、器高4.8～8.6cmを計る。

SD4 (第57図)

須恵器杯蓋(202)：天井部は高く、丸味を帯びる。口縁部との境は断面三角形の稜がつく。口縁端部は内傾した凹面をなす。天井部外面はヘラケズリ、他は回転ナデによる。

須恵器把手付鉢(203)：上半は欠損のため不明。下半は3条の稜があり、下の2条間に波状文を施す。底部外面は静止ヘラケズリを施す。

土師器壺(204～207)：(204)は扁平な球形胴部に、外反気味に外上方へ開く口縁部がつく。胴部内面は指によるカキアゲ、他はヨコナデによる。(205)は、口縁部径と胴部最大径がほぼ同じである。(206)は、下半部を欠損するため、全体のプロポーションは不明。器壁が厚い。(207)は、甕ともみられるが、ここでは広口壺と考える。球形の胴部に、直立気味に外反する口縁部がつく。体部外面はヘラ状工具による押圧ののちナデる。

土師器高杯(208・209)：全体のわかる(208)は、SD1の分類でAタイプに該当する。杯部の底部と口縁部の境に稜をもつ。比較的大形で、口径18.2cm、器高12.8cmを計る。(209)は、杯部を欠損するため、分類できなかった。

SD5 (第57図)

須恵器杯蓋(210~214)：5世紀後半の(210)、6世紀中葉の(211・212)、7世紀前半の(213・214)に分けられる。(210)は、平坦な天井部に、垂下した口縁部がつく。口縁端部は内傾した凹面をなす。口縁部と天井部の境は、断面三角形の稜をなす。天井部外面はヘラケズリ、他は回転ナデによる。(211)は4号馬鍬の周囲から出土した。天井部は丸味を帯び、口縁部との境はゆるい稜がある。口縁端部は内傾した凹面をなす。天井部外面はヘラケズリによる。(212)は有蓋高杯の蓋で、つまみを有する。丸味のある天井部に、扁平なつまみがつく。天井部外面は、つまみの周囲はカキ目、その外側はヘラケズリによる。口縁部と天井部の境は、わずかに稜をなす。口縁端部は内傾した凹面をなす。4号馬鍬周囲から出土した。(213)は、丸い天井部に、内弯した口縁部がつく。口縁端部は丸く終る。天井部外面の中央部のみヘラケズリを施す。(214)は、口縁内面にかえりを有し、天井部にはつまみがつく。古川B・C区の自然流路の埋没時期の下限を示す資料である。

土師器高杯(215)：杯部は欠損している。杯との接合部付近は細く、新しい傾向を示している。

SD6 (第57図)

土師器壺(216・217)：(216)は、球形の胴部に、外反気味に外上方へ開く口縁部がつく。口径8.2cm、器高9.2cm、胴部最大径8.5cmを計る。(217)は、球形の胴部に、直線的に外上方へ開く口縁部がつく。口径8.3cm、器高9.3cm、胴部最大径10cmを計る。

土師器高杯(219)：口縁部は、外反気味に外上方へ開き、底部との屈曲部はゆるやかな稜をなす。口径18.8cmを計る。

SH1 (第57図)

土師器高杯(218)：口縁部は、大きく外反して開き、底部との境は稜をなす。脚部は欠損のため不明。口径19.6cmを計る。

SD11 (第58図)

下層の黒色泥土層に、古墳時代前期の遺物を多く包含していた。

土師器壺(220・221)：球形の胴部に、退化した受口状口縁部がつく。(220)は、口径7.7cm、器高6.3cm、胴部最大径8.4cmを計る。

土師器高杯(222~225)：口縁部は外反して外上方へ開き、底部との屈曲部はゆるやかな稜をなす。口径14.2cmを計る。

土師器甕(228~238)：受口状口縁のもの(228~234・237)、いわゆる布留式のもの(235)、「く」の字に外反するもの(236)、外弯して外反するもの(238)に分けられる。受口状口縁の形態は、口縁の立ち上がりが垂直で、端部は尖り気味に丸く終るものと、口縁の立ち上がりが外上方に開き、端部は水平に近く外へ引き出すものがある。(232)は、いわゆる「S字状口縁」を呈し、受口状口

縁襷に較べて器壁が薄い。(237)は、口縁部がわずかに屈曲するのみで、端部も丸く終る。体部外面の調整は、(228)と(237)がヘラケズリで、他はハケ目による。(235)は、口縁部が内弯して外上方に開き、端部は内側へわずかに肥厚する。体部外面及び口縁部内面はハケ目、体部内面はヘラケズリによる。(236)は、口縁部が直線的に外上方へ開き、端部は丸く終る。体部内外面はヘラケズリによる。(238)は、口縁部が外弯して外反する。体部は長胴化しつつある。体部外面はハケ目、内面はナデによる。

古川A～D区 (第59図)

今回の調査で出土した奈良時代の須恵器のすべてである。(239・241)は、杯蓋で、丸味のある天井部に、断面三角形の口縁端部が垂下してつく。天井部外面はヘラケズリによる。(240・242)は高台付杯である。いずれも包含層からの出土である。

古川C区 (第59図)

S D11以東で検出した素掘溝内より出土した。12世紀代の瓦器・黒色土器・土師器がある。

瓦器椀(243・244・245)：(243)は、口縁端部内側に沈線をもたない。内面はヨコ方向のヘラミガキ、外面は下半まで粗いヘラミガキを施す。(244)は、口縁部を強くヨコナデして内側へ屈曲させ、端部内面に沈線を施す。高台は、断面三角形のものが短くつく。内面はヨコ方向のヘラミガキ、外面上半は粗いヘラミガキを施す。(245)は、摩耗のため詳細不明。

黒色土器椀(246)：器壁は厚く、口縁端部内側に沈線を廻らす。

瓦器皿(247)：口縁部は二段ナデによる。口縁部内側にはヨコ方向のヘラミガキ、見込み部には、ジグザグ線状のヘラミガキを施す。

土師器皿(248)：口縁部は、外上方に直線的に短く開く。口縁部はヨコナデ、他はナデによる。口径9.2cm、器高1.7cmを計る。

古川D区 (第59図)

各遺構より弥生時代から中世までの遺物が出土した。

弥生時代(249～250)：(249)は高杯の脚部である。四方に円形の透し孔がある。(250)は器台で、三方に円形透し孔をもつ。(251)は受口状口縁の襷である。摩耗が著しい。

古墳時代(252・253)：いずれも須恵器の杯身である。口縁部の立ち上がりは内傾する。底部外面はヘラ起こしのまま未調整である。

中世(254～257)：(254)は白磁の底部である。(255)は土師器皿で、口縁部と底部の境は稜をもつ。(256)は青磁椀である。(257)は土師器羽釜である。球形に近い胴部の上半に罅を廻らせる。胴部内面はハケ目、口縁部外面はヨコナデ、胴部外面はスス付着のため詳細は不明であるが、一部にハケ目を施す。

SD14 (第60図・第61図)

最下層から5世紀後半の土器を出土した。出土遺物の大半は同時期のものであるが、古墳時代前期の遺物も混在する。出土土器は、器台・高杯・甕・壺などの土師器と、須恵器甕である。出土層位は最下層のものが最も多く、完品をはじめ、大きい破片が多くみられた。

土師器器台(258)：脚部から受部にかけては中空となる。「ハ」の字に開く脚部の内面下半はハケ目、他はヨコナデによる。

土師器高杯(259～273・282)：(259)は、脚部に、三方の円形透し孔がある。脚部の外面はヘラミガキ、内面下半はハケ目による。杯部は欠損のため不明。(260)は、杯部内外面及び脚部外面をヘラミガキする。脚部内面はヘラケズリによる。(258～260)は古墳時代前期までの時期と考えられる。(261)は、(20)と同じく、大形の高杯である。杯部は、底部と口縁部の屈曲部に、明瞭な稜をもつ。口径22.7cm、器高15.8cmを計る。(263)は、SD1の分類ではBタイプとなる。しかし、SD1の例よりも大きく、口径18cm、器高12.6cmを計る。脚部と杯部の接合部周辺はハケ目による。脚部内面はヘラケズリによる。(262)は、(263)と同じタイプであるが、やや小ぶりである。杯部内面にもハケ目を施す。(268)は、大形品で、杯部の屈曲部に断面方形の凸帯を廻らす。杯部の内外面はハケ目を施す。口縁端部は外側へ肥厚する。(285)は、Bタイプで、杯部内外面及び脚部の裾上面はハケ目を施す。脚部の内面はヘラケズリによる。口径17.6cm、器高13.2cmを計る。

土師器甕(274～280)：(274)は、受口状口縁の甕である。体部外面は粗いハケ目を施す。(275)は、口縁が「く」の字に外反し、端部は凹面をなす。口縁部内面及び体部外面はハケ目による。(276～278)は、口縁が「く」の字に外反し、端部は尖り気味に丸く終る。(277)は、やや縦長な球形の胴部に、「く」の字の口縁がつく。体部外面及び口縁部内面はハケ目による。体部内面下半は粗いハケ目、上半はヘラケズリによる。(279)は、口縁が外弯して外反する。体部外面はタタキ目による。(280)は、口縁が直線的に外反し、端部は丸く終る。体部外面はハケ目、内面はナデによる。

土師器壺(281・283～285)：(281)は、口縁部のみで、内面はハケ目による。(284)は、やや扁平な球形体部に、直線的に外上方へ開く口縁部がつく。体部内面はユビによるカキアゲ、他はナデによる。(283)は、平底気味の球形胴部に、外反した短い口縁部がつく。器壁は厚く、体部内面には粘土紐の継目を残す。(285)は、胴の張った球形体部に、直線的に外上方へ開く口縁部がつく。体部最大径のあたりに、指による押圧がみられる。体部外面下半はハケ目、他はナデによる。口径10.4cm、器高16.4cm、体部最大径16.7cmを計る。

須恵器甕(286)：大形の甕の口縁部で、上半部及び体部は欠損のため不明である。口縁部外面の下半には、ヨコ方向のカキ目ののち、タテ方向に粗いカキ目を施す。また、体部との接合部より上に5cmのところ、2条の平行する沈線を廻す。体部との接合部での径は22.6cmを計る。

SD8・9・10 (第62図・第63図)

SD8とSD9の下層は、弥生時代後期から古墳時代中期までの遺物を含む砂礫層が広がっており、本来は1条の自然流路としてとらえられる。ここでは、砂礫層の遺物を中心に報告する。

弥生土器鉢(287)：受口状口縁の鉢で、立ち上がりは外上方に伸び、端部は外方へつまみ出す。体部最大径は、器高の中位より上にある。体部外面はタテ方向のハケ目、内面下半はヘラケズリによる。体部下位に、長径6cm程度の焼成後穿孔がある。口径12.3cm、器高13.8cmを計る。

弥生土器甕(288・292・293)：(288)は、平底の小型の甕である。口縁部は「く」の字に開く。体部最大径は、器高の中位より上にある。体部外面はハケ目、内面はナデによる。口径10.6cm、器高10.8cmを計る。(292)は、受口状口縁の甕である。立ち上がりは垂直で、端部は外上方へつまみ出す。立ち上がり外面は刺突列点文で飾る。体部外面はハケ目ののち、上から、刺突列点文・3条1単位の橢描直線文・刺突列点文・橢描直線文・橢描連弧文・凸帯文で飾る。体部内面下半はヘラケズリ・上半はナデによる。(293)は、(292)と同様の甕である。口縁部は欠損している。体部最大径は、器高の中位より上にある。体部外面の施文は、上から、刺突列点文・橢描直線文・刺突列点文・ゆるい橢描連弧文・橢描連弧文・凸帯文の順で飾る。

弥生土器壺(289～291)：(289)は、口縁部のみ破片である。口縁部は大きく外反して開き、端部は垂下する。(290)は、広口壺で、口縁部と体部の破片を図上で合成した。小さく凹む平底で、体部最大径は器高の中位より下にある。口縁部は短かく外上方へ開く。肩部に2条の橢描波状文と、その間に、竹管文を配する。口径10.8cm、復元高16.2cmを計る。(291)は、長頸壺である。体部は欠損のため不明である。口頸部外面及び内面上半はハケ目による。

弥生土器及び土師器高杯(294・297・298・305・306・308～310)：(394)は、底部の大きい杯部と、高い脚部からなる。口縁部は外弯して外上方に開く。杯部の底部外面及び、脚部の裾部上面はハケ目による。口径21.7cm、器高17.1cmを計る。弥生時代後期と考えられる。(297)は、SD8上層から出土した。杯部は、口縁部と底部の屈曲部に明瞭な稜をもつ。口縁部外面はハケ目、他はナデによる。(305)は、口縁部を欠損するが、径の大きな底部で、口縁部との屈曲部は明瞭な稜をもつ。脚部は「ハ」の字に開き、三方に円形透し孔がある。外面はすべてヘラミガキによる。(306)は、杯部の口縁部が、脚部との接合部から直線的に開く。口径17.8cm、器高13.0cmを計る。(308)は、内弯気味に立ち上がる口縁部の杯部で、内外面ともに、タテ方向のヘラミガキを施す。(309)も、(308)と同様のプロポーションと調整を施す。

土師器壺(295)：やや扁平な球形の体部に、直線的に外上方へ開く口縁部がつく。口径7.3cm、器高8.5cmを計る。

土師器器台(307)：受部は直線的に外上方へ開き、端部は面をなす。下端部はわずかに垂下する。内外面ともにヘラミガキによる。

土師器甕(296・299～304)：(296)はSD10から出土した。口縁部は「く」の字に開く。体部外面はハケ目による。(299～301)は、受口状口縁の退化形態である。(299・301)は立ち上がりは外上方へ伸び、端部は外方へつまみ出す。体部外面はハケ目による。(300)は、口縁部が、逆「く」

の字につく。(302)は、体部の大きさに較べて口径の小さな口縁部がつく。口縁端部は外下方へつまみ出す。(303)は、「く」の字の口縁部がつく。体部は長胴化の傾向にあり、体部外面はハケ目、内面はユビによるカキアゲによる。(304)は、直立に近い口縁部が、かなり長胴化した体部につく。外面はすべてハケ目、内面はユビによるカキアゲである。

38号排水路区 (第64図)

調査区西端のS D14出土土器については、すでに述べたので、ここではその他の遺構・包含層から出土した土器について述べる。出土土器は、古墳時代後期と、平安時代末期のものが多い。

須恵器杯蓋(456・459)：(456)は、P.6から出土した。天井部外面はヘラ切り未調整、口縁端部は丸く終る。(459)は、天井部外面をヘラケズリ、口縁端部は内傾した凹面をなす。

須恵器杯身(457・458・460・461)：(460)は、底部外面をヘラケズリする。他は、ヘラ切り未調整である。

土師器高杯(463・464)：(463)は、S D1の分類によるとBタイプの高杯である。竪穴住居(S H2)を切り込んだピットより出土した。

土師器皿(313・465)：(313)は、口縁部一段ナデによる。口径9.0cm、器高1.9cmを計る。小皿である。(465)は、大皿である。底部はやや丸味をおびる。口縁部は一段ナデによる。口径14.8cm、器高2.8cmを計る。(313・314・465～467)はS K1より出土した。

黒色土器椀(311・467)：内弯して開く口縁部に、断面方形の高台がつく。(311)の口径15.4cm、器高5.0cm、(467)の口径15.1cm、器高5.7cmを計る。

瓦器皿(314)：丸味のある底部に、外反する口縁部がつく。口縁部内面はヨコ方向のヘラミガキ、底部内面はジグザグ線状のミガキを施す。

緑釉陶器椀(315)：調査区東域のピット群から出土した。軟質焼成の深底椀である。口径は16.2cmを計る。

灰釉陶器椀(317・318)：底部のみの破片である。(317)は、高台端部は面をなす。高台径13cmと大形である。(318)は、内弯気味の高台で、端部は尖り気味に丸く終る。

29号道路区 (第64図)

掘立柱建物群とその周辺から、平安時代末から鎌倉時代前期の土師器・黒色土器が出土した。

土師器皿(319・320)：(319)は、小皿である。口縁部は一段ナデによる。口径9.0cm、器高1.9cmを計る。(320)は、丸味のある底部に、強く外反する一段ナデの口縁部がつく。口径16.0cm、器高3.2cmを計る。

無釉陶器(321)：外上方に直線的に開く口縁部に、断面逆台形の高台が踏ん張ってつく。

黒色土器椀(322)：内弯して開く口縁部に、断面三角形の高台がつく。口縁端部の内側には1条の沈線を廻らせる。内面は、連続した円弧状のミガキを施す。口径15.4cm、器高5.0cmを計る。

46号排水路区（第65図～第68図）

弥生時代後期の竪穴住居 2 棟、古墳時代後期の竪穴住居 3 棟、掘立柱建物 1 棟、平安時代末から鎌倉時代前期の掘立柱建物10棟、土壙、ピット群から、同時期の遺物が多数出土した。とりわけ、平安時代末から鎌倉時代前期の遺物が多い。

土師器皿(323～388)：小皿(323～382)と、大皿(383～388)がある。小皿には、口縁部を大きく外反させ、端部の内側をわずかに肥厚させるもの(323)、口縁部を一段ナデによるもの(324～366)、口縁部を二段ナデによるもの(367～382)がある。(323)は、口径9.2cm、器高1.3cmを計る。(324～366)の平均の口径は8.5cm、器高1.5cmを計る。(367～382)の平均の口径は8.7cm、器高は1.7cmを計る。大皿には、底部から口縁部まで、同じ厚さでナデるもの(383・385・387・388)と、口縁部を強くナデるもの(384)、口縁端部内側に凹線を廻らせるもの(386)、がある。平均口径14.3cm、器高2.8cmを計る。大皿(385)と小皿(331)に各 1 点ずつ、底部に穿孔がある。

土師器高台付皿(389・390)：完品の(390)でみると、扁平な皿に、高い高台部がつく。口径10.2cm、器高3.6cmを計る。

瓦器皿(391～399・415～424)：口縁部が外反するもの(392・394・422)、直線的に外上方へ開くもの(396・398)、二段ナデによるもの(391・393・397・399・415～421・423・424)がある。内面調整は、口縁部に圏線状ミガキを施すもの(396・422)、底部にジグザグ線状ミガキを施すもの(391～399)がある。(415～424)は、風化が著しいため細部観察が困難であった。口縁が外反するものの平均の口径9.4cm、器高1.9cm、直線的に外上方に開くものの口径9cm、器高1.9cm、二段ナデによるものの口径9.2cm、器高2.1cmを計る。

瓦器椀(400～414)：内面の調整で分類すると、古いものは、体部を分割したヨコ方向ミガキ(400・408)によるが、他は圏線状ミガキによる。また、底部は、螺旋状ミガキによるものが大半であるが、(403)のように、ジグザグ線状の古いタイプのミガキを施すものがある。高台の形態は、古いタイプ程、断面台形のしっかりしたものがつく。平均の口径15.1cm、器高5.1cmを計る。

黒色土器椀(425～436)：瓦器と較べて、器壁は厚く、高台も大きい。内面は放射状ミガキを施す。平均の口径15.0cm、器高5.4cmを計る。

白磁椀(440)：体部は直線的に外上方へ開き、口縁部は直立する。口縁端部は玉縁状に肥厚する。高台はケズリ出しによる断面台形のものがつく。底部外面以外は、白灰色に施釉する。口径14.8cm、器高7.7cmを計る。

用途不明土製品(445)：平底の円形容器を、2つ連接させた形態の瓦質土製品である。内外面ともにケズリによる。長径8.2cm、器高3cmを計る。

三足鍋(446～449)：いずれも脚部のみの破片であるため、全形は不明である。

須恵質片口鉢(450)：口縁部と底部の破片を図上で復元した。体部は外上方へ直線的に開き、口縁部は、わずかに外反する。高台は、断面方形のものがつく。口縁部に一ヶ所・外方へ引き出した片口がつく。復元口径34.9cm、器高12.2cmを計る。

土師器羽釜(451～455)：内傾した口縁部外下方に、鐙がつく。体部下半は全て欠損しているた

め不明である。内面及び外面の一部はハケ目による調整を施す。口縁端部は、面をなすもの(452・453・455)と、丸く終るもの(451・454)がある。

土師器甕(437)：平安時代末の遺構面下より出土した。受口状口縁の甕である。口縁の立ち上がりは垂直で、端部は外上方につまみ出す。体部外面はハケ目による。

須恵器壺(439)：SH 7から出土した。口縁は外反して開き、端部は上方につまみ出すとともに下方へ肥厚する。(444)が共伴した。

須恵器杯身(442)：小型の杯身で、口縁の立ち上がりは内傾して短くつく。底部外面はヘラ切り未調整である。口径8.1cm、器高3.1cm、受部径10.2cmを計る。SH 6から出土した。

土師器高杯(444)：脚部のみの破片である。5世紀代のものに較べて高い。外面はヘラケズリ、内面はシボリ目を残す。SH 7から出土した。

弥生土器器台(441)：半球形の受部に、「ハ」の字の脚部がつく。口径6.3cm、器高5.6cmを計る。SH 9から出土した。

木製品 (第69図～第72図)

1号馬鍬：SD 1中央部やや下流より、暗灰色砂泥層上面から台木のみが出土した。長さ127.5cmの角材の台木に、11本の歯、2本の柄、2本の引棒がつく。台木は、高さ10cm、幅9.5cmの断面方形の角材で、木目にそって面取りをしているため、中央部分がややそり上がる。歯は台木の上下に貫通する方形の孔を、ほぼ等間隔(11cm前後)であける。孔の大きさは、長辺4.5cm前後、短辺2.5cm前後が多い。柄は、両端から4孔目と5孔目の間に、斜目に方形孔をあけて差し込む。引棒は、両端から1孔目と2孔目の間に、側面で貫通する円形孔をあける。円形孔の大きさは、径5cmを計る。6世紀後半までの時期が考えられる。

2号馬鍬：SD 1の右岸、最上層である黒灰色泥土層から台木のみが出土した。長さ123.0cm幅9.5cm、高さ9.5cmの台木に、9本の歯がつく。台木は、側面からみると「S」字に、ゆるくねじれる。歯孔は方形で、長辺3.5cm前後、短辺3cm前後を計る。歯の間隔は、中心と中心の平均で13.4cmを計る。柄は、両端から3孔目と4孔目の間に上下に貫通する孔をあけ、同じ箇所にも側面からも孔をあけて、柄を固定するための木クサビを打ち込んだものと考えられる。引棒は、両端から1孔目と2孔目の間に、側面で貫通する円形孔をあける。円形孔の径は4.5cmを計る。共伴遺物から、6世紀後半までの時期が考えられる。

3号馬鍬：SD 2の上層から出土した。台木の一部と歯2本分が残存している。台木は残存長38.0cm、幅7.0cm、高さ11.0cmを計る。歯は、差込み部分を除いて、長さ32.0cm、太さ2.5cm(中央部分)を計る。断面は三角形に近く、馬鍬の進行方向が鋭っていると考えられる。共伴遺物より6世紀後半と考えられる。

4号馬鍬：SD 4の上層から台木のみが出土した。長さ126.0cm、幅8.0cm、高さ10.0cmの台木に10本の歯がつく。歯孔は方形であるが、大きさにはばらつきがある。歯の間隔は、中心平均で12.8cmを計る。柄は、両端から3孔目と4孔目の間に、上下に貫通する孔をあける。孔は、隅丸

方形である。引棒は、両端から1孔目と2孔目の間、側面で貫通する円形孔をあける。円形孔の径は4.5cmを計る。共伴遺物から、6世紀中頃までの時期が考えられる。

なお、1号馬鋤・2号馬鋤・4号馬鋤の台木はヒノキ科、1号馬鋤の歯はアカガシ亜属に属するとの鑑定結果がでている。

曲物底板(1)：径40cm、厚さ4cmを計る。腐植が著しく全容は不明である。

梯子(2・3)：(2)はSD1下層の礫層から出土した。幅15cm、残存長59cmで、二段の足踏部が残っていた。(3)は、SD5下層から出土した。残存長115cm、幅27cmを計る。二段の足踏部が残っていた。

剣形代(4)：柄部分は欠損して不明だが、残存長31cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmを計る。

柄状木製品(5)：頂部は疑円形に彫り出している。刀もしくは剣形代の柄と考えられる。残存長25cmを計る。(4・5)はSD2下層から出土した。

鳥形代(6)：板を削り、頭部と体部を表現している。長さ33.2cm、厚さ1.7cmを計る。SD2上層から出土した。

下駄(7)：一木から歯を彫り出す。鼻緒の前穴は右にかたよる。大きさも15cmと小さく、女性か子供の左足用と考えられる。SD2下層から出土した。

田下駄(8)：歯のない下駄である。長さ29.2cm、幅13.0cm厚さ2.0cmを計る。(7)の近くで出土した。

鋤(9)：破損が著しく全形は不明である。SD8より出土した。

槽(10)：一木を削り抜いた容器である。長さ39cm、幅16.5cm、高さ8.5cmを計る。SD5下層から出土した。

曲物(11)：楕円形で、長径の両端に把手をつける。側板は、桜皮で6ヶ所が綴じられている。側板以上は欠損のため不明。長径67.5cm、厚さ1.2cmを計る。SD2上層から出土した。

石製品・鉄製品 (第73図)

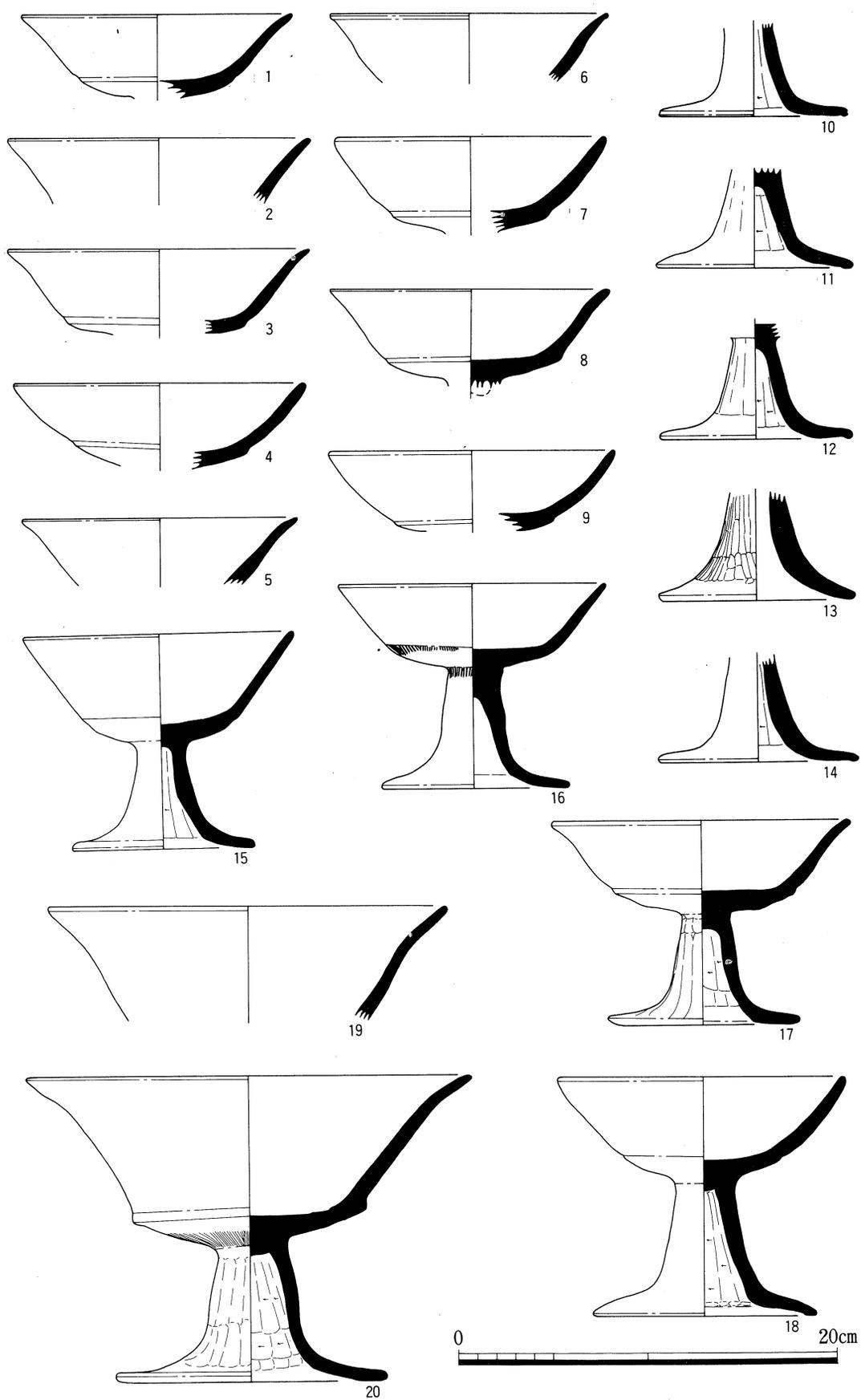
白玉(1)：SD2の手づくね土器群から出土した。滑石製で、径0.5cm、高さ0.2cmを計る。

有孔円板(2)：SD1から出土した。滑石製で、径3.0cm、厚さ0.3cmを計る。

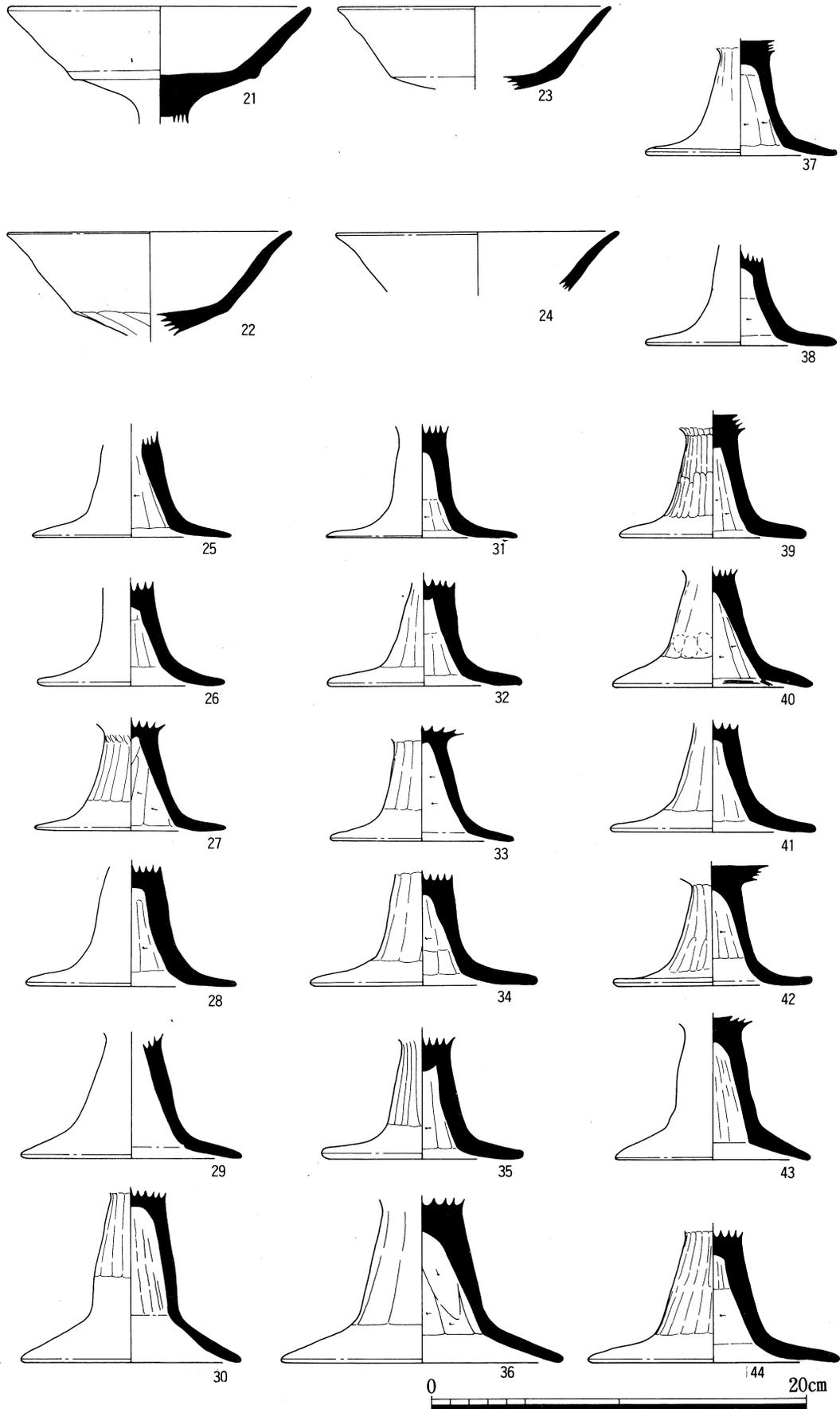
紡錘車(3)：SD5から出土した。滑石製で、復元径4.3cm、高さ2.0cmを計る。

鉄板(4)：古川B区包含層から出土した鉄板である。長さ14.7cm、幅4.0cm、厚さ1.0cmを計る。

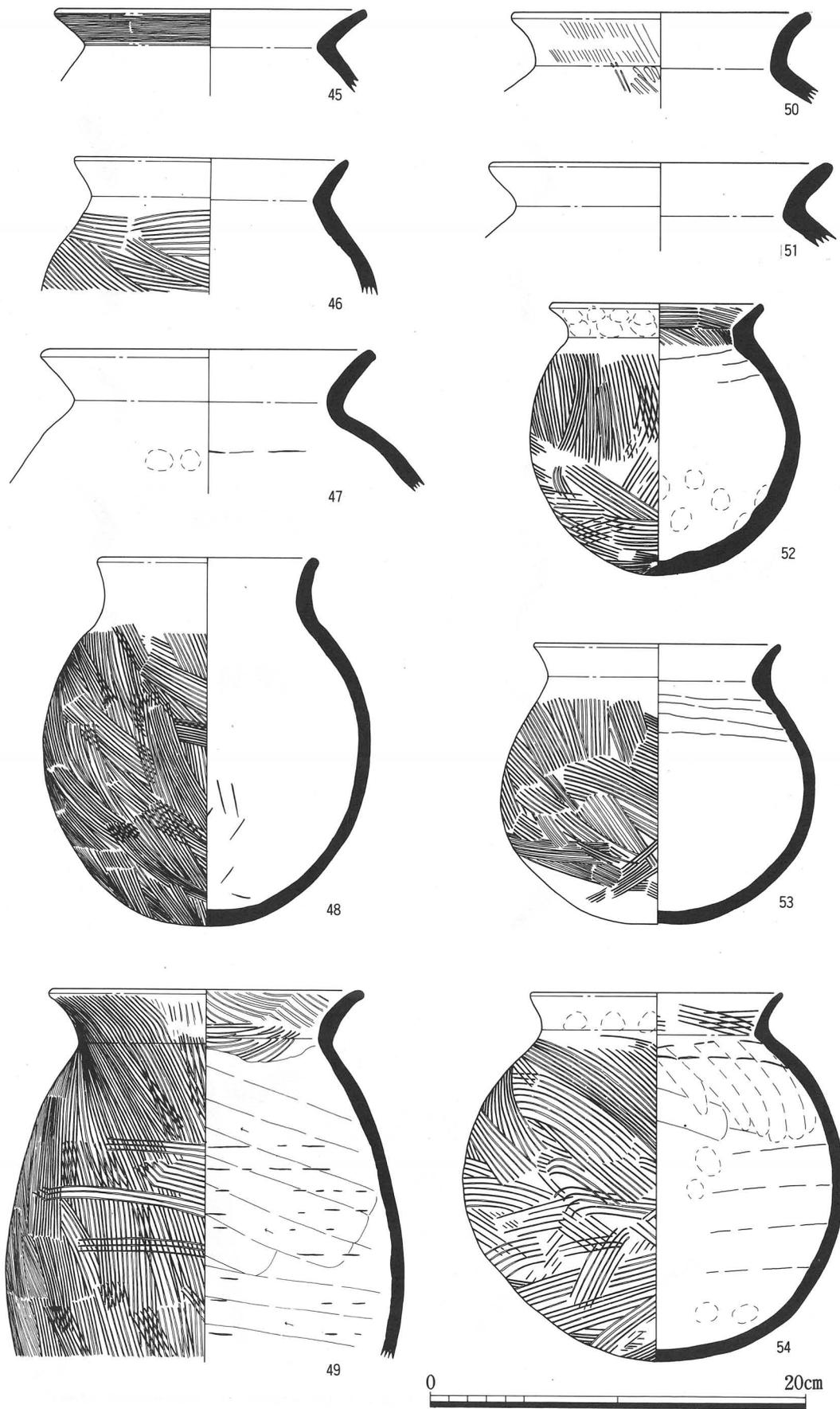
敲石(5・6)：SH9とSH10のそれぞれで、北東角近くの同じような位置に、床面上に裾え置かれていた。ともに火を受けた痕跡を残す。(5)は、長径26.0cm、厚さ8.7cm、(6)は、長径30.0cm、厚さ8.5cmを計る。



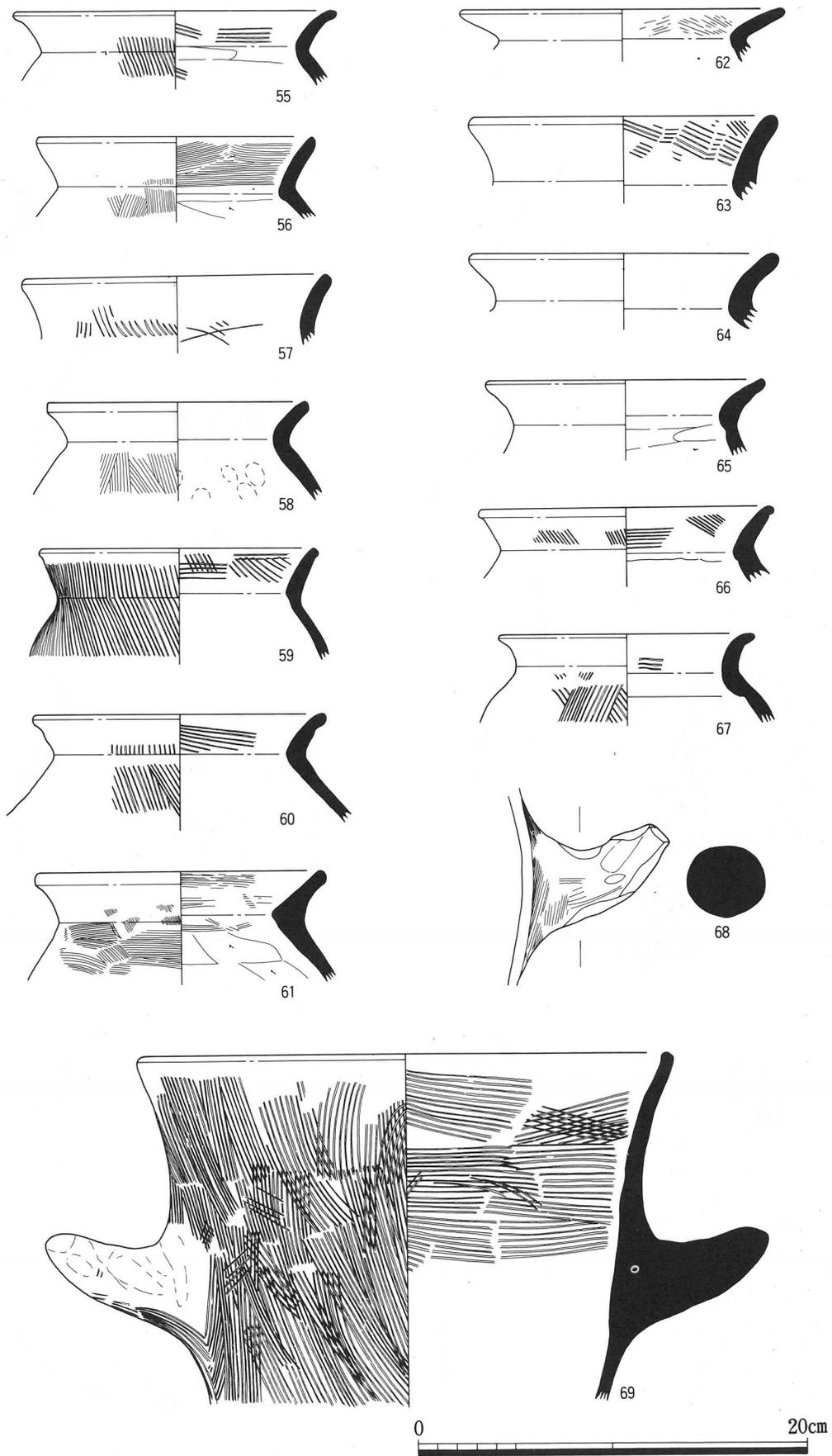
第49图 古川B区 SD1 出土土器(1)



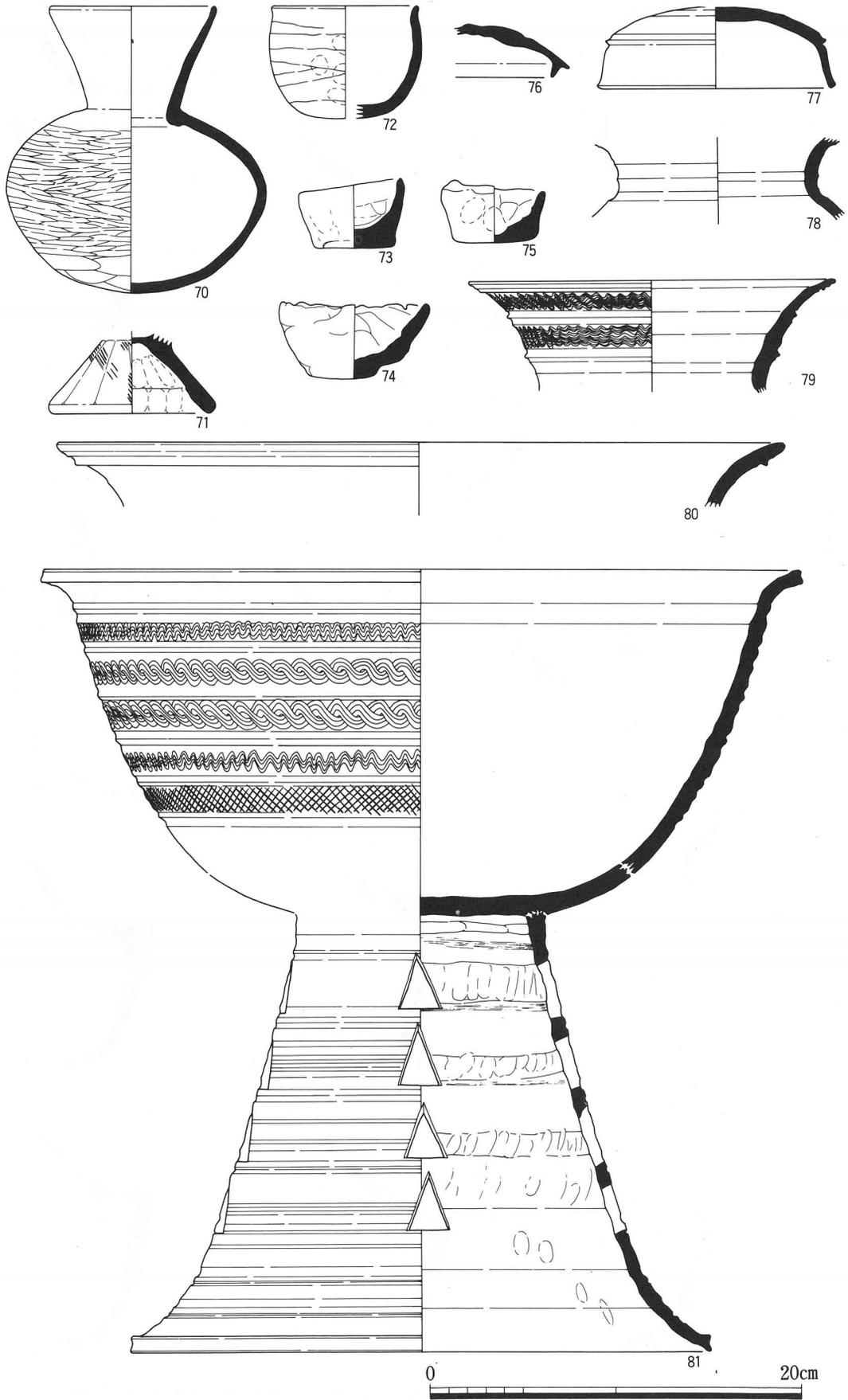
第50图 古川B区 SD1 出土土器(2)



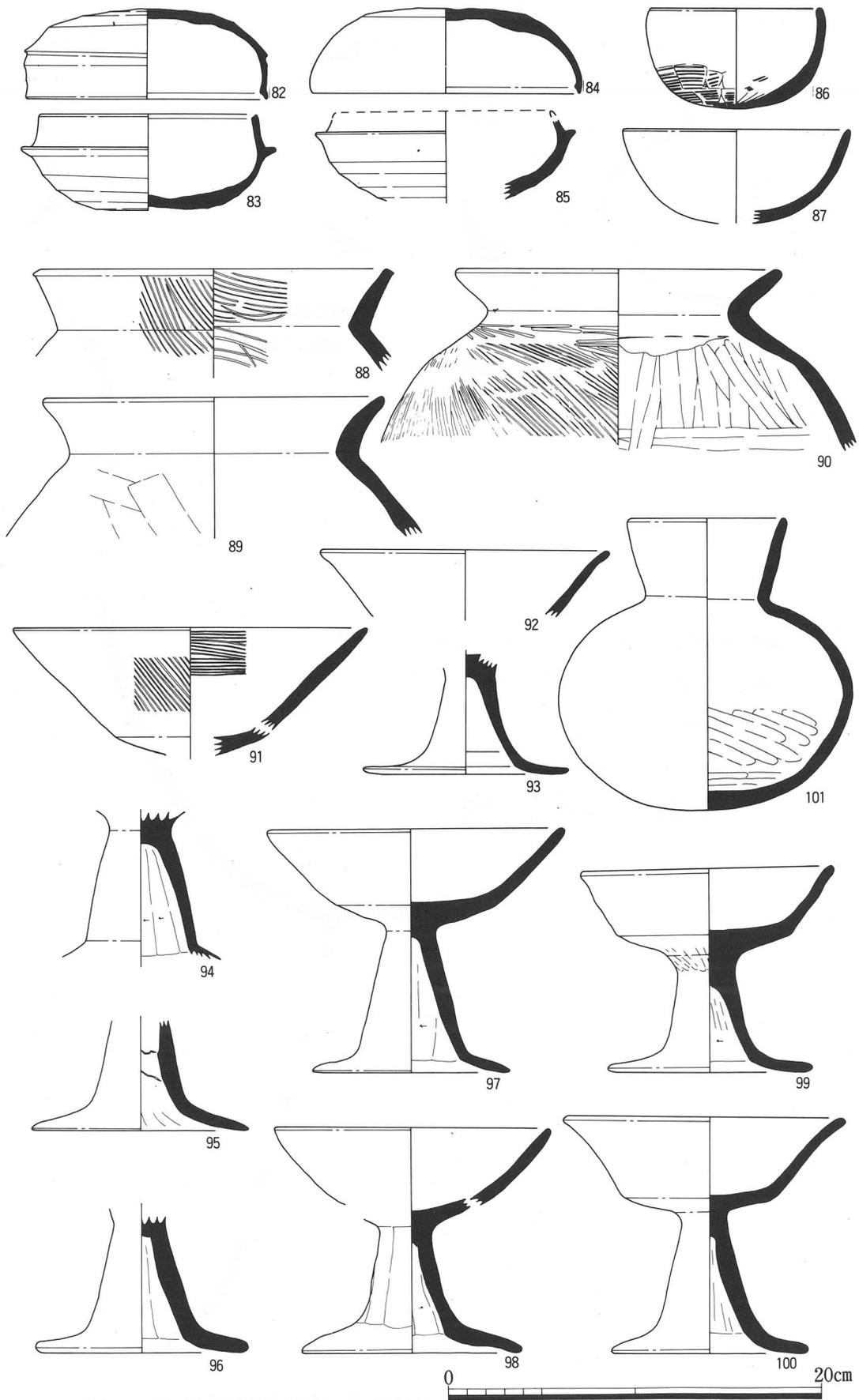
第51图 古川B区 SD1 出土土器(3)



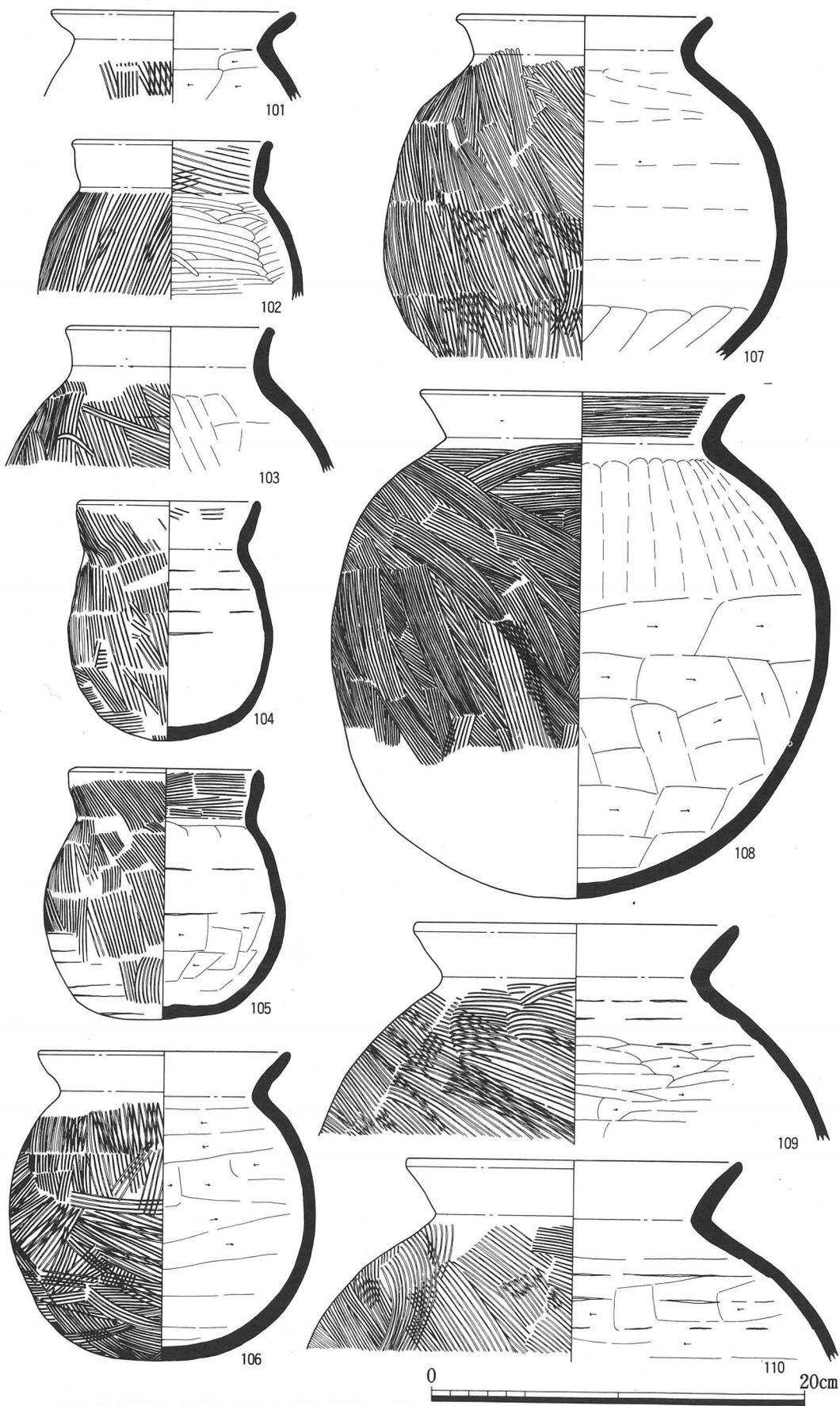
第52図 古川B区 SD1 出土土器(4)



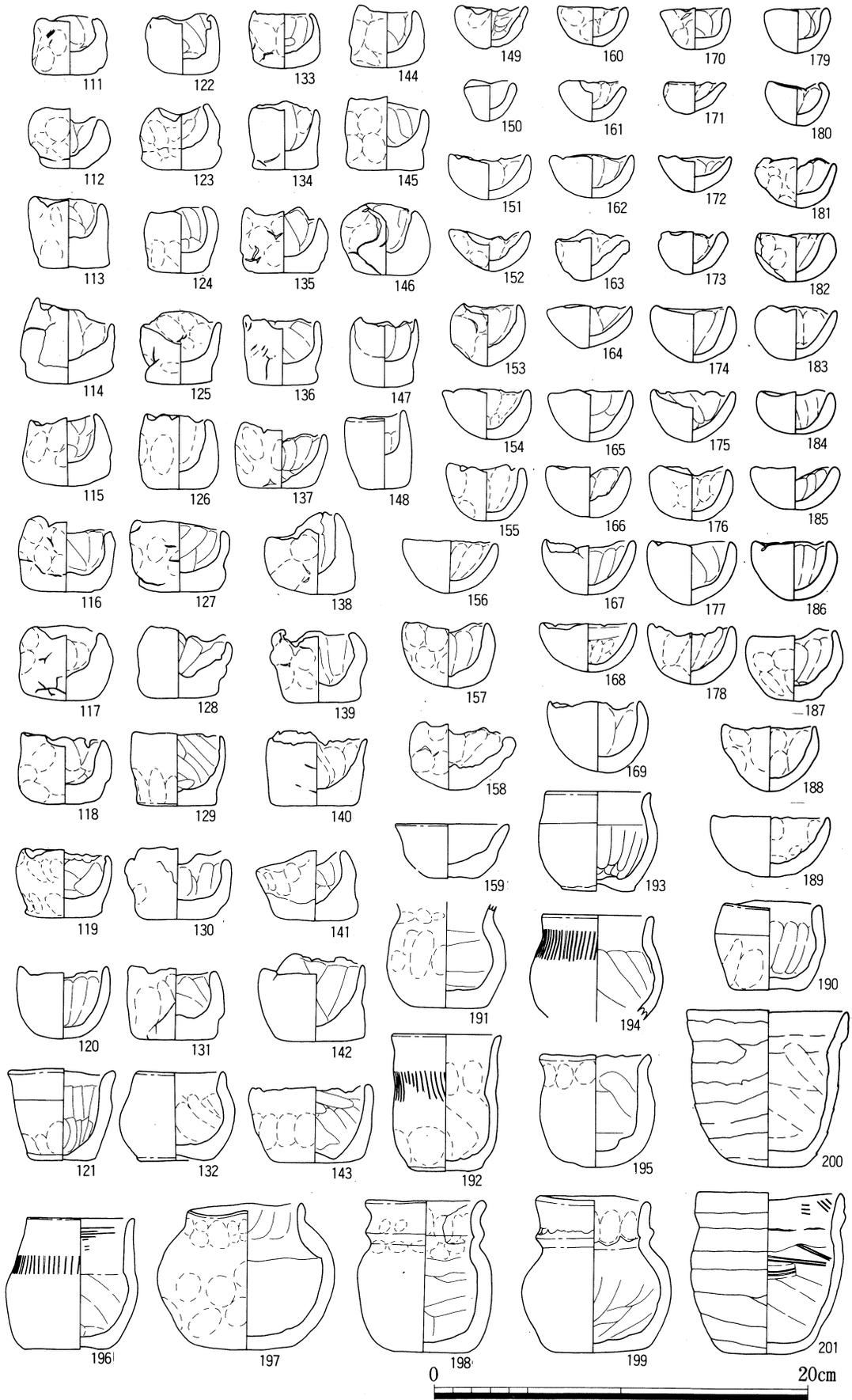
第53図 古川B区 SD1 出土土器(5)



第54図 古川B区 SD2 出土土器(1)

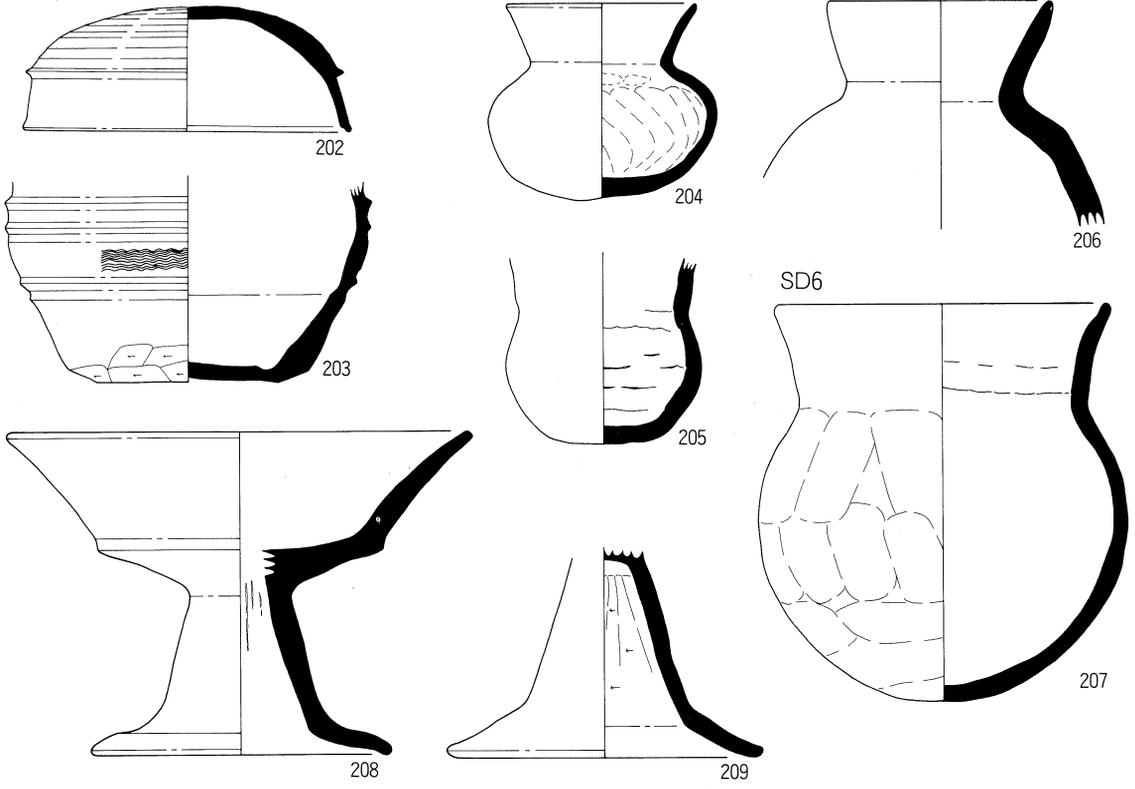


第55图 古川B区 SD2 出土土器(2)

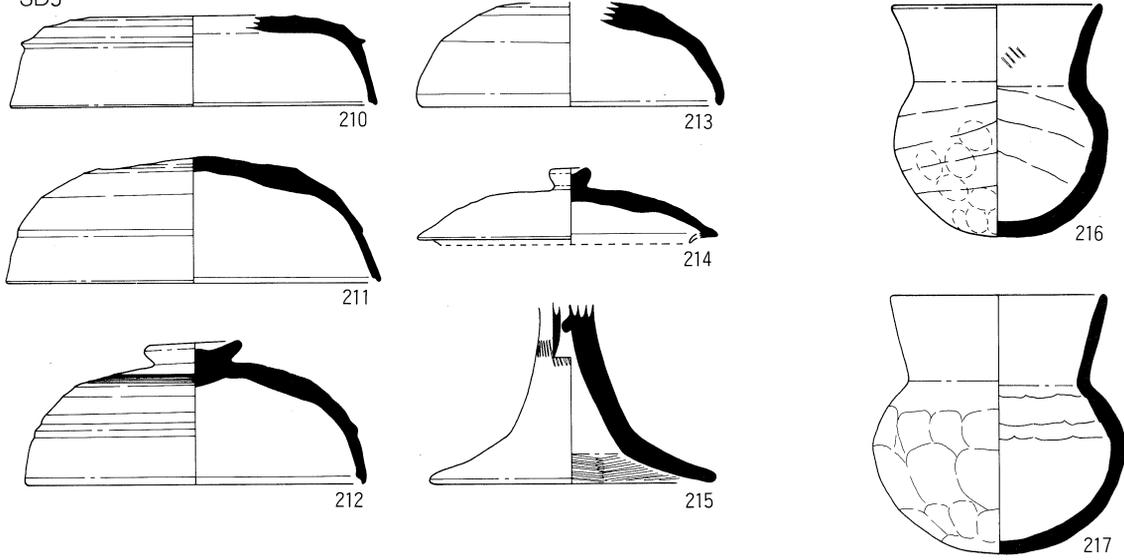


第56図 古川B区 S D 2 出土土器(3)

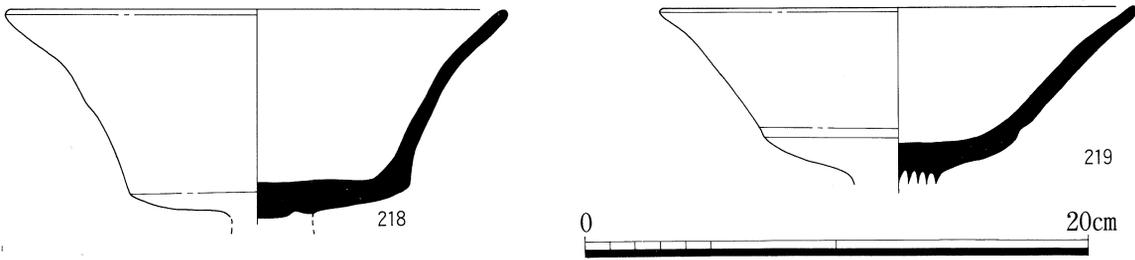
SD4



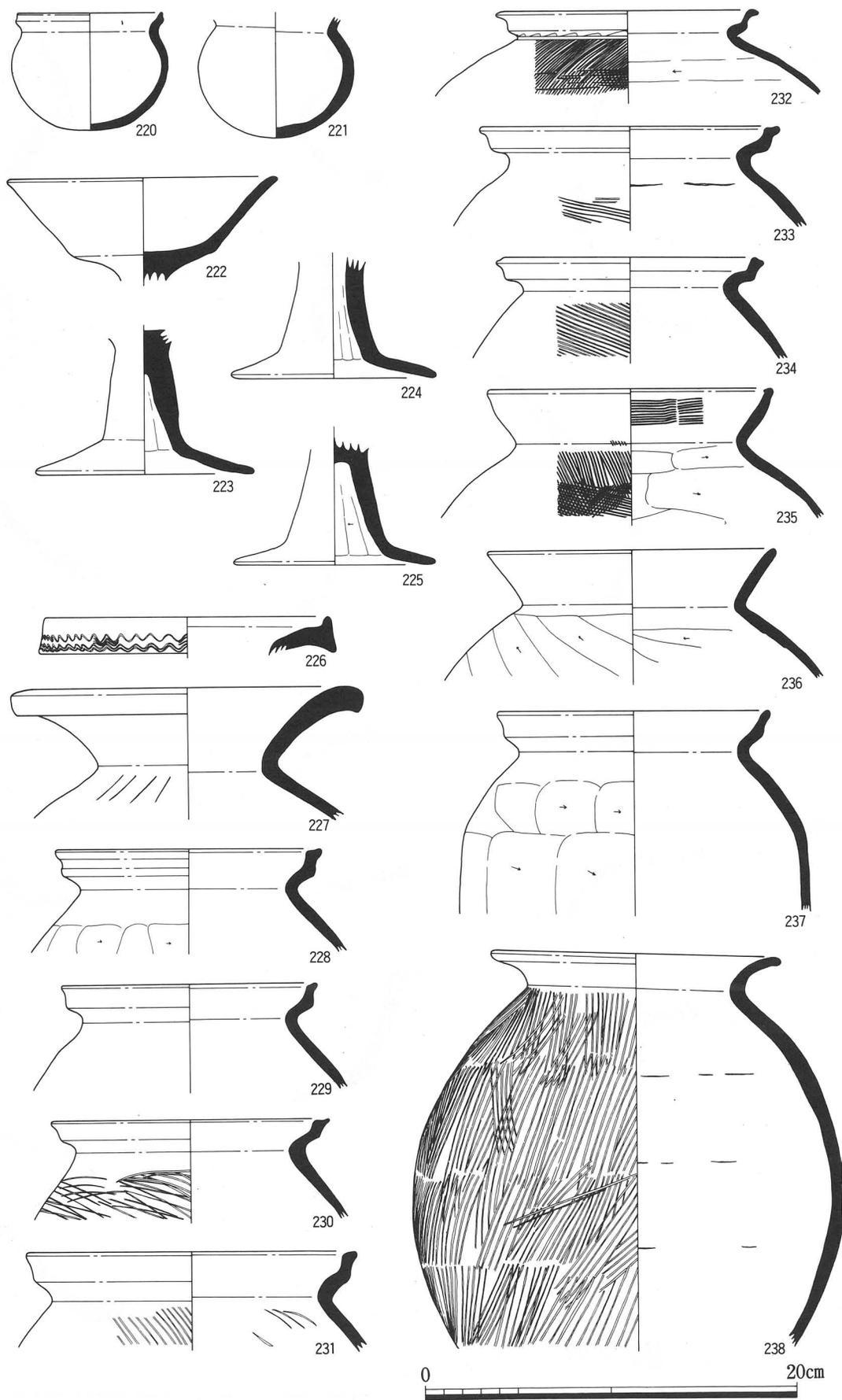
SD5



SH1

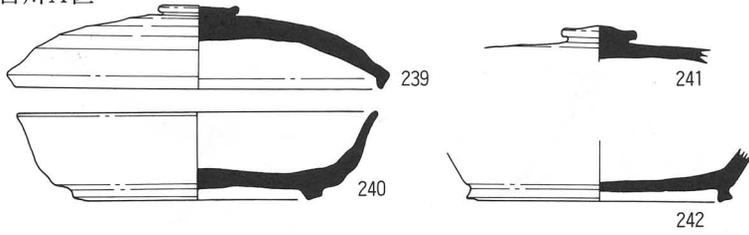


第57图 古川B区 SD4・SD5・SD6・SH1 出土土器

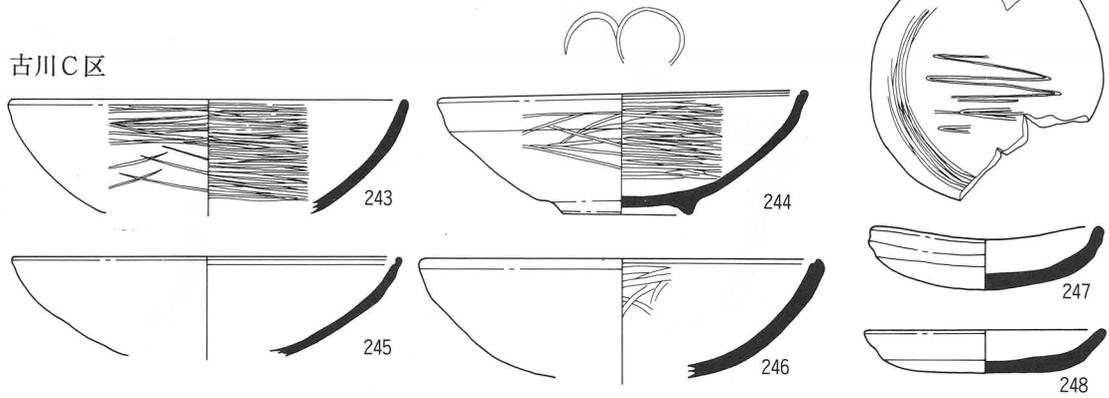


第58図 古川C区 SD11 出土土器

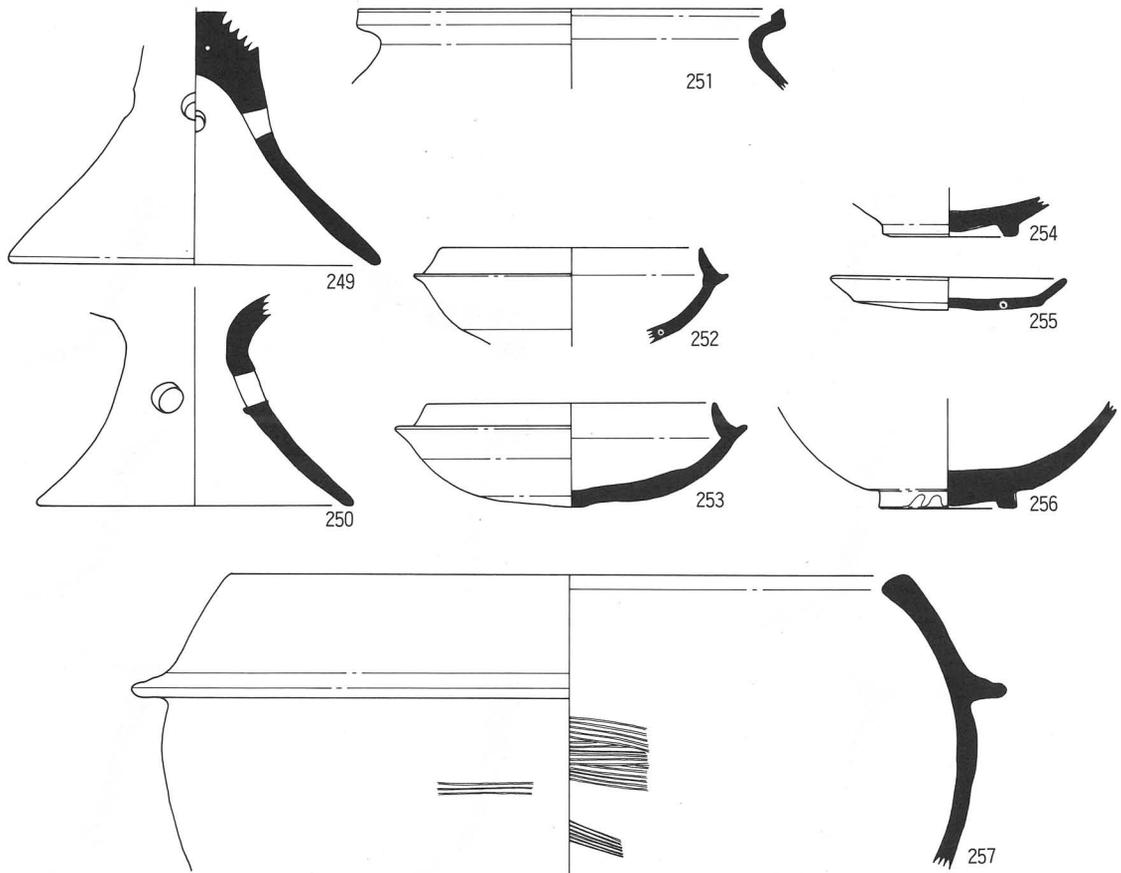
古川A区



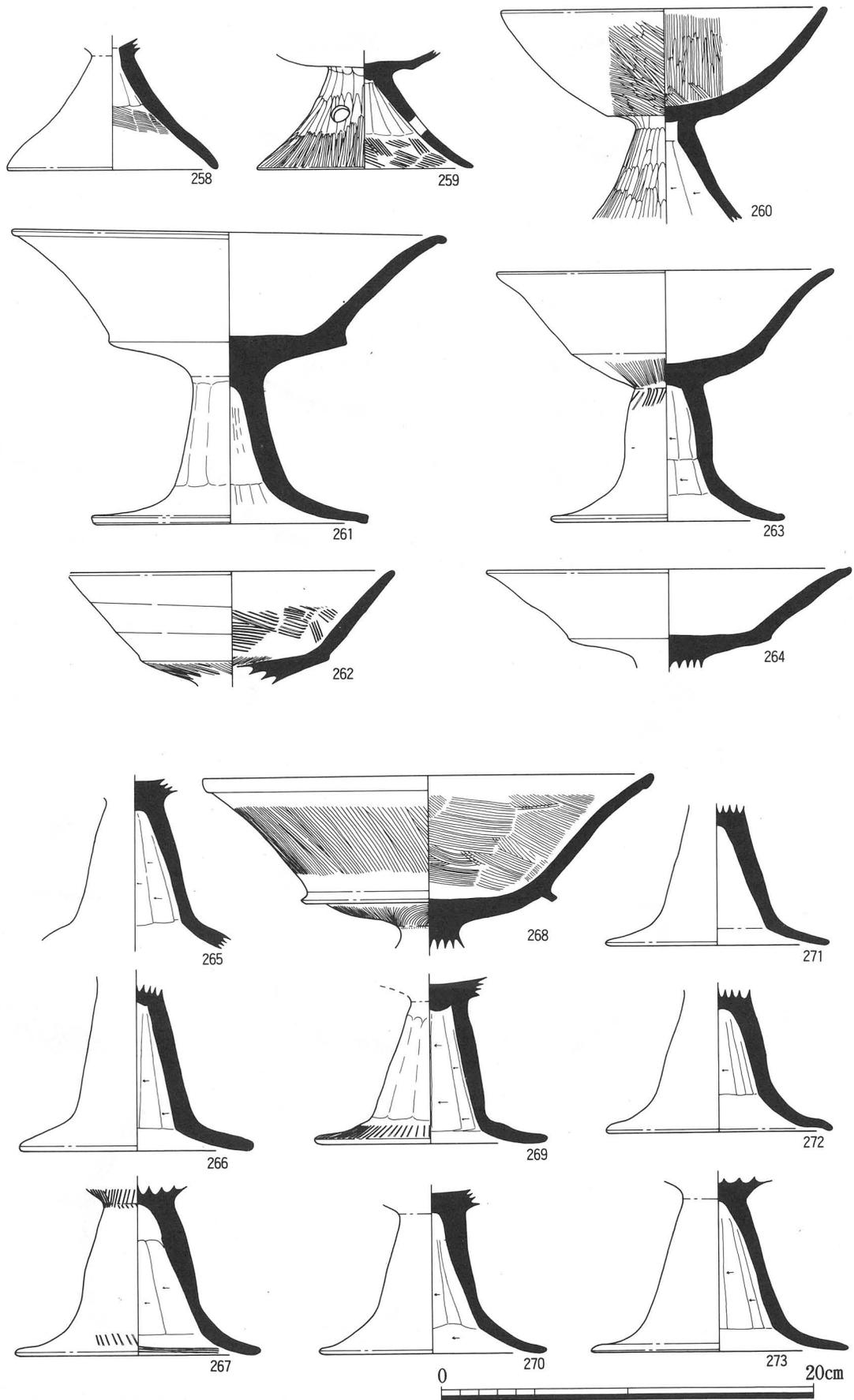
古川C区



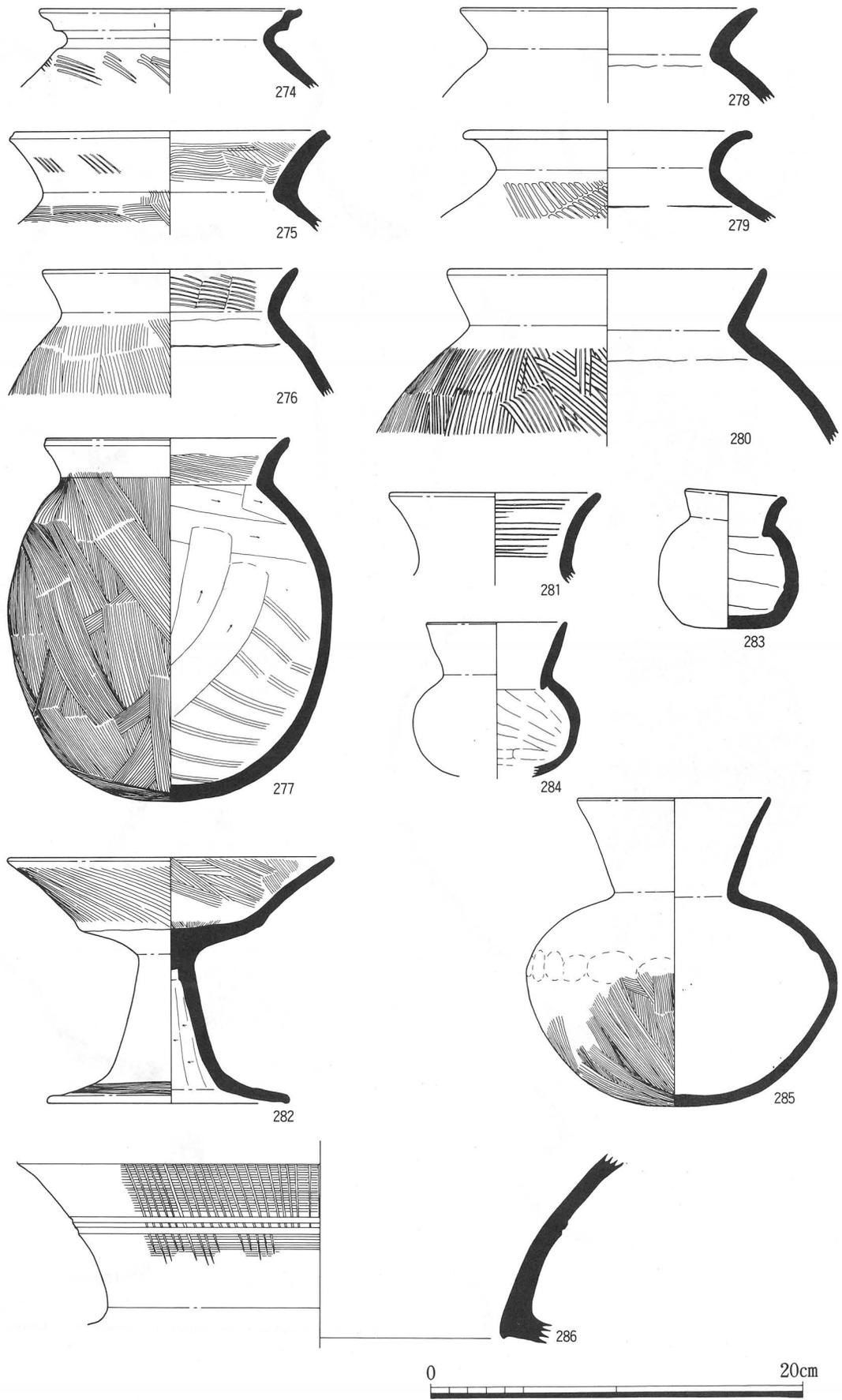
古川D区



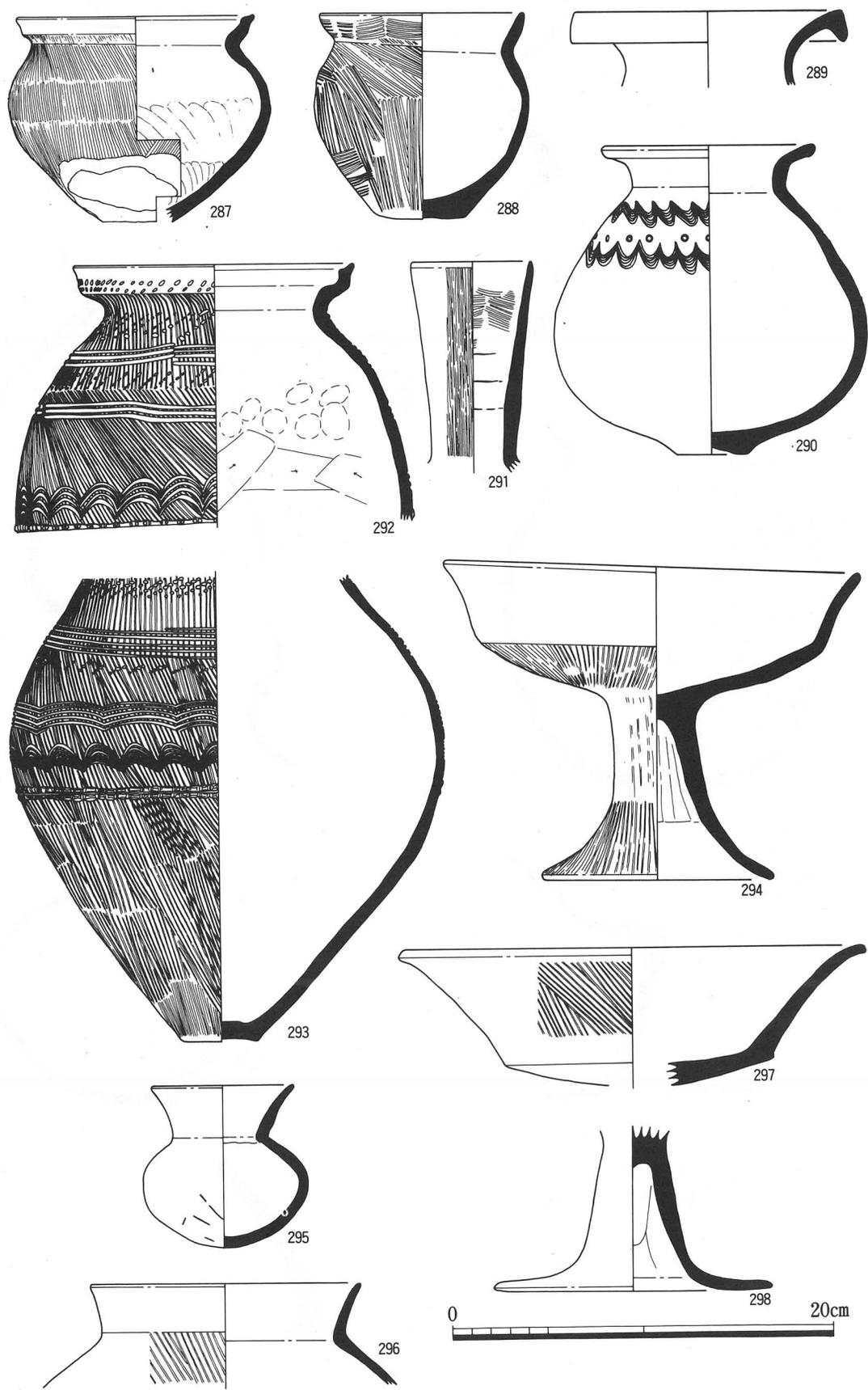
第59図 古川A区・C区・D区 出土土器



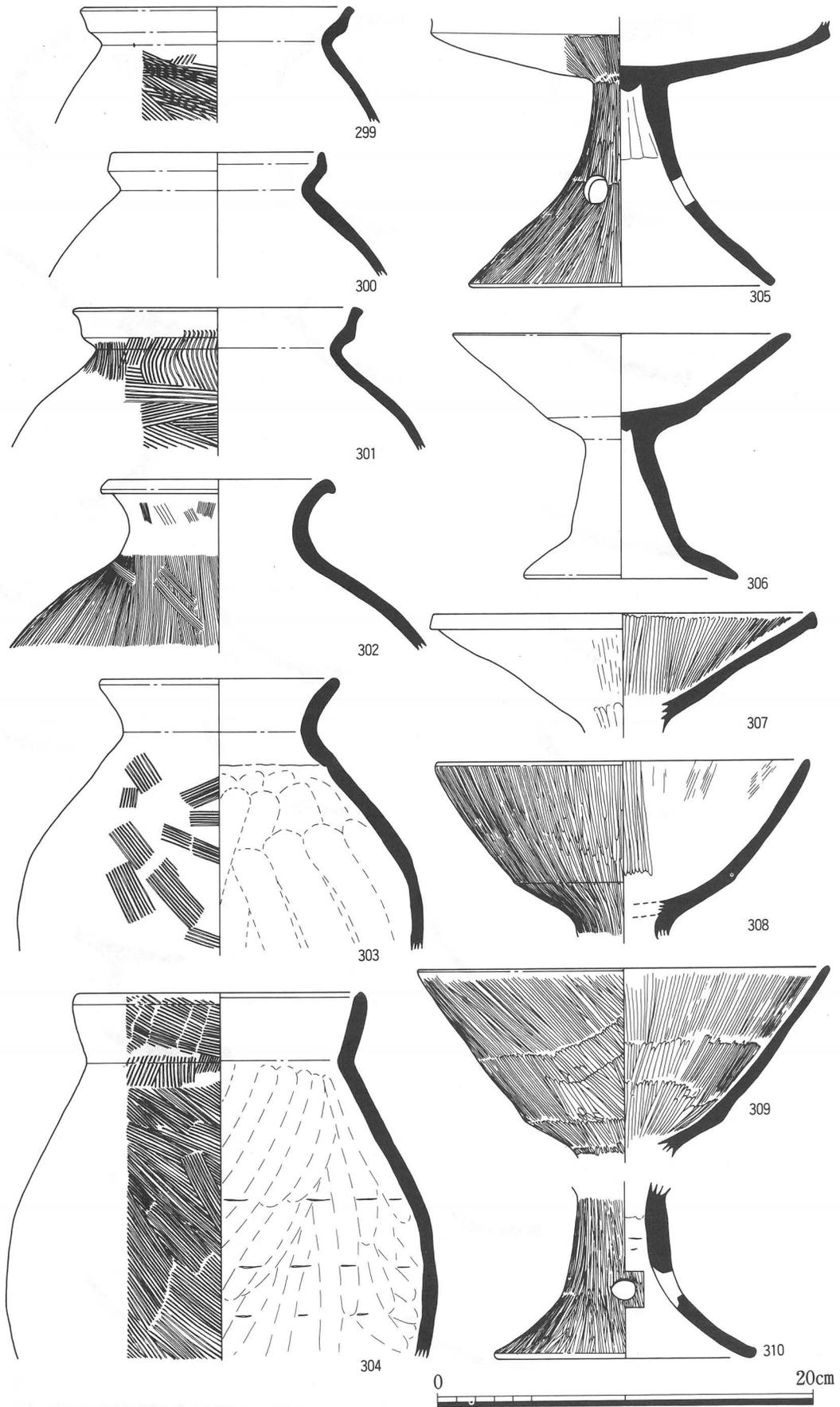
第60图 38号排水路区 S D 14 出土土器(1)



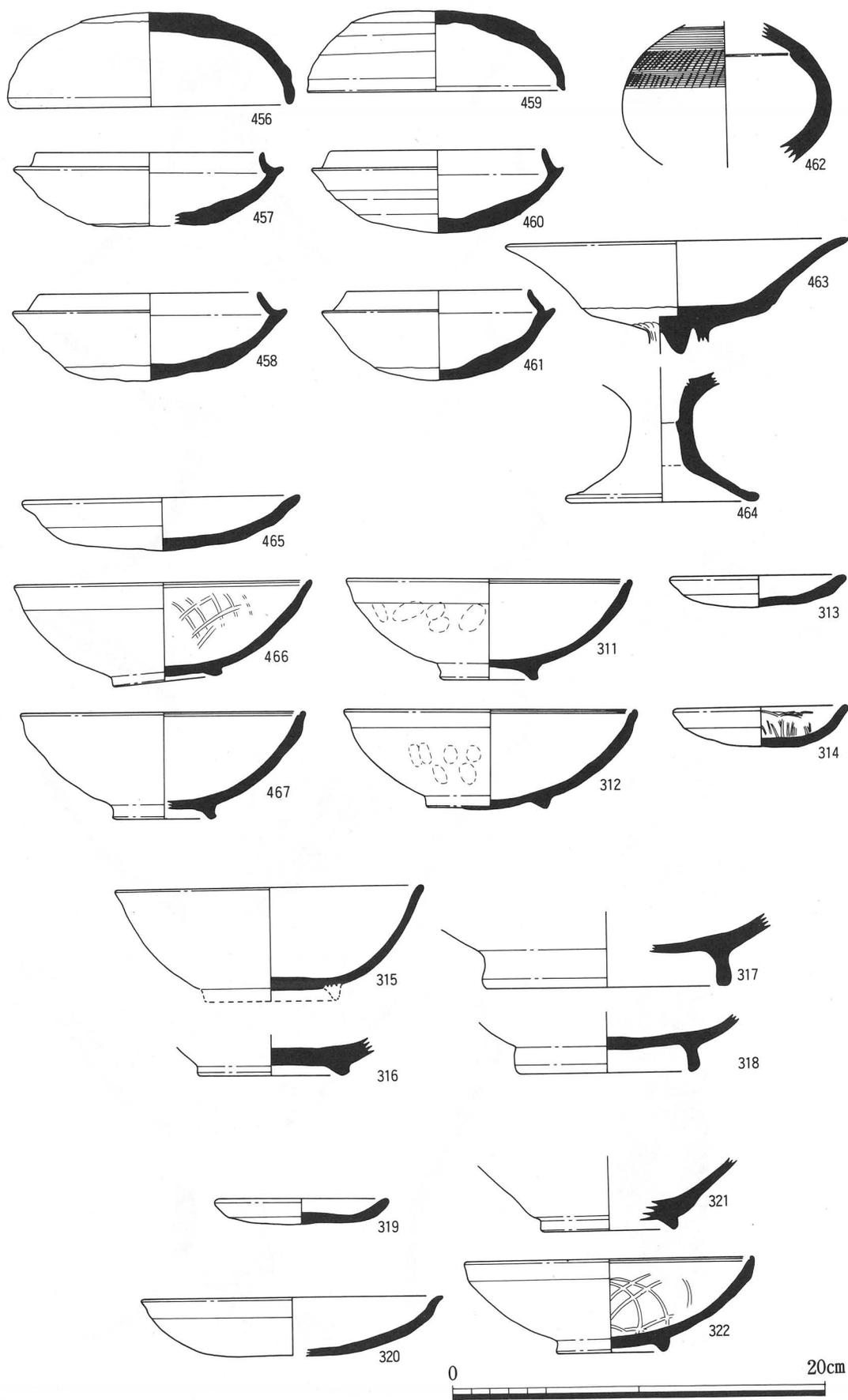
第61图 38号排水路区 S D14 出土土器(2)



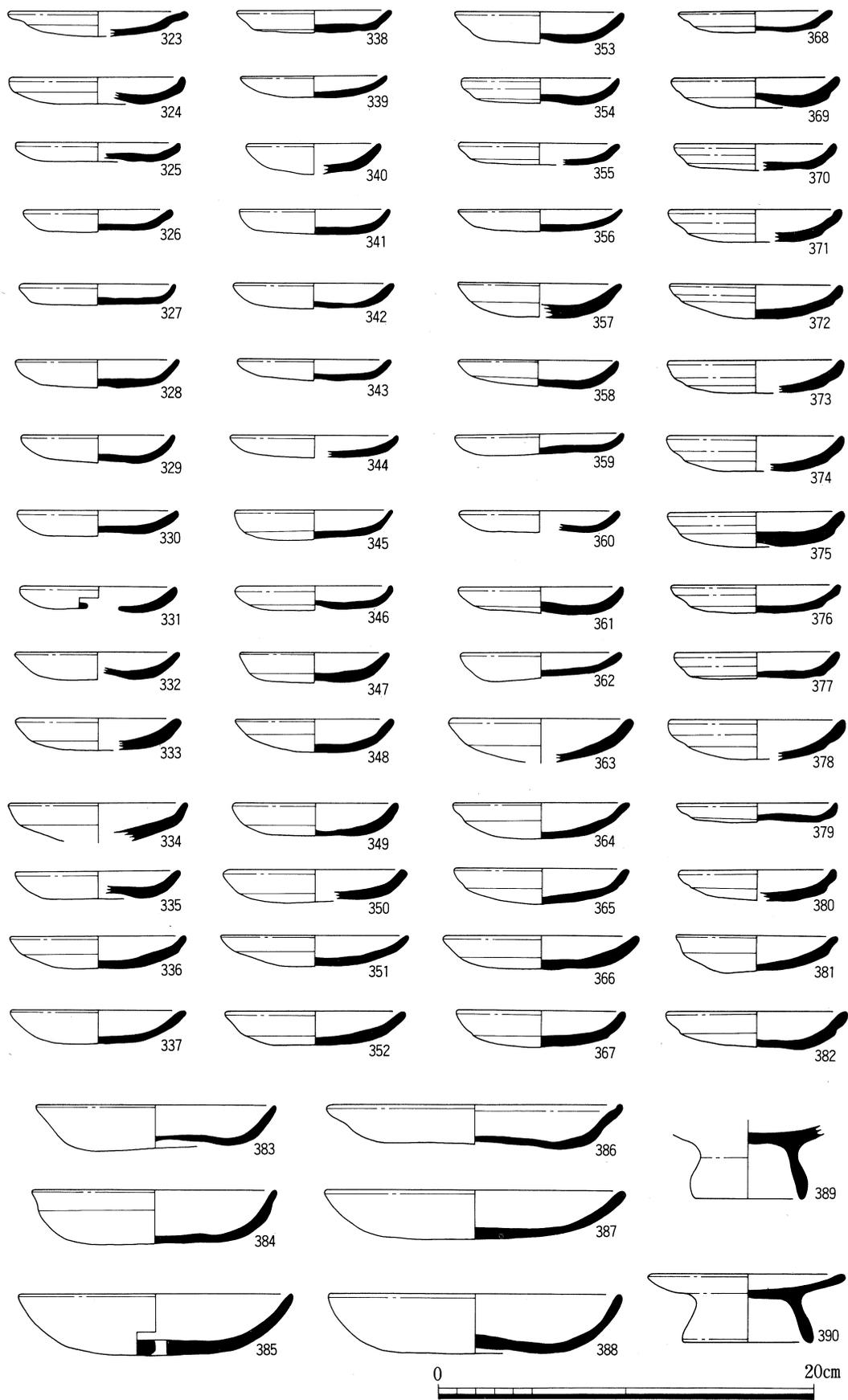
第62图 29号道路区 SD7·SD8·SD10 出土土器



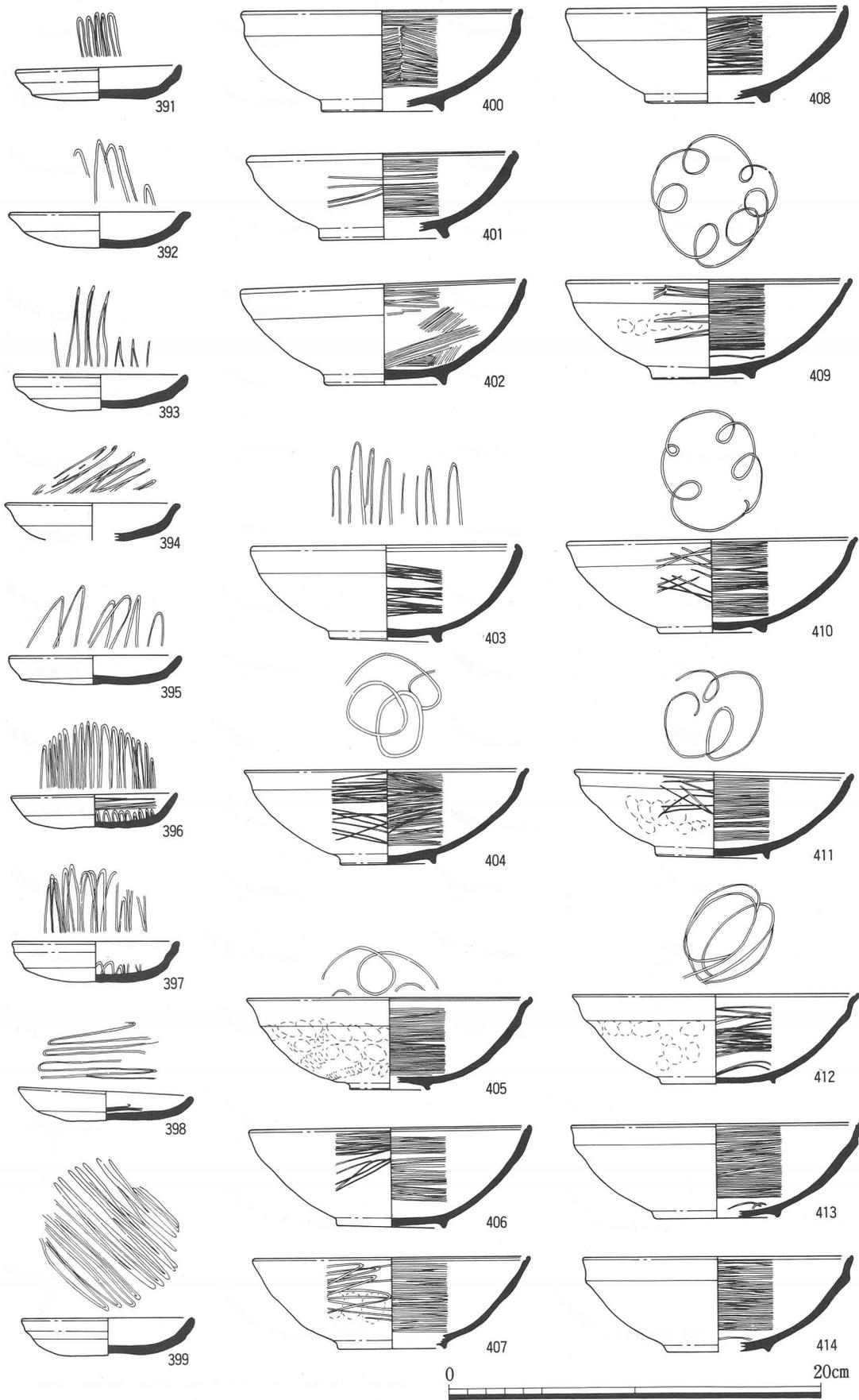
第63图 29号道路区 S D 8 出土土器



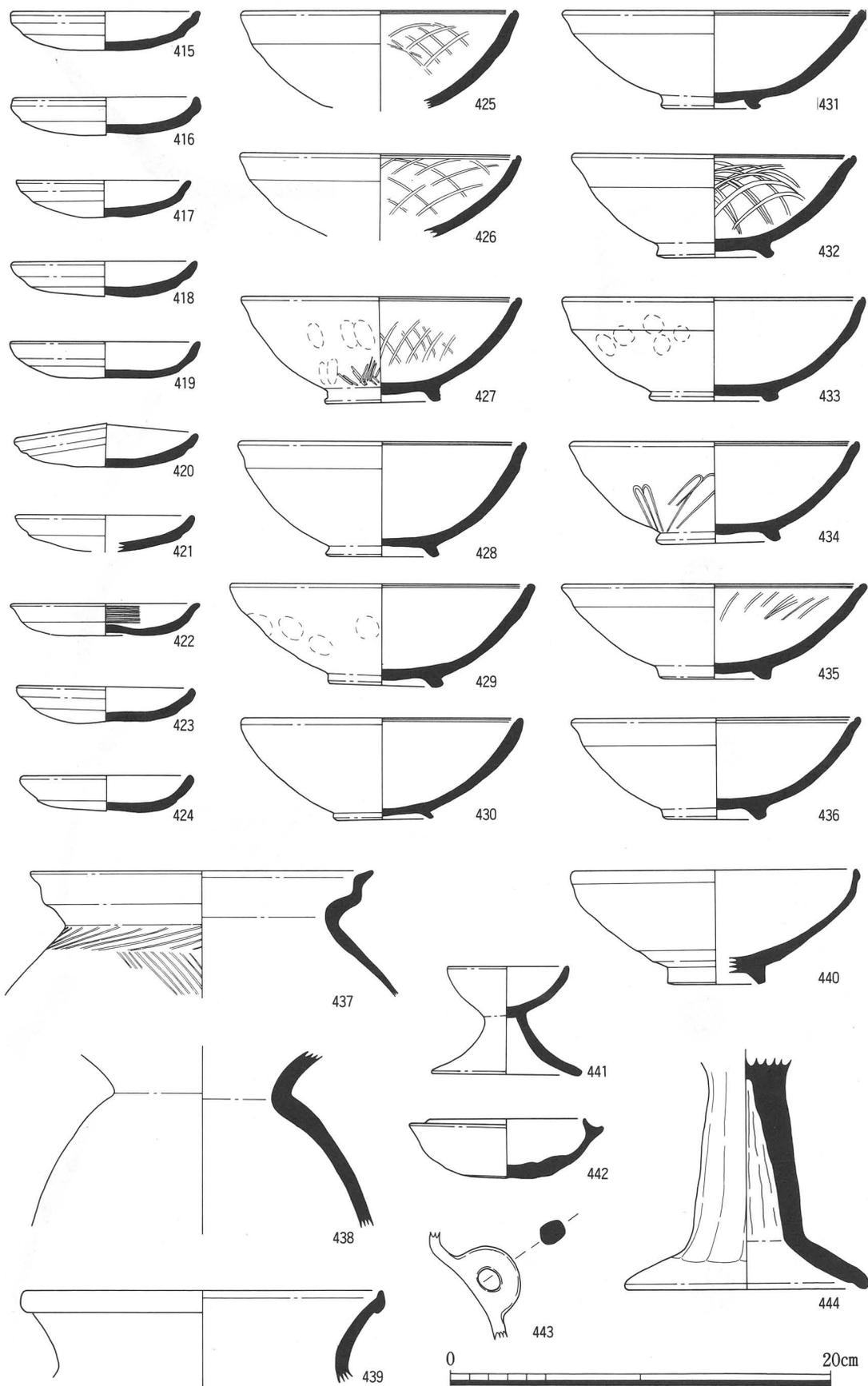
第64图 38号排水路区·29号道路区 出土土器



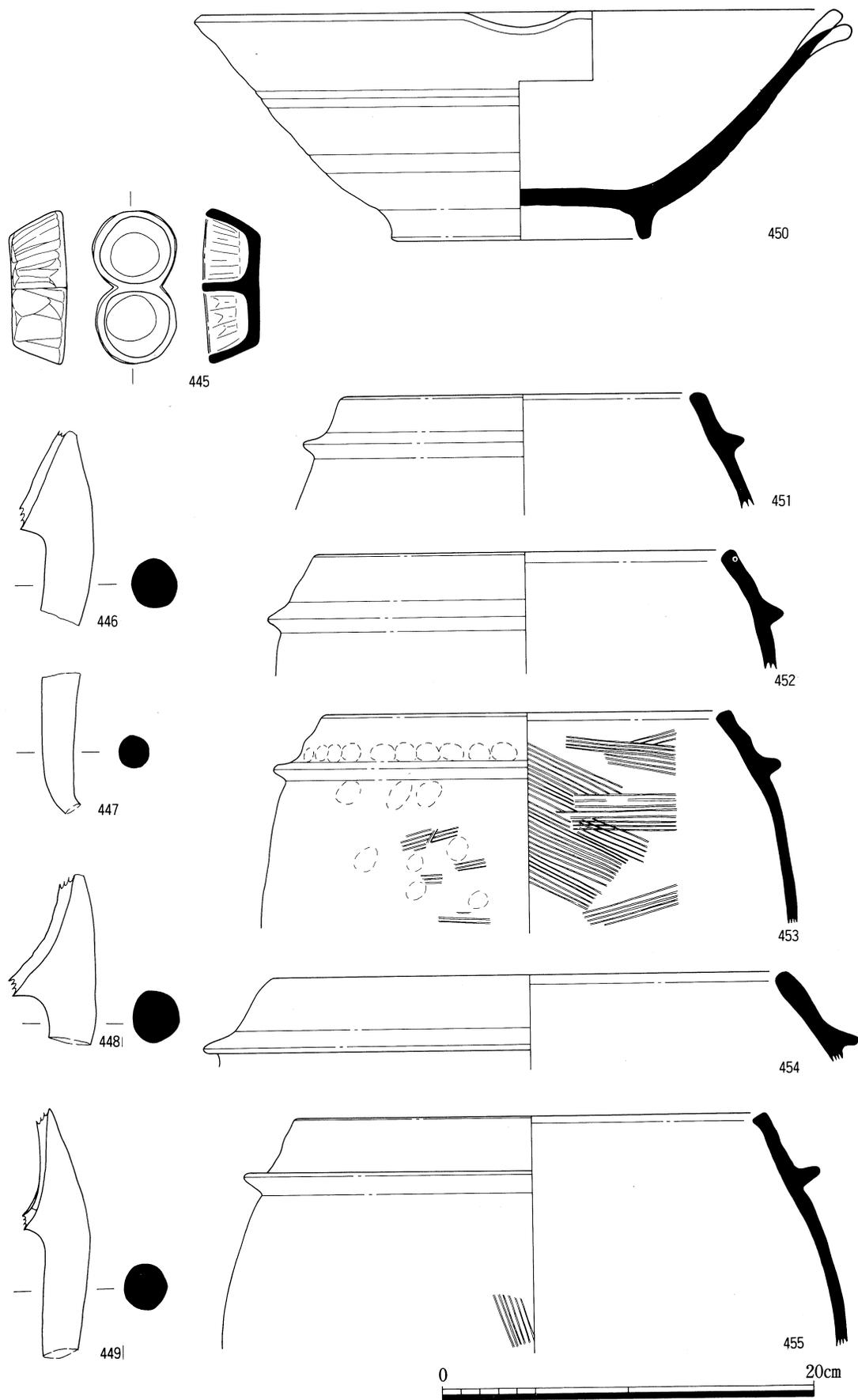
第65图 46号排水路区 出土土器(1)



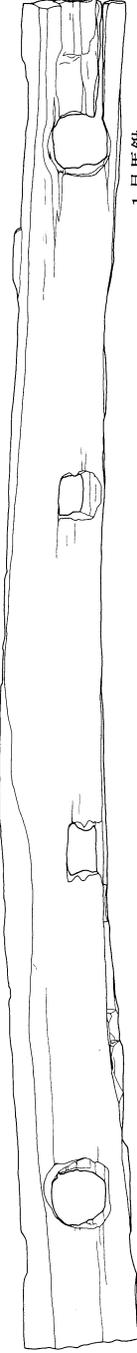
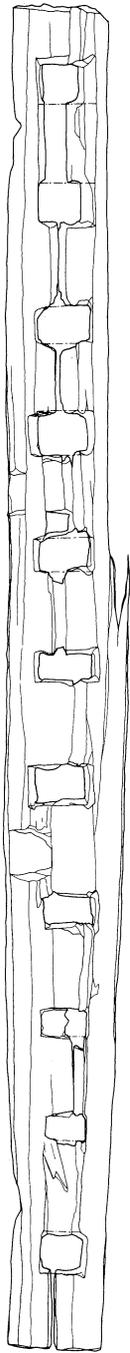
第66图 46号排水路区 出土土器(2)



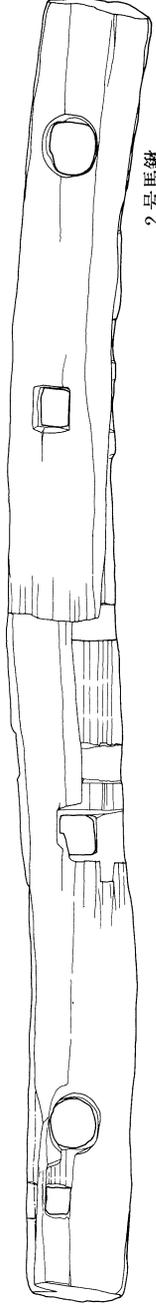
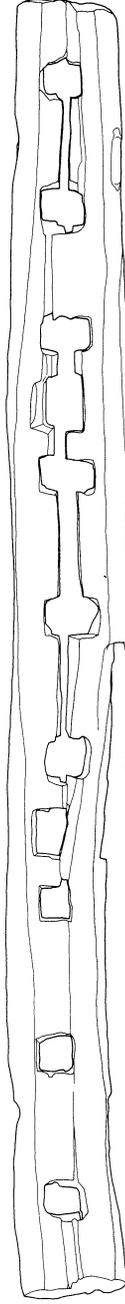
第67图 46号排水路区 出土土器(3)



第68图 46号排水路区 出土土器(4)

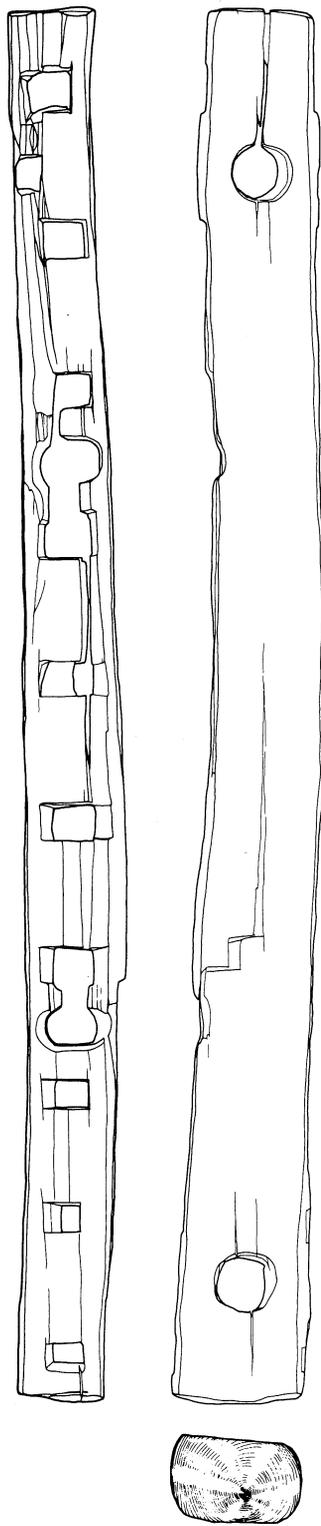


1号馬欏



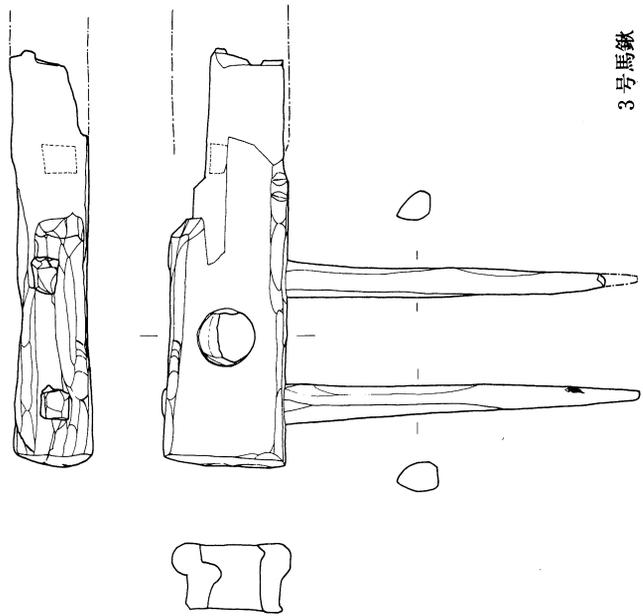
2号馬欏

第69図 堂田遺跡 1号馬欏・2号馬欏



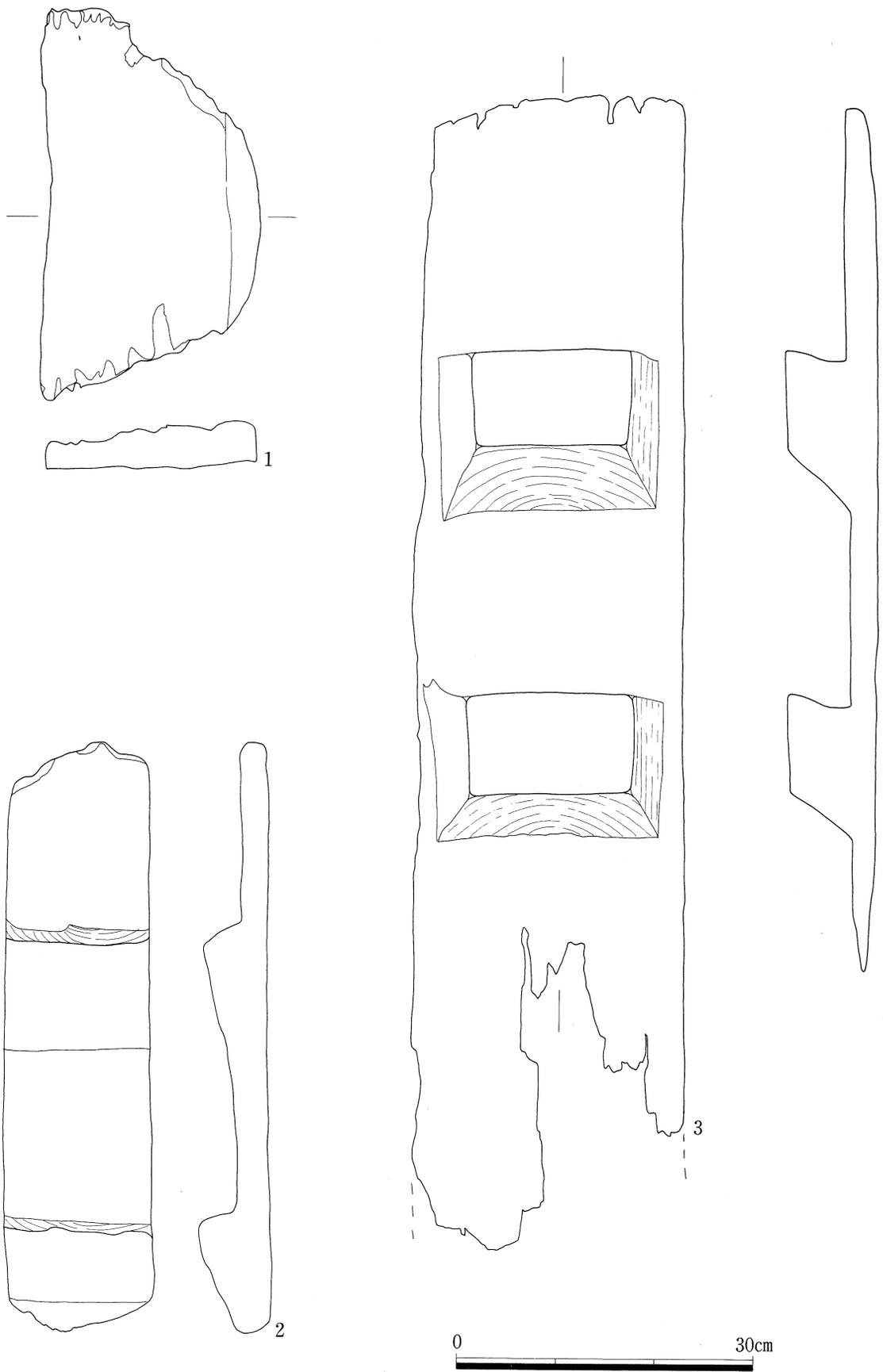
4号馬鍬

0 30cm

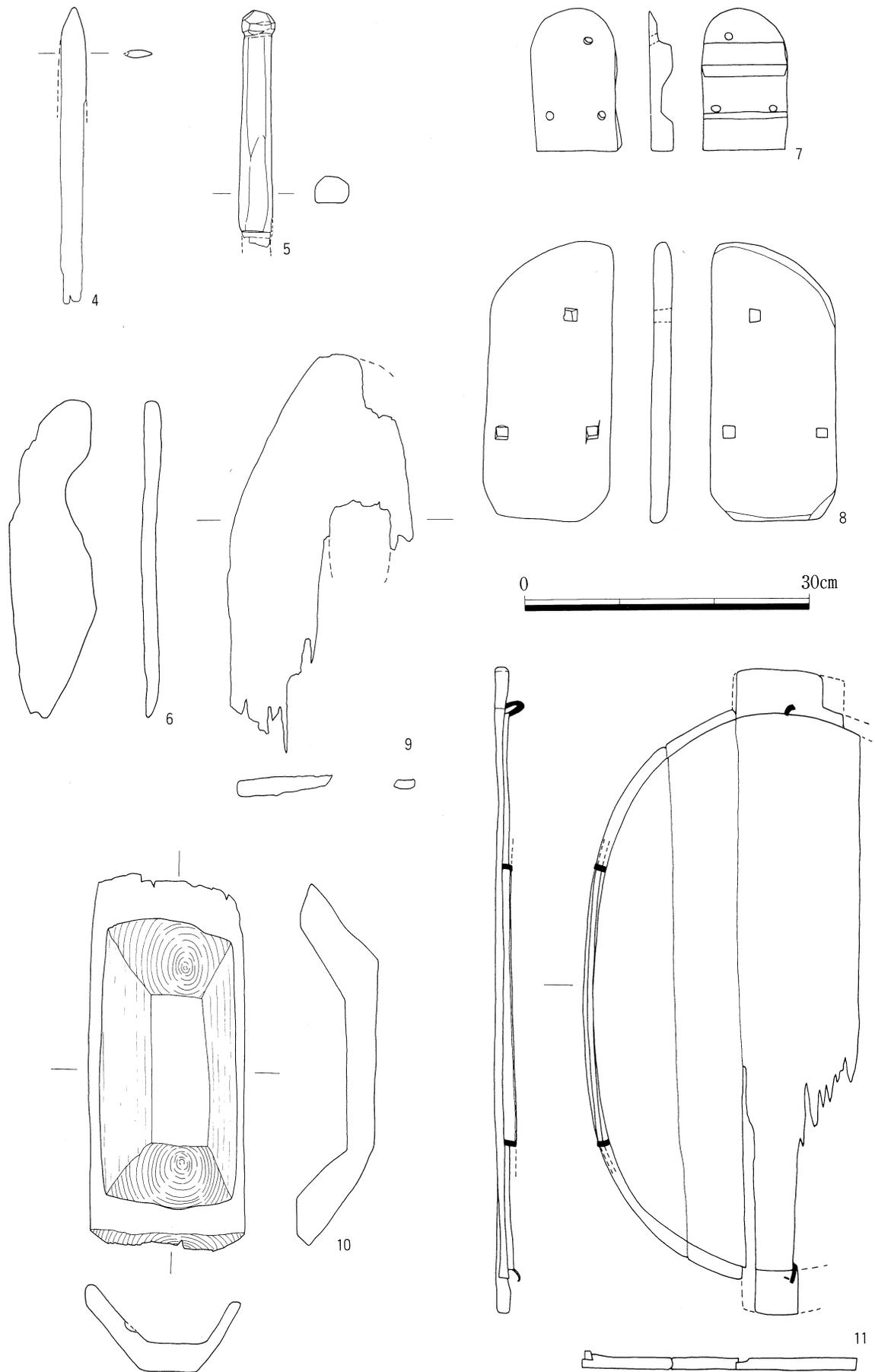


3号馬鍬

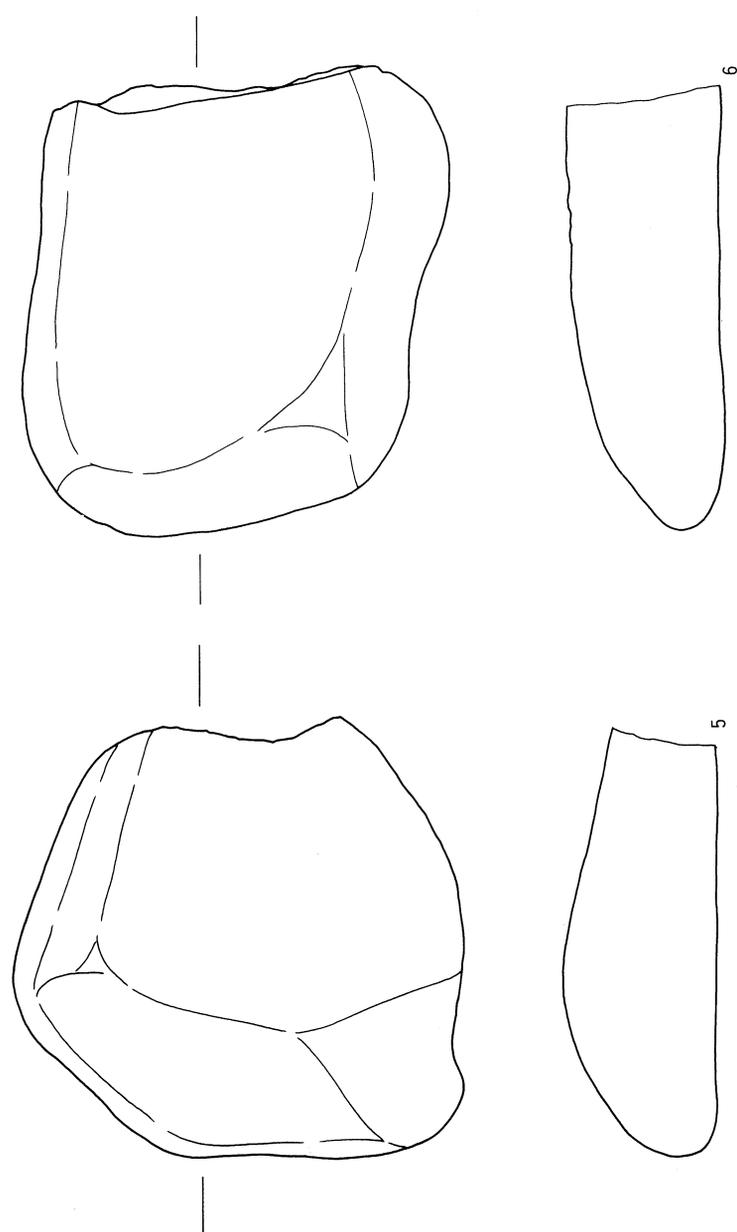
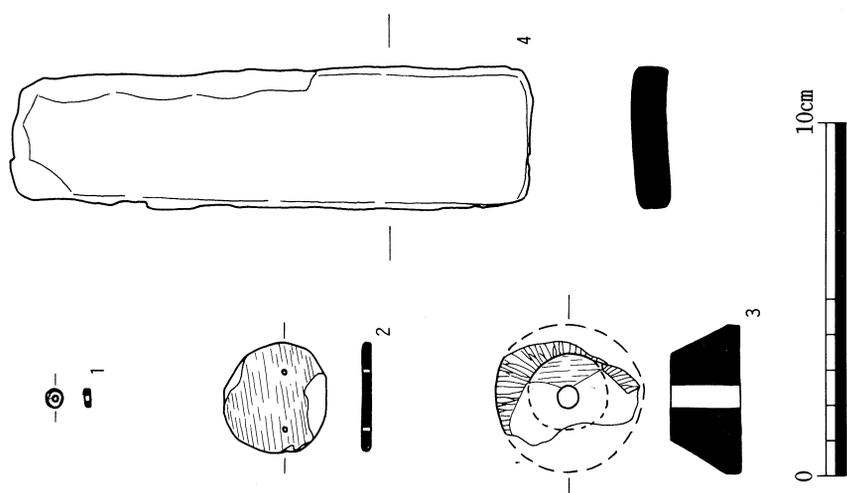
第70図 堂田遺跡 3号馬鍬・4号馬鍬



第71図 古川B区 SD1・SD5 出土土器



第72図 古川B区 SD2他 出土土器



第73図 堂田遺跡 出土石製品・鉄製品

5. まとめ

今回の調査では、弥生時代後期から、鎌倉時代前期までの遺物・遺構を検出した。各調査区で検出した遺構を、時代毎にまとめると以下のとおりである。

古川A区：古墳時代中期～後期の建物1棟(SB3)、古墳時代中期の溝1条(SD3)、平安時代末期～鎌倉時代前期の掘立柱2棟(SB1・2)

古川B・C区：古墳時代前期～後期の自然流路6条(SD1・2・4・5・6・11)、古墳時代中期の竪穴住居1棟(SH1)、掘立柱建物1棟(SB1)

古川D区：弥生時代後期～鎌倉時代の溝20条以上、竪穴住居1棟(SH11)、鎌倉時代前期の掘立柱建物3棟(SB9・10・11)

38号排水路区：古墳時代中期～後期の竪穴住居1棟(SH2)、掘立柱建物3棟(SB13・15・16)、溝3条(SD13・14・15)以上、平安時代末期の掘立柱建物4棟(SB12・14・16・20)、土壇1基(SK10)、時期不明の掘立柱建物3棟(SB18・19・21)

29号道路区：弥生時代後期～古墳時代中期の自然流路4条(SD7・8・9・10)、平安時代末期～鎌倉時代前期の掘立柱建物4棟(SB4・5・6・7)

46号排水路区：弥生時代後期の竪穴住居2棟(SH9・10)、古墳時代後期の竪穴住居3棟(SH6・7・8)、掘立柱建物1棟(SB32)、平安時代末期～鎌倉時代前期の掘立柱建物10棟(SB22～31)以上、溝5条(SD16～20)、土壇8基(SK1～8)

この他、同時に調査した国営日野川土地改良事業にかかる調査区からは、弥生時代中期～古墳時代中期の自然流路2条、弥生時代後期の竪穴住居1棟、古墳時代中期の竪穴住居2棟、平安時代末期の掘立柱建物1棟が検出された。調査区は、46号排水路区の南接部、東西200m、幅10m程の範囲である。

さらに、46号排水路の南半部の調査(蒲生町教育委員会の調査)では、弥生時代の方形周溝墓、竪穴住居、平安時代末期～鎌倉時代前期の掘立柱建物群を検出している。

昭和62年度にも、町教育委員会の調査区の南接部分で調査がなされており、報告書が刊行されている。それによると、T1～4を中心に、方形周溝墓2基、古墳時代中期の竪穴住居13棟、溝1条を検出している。

以上の調査成果から、堂田遺跡における時代別変遷を概観してみる。

縄文時代：石匙2点が採集されている。しかし、今回の調査トレンチ内からは、縄文時代に属する遺物・遺構は見い出せなかった。麻生遺跡では、現地表下80m前後で、縄文時代晩期の遺構面を検出したが、土砂の堆積作用が著しい本遺跡の場合、予想外に深く遺構が眠っている可能性は否定できない。

弥生時代：市子遺跡で中期の方形周溝墓群を検出しているのに対し、本遺跡では、後期の竪穴住居群を主体とした集落の一部を検出した。集落規模に関しては明確にし得ないが、現在の市子

松井の南から、市子沖にかけての古川左岸に、十数棟が1グループとして、数グループのまとまりが、延長約1.5kmにわたり分布しているのではないかと予想している。

古墳時代：自然流路（SD11）などを中心に、前期の遺物が出土していることから、弥生時代以降も、集落が継続して営まれていたと考えられる。しかし、弥生時代後期の遺物・遺構の分布範囲に較べて、著しくその規模を縮小している。集落規模が爆発的な勢いで拡大するのは、5世紀後半の須恵器出現期以降である。この時期の遺物・遺構は、今回の調査トレンチ全域から検出しており、遺物の絶対量も、他の時代とは桁はずれに多い。このような集落規模の拡大の背景には、人口増加を可能にした水田の可耕地面積の拡大があったと考えられる。それには、当然のことながら、従来の農術技術・社会体制では不可能であった土地でも、新たな開発を行なうことができる農術技術・土木技術の導入があった筈である。それまでの農業技術が、湿地を中心とした点的な開発であったとするならば、この時代の開発は、自然流路を統制して、半湿地や乾地を開発可能にした面的な開発であったと考えられる。本遺跡では、5世紀後半から6世紀後半の約100年間で埋没する自然流路が多く、この間に、治水事業が成功しているとみられる。また、これらの自然流路内から出土した多くの遺物とともに、4点の木製馬鍬が出土した。馬鍬は、従来の農具にはなかった蓄力科用の農具であり、当時としては、U字形鋤先とともに、最新の農業技術を示すものである。つまり、乾田を鋤や鍬で耕起した後、代掻に馬鍬を使用したのであろう。今回の調査では、古墳時代中期の水田跡を検出することができなかつたため、1枚の水田がどの程度の大きさであるか不明である。しかしながら、代掻に馬鍬を使用する必要がある程の面積をもった水田開発があったことは、充分予想される。また、代掻をするのは、乾田であったことを証明するとともに、直播きではなく、田植による農法を取り入れたからであろう。このように、全国的にみても早い時期に馬鍬を使用する農業技術があったことは、堂田遺跡の開発契機を考えると興味深い。蒲生町周辺では、同時期に、近江でも最大規模の首長墳墓群である木村古墳群が形成されることから、こうした先進技術を持った集団の大規模な水田開発との関係が、今後、検討されるべきである。馬鍬とともに、同時期の遺物として注目されるのは、SD2から一括出土した手づくね土器約100点と、土師器高杯・壺・甕、滑石製白玉である。その出土状況は、ほぼ現位置を保っており、一部の手づくね土器には火を受けた痕跡があった。出土位置は、自然流路の岸近くの川の底で、岸には祭場と考えられる杭が残存していた。当時の人々が、自然神とりわけ水の神に対して深い信仰を持っていたことは、文献史料、考古資料が証明している。今回検出したこれらの遺物は、こうした信仰形態を生々しく明示しているといえよう。

律令期：若干の遺物を出土するが、集落が立地した痕跡は見い出せなかつた。東方約1.5kmの日野丘陵裾部に立地する七ツ塚遺跡や杉ノ木遺跡周辺に、同時期の集落がある。

平安時代末期～鎌倉時代前期：蒲生郡条里に規制された屋敷地をもつ掘立柱建物群が、各坪に出現する。大半は、数棟の建物が一単位となり、単時期もしくは一度の建て替えのみで廃絶する。しかし、46号排水路区にみられるように、溝で区画された大規模な建物と、それに付随する建物群からなる広大な屋敷地をもつものもある。これらは、文献史料にみられる市子荘の実態を示す

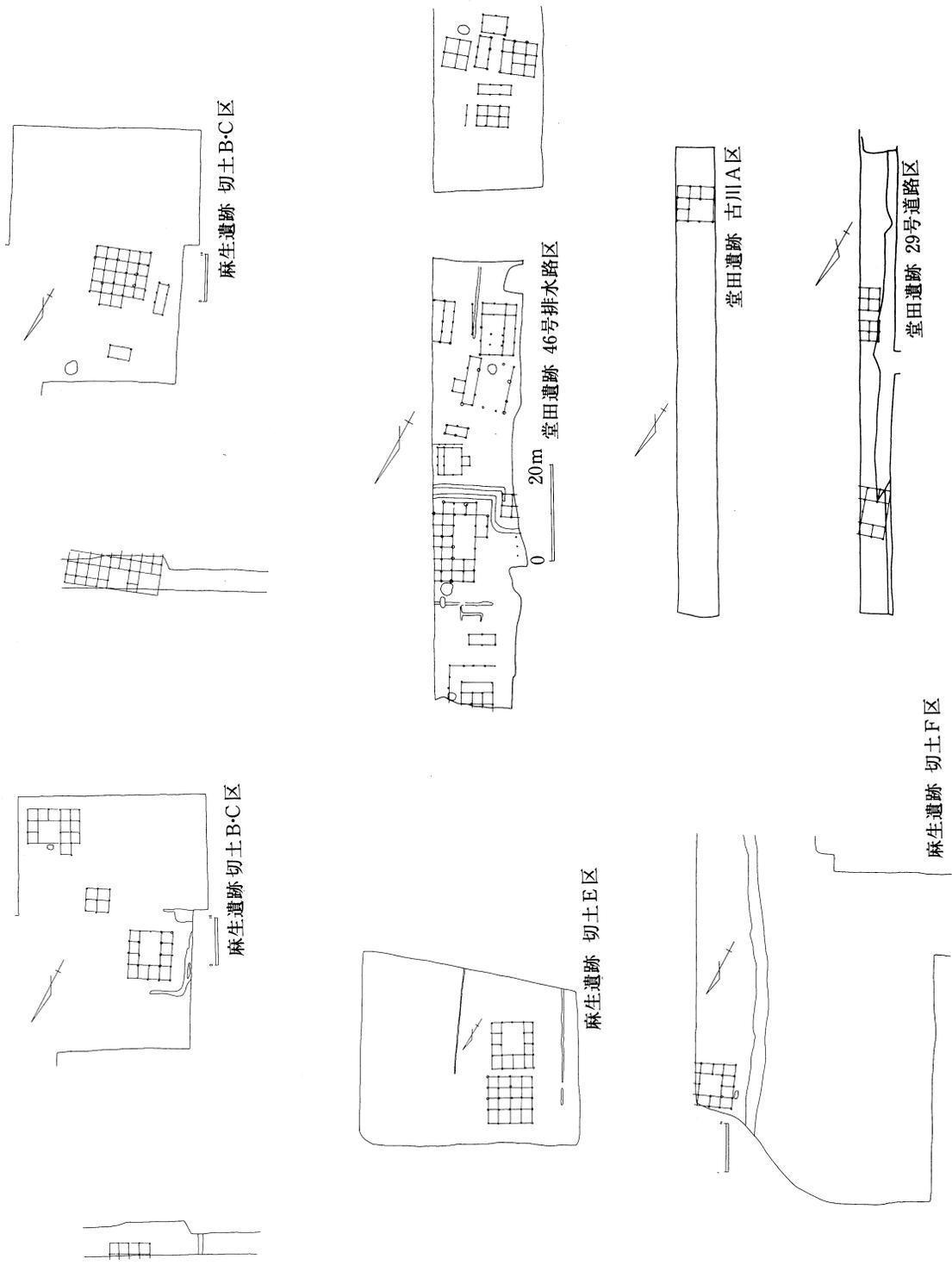
ものと考えられる。つまり、屋敷地の大小、建物の継続性が、そのまま、荘園内における経営基盤の強弱、すなわち、名主層や散田作人層などの階層を示していると考えられる。このような、屋敷地の大小や分布状況は、4 km程上流の麻生遺跡と同様であり、当時の荘園の一般的な景観であるとみられる。また、出土遺物に関しても、麻生遺跡と同じ様相を示している。例えば、46号排水路区からの出土土器についてみれば、器種の判別する13,686点（同一個体とわかるものは1点として数えた）の内訳は、土師器6812点(62%)、黒色土器2211点(20%)、瓦器1727点(16%)、灰釉陶器197点(1.8%)、白磁17点(0.2%)となる。出土遺物の下限は12世紀代に納まるため、麻生遺跡の報告でも推察したように、13世紀以降は、現在の集落と同じ場所で集村化していったと考えられる。

最後になりましたが、今回の調査において多大な協力を得た蒲生町教育委員会をはじめとする関係機関、調査参加者の方々に厚くお礼申し上げます。

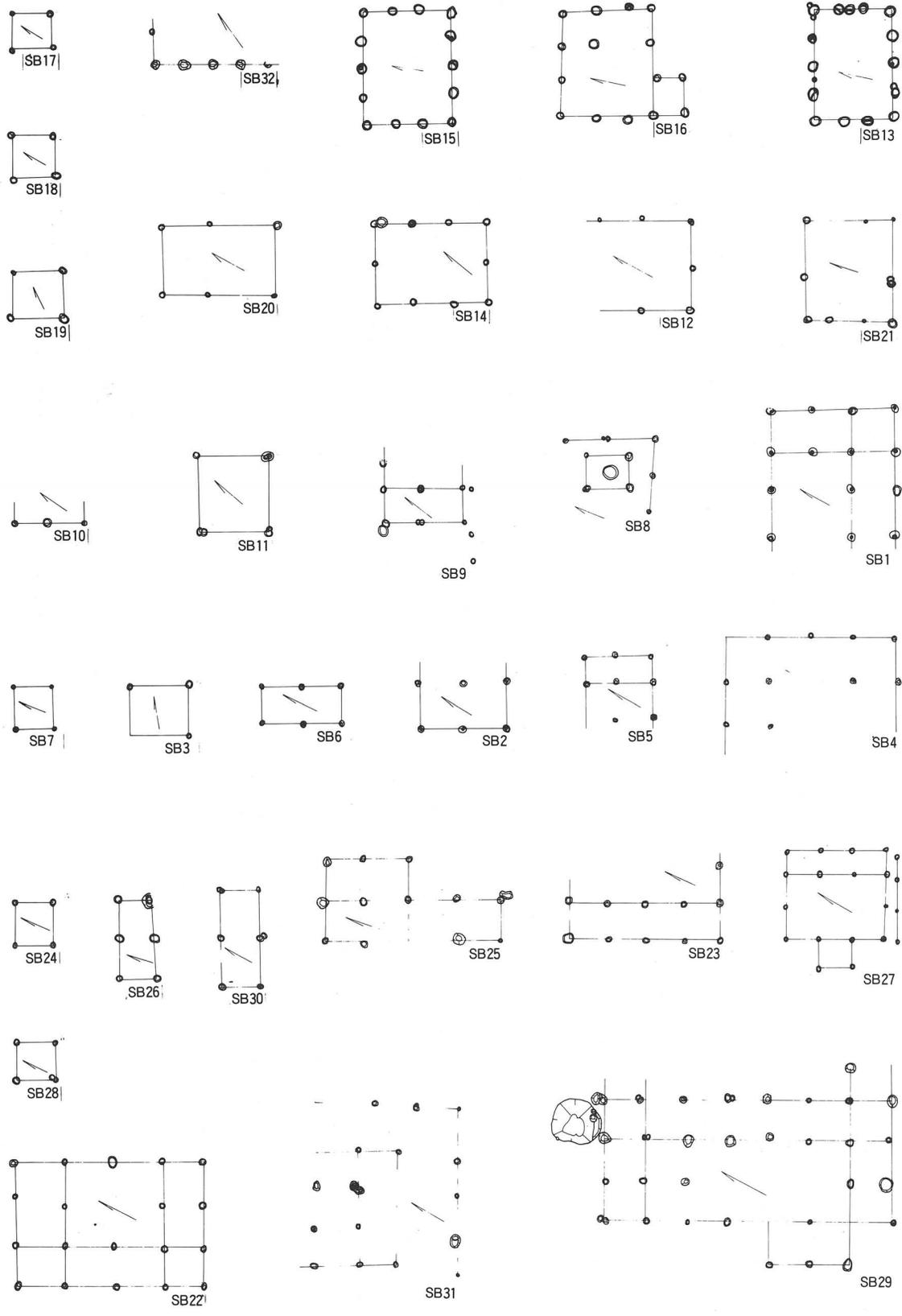
〈参考〉

馬鋤出土遺跡	(所在地)	(時代)	(出土点数)
1. 伊場遺跡	静岡県	7世紀	6点
2. 上田部遺跡	大阪府	8～9世紀	2点
3. 吉田南遺跡	兵庫県	8～9世紀	1点
4. 山垣遺跡	兵庫県	8～9世紀	1点
5. 太宰府史跡	福岡県	8～9世紀	1点
6. カギ遺跡	福岡県	6世紀	1点
7. 辻井遺跡	兵庫県	6～7世紀	1点
8. 上浅川遺跡	山形県	8世紀	1点
9. 堂田遺跡	滋賀県	5～6世紀	4点

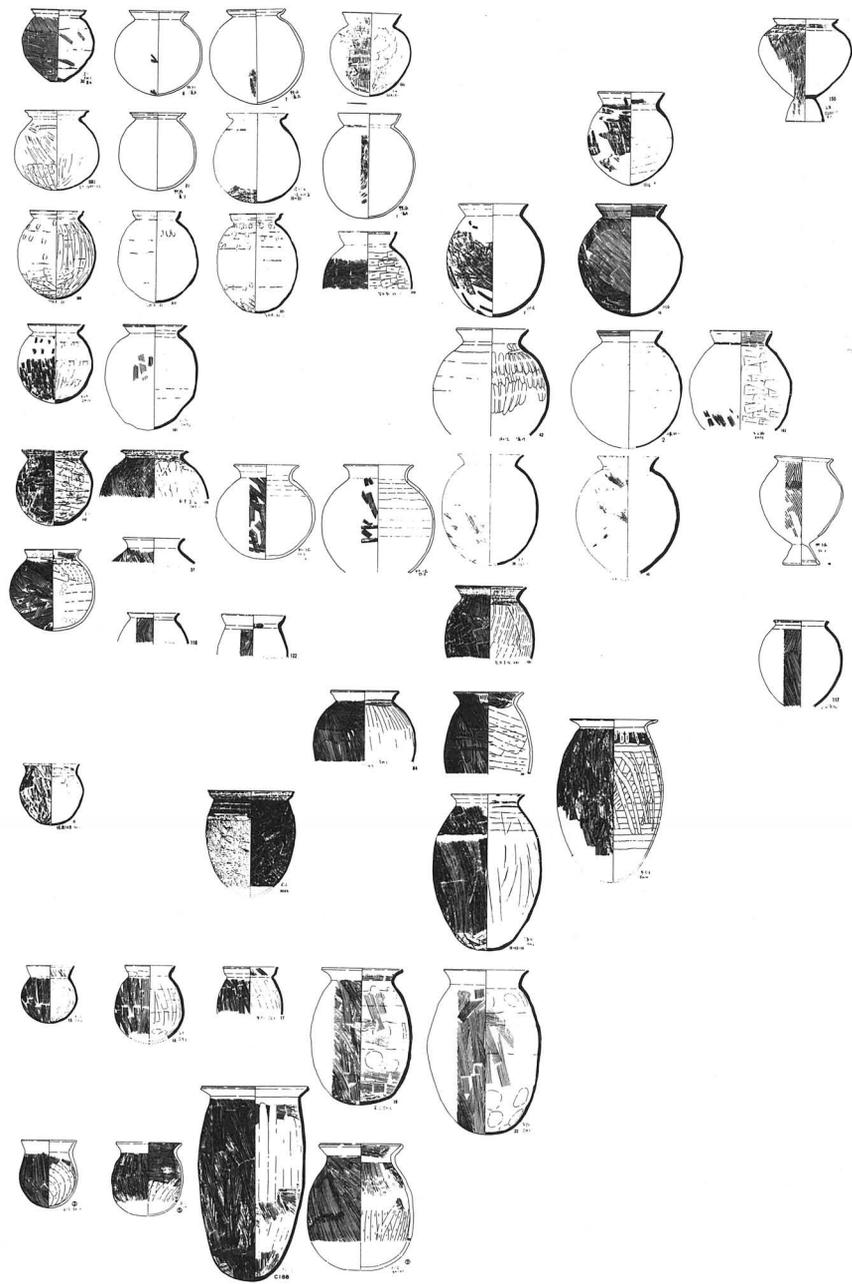
なお、馬鋤に関しては、河野通明氏、田中義明氏、岡田文男氏より御教授頂いた。



第74図 麻生遺跡・堂田遺跡 掘立柱建物配置図 (12世紀)



第75图 堂田遺跡 掘立柱建物集成図



第76図 古墳時代中期～後期の土師器甕（湖東・湖南地方）

版 図

図版一 蒲生町航空写真





調査地山景



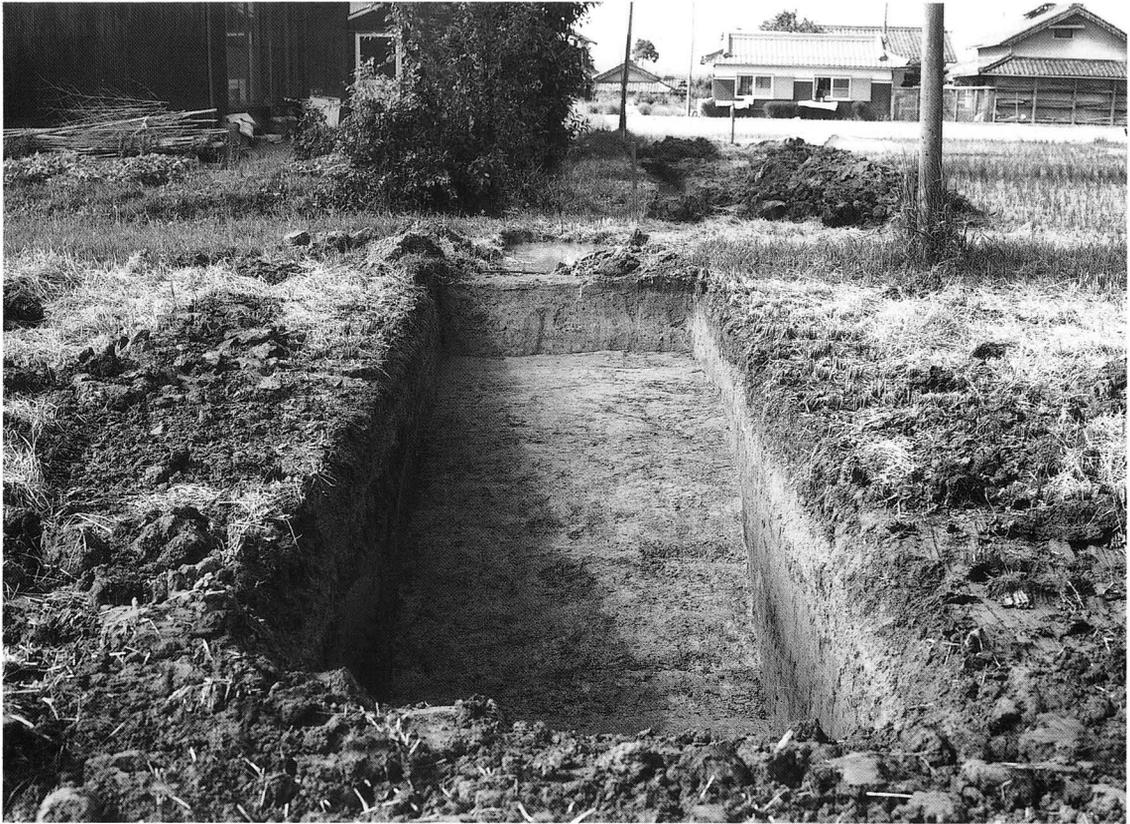
調査前状況



第13トレンチ全景



第16トレンチ全景



第17トレンチ全景



第17トレンチSD12



第20トレンチ全景



第20トレンチS D 13



第20トレンチSD13



第26トレンチSD14・SD15



第20トレンチS D13



遺物出土状況



第25トレンチ S D21



第25トレンチ S D22



第26トレンチ・第25トレンチ



第26トレンチ全景



第26トレンチ



第25トレンチ S D22



第26トレンチ S D22



第26トレンチ S D22



第27トレンチ検出遺構



第28トレンチ検出遺構



第27トレンチ全景



第28トレンチ S D 26



第28トレンチ S D26



第28トレンチ S D26



第28トレンチ全景



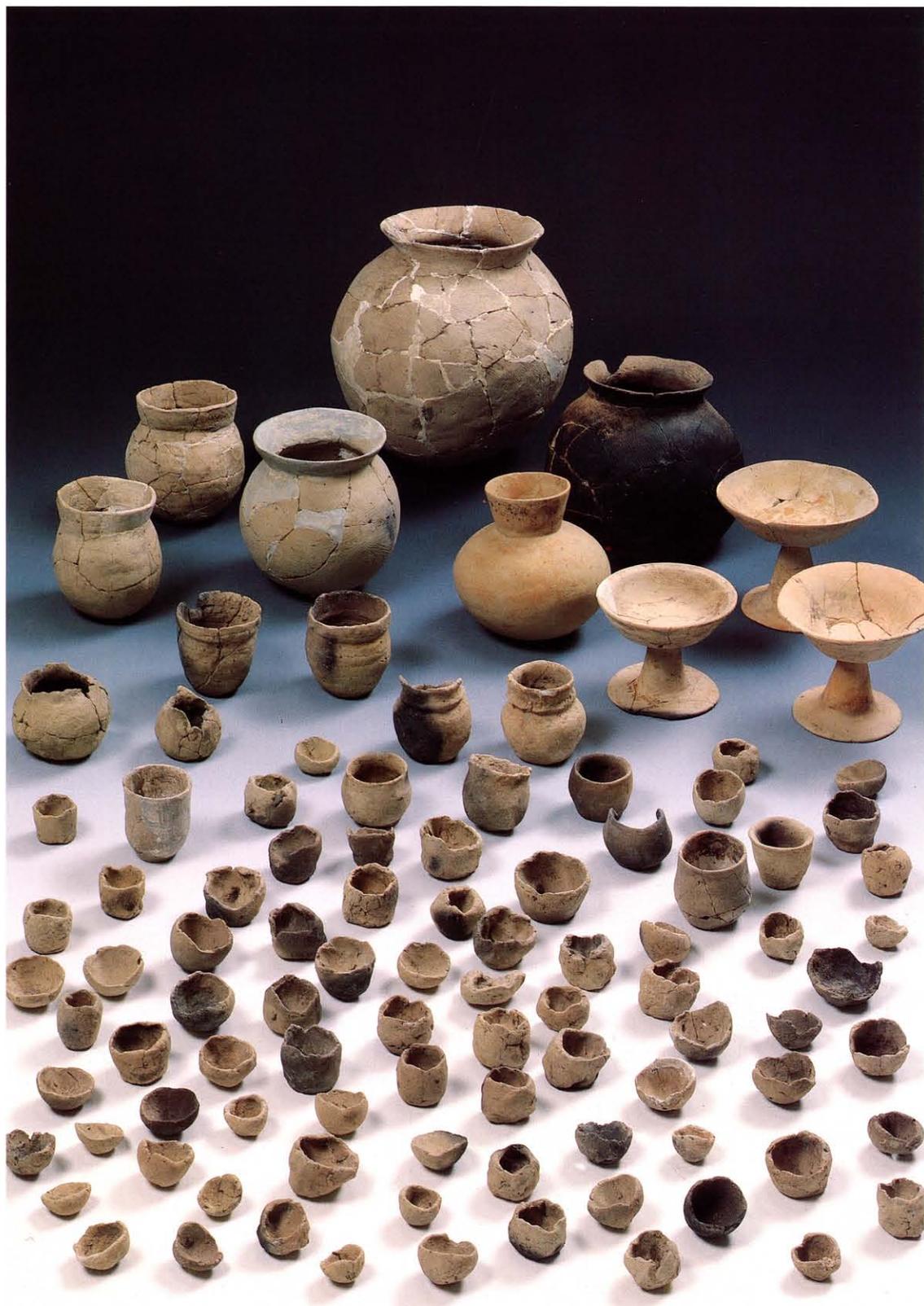
第28トレンチSD26



発掘作業風景



実測風景



S D 2—括出土土器群



古川B区 SD1・SD2・SH1



46号排水路区



38号排水路区



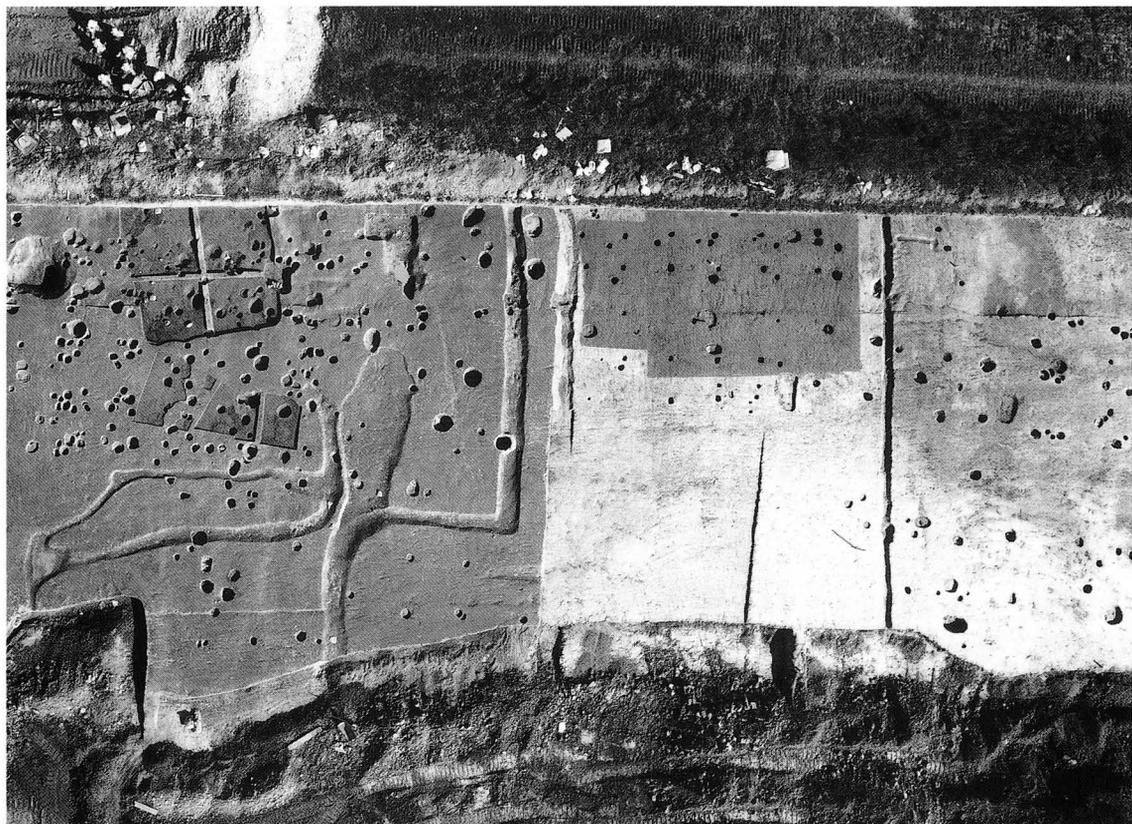
古川D区



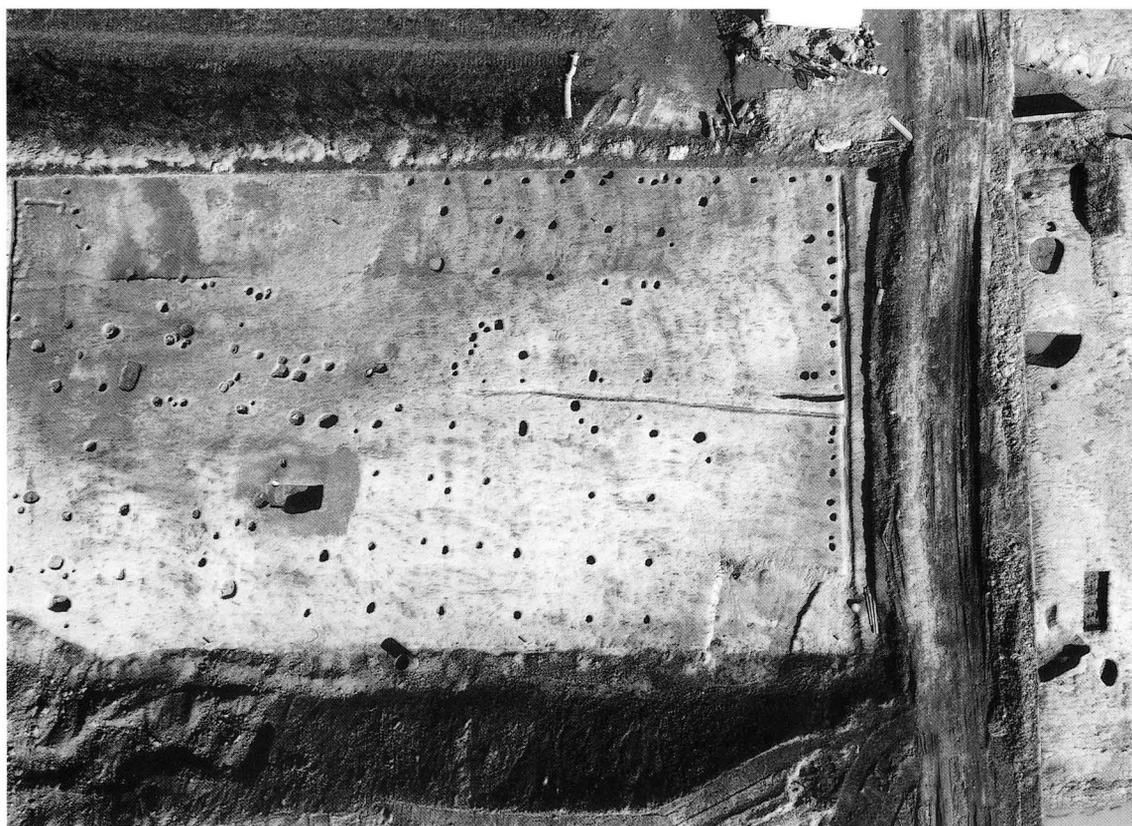
古川B区 SD1・SD2・SH1



46号排水路区 北半



46号排水路区 中央



46号排水路区 南半



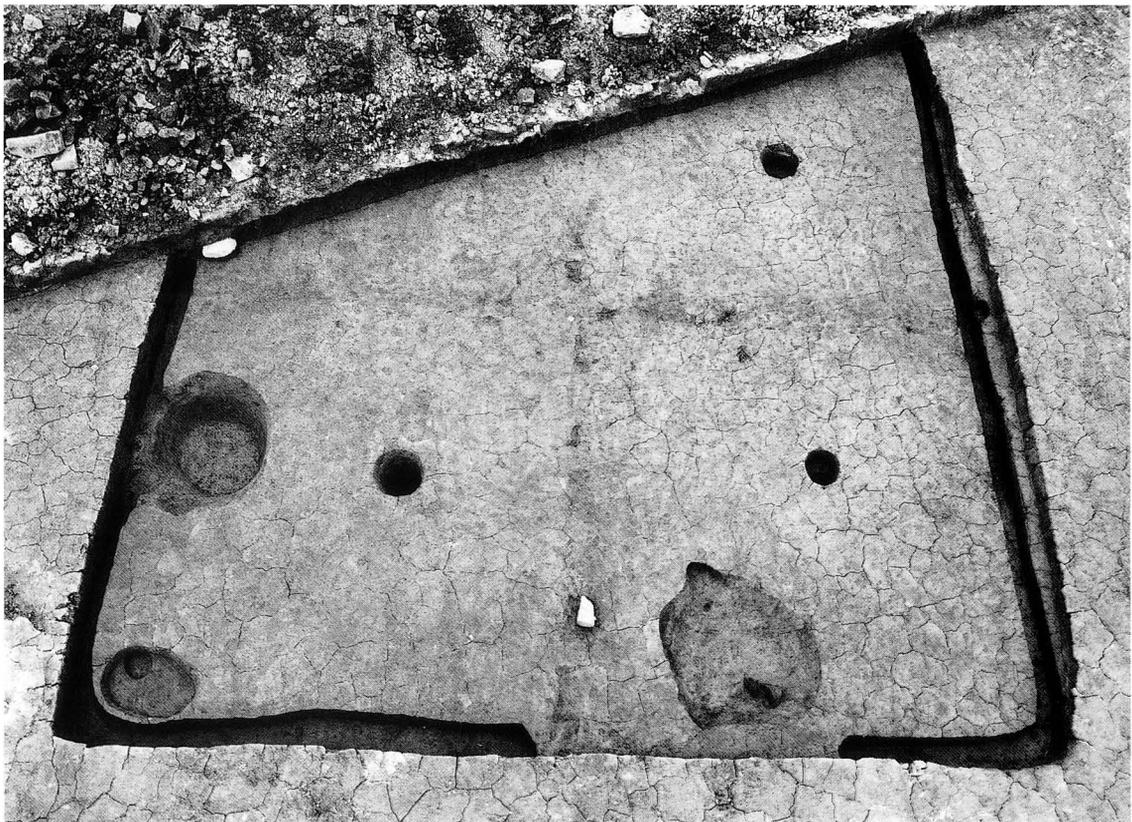
古川B区 SD1・SH1



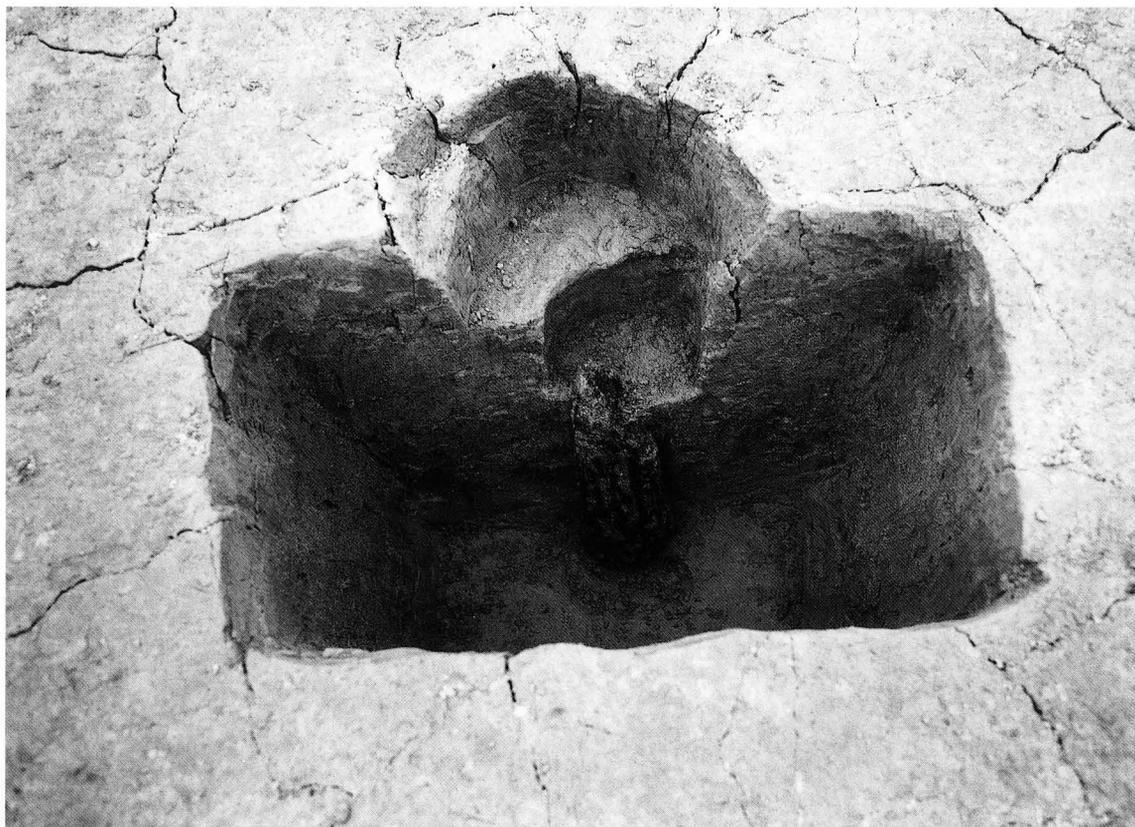
古川B区 SD1 2号馬鍬出土状況



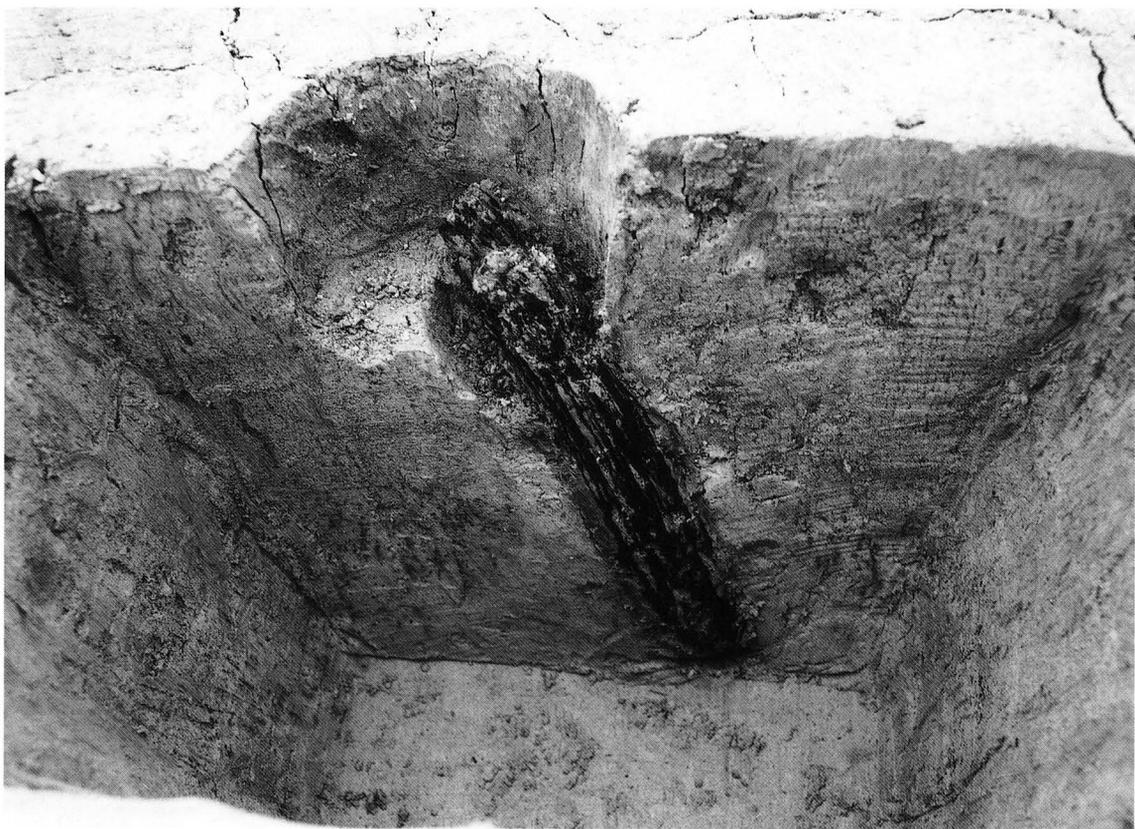
古川B区 SH1 遺物出土状況



古川B区 SH1



SH1 P.1 柱根遺存状況



SH1 P.2 柱根遺存状況



古川B区 全景(南から)



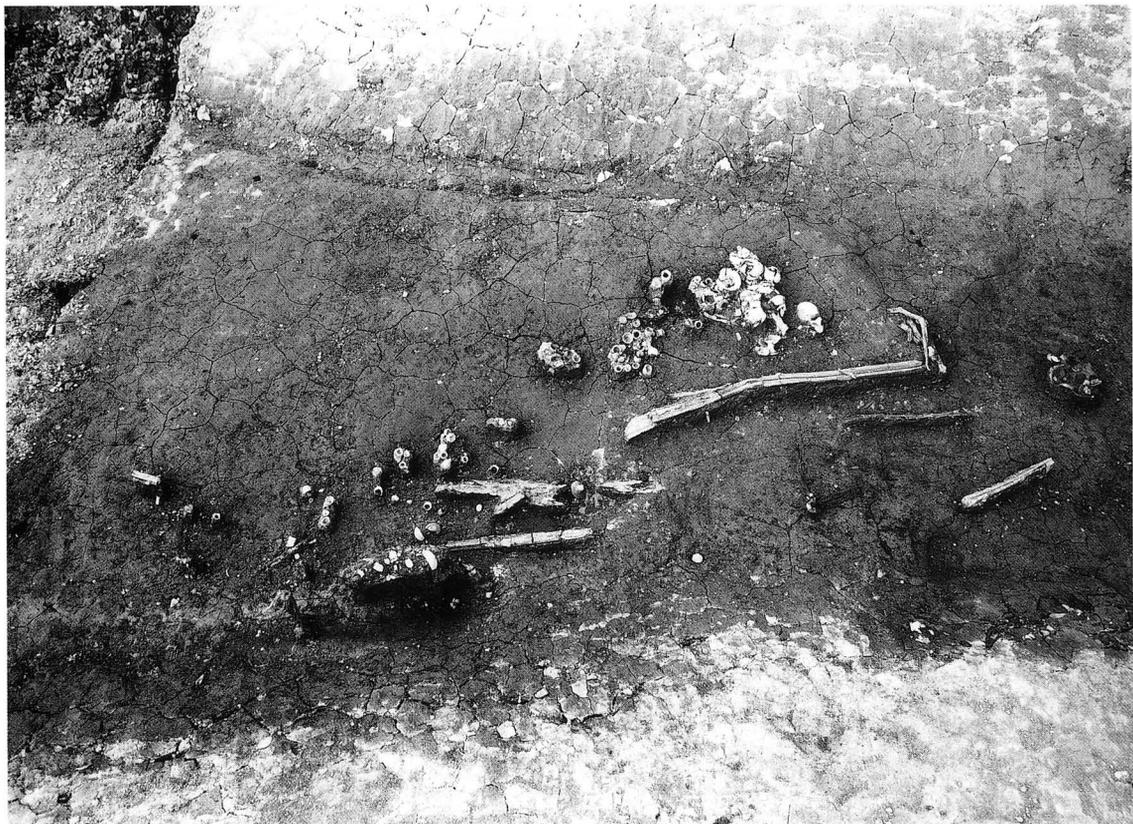
古川B区SB8



古川B区 S D2 木器出土状況(西から)



古川B区 S D2 木器出土状況(南から)



古川B区S D2 手づくね土器出土状況(西から)



古川B区S D2 手づくね土器出土状況(拡大)



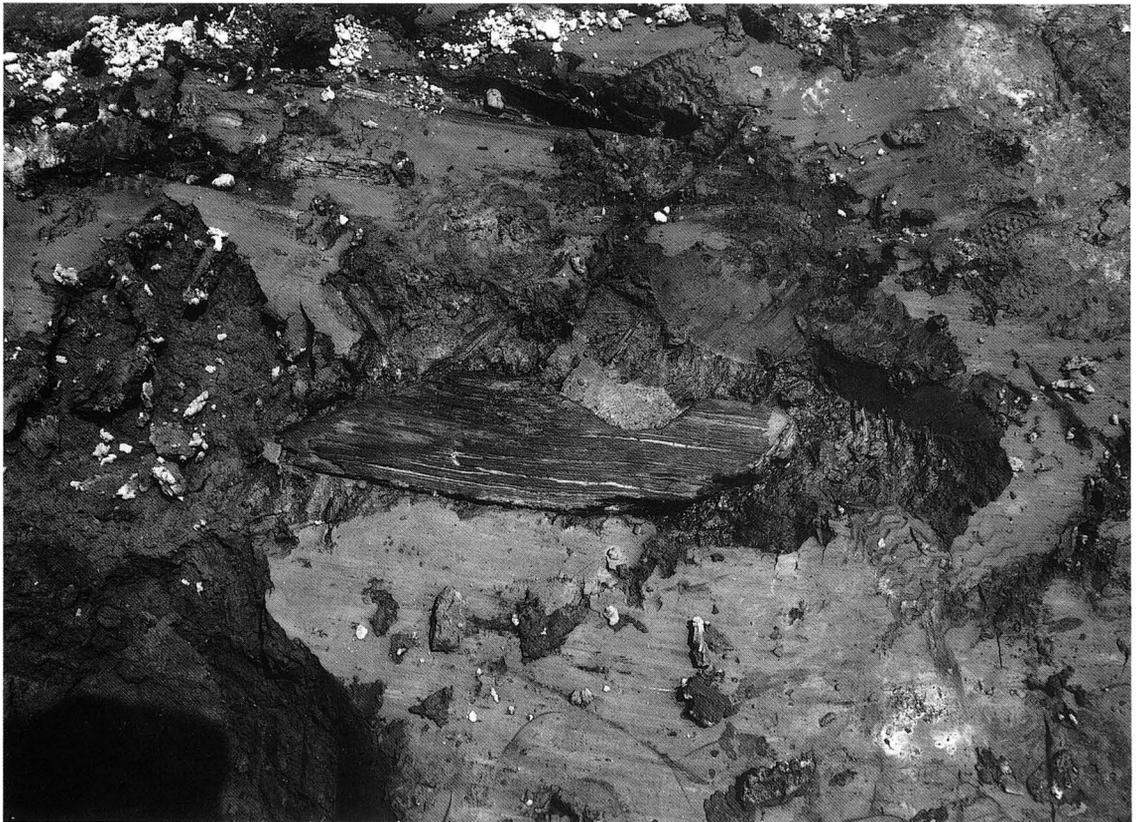
古川B区S D2 3号馬鍬出土状況



古川B区S D2 曲物出土状況



古川B区SD2 下駄・田下駄出土状況



古川B区SD2 鳥形出土状況



古川B区SD4 (南から)



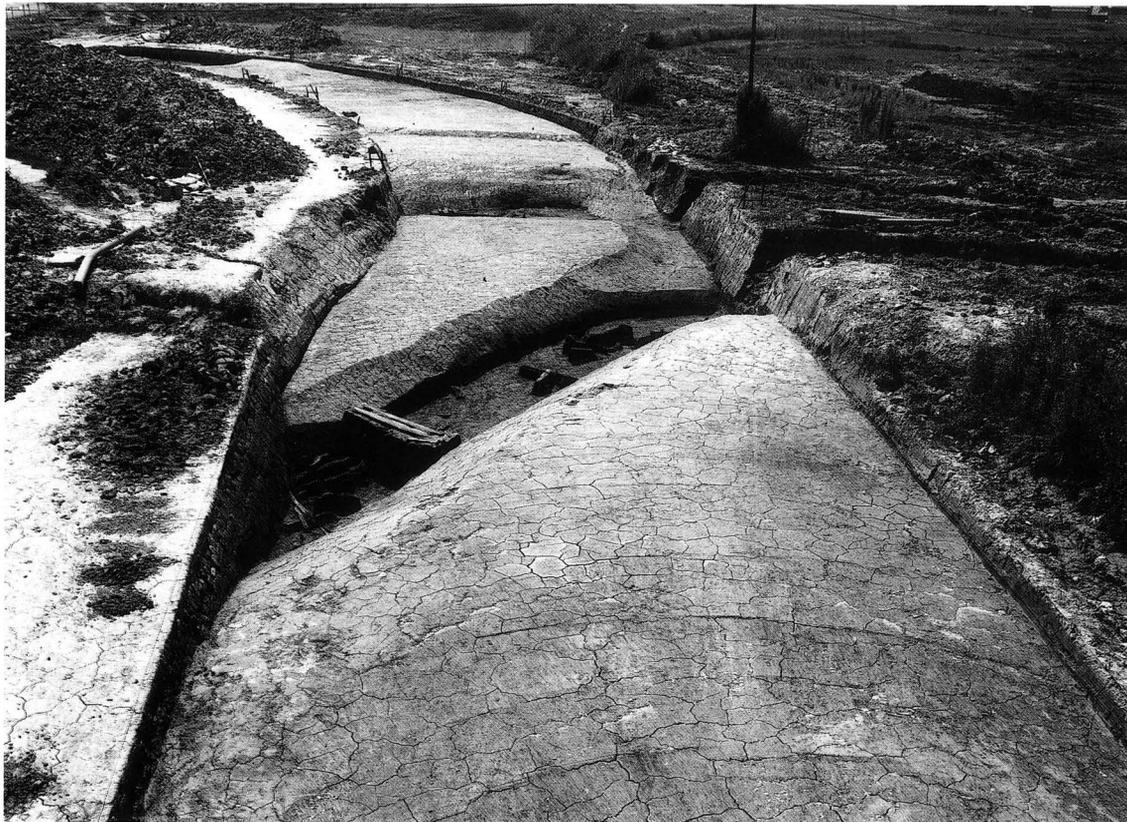
古川B区SD4 (北から)



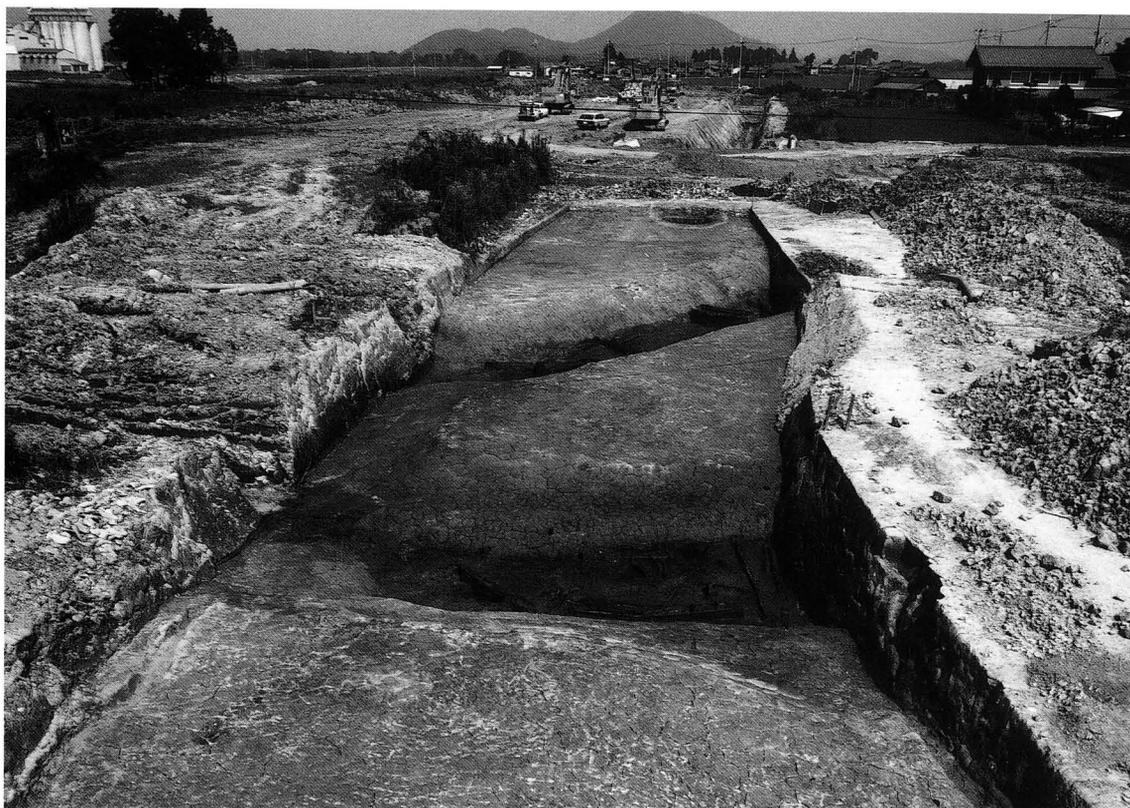
古川B区SD4 南半部(西から)



古川B区SD4 南半部(南から)



古川B区S D5・S D6(北から)



古川B区S D5・S D6(南から)



古川B区SD5 4号馬鍬出土状況



古川B区SD5 梯子出土状況



古川A区北半部(南から)



古川A区SB3(南から)



古川A区SD3(西から)



古川A区SB1・SB2(北から)



古川C区SD11(西から)



古川C区SD11(北から)



古川C区SD11遺物出土状況



古川C区素掘溝群(北から)



古川D区SB11・SK2(南から)



古川D区SH11(南から)



29号道路区調査前(西から)



29号道路区 S B5・6・7(南から)



29号道路区全景(南から)



29号道路区 S D9



38号排水路区(北から)



38号排水路区(西から)



38号排水路区(西から)



38号排水路区S B13・14・15(南から)



38号排水路区S D14(西から)



38号排水路区S D14遺物出土状況



46号排水路区 S H6(南から)



46号排水路区 S H7・8(南から)



46号排水路区 S H6・7・8(南から)



46号排水路区 S H9・10(西から)



46号排水路区 S H9・10(南から)



46号排水路区 S H9(西から)



46号排水路区 S H10 炭化材検出状況(西から)



46号排水路区 S H10(西から)



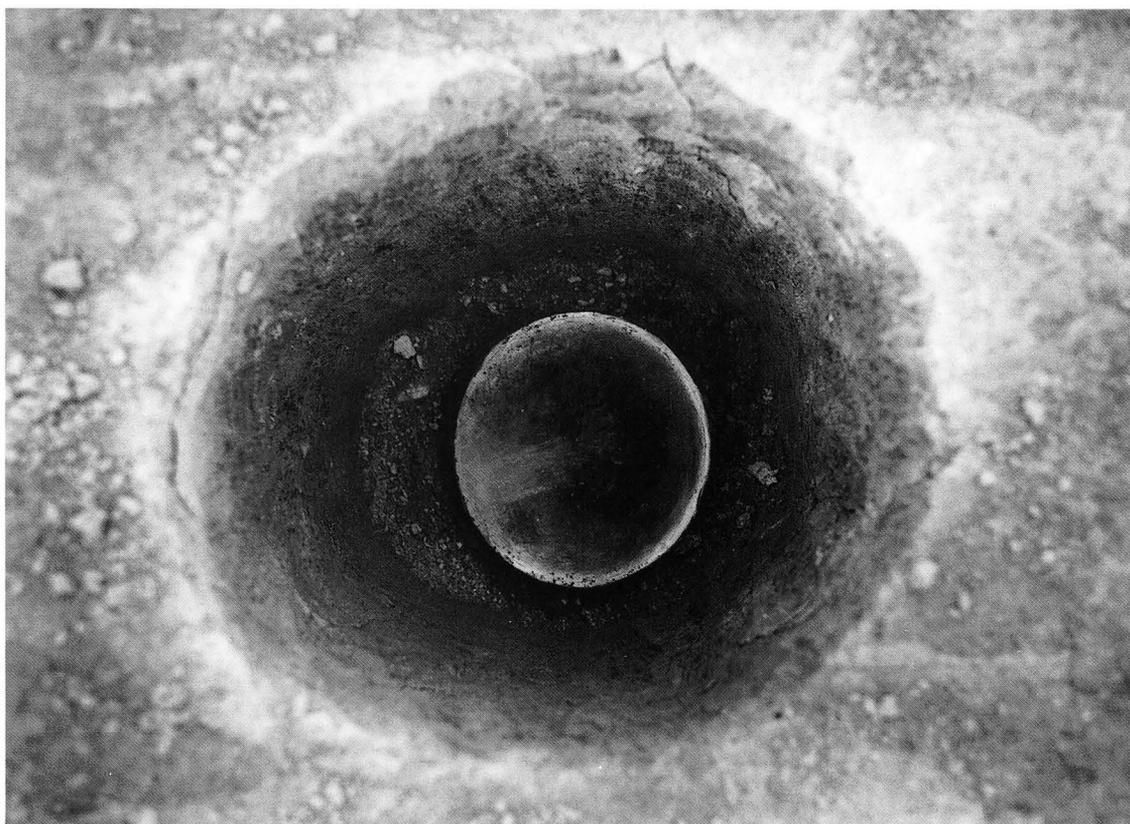
46号排水路区 S K5(北から)



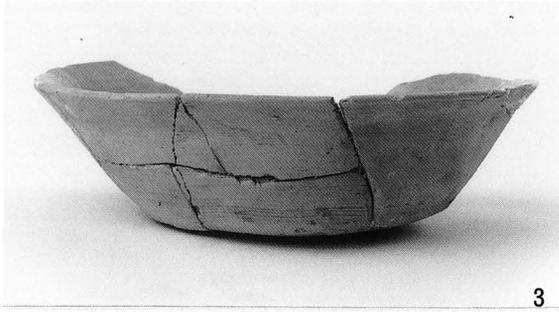
46号排水路区 S K8(南から)



46号排水路区 S B 22pit163



46号排水路区 S B 22pit164



3



4



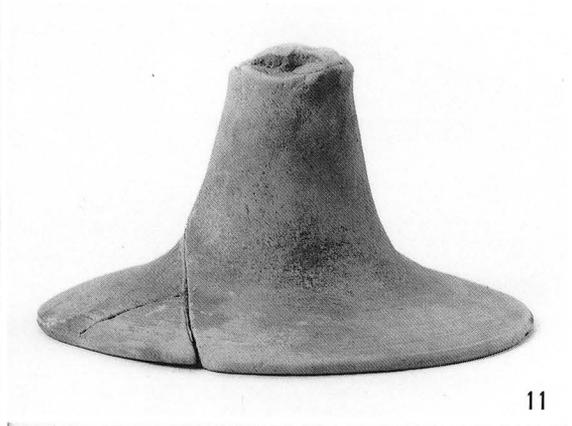
8



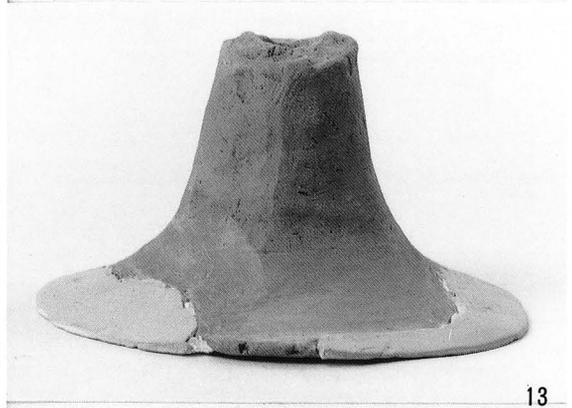
9



10



11



13



14



15



16



20



17



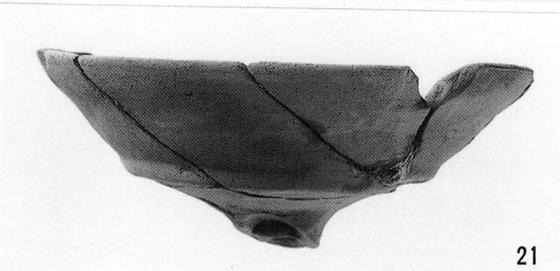
25



18



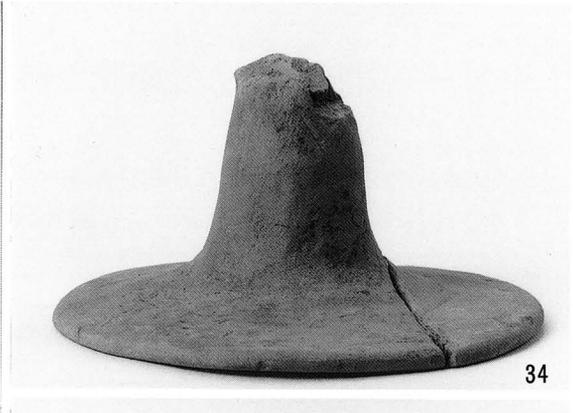
26

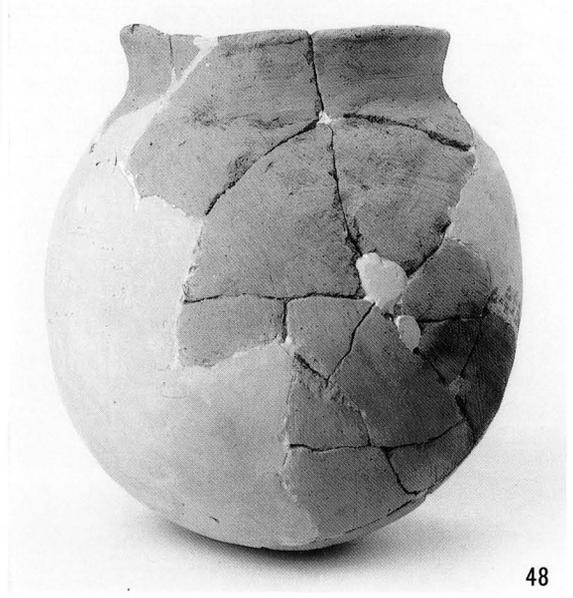


21



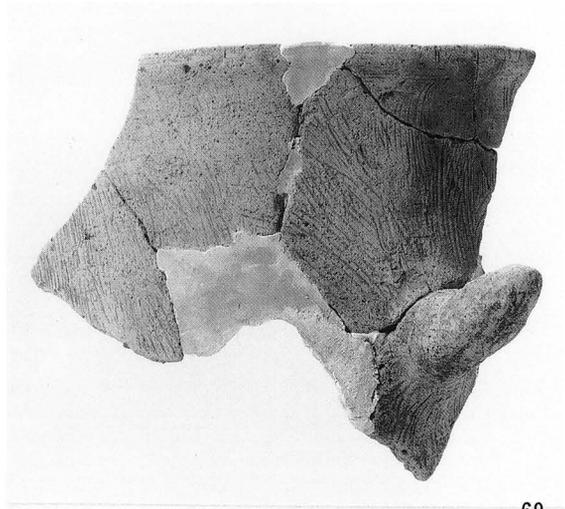
27







52



69



53



70



54



71



73



72



83



74



84



75



86



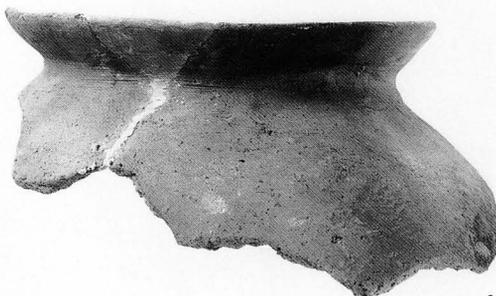
77



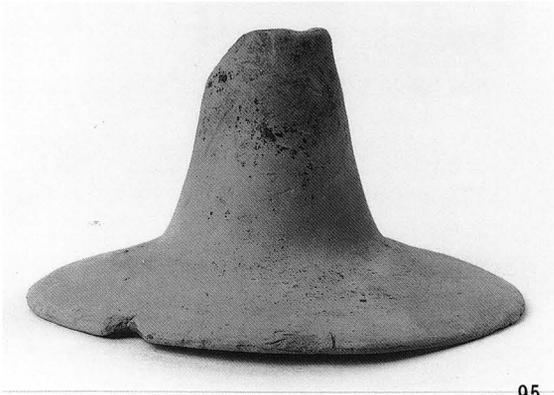
87



82



90



95



96



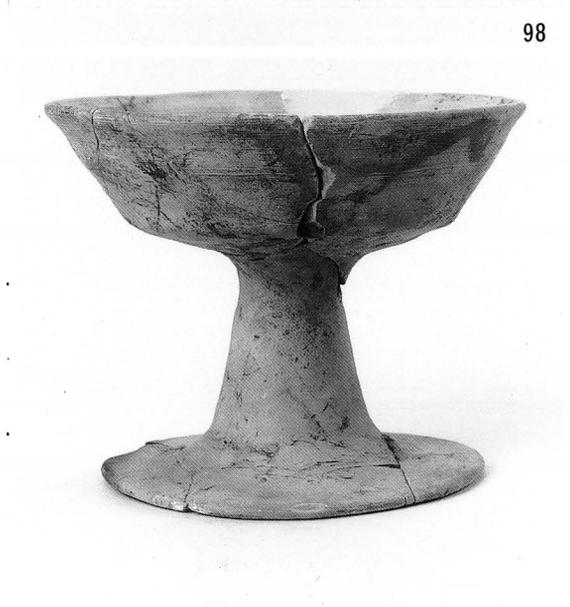
97



103



98



99



100



101



106



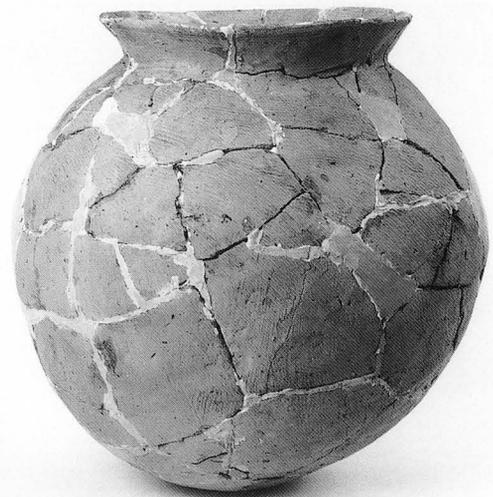
104



107



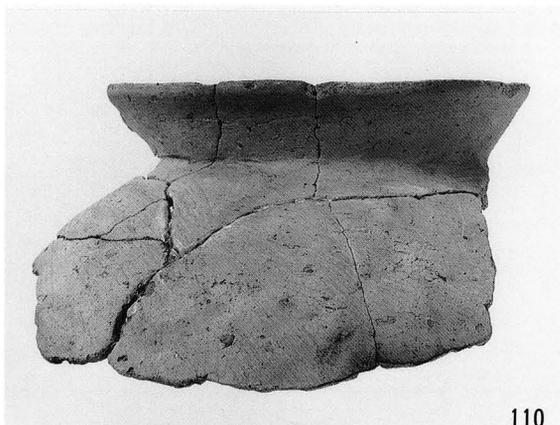
105



108



109



110



121



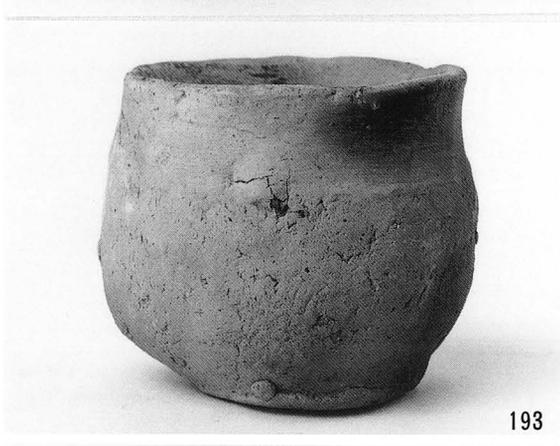
129



190



192



193



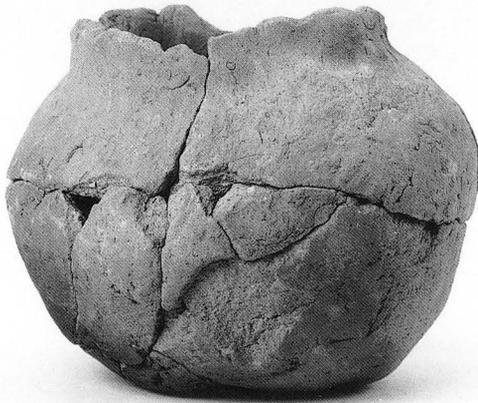
195



196



199



197



200



198



201



202



207



204



208



205



209



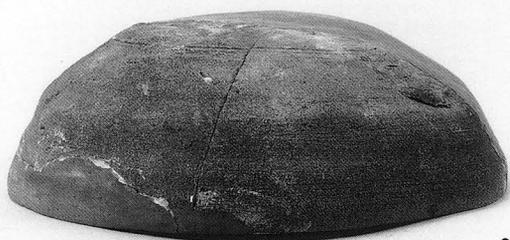
206



211



212



213



215



216



217



218



219



220



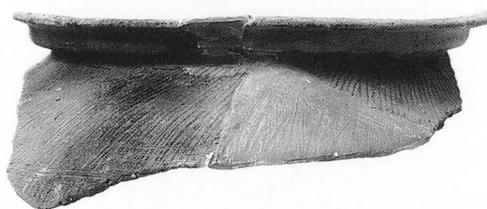
221



227



223



232



224



237



225



238



239



247



240



254



244



249



260



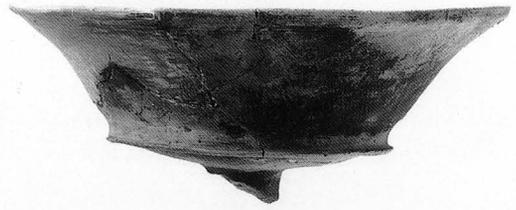
250



261



262



268



263



269



266



270



267



271





283



292



287



293



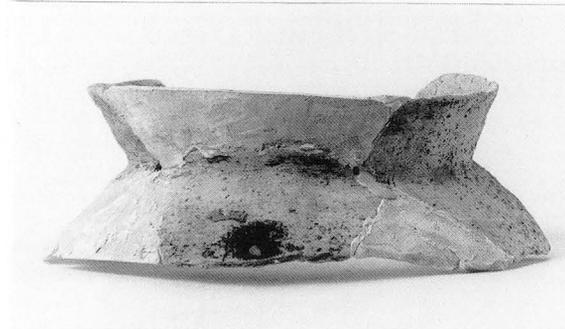
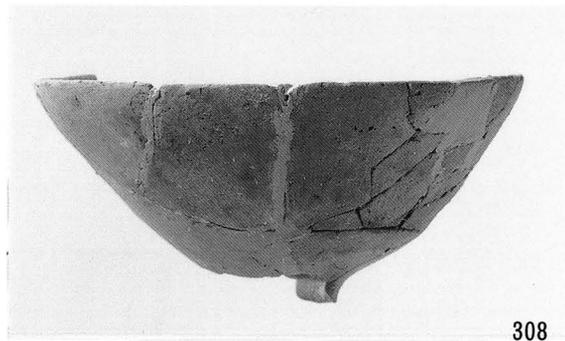
288



289



295





297



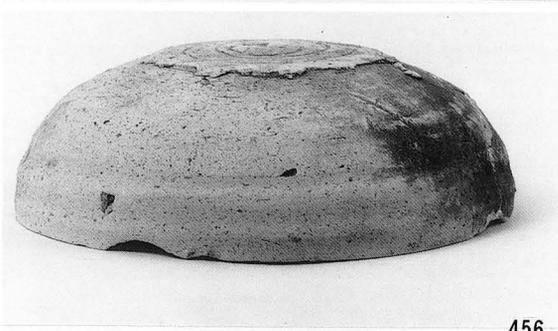
460



298



461



456



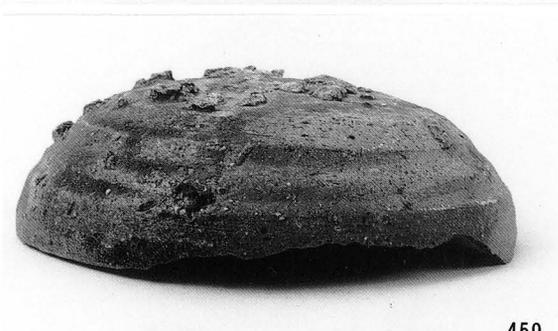
463



458



465



459



466



311



312



313



314



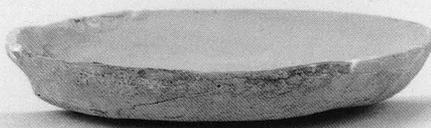
315



319



323



324



326



327



328



329



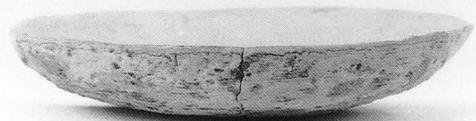
330



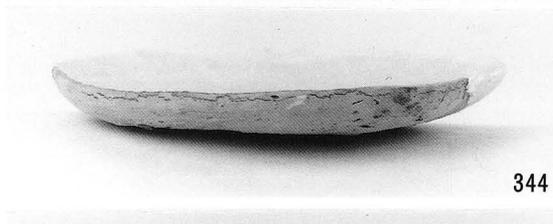
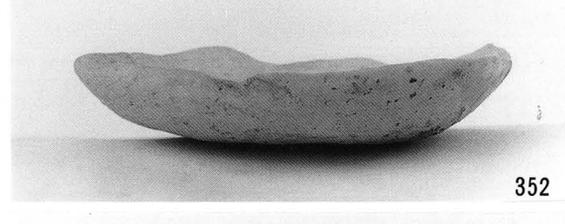
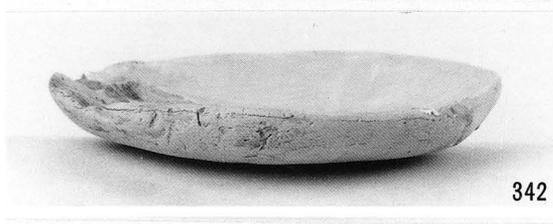
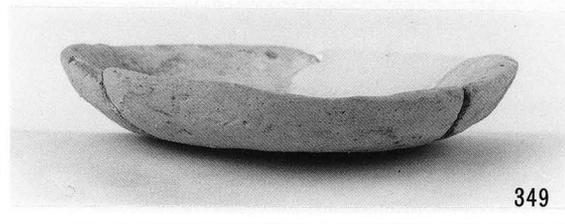
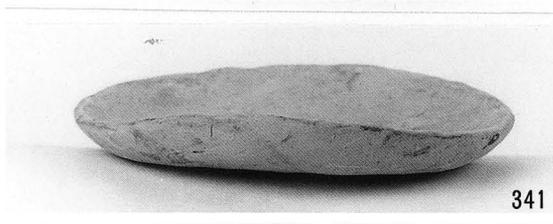
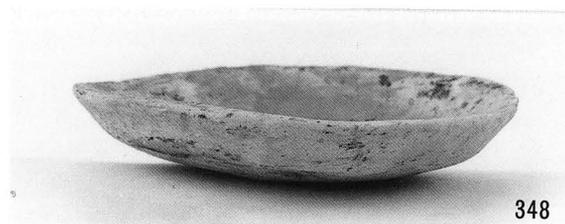
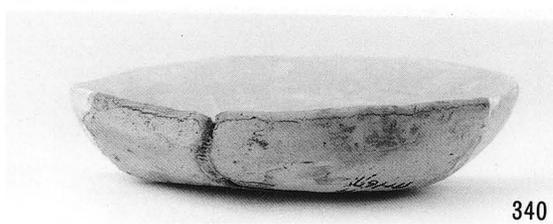
331

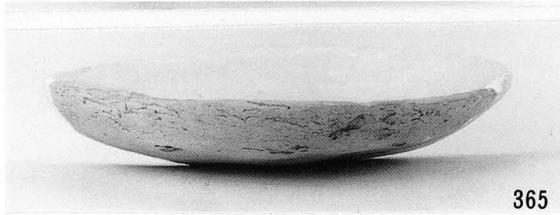
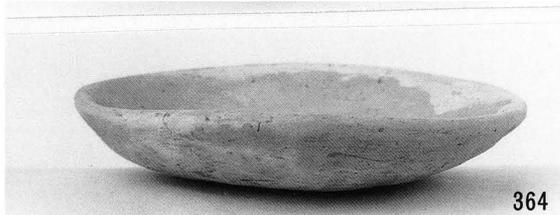
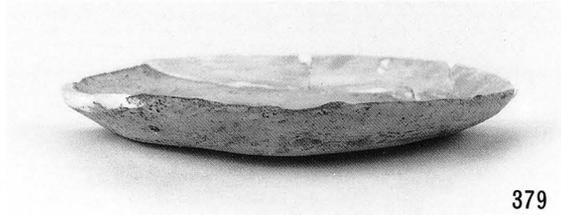
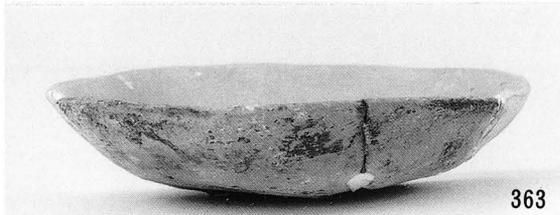
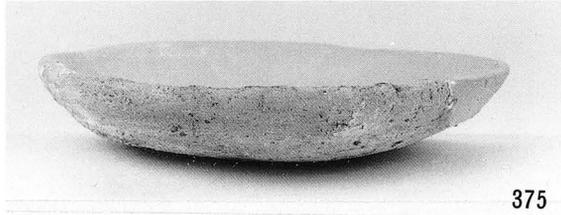
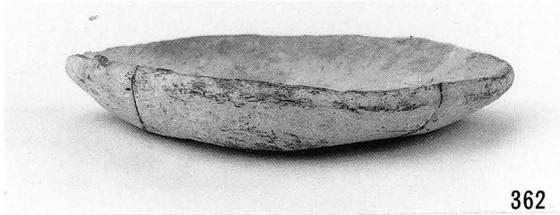
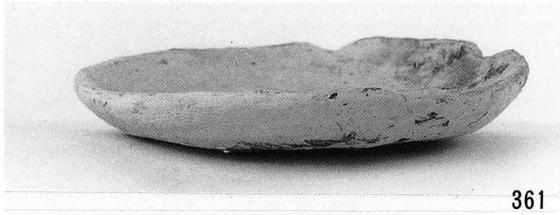
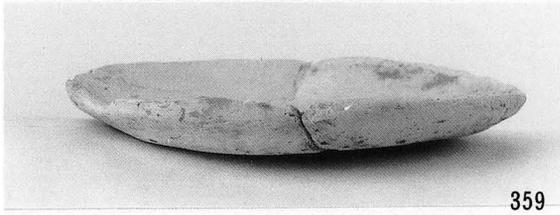
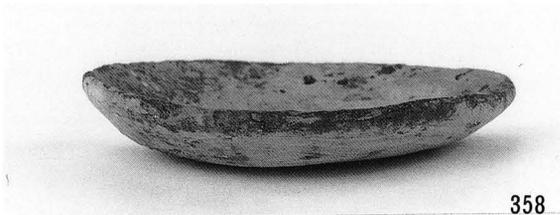


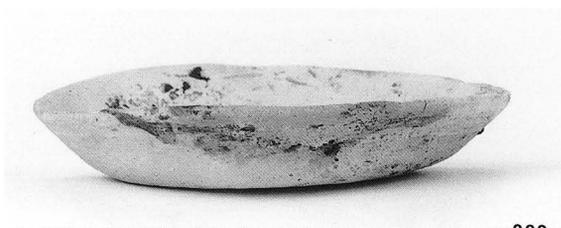
332



336



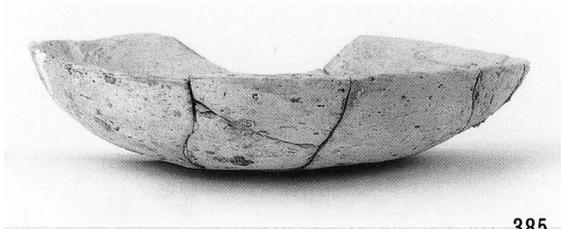




383



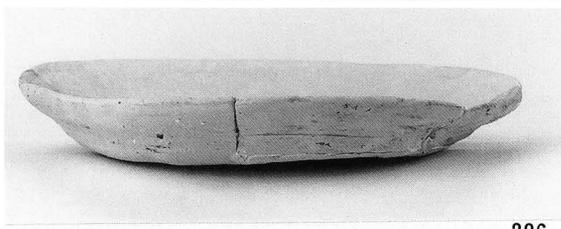
393



385



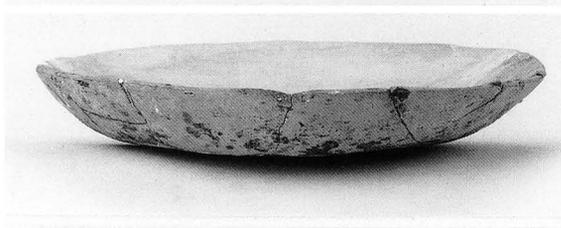
395



386



396



387



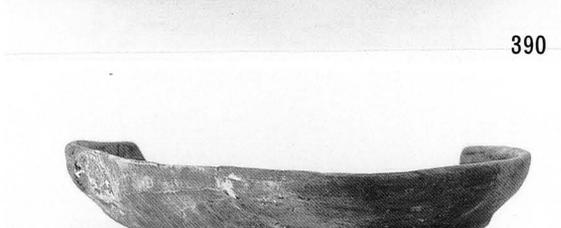
397



390



398



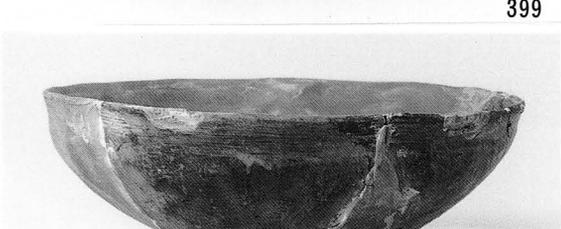
391



399



392



400



402



410



403



411



405



415



406



417



408



418



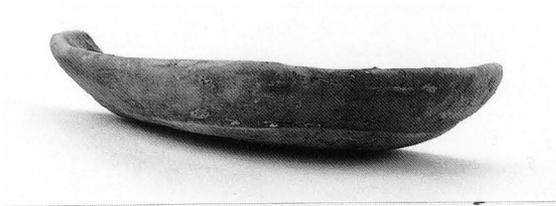
409



420



423



424



427



428



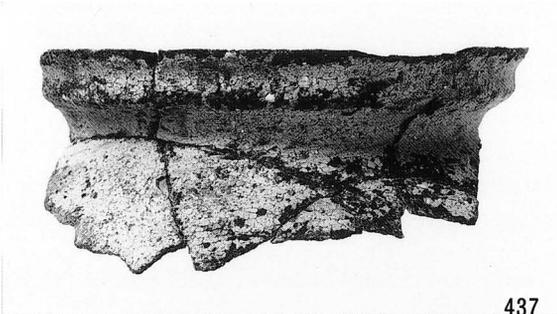
432



434



436



437



440



441



442



445



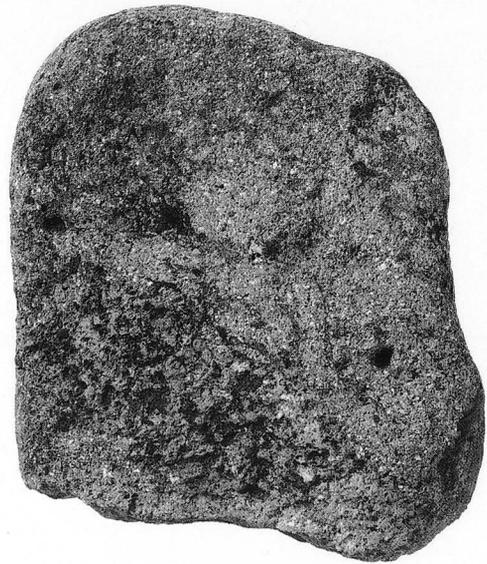
444



453



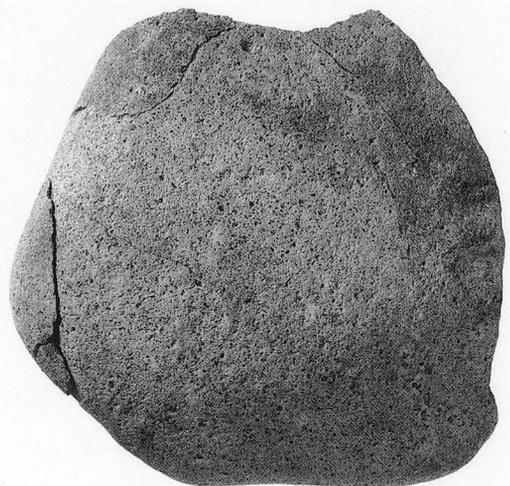
450



SH10



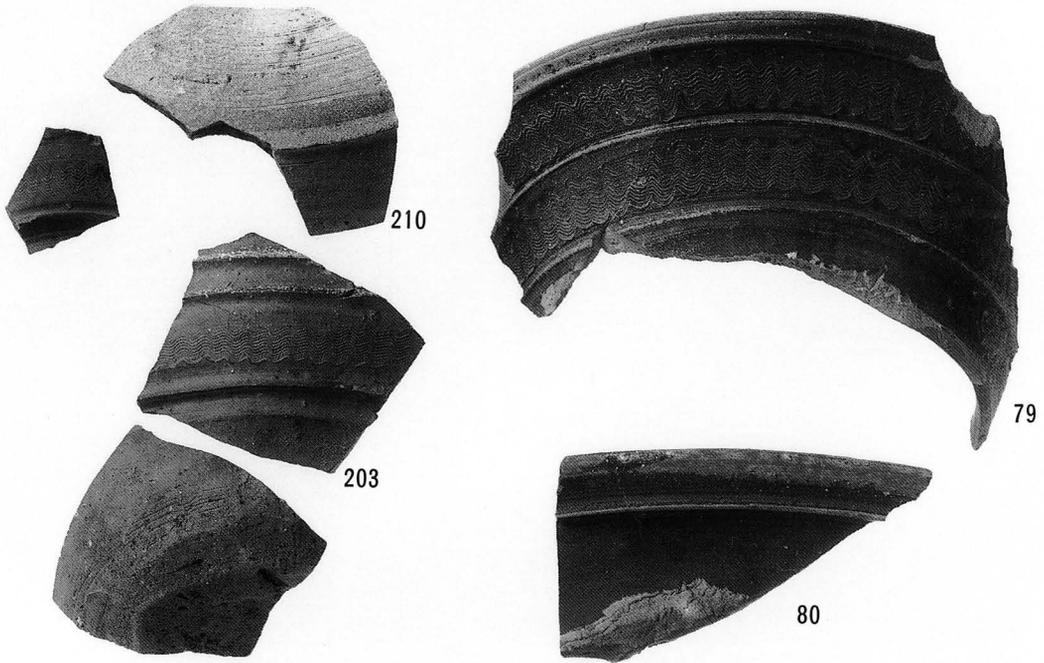
455

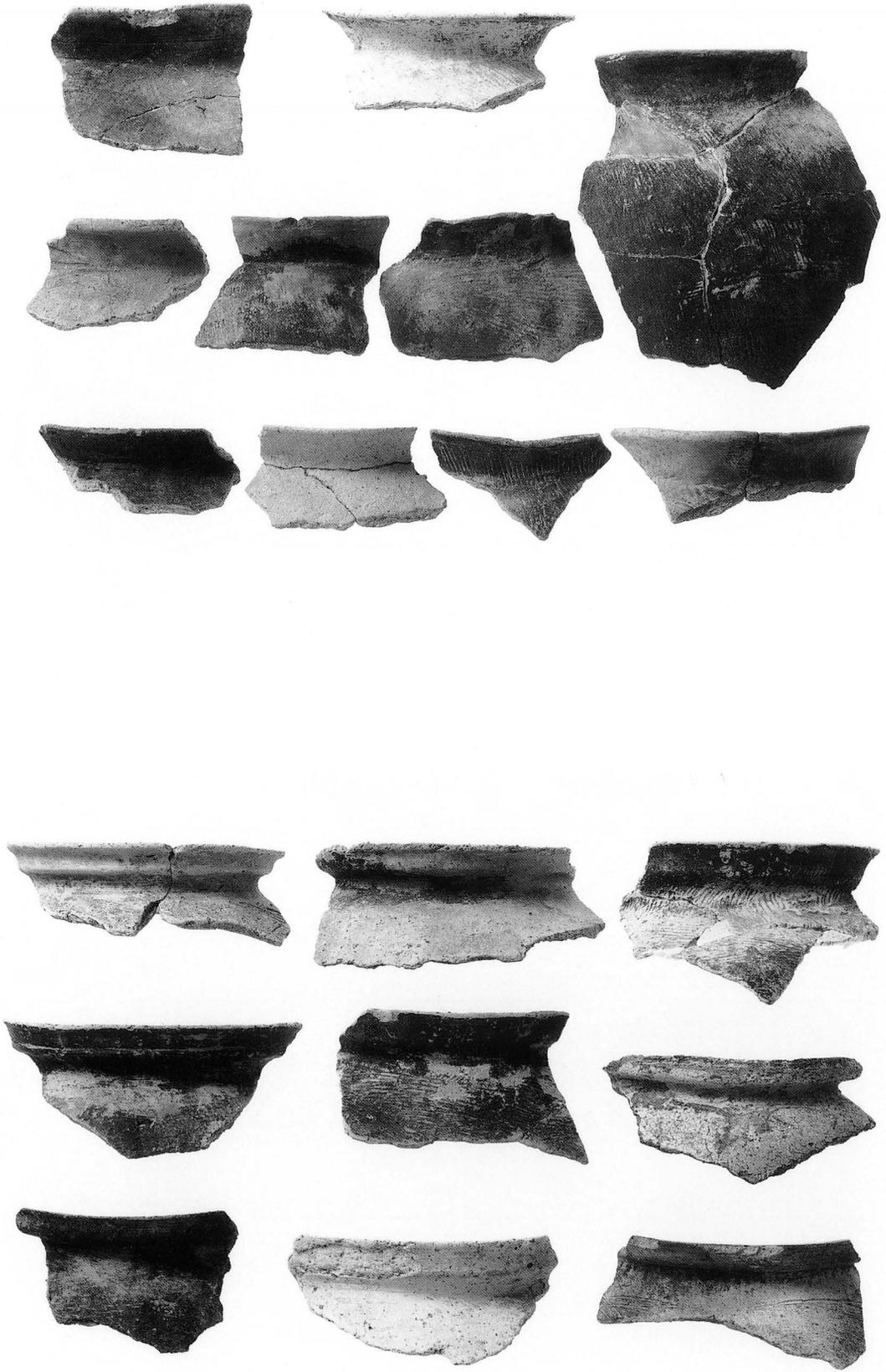


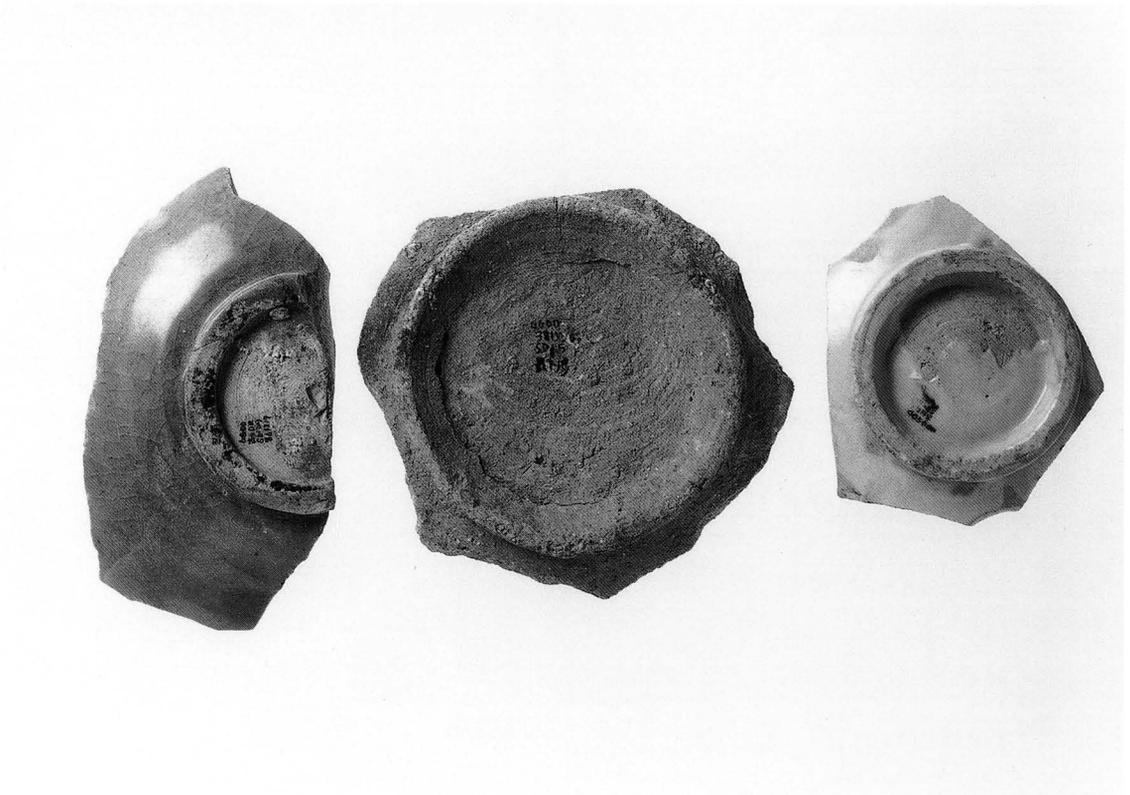
SH 9



81









1号馬鍬



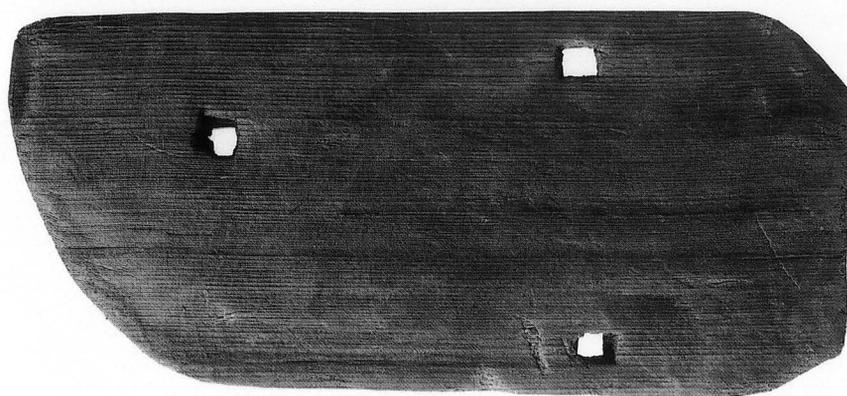
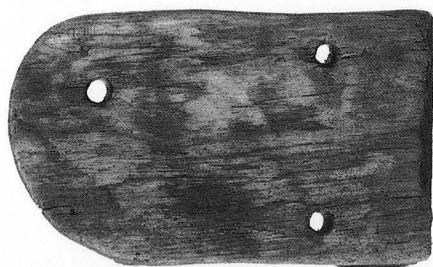
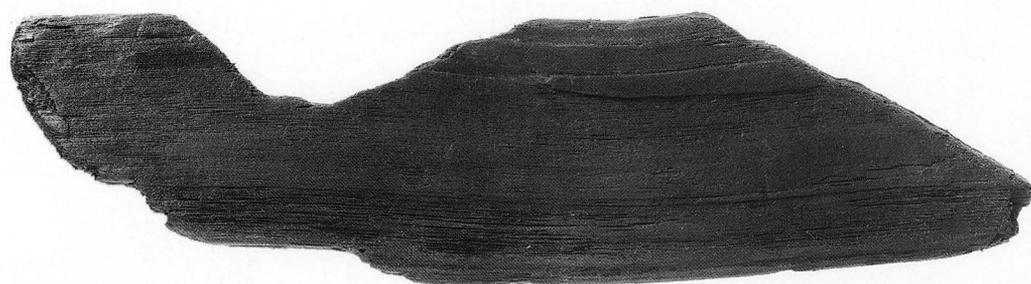
堂田遺跡出土木製品(1) 2号馬鍬



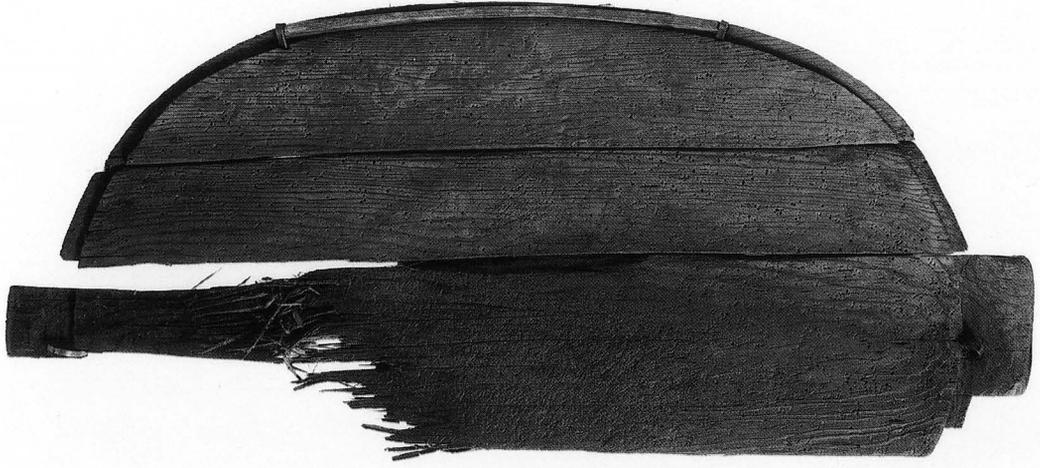
3号馬鍬

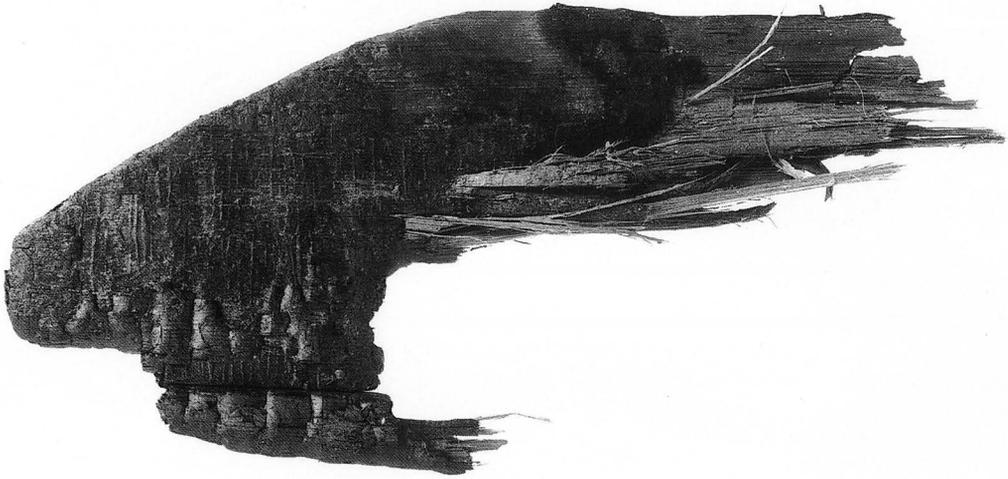
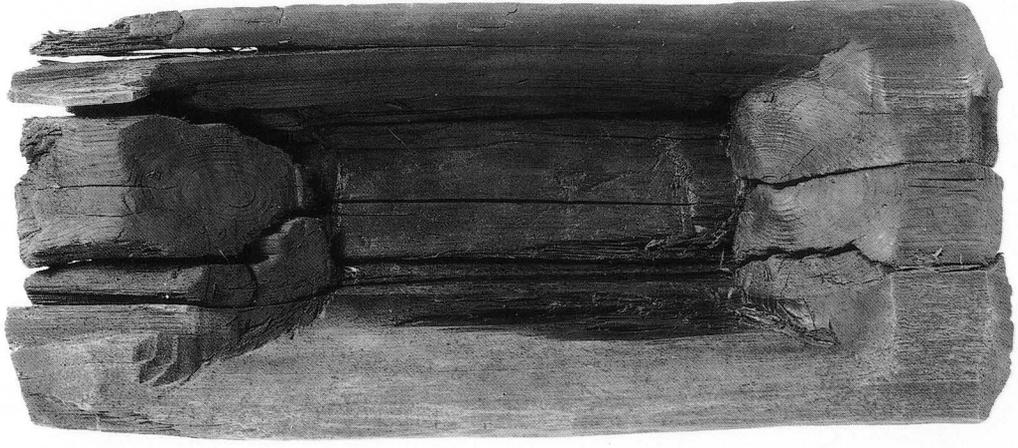


堂田遺跡出土木製品(2) 4号馬鍬



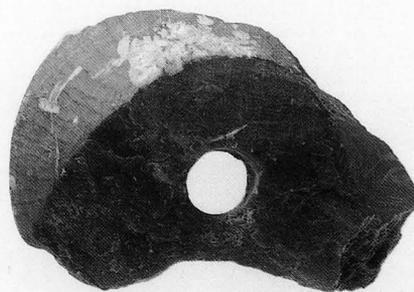
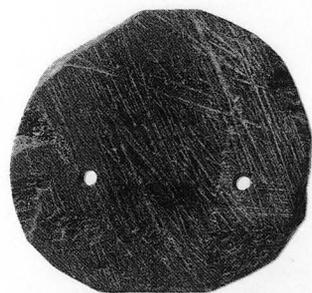
堂田遺跡出土木製品(3)







堂田遺跡出土木製品(6)



堂田遺跡出土石製品



堂田遺跡遠景(北から)



堂田遺跡遠景(西から)

平成元年 3 月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XVI-5

堂田・市子遺跡(2)

——蒲生郡蒲生町市子沖・市子川原所在——

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目1-1
電話(0775)24-1121 内線2536

(財)滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
電話(0775)48-9781

印刷 東洋印刷株式会社
京都市中京区壬生桧町20
電話(075)311-2006